

こんな分岐は嫌だ ～ BALDR SKY短編集～

水城悠理

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Arcadiaで投稿していた「こんな分岐は嫌だ」をこっちでも投稿

水無月空と真が他愛もなく駄弁ったり、原作では悪役だった彼がなぜかヒーローとして活躍したりしたりする話を纏めたものです。

物理的なエロシーンはないですが、一応R-15

キャラ崩壊がありますが、特に水無月真のキャラはぶっ飛んでますのでそこは加味して読んでいただければ幸いです。

完結

・スーパージルベルトワールド本編

・afterstory

・えせ救世主物語

・D I V E X

目次

スーパージルベルトワールド

スーパージルベルトワールド1 | 1

スーパージルベルトワールド1 | 2

スーパージルベルトワールド2 | 1

スーパージルベルトワールド2 | 2

スーパージルベルトワールド2 | 3

スーパージルベルトワールドanother1 | 33

スーパージルベルトワールド3 | 1

スーパージルベルトワールド3 | 2

スーパージルベルトワールド3 | 3

スーパージルベルトワールド4 | 1

スーパージルベルトワールド4 | 2

スーパージルベルトワールド4 | 3

スーパージルベルトワールド4 | 4

スーパージルベルトワールド5 | 1

スーパージルベルトワールド5 | 2

スーパージルベルトワールド5 | 3

スーパージルベルトワールド6 | 1

スーパージルベルトワールド6 | 2

スーパージルベルトワールド7 | 1

スーパージルベルトワールド7 | 2

スーパージルベルトワールド7 | 3

スーパージルベルトワールド7 | 4

スーパージルベルトワールドEND | Neu | 141

世界0シリーズ

こぼれ落ちる愛の雫

148

分岐 α 1 降り止まない雨はなく、月はやがて優しく照らす

151

分岐2 ニラにはニラを

156

分岐5 貧乳萌えというか貧乳にコンプレックス持っている人に

萌える方向きの何か

161

分岐1 MASA

166

分岐6 ノインツエーンは静かに暮らしたい

170

分岐7 そして神はニラとなる

172

分岐8-1 ノーマルエンド (R18シーン当然無し)

177

分岐8-2 リアル世界の同居人 (パートナー)

181

DIVEX

prologue ジルベル・ジルベルトの憂鬱

186

DIVEX1 求道者

189

DIVEX2 恋愛不能症候群

194

DIVEX3 Kou in Wonderland

199

DIVEX4 Intelligent Design

205

DIVEX5 姉と弟

213

DIVEX6 宿命の交わる時

222

DIVEX END RAIN

232

鏡面世界のヴェリテ

鏡面世界のヴェリテ1

240

鏡面世界のヴェリテ2

244

スーパージルベルトワールドafterstory

afterstory1	魂の在り方前編	249
afterstory2	Q. 日常が容易に崩壊するエロゲの登場キャラになった時の心境を答えなさい	254
afterstory2-2	A. 私の大切なものを壊した責任取ってもらおう	261
afterstory3	さようなら違う世界の私達	269
afterstory4	魂の在り方後編	279
えせ救世主物語1	ジルベルト「サイバー出身の人間はファンタジーな世界に適應できるのか」	286
えせ救世主物語2	クリス「ダウニー先生の永久封印刑のCGまだー」	289
えせ救世主物語3	ノイ「善人も悪人も皆等しく狂気にさらされている」	297
えせ救世主物語4	真「奇跡は起こらないから奇跡って」	305
えせ救世主物語5	レイン「今更ですがここはどこなのでしょうか」	313
えせ救世主物語5.5	本来の主人公「いや、あれを同じ地球人と言っているのかわからないんだが」	321
えせ救世主物語6	ミユリエル「思い通りになったような気はしませんが、どうも腑に落ちません」	325
えせ救世主物語end	「君が望む日々」	333
スーパージルベルトワールド	人物解説集	339
スーパージルベルトワールド0	ただのジルベルトの物語	346
企業戦士ジルベルト		351
企業戦士ジルベルト	愛戦士	355

企業戦士ジルベルト

めぐり逢いSモデル



スーパージルベルトワールド スーパージルベルトワールド1-1

ジルベル・ジルベルトってドイツ語にすると、同じ綴りなのだが、要は某国民的有名なアクションゲームである主人公の名前がマ○オ・マリ○であることを考えるとまあ、それもありなのかなと思う。

ああ、申し遅れました。ジルベル・ジルベルトこと、元佐藤弘光です。実は俺一度死んだという認識をもっているんですよ。徹夜が続いてぼんやりしていると車を車に引かれたつてのが多分死因だと思ひまして。まあ、気がつけばジルベル・ジルベルトなる人物として新たに生を受けたのだが、両親は微妙な人たちだったのがケチのはじまり。

「お前は優秀な私の遺伝子を継いだのだから歴史に名を残すような人物になるのだ」

「でも、この子に私の遺伝子って混ざってるのかしらね。デザイナーズチャイルドってそういうものなんでしょ」

どうやら私は遺伝子を弄られて生まれたようだ。コーディネーターとかマシンチャイルドみたいなものだろう。

まあカタログスペック的にすごいとは思っていたのだが、物心ついた頃には反射神経や学習能力の分野でその恩恵は十分に発揮されていた。

ただ、デザイナーズチャイルドなら当たり前っていうところがあるので別に自慢できることではないだろう。

生きる上で多少選択肢が増えた程度に俺は思っている。

両親？

何か思い通り性能が出ないのが気に入らなかつたのか半ば放置気味。俺が8つの時に普通に生まれた弟をかわいがっている。

まあ、西暦2000年代からかなり文明が進んだっぽいなあとは思っていたのだが、よく考えてみると知っている単語がちらほら出てくる。そこで裏付けすべく色々調べて見た結果この世界って。

「バルドフォース？」

簡単に言うとネットの世界でシミュクラムっていう兵器を使つてドンパチするゲームだ。多分、初見でお兄ちゃん・・・来て！されたプレイヤーが大半だろう。

そして脳内チップはこの世界を生きるための基本ツールなので俺の脳内にもチップが入っている。どうやら生まれた初期段階でチップを入れるセカンドジェネレーションという人たちもいるようだ。

「でも、フォースの時代じゃないっぽいしなあ」

飛刀（フエタオ）

V・S・S

リヴァイアサン

知っている単語を片っ端から入力したらどうやらそれらは一世紀以上の前の歴史的事件として刻まれていた。

「それに、誰のエンドの未来なのかも不明だしなあ」

あるいは、パラレルワールド的な解釈をすればいいのか。とにかく、この世界はバルドフォースっぽい時系列の世界と解釈しよう。

よくネット小説とかで見ると、憑依とか転生とかだと原作知識を生かして活躍とかできるけど、こんな時代に生まれて俺にどうしろということに。

あれか、シミュクラムを駆使して戦えっていうのか。

現状世界は多少のいざごぎざはあるけど平和で、俺には復讐に走る為の理由はない。

まあやることと言えば、普通に学生して、普通に就職して、普通に結婚してという無難な人生を歩みたいわけだ。

少なくとも、俺は基本スペックが通常よりいいので、無難に過ごせるだろう。

chapter 1

分岐点 turning point

「そう思っていた時期が俺にもありました」

ついついこの状況を嘆いてしまうわけだが、そもそもあの家に生まれたのが問題だったのか、進学が問題だったのか。

自分の入学した鳳翔学園は明日を担う人材を育成するっていう学校なのだが、当然そういう学校にはデザイナーチャイルドが多い。彼ら的には自分は選ばれたエリートなので、結果してこういう身の上となった自分との相性がすこぶる悪かった。

「猫だって遺伝子を弄れば立派なデザイナーチャイルド。親のペットになったつもりはさらさらないね」

某種がはじけ飛ぶロボットアニメの世界でもそんなレベルだったんだろうなあ。

スペック的に頑張れば銃弾をかわすことはできるだろう。じゃあマシンガンは？ ミサイルは？

それに耐えるのを目指すなら義体化した方がいいだろう。

頭脳が優秀とは言うが、未だかつて最強のコーデイネーターのごとく即座でプログラミングとかする人を見たことがない。

むしろそっちはセカンドの得意分野だ。

ではデザイナーズチャイルドとは何なのかと問われるとスペックの高い人間としか答えようがない。それに気付かないのか、気づきながら目を背けているのかは分からないが、自分たちの優位性を疑わない同級生の方々には心底うんざりしている。

そんならお前ら生身でグングニールの直撃耐えてみるや。まあ、そんなこんなでうんざりしながら一年目を過ごし、二年目に入って5月を過ぎた頃のある日の休日。

公園で本でも読もうかと向かうと、嫌なものを見つけてしまった。

「離してください」

「下等なメスをしつけてやるのだ。逆に感謝して貰いたいぐらいだ」

何か下劣なセリフを吐いている同窓が複数、同世代の美人なお嬢さんに絡んでいる。

しかし、あの子どこかで見たことあるんだよな。

「まあ、これ以上自分の学校の評価貶めるのもなあ」

うちの評判というのはあまり良くない。高飛車な人たちがたくさんいるし。あの制服着ていると商店街の皆さんからいい目で見られなかったが、半年以上掛けて「ジルベルトは鳳翔の生徒なのに変わっている（変わり者だがまともだ）」という評価を獲得できた。まあ、その辺のこともあって面倒なのだが。あの輪に近づくと手をたたいた。

「はいはい、お前ら女性を口説くときは1対1でやろうな。ところでお嬢さん今後のご予定は？」

「え、あ、あの」

腰まで伸びた金髪と、メリハリのついた肉体が魅力的なお嬢さんに向かって偽善的な笑みを浮かべる。

「よろしければ、リーズナブルなイタリアンがあるんだけど一緒にしない？」

「おい、ジルベルト」

空気を読まずに口説き始めることで、周囲が反応できなくなる状況を作ったのだが、残念ながら反応する人物がいた。

「ケニツヒス、俺はきれいな女性を口説くのは好きだが、野郎に愛を語る趣味は無いんだ。だから諦めてくれ」

ケニツヒス・シユトラウト。同級生で優秀なのだがサディステイックな性格な為、学園でも微妙な立ち位置をしている男だ。まあ、基本的に独りでいる俺も微妙なのだが。

「どうやらお前もしつけが必要なようだな。デザイナーズチャイルドの失敗作」

予想通りに噛み付いてきたので、目標をずらすという意味では成功と言ったところだろうか。

「しょうがない、お嬢さん。俺は野郎とちよつと遊んで食事はまたの機会に」

俺の意図を悟ったのか公園の外へ逃げていった。

「さて、俺もお暇したいところだが、そういう訳にはいかないよなあ」
目が血走ったのが4人。

3対1なら何とかなるが、4人はつらい。

「多勢に無勢か」

そういえば、この体になってからケンカらしいケンカしてないことに気づく。もちろん、ポテンシャル高いから一通りはやってるんだが。別にバイオレンスな前世を生きてきた訳ではない・・・うん普通だよ。

「お前は前から気に入らなかつたんだよ！」

「そうか、俺的にお前はいつでもいいポジションだったよ」

そして間髪入れず俺は懐から取り出した物でたたきつけた。

「ぐはっ」

「俺って落ちこぼれだから身を守る為に武器を携帯しても仕方が無いと思うんだ」

特殊警棒的な武器は携帯性がいいので持ち歩くことにしていた。

「ぶ、武器とは卑怯だぞー！」

よろよろとなりながら立ち上がるケニツヒスに正直驚いた。

「さすがはゴキブリの遺伝子を組み込んだデザイナーズチャイルドだけある」

「そんなはずがあるか！ お前ら取り囲んでやってしまえ！」

そしてようやく我に返ったのか、じわじわと俺を取り囲み始める。だが、先ほどと違い隙がないので、少々卑怯な手を使うかと思った矢先だった。

「おまわりさん、ケンカです、早く！」

「ちっ、運が良かったな」

状況4対1、どう考えても印象的な不利を悟ったのか、ケニツヒスと愉快な仲間達は去っていった。

さてどう答えたらいいものかと悩んだのだが、現れたのは警察ではなく先ほどのお嬢さんだった。

「助かったよ」

「お礼を言うのは私の方です。ジルベルトさん」

「あれ？ 俺の名前知ってるの？」

「私も鳳翔の生徒ですから」

「じゃあ、君もデザイナーズチャイルド？」

「いえ、私はセカンドです」

「セカンドなら星修に行けばいいのに。変わってるね、君も」

「父が決めたんです。私としてはどうしようもなく」

「ああ、親に逆らうって難しいよね。俺なんて望んでないのにデザイナーズチャイルドになって、望み通りにならないから捨てられ気味だよ。まあ、幸いこの体なので肉体労働でもバリバリ生きていく自信はあるけど」

「ジルベルトさんってすごいんですね」

そんな感心されても前世から数えたとすでに43年生きてるから人生経験だけは積んでいるつもりなだけなのだが。

「まあ、知り合ったのも何かの縁。良かったら行くかいタリアン？」
怖い思いをしたお嬢さんと一緒に母校の悪口を言うのも悪くない
と思いと、たまには馴染みの奴らに俺だってやれば女性の一人や二人
エスコートできることを証明してやろうというどうでもいい理由
だったりする。

「よろこんで」

まあ、見たところいいところのお嬢様っぽいしこんな誘いには乗らな
いと思っただが返事は意外なことにはOKだった。

「まあいいけど、今後は俺みたいな変な男に簡単に付いていけないよ
うに」

「そうですね、気を付けます」

何か娘とか年の離れた妹がいるとこんな感じなのかなと思いつ
つ、なじみのイタリアンに向かうことにした。

スーパージルベルトワールド1—2

よく精神年齢は肉体年齢に依存すると聞く。理由としては簡単で、肉体が若々しい人は心も若々しいというのだ。否定する要素はあまりないのであるが、ジルベル・ジルベルトは27歳の時に死んで今16歳だから認識している限りは43年生きている。突然0歳からやり直しを初めている身とあっては同年代との付き合いに疲れることもあるのだ。

鳳翔の同級生は自分の力の振り回されている幼さが目に付くというのも肌に合わない理由の一つである。彼らとは一線を画するとはいえ、目の前にいるお嬢さんの相手も面倒とまでは言わないが、気を使っている部分は否めないだろう。

「ようジルベル、またお嬢さんとデートか」

「デートならこんな所に連れてこないよ。俺はアメリカンとチリドッグ。お嬢さんは？」

行きつけの喫茶店——カフェテリアなどといった上品な名称が付かない——に入った俺はマスターの茶化しを無視して注文し、お嬢さんこと桐島レイン嬢にも注文を促す。

「そんなデートなんて。あと、ジルベルトさんはいい加減私のことはレインと呼んで下さい！ マスターカフェオレお願いします」

あいよと注文を確認したマスターが調理をし始めたのを確認すると、ため息を吐きつつ年の離れた妹に忠告するように告げる。

「しかし、君はもう少し男を見る目を養った方がいい。俺なんかにつきまとっているとな変な噂がつきまとうぞ」

「もう付いちちゃっている気がしますけど。それに私、あそこでは友達居ませんから」

「まあ、俺も否定はできない」

どうも鳳翔の気風は俺たちには合っていないのだろう。一般的な感覚を持っていればあそこに馴染むのが異常なのではないかという疑問は置いておくとしてもだ。

それから、最近読んだ本や社会情勢情勢などについて話していると

食欲をそそる肉の匂いととも何か甘ったるい匂いが鼻腔を刺激する。

「ハニートーストは誰も頼んでいないのだけど」

「最近常連だからサービスだ。そっちのお嬢さんと分けてくれ」

「お嬢「レイン」レインは食べられるか？」

「喜んで」

「ん？」

食事を終えて、他愛の無い話を続けていると、使い慣れている端末からのメールが届いた。

差出人を見てメールを開き、読むこと30秒ほど。俺はそこに書かれた内容を見て、つい破顔する。

「どうしたんですか？」

「知り合いの愚痴。一つ上のお姉さんに振り回されている子なんだけど中々いい感じに擦れてて面白いんだ」

「……そのお知り合いって女の子ですね？」

「匿名掲示板で知り合ったのでなんとも。まあ多分女の子っぽいよ。俺は面白ければ性別はどうでもいいけど」

ちなみに内容はこんな感じだ。

『今日もお姉ちゃんはツンデレさんなのです。気になる男の子に突っかかって、部屋に戻ってorzみたいな格好で凹みます。私は慰めようかと思うのですが、面白いから放置することにしました。容姿に恵まれているけど、あの性格を直さないと彼氏はできそうにありません。佐藤さん、私はどうすればいいんでしょうか。まあ、私からは何もできませんがw』

それに対する俺の返事。

『あーいるいる。でもそれがかわいいのは学生時代までで大人になると面倒な人になっちゃうんで、若い内に修正した方がいいよ。そうなるともう突っぱねてバリバリ独り身ルートなんで。あと君も黒すぎると引くと思うから適度にね。まあ普段はおとなしげなキャラだと思っけどき』

と、なにげにひどい応酬なのだが、絶滅寸前の文字オンリーチャットサイトの参加者の一人である shinさんはちよつと黒いけいとい子なんだろうとは思う。

「ネットで会ってみたいとは思わないんですか？」

このネットの発達した時代にただの文章のやりとりなどさぞ変わっていると思うのだろう。

「このネットワークが発達した時代にラブレターや紙の本が無くならない理由と似たようなもんだよ。ある種の様式美的な話さ。何だかんだいって男は料理技能の高い女性に弱いとかさ」

「ジルベルトさんも、女性は料理が出来た方がいいと思いますか？」

「身につけておいて損はないとは思うよ。手料理という言葉に男は弱いものだ」

男女平等とかいうのはさておくとして、胃袋を握られると弱いというのが俺の感想だ。前世では握ってくれる人は居なかったというか、むしろ俺が調理していたからな。

まあ、たまにセンスが無いというか幼なじみの瑞香のように致命的なドジっこともいるのだろうけど。

「私、頑張りますー」

「ああ、頑張るといい」

なんか気合い入ったお嬢さんを傍目に、でも話聞く限り本当にご令嬢だから包丁はおろかフライパンも使えないなんて可能性あるよなあ。

ちなみに shinさんは料理は得意らしい。お姉さんが壊滅的な兵器を作るらしいので自衛の為に仕方なかったとのこと。俺も改めて一人暮らしを始めてからそれなりに拘っているとは思う。

桐島レインにとってジルベール・ジルベルトは憧れだった。この鳳翔という檻の中で孤独なのにそれを良しと独りで生きていくその姿に。彼は知らないのだろう、エリートの中にも追従しかできない弱者がいて、彼らにとって自然体に独立しているジルベルトという存在は嫉妬と憧れを孕むものだということを。

そして、桐島レインはあの中では弱者だった。私だって運命を変えてくれる王子様を求めたいという願望が無いわけではない。だからあの日助けられたのは何かの運命だったのかも知れないと思っている。

知り合つて、勝手に付いていくだけです、彼の行くところにはデザイナーズチャイルドもセカンドも関係なくて、ただ人と人のつながりしかない。

彼が心を許すのは心身ともに成熟した大人というイメージで、ともすれば彼自身が大人と同年代という錯覚も覚えてしまうこともあった。

彼も私と同じく親との関係があまり良くないとのことなので、同年代では私が一番彼のことを知っていると自信があつた。今日も何度か行つた喫茶店——ジルベルトさん曰くカフェではなくて喫茶店——でマスターから恋人扱いされ、これはなし崩しになるのではという淡い期待があつただけ、それは一通のメールに打ち崩され。

ネット内で出会えるこの時代に映像でも音声でもなくメールというのが、この文明の発展した世の中では奇異に思えるが、同時に彼らしいと思つた。

彼は他人を生まれとかそういうもので決めつけない。必要ならいいけど、不要なら関わらないというスタンスにこだわるのだろう。今は（友人的な意味で）自分に付き合ってくれているが、疎遠になる可能性だつて捨てきれない。

「何とかしなくては」

メールの相手は多分女性で、ダメなお姉さんを甲斐甲斐しく世話する家庭的なタイプ、それともちよつとした小悪魔タイプだろうか。

まずは料理をがんばろうと私はまだ見ぬ仮想敵に闘志を燃やし、料理の本と食材を購入すべく商店街に向かうことにした。

しかし、失敗した料理（肉じゃが）はたまたま居合わせたお父様の胃を直撃し、さらにジルベールさんの人並み以上の料理の腕を見せつけられて部屋でorzすることになることを私はまだ知らなかった。

「ほう、君もシユミクラムに興味があるのかね？」

目の前に見た目中学生の少女が座り、高校生としては長身の自分が座ると、ちよつと年の離れたカップルか兄妹に見えるのではないかと思える。もつとも自分は赤毛で彼女はダークブラウンなので兄妹とは思えないだろうが。

「まあ男の子ですから人並みに」

「私のコモンセンスに照らし合わせる限り、君はごく一般的な男の子は大きな隔たりがある気がするが」

「俺のコモンセンスに照らし合わせても先生は、ごく一般的な医師のイメージから掛け離れている気がしますけどね」

目の前の少女は実際問題年齢だけで言う少女ではない。

『ドクター・ノイ』。蔵浜でドクターをやっている不思議系生物だ。いや不思議系生物をやっているドクターだろうか。

「前者であるなら私は人間ではなくなるし、後者であるなら私の本質は医者なのか不思議な生物かという命題が発生する」

「怒らないですね」

「何年私をやっていると思うのだ。いい加減慣れたよ。それにこの体なら男女問わずスキンシップし放題だ」

不思議系変態ロリドクターノイ。残念ながら腕は確かなので追放されたという話は聞かない。裏町で知り合ってから、何かと付き合いが多いのだが、この人も個性的だよなあ。

「ああ、それでシユミクラムの話だが、良ければ私が用立てても構わんですよ。なに、一日ちよつとしたスキンシップに付き合ってくれればい」

「それ捕まるのきつと俺だから」

「ゆりかご（赤ちゃんプレイ）から墓場直前まで何でもござれだ。お兄ちゃんノイのポンポンが痛いからみてほしいのー♪」

「はい、スカートたくし上げない。ここそういう店じゃないですし」

舌足らずなノイ先生がもじもじしながらスカートをたくし上げる。それはそれでグツと来るものが無いわけではないが、黒い下着は頂けない。更に残念なことだが、俺は普通に発育している子が好みだっ

た。

「で、話というのは？」

「いや特に無いよ。ジルベルト君と話すことで自分がダメ人間であることを再確認しにきたただけだ」

うわ、年上じゃなかったらマジ殴りてえ。

「私の父親も君みたいな愉快的な性格なら苦勞せず生きられたらうに」

「ノイ先生にも遺伝上のつながりってあったんですね」

「まあ、望まれたわけではなく結果として血縁関係があるだけだ。いや、あるとっていいやら私が生まれたのはかなり特殊なケースだからな」

彼女もデザイナーズチャイルドなのだが、出自がかなり特殊であるということとは言葉の節々から判断できる。成長しない体もそれが問題なのだろう。

「さて時間もいい頃だし、そろそろ帰るとしよう」

ノイ先生は伝票を持った。

「自分の分は出しますよ」

「私がおごると言ってるんだ。素直におごられたまえ」

「ごちそうさまです。その内何かで返しますよ。体以外で」

前回の時は人間ってこの文明が発展した世の中でも空への憧れを忘れないなあと、スカイダイビングをしながら思ったとだけ言うておこう。

スーパービルベルトワールド2-1

鋼の身体に袖を通すという表現が正しいのだろうか。右手を動かすように思考するとイメージ通りに右手が動く。次に歩行、そして疾走だが歩行はともかく疾走は人間ではできないのでフアジーなものだと思った。

電子体からシミュグラムへのシフトは初めての経験だが、思ったほど違和感はない。

「一応君の意見を聞いて製作したが、何とか悪役仕様だな」

「そうですか？ まあ、悪の魔法使いがイメージですからね」

紫と黒と深紅を配したシミュグラムのカラーリングはどちらかというと高圧的な印象を与えるだろう。

「武装は電磁鞭に投げナイフ、機雷、ニードルガン……この辺りまでは問題ないが、これは結構メモリを食うぞ」

「それに関しては普段から使うわけではありませんから、登録だけしといて下さい。あとはこちらで調節します」

「ふむ、ならいいか。よし、これで完成だな」

俺の発案を元にノイ先生が設計したシミュグラム『グリモア』はこうして完成した。

「私が言うのも何だが、バランス良く仕上がったな」

この機体は攻撃力よりも回避性能や継戦能力を重視した機体で、どちらかというと言撃向きだ。反面、防御力には期待できないので、単独の場合は基本的には逃げながら削っていくことになる。

「では、早速戦ってみようか」

「先生が相手をするんですか？」

「私じゃない。私は残念ながら相性が良すぎてシミュグラムを操ることができないのだ」

相性が悪いというのは聞いたことがあるが、良すぎて操ることができないというのは聞いたことがない。

「君の相手はもうすぐ来る」

「お待たせしました」

空間に移動してきた白いシユミクラム。淡い光を発するオプティカルウイングが神々しさを演出するその姿は天使のようだった。

「私の患者の一人である水無月真君だ。真君、彼はジルベルト君。年は君の一つ上だったかな？」

「俺に聞かれても何とも。ジルベル・ジルベルトだ。よろしく水無月さん」

「は、はい。よろしく……お願いします」

chapter 2

日常 one day

俺はこてんぱんにのされた後、電子体にシフトした。

「強いなあ」

ほぼ常時滞空状態な上、ビットとかレーザーとか「お前はどこのバチエラだ？」と聞きたいぐらいだ。間を詰めようとするとトリッキーな接近戦で叩いてくる。間違いなく初見殺しだなどと思った。何より高速機動できる機体はグリモアと相性が悪い。

「初心者割には君もうまくやっていたと思うが？」

「対空武装が必要ですね。機雷で対処するのも悪くないですが」

牽制にはなるだろうが、弾幕で彼女に勝てる訳が無いので、まだ試したことのない奥の手を使うか否かの勝負になるだろう。強固な牙がいる。そう、どんな敵をも打ち破る強固な牙が。だが、そう心の中で思っている自分に気づいて、つい苦笑する。そう、自分は何かの物語の主役ではないだろうし、別にゲームと同じ世界観の世界に産み落とされただけで、戦う必要がないことに。

これはあくまで、モラトリアムの中でやる娯楽に過ぎないということ。そう思うと、ついに大きな声で笑ってしまった。

「どうしたのかね、ついに狂ったか？」

心配そうに見つめるノイ先生に俺は首を横に振る。

「いえ、自分の新しい側面に気づかされただけですよ」

「あ、あの」

今まで相手をしていたシミュクラムの主が電子体にシフトして近づいてくる。何というかノイ先生に劣らず、こう凹凸が少ない少女だ。一つ下とは聞いたが、ノイ先生と違ってまだ見込みはあると思う。

さっきの模擬戦の果敢さとは裏腹に、少し怯えたように俺を見、声(？)を掛けてきた。

「へど、どうしよう、初対面の人に対してあんなに激しくしちやっただりやり過ぎちやっつて変な目で見られないかな」

そんなことないけど。

「へよ、良かったあ。あ、アレ？　もしかして私の声が聞こえるんですか」

聞こえるというか君も俺の思考にダイレクトに返事してるよね？

「へど、ごめんなさい！　ま、まさか思考がダイレクトに繋がるなんて思わなかったんです」

「ノイ先生、彼女もしかして特別な力を持っているんですか？」

「そ、それは……」

珍しく言い淀むノイ先生。

「研究機関で育てられたとか、そんなバックボーンがあるとか……？」

「へな、何でわかるんですか!?　まさかあなたも!」

俺の場合生い立ちが変わっているだけで、ごく普通のデザイナーズチャイルドというだけだ。しかし、彼女はある目的のために研究所で多くの実験などをやったのだろうか？　こんな少女が。

「苦労したんだな。……まあ、この電脳世界が全盛の世の中でのものも何だけど、エスパー実験とか超能力者って本当に実在しているとは思わなかったよ」

あつ、二人ともこけた。

俺の変な誤解はノイ先生の説明によって解かれた。

「ああ、電脳症なんですか彼女？　防壁とか簡単に突破するとか、その

類の」

「脳症というのは、自分と他との境界線があやふやになる病気らしい。俺の認識的にはバルドフォースの隣みたいなものか。」

「でも、実体あるんですよね？ 長時間、実体と電子体の切り離し実験でそういう適正を手に入れたとかじゃなくて」

「第二次電子革命の前には、そんな実験を行っていたという話を聞いたことがあるが、彼女の場合は事故の後遺症だ」

「それは何というか、初対面の相手に対して大変無礼なことを」

「しかし、君は脳症というのを忌避しないんだな」

「知識としては知ってますが、実物がどんな影響を及ぼすかなんてわからない訳ですし。それに彼女と俺たち、人間的に駄目なのは？」

「当然私たちだな。なるほど、おめでとう真君。君は脳症という症状を煩っている普通の女の子であることが実証された」

「ノイ先生は迷うことなく即答した。」

「へ？」

「彼女はどうも俺たちのテンションに付いていけないようだ。」

「無理もない。あのネガティブさを見る限り、かなり周りから忌避されたのだろう。それがこの2、3時間の間に、ちよつと事情のある普通の女の子レベルまであげられたのだ。」

「君がその力を使って悪事を働かない限り、俺は君に対して別に何か言うつもりはないんだよ。思考だってもう読めないだろう？」

「対超能力者とかで思考を閉じるというのはやってるし、こつちの場合合は脳空間だからちよつとプログラムを作れば問題がない。」

「まあ、意識してやられるとまた問題なのだが、無意識のやりとりとこのは無くなった。」

「たまに思うのだが、私は君が天才なのではと錯覚を覚えることがある」

「完全な錯覚ですね。がんばれば秀才ぐらいにはなれるでしょうけど、面倒じゃないですか？ そういう人生」

「そうだな。ところで真くん、そろそろ食事の時間ではないかね？」

「あ、そうでした。じゃ、また病院で。ジルベルトさんもお元気で」

ぺこりと頭を下げたログアウトしていく彼女を見送ると、俺はノイ先生にたずねてみた。

「彼女、日常生活大丈夫なんですか？」

「どうしてそう思うのかね？」

「いえ、何となく」

「もし彼女がいいと思うなら、今度はリアルの彼女とも会ってくれたまえ。やはり脳症なのか、こっちに依存するからな」

「その時は喜んで……って何ですか、その顔は」

その幼い容姿からは想像もつかないニヤニヤした表情。

「たまに思うのだが、君は子どもには甘いなと思つてな」

「ノイ先生だつて俺から見たら子どもですよ」

たぶん20代前半から半ばくらいだと思つて、俺の前世分よりちよつと若い程度だろう。

「できるなら面倒ごとを抱えたくないんですよ。俺もガキですから」

すると今度は何というか、年上の姉のような顔をした。

「いつも思うのだが、私は君をどのカテゴリーに入れるか迷うときがある」

「自分が何者かなんて誰にもわかりませんよ。どんなに進歩しても他人を介してしか自分を確かめられないですから」

親から見たジルベルト、お嬢さんから見たジルベルト、商店街のみんなから見たジルベルト、ノイ先生から見たジルベルトはみんな違う。もちろん佐藤弘光から見たジルベルト評なんかもあるなど自分のことながら他人事のように思った。

「さて、俺たちもそろそろ出ましようか」

「そうだな。たまには君の料理が食べたくなってきたので、この間の奢り分は君が料理を作るということで……」

ノイ先生も物好きだと思つたが、まあいい。久しぶりに他人相手に独身男の手料理でも食べさせるとするか。

「いいですよ、お嫌いなものがあれば抜きますが？」

「特にないよ。では次週の休みを楽しみにしよう」

こうして、次週の俺の予定は女性に料理を振る舞うことに決定し

た。

スーパージルベルトワールド2―2

―チャット空間『暇人の憂鬱』―

佐藤：というわけで、今度久しぶりに本気で料理をすることになった

shin：何がというわけでなのかはわかりませんが、佐藤さんの料理ですか。私も食べてみたいかも

佐藤：男の料理なんて大雑把というか趣味の領域で、現役で金額計算しながら毎日料理を作っているshinに勝てる気がしねえ

shin：そんなことないですよ。でもこれからの季節はサンマがおいしいかも・・・うん、今日はサンマの蒲焼き丼にしよう

佐藤：完全に主婦（夫）的発想だよそれ（苦笑）

火打ち石さんがログインしました

火打ち石：今日は佐藤とshinだけか。

佐藤：ちわ、火打ち石氏。久しぶりに見たけど元気だった？

shin：こんにちわ、お元気ですか？

火打ち石：うむ。少し長丁場だったが、無事に解決して、今は休暇がてら温泉宿からアクセスしている。

佐藤：温泉！ ああ、俺考えてみたら温泉行ったことないや。

shin：私も無いですね。今度オフ会で行ってみましようか。

佐藤：いいねえ、仕事人間の御大将もたまには羽を伸ばした方がいい。

御大将さんがログインしました

御大将：失礼な私だって仕事ばかりしているわけではないよ

佐藤：じゃあ、先週の休日は何をしてたんだよ

御大将：久しぶりに面白い講演があるから聞きにいった。専門とは

少しかけ離れるがとても興味深くてね

shin：・・・

佐藤：・・・いや、御大将それって

火打ち石：俺たちが言いたいのはもう少し、学問から離れるということだ

御大将：君達、いくら私が学者だからって全てを学問でまとめるのはねえ

佐藤：すまん、御大将は学問オタクだったな。俺たちの認識が足りなかつたわ

shin：そうですね。あつ、そろそろセールの時間なので、そろそろ出かけますから落ちますね

佐藤：おつー

御大将：では、また今度

shin：また会いましょう

shin：さんがログアウトしました

佐藤：んじや、俺もそろそろ落ちますわ。人と会う約束があるんで

火打ち石：デートか

御大将：へえ、佐藤君も隅に置けないなあ

佐藤：違いますつてば。まあ、人生相談つて若い内は大切ですよつて話

御大将：ははは、君だつて私より年下だろ

佐藤：中身は40代のおっさんかもしれませんよ？

火打ち石：そうだな、お前の言葉には俺たちより年輪の重みがある

佐藤：そんなもんですかねえ……では、失礼

佐藤さんがログアウトしました

「しかし、作った自分が言うのも何だが、この文明が発達した世の中

で、文字オンリーのチャットとかねえ」

どれだけ離れていてもイーサー（中継ポイント）を経由して電子体に会える現代社会において、チャットサイト「暇人の憂鬱」は電子の海の片隅に存在している。

シンプルイズベストとでも言うのだろうか、多分年代でメル友でもあるshinさんはもちろん、仕事人間の御大将や、不思議系というか神秘的存在である火打ち石氏、今日はいなかったが、姉魂（シスコン）さんなど変な常連が集まっている。

「うん、今度ノイ先生も誘ってあげよう」

きつとよく馴染むはずだ。あの人も紛う事なき変人だし。

「お待たせしました。ジルベルトさん」

急ぎ足で駆け寄ってくるお嬢さんもとい、桐島レイン嬢。

「別に待ってはいないよ。しかし、買い物といってもそんなに面白いものでは無いんだけども」

「そうですか？ それで今日はどこに行くんです？」

そう、買い物に行く話をしたらぜひ付いていきたいという話になったのだ。本当に面白くないんだが、一応女性の視点から見てもらうのもいいだろう。今日は若草色のツイードコートを中心に決めているんだけど、行く場所が行く場所だし。

「……………ですか？」

レインボーストアというネーミングの欠片もないスーパーマーケットだが、適度な値段で品質もまあまあと、俺は結構重宝している。「今度、食事を作ることになったんだけど、女性的にどんなのがいいのかアドバイスが欲しくてね」

「……………女性の方ですか？」

「そうだけど。でも、女性って言っても好みの差あるし、あの人基本的に何でも食べるから問題ないんだけどさ。レインは意外と好き嫌いが結構ありそうだよな」

「そ、そんなことはないですよ」

「そうか。一応ヘルシー志向ということで水餃子は決まりとして、豚とキクラゲの中華炒めに、肉末粉絲もいいなあ」

「ろーもうふえんすー?」

「日本的に言うとな麻婆春雨。おかずというか酒のつまみにもいい」

「デザートに杏仁豆腐は外せないとして、もう一品くらい欲しいが。
「中華得意なんですか?」

「いや、趣味の範疇。中華って手間かかるけど、手順と火力さえ間違えなければ問題なくできるよ。俺は餃子だったら皮から作る派だけど」
「以前は市販のをメインに使っていたのだが、この時代に来てからは自作している。」

「ん?」

「どうかしたのですか?」

「エビか白身を求めて鮮魚コーナーに向かうと、真剣なまなざしで獲物を物色しているかわいい生き物を見つけた。」

「知り合いを見つけたんでちよつと挨拶してくる」

side 水無月真

「やっぱり今日はサンマがおいしそうだけど、こっちのイカにも浮気したい気分だ。」

「予算的に買えなくも無いけど、そうなると副菜に問題が。」

「こんにちは、真ちゃん」

「声を掛けられると、つい身構えてしまうのは悪いくせだ。世界は悪意ばかりじゃないけど、怖いものは怖い。おそろおそろ後ろを振り向くと、ついこの間知り合った赤い髪の男性がいた。」

「あ」

「確かジルベルトさんだ。」

「この間はどうも。へえ、真ちゃん料理をするんだ?」

「私は首をコクコクと振る。」

「サンマもいいよね。今日の夕飯はサンマの竜田揚げにしようかな」
「うっ、そう言われると竜田揚げもいいかもしれない。私の中では蒲焼きにしようと思ったけどちよつと心が揺らぐ。」

「あう」

「イカをオイスターソースで甘辛く炒めるのもいいなあ」

この人はどうして私を迷わせるのだろうか。私は今日サンマの蒲焼きを作ろうと決意したはずなのに。

「ジルベルトさんのお知り合いですか？」

「うん。知り合いの先生の患者さんで、俺の師匠的存在」

「はあ」

師匠さんか。確かに現段階では私の方は腕が上だけど、その内抜かされるかもしれない。素人のはずなのに、切り返しとかがとにかく早いのだ。思考から行動へのタイムラグが無いというのか、それが才能と言えばそうなのかもしれないけど。

それにしても一緒にいる女の人、美人さんだな。もしかして彼女さんなのかな？

すぐくプロポーションがいいし、何といっても亜季先輩と同じくらい大きい。

「そうだ、今週末先生を呼んで料理を作ることになったんだけど、真ちゃんもよかったらどうかかな？」

「え」

胸について考えていると突然のジルベルトさんからの提案について戸惑ってしまう。どうしよう、この間知り合ったばかりの人の家に行っても大丈夫かな。でも、ノイ先生と一年くらい前からの知り合いだつて言うし、不思議と悪い感じはしない。

「返事は後でもいいよ。ノイ先生経由でいいから」

私はとりあえず頷いた。この時点で私の心は一緒に行く方向で定まっていたのだが、何か彼女さん(?)の機嫌が心なしか悪いような気がする。そう、何というか、最近いい感じの甲先輩と千夏先輩に対するお姉ちゃんのジェラシーみたいな。

菜ノ葉ちゃんがこの頃、「私、幼なじみなのに……料理だつてできるのに……脱いだらすごいのに」とか呟いているのは怖いけど最後のは諦めた方がいいと思う。

どう考えても私(事實は事實として認める)へ菜ノ葉ちゃんへ越えられない壁へお姉ちゃんへ多分千夏先輩へ間違いないく亜季先輩というヒエラルキー……。

アレ？　もしかして私、嫉妬されてる？　つまり、あの人はジルベルトさんが好きだけど、ジルベルトさんは興味がないって関係なのかも。

でも、ノイ先生の知り合いということとは、変人だろうし。突然修羅場に巻き込まれるのは怖そうだし逃げることにしよう。

「じゃ、またです」

「うん、また」

お呼ばれするのなら、私も何か持って行こうかな。何となく私の中の料理人魂がうずいたのだった。彼はきつとできる人だ。

side 桐島レイン

「ああ、どうしよう」

スーパーで不機嫌になった後、逃げるように自宅に戻ってきてしまった。あの後一応話はしたのだが、頭が一杯になってしまつて何を話したかよく覚えていない。

「何であんな態度取っちゃったんだろ」

あんな小さな子に嫉妬する自分に自己嫌悪する。でも、自分以外の女性に彼の意識が向けられているのが嫌。

「先生か……ラ・ヴィータのマスターなら知ってるかな？」

ジルベルトさんは、色んな場所に行くけど、基本的にあそこにいることが多い。なら、マスターに聞けばわかるかもしれない。

「これはジルベルトさんに悪い虫が付かないようにするための、そう、予防行為なんです」

先生という立場を使ってそんなかわしい行為をするなんてうら……じゃなくて許せません。私は意気揚々と立ち上がろうとしたが、身体が空腹を訴えたのでキッチンに向かった。

帰りに買ってきたお弁当を食べながら思う。とりあえず、私も何か、そう何か一品くらいは得意料理がないと。先日試しに作ってみたオムレツは何とか食べられる味だった。よし、今度はお袋の味の定番である『肉じゃが』と『きんぴらごぼう』に挑戦してみよう。

だが、今私がやることは。

「どうにかして、その週末の食事会に参加できないものでしょうか」
週末まであと4日。

その間にどうにかしないと。とりあえず明日ジルベルトさんに話を何となく振ってみよう。

スーパージルベルトワールド2―3

結局、料理の基本は水だと思う。水と塩、この二つ次第で料理は格別に美味くもなり、まずくもなる。後はさじ加減か、過分にしろ過小にしろ見極めを誤れば食べられたものでは無い。

基本的なレシピを学び、それを会得してから自分好みの味にしていくのが手料理の醍醐味。決してチーズケーキは投げ捨てるものではないのだ。

「何だねそのチーズケーキは投げ捨てるものとは？」

「金を作るより、満足できるチーズケーキを作る方が困難な人間がいるってことですかねえ」

なるほどと納得しているノイ先生だが、彼女は基本的に何もしない。

ナノマシンをいじれる人物が料理が不得手というのが何となく面白いが、人間才能のある分野もあれば、ない方面だって当然あるだろう。

彼女曰く、普通に作れなくはないのだが、手抜きできるならそれ超越したことがないのだが、調味料代わりにナノを入れるようなマッド医師には食材を触らせないのがベター疑惑は置いておこう。

「準備できました」

「ありがとう真ちゃん、いや助かったよ。ひとり暮らしで結構慣れているけど、同時にやるのは難しいから」

そう言つて真ちゃんの頭をなでる。

「ああ、ゴメンゴメン。つい弟と同じに扱っちゃつて」

俺と両親の共通認識としては弟がジルベルト家の跡継ぎなのだ。弟は歪まないで育つて欲しいとは思っているが、どうなんだろうか。

「だいじよぶです」

「そう見ていると、君達は本当の兄妹のようだな」

「じゃあ、ノイ先生はダメな姉か、年の近い叔母ですね」

「失敬な、私だつてやればできるんだぞ。あのナノだつてもう少し改良を加えればだな」

「それがどうにかなったときは、食料事情が解決しそうな勢いですね」
俺はどこか言い訳がましいというか、イタズラがばれた子どものような理屈を述べるノイ先生に苦笑する。だが、まさか開発中の調理用ナノマシン「ノイ印の万能調味料」から三世代経た「ノイ印の万能調味料EX」が本当に食料問題を解決するとは、この時の俺には想像もつかなかったのであった。

「まあ、私も他の人に使ってもらおうかと思って、料理下手な知り合いに……なに真君は青ざめているんだ？」

「おねちゃ、今日料理するって……」

「ははは、いくら空君でも君と一緒にやなきやそういうのは手を出さないように言っているのに、やるわけあるまい」

豪快に笑い飛ばしてはいるが、帰宅後に「第一次月寮の変」が起こったことを真ちゃんから聞かされたときはさすがに神妙な面持ちになり、さらなる改良を決意したそうだ。

さて、俺は予定通りエビと白身魚の二種類の水餃子を作っているわけだが、真ちゃんやんは蒸し派らしく、小籠包（ショウロンポウ）と中華ちまきを用意してきた。皮の包み方といい堂にいつている。

伊達にあの若さで料理をしているわけではないようだ。あれだけシミュクラムの才能があつて、料理もうまいなんてどういうチートなんだこの子。ノイ先生も性格はアレだけど天才の部類だし、レイン嬢は言うまでもない才女。それと比較するとなんちゃってデザイナーズチャイルドの自分だけかなり地味な気がする。

まあ、機体が最新でもOSが古いパソコンだと十二分にスペックを發揮できないわけで。この時代に生まれて早16年になるが未だに適応できないことが多い。何といつても参考文献がバルドフォース（PC）とかいうのが。

特殊な境遇で生まれた人間が事件に巻き込まれて活躍する話なんて参考になるわけがない。生い立ちはともかくジルベール・ジルベルトとしての自分は普通にカテゴライズされる人間なのだ。

呼び鈴が数瞬の思考のループを止め、意識を佐藤弘光からジルベール

ル・ジルベルトにシフトする。

「ノイ先生、悪いですけどドア開けてもらえますか。今手を離せないんで」

sideノイ

ジルベルト君に頼まれて、私はドアのカギを開け、扉を開いた。起伏のあるラインに艶やかな金髪が映える西洋的な美人だ。何よりちょうど目線近くになる二つの頂がすごい。

「しかし、ジルベルト君と同じ年でこの大きさか」

「あ、あの、ここってジルベルトさんのお部屋ですよ？」

「そうだが、君がジルベルト君の『お嬢さん』だな。私はノイ、仲間内では『先生』と呼ばれている」

「あなたが先生？ その、先生の妹さんとかではなく？」

失礼な娘だと思ふ反面、何故彼女がそのような考えに至ったのか興味を覚える。

「後学のために聞きたいのだが、ジルベルト君は私に対してどういうことを普段君に話しているのかね？」

「ええと、ちよつと問題があるけど立派な大人の女性だと」

む……ジルベルト君は他人に対して私をそういう風に評価していたのかと思ふと心音が早くなってきた。顔には出ていないだろうか。「あの、私にも教えて欲しいのですが、普段ジルベルトさんは私のことをどういう風に仰っているのでしょうか？」

「手のかかる妹みたいなものだと言ってたな。まあ君くらい可愛らしければ手がかかっても役得だろうが」

何かシヨックを受けている彼女を見て、ああ、つまりそういうことかと気付く。

「ジルベルト君に女を意識させるのは面倒だぞ」

「わ、私はそんなつもりでは」

「ならいいが、キッチンの光景を見て同じことが言えるならいいが……」

失礼します、とキッチンに向かっていく彼女を尻目に私は確信を

持った。彼女は彼に恋をしている。彼女は彼に救われたことを運命と捉え、それが恋心に結びついていいるのだろう。だが、残念ながらその程度の運命なら大なり小なり宝くじが当たるより多く転がっている。それを宝物のように感じるとは確かにごくごく普通の『お嬢さん』だ。

「だがジルベル・ジルベルトという人物に救われて運命を感じたのは余りいないか」

そして私の中に渦巻いている感情が嫉妬であることに気づくと年甲斐もなく苦笑する。否、姿はどうあれ女は生まれてから死ぬまで女なのだと言いつていたことを思い出した。

つまり、彼と同じ年の少女が、理想に浸っていられる若さがある少女の恋に向かって邁進する様をある意味見せつけられたのだ。

「私も彼女のように生きたかったな」

もともと、そのような人物はノイではなく別の何かであり、生まれ育った過程を経たからこそ私は私でいられる。

「まあ、結局ジルベルト君は彼女には手が余るだろうが」

彼女の人生がジルベル・ジルベルトによってある種の方向性を持ったように、ジルベル・ジルベルトが形成されるに当たって少なからず影響を与えた自負が自分にはある。

リズムを整えて自分を再確認する。うん、私はいつものノイだ。この少しいい加減な日常こそが私の現在せかいなのだ。足取りを確かに、良い匂いがするキッチンに戻っていった。

side out

炒められた豚肉とキクラゲが卵によってふんわり包まれる。火力は大胆に、動きは繊細に。隠し味に甜麴醬を入れるのが俺好みだ。

その隣では、器用に野菜を切る真ちゃん。青梗菜はちゃんと湯通しを欠かさないし、やっぱり料理好きなのかと感心させられる。何より少ない言葉のやりとりからわかったことだが、彼女の得意料理は和食系というのだから、やっぱりどの料理をするにしても基本をおろそかにしてはならないということだろう。

横でその奥深さを改めて感じながら料理を続けていると、レイン嬢

が飛び込んできた。

「早かったなレイン。お客さんなんだからそんなに急がなくてもよかったのに」

「い、いえ、何かお手伝いができればと」

「正直手伝いは要らないかなあ。ほら、主婦技能を持つ女子高生がいて、下手すると俺の出番まで取られそうだし」

彼女やろうと思えば料理で食っていけるよなあ。でも考えてみれば星修出身だし、シミュクラムの腕も一流だからそっちの方が稼げると思うけど。

「やっぱり料理ができる女の子の方がいいんですね……」

「ん？ 何か言ったか？」

「い、いえ。それより、これマフィンです。よかつたら食べて下さい」「ありがとう。へえ、自分で作ったのか」

ちよつと一部焦げたりしているが、見た目はフルーツの入った普通のマフィンだった。

「……本当は、お料理を持ってきたかつたのですが、味見をした父が止めまして」

「まあ、それはまた今度の機会だな。マフィンは後でデザートと一緒に食べるとしよう」

「はいー」

そして料理も終わり、テーブルに結構な量が並べられた。

「ジルベルト君と真君は学校を卒業したら料理屋を開いたらどうかね？ 十分通用すると思うが」

ノイ先生は見た目とは違い健啖家で、おいしそうに食べる姿は料理を作る者に見れば結構うれしい物だ。最初はレイン嬢も緊張していたようだが、馴染んだのかそれなりにノイ先生と会話を進めている。

反面、真ちゃんとはうまく意思の疎通ができていない気がした。

お互いに積極的じゃないからな。

「ところで、ジルベルト君はシミュクラムの試合に出てみる予定はあるのかね？」

「そうですね、同年代と自分の力量を比べてみたいという欲求はありますよ。今のところ、やってみたのが凄腕ホットドガーだから比較対象にはなりませんし」

「わたし、すぐくないです」

「必要以上に自分を卑下するということは相手を侮辱していることにも繋がるから、あまりしない方がいいと思うよ」

「そうだな、君に必要なのは自信を持つことだ。君のお姉さんは……まあ、あそこまで元気になると君らしくないかもしれないが」

彼女の人生に踏み込むつもりは毛頭無いが、年長者として軽くアドバイスを試してみたくなった。ノイ先生も思うところがあつたのだろう。

「ジルベルトさん、シユミクラムをはじめたんですか？」

「うん、それで俺の師匠さんが彼女。今日は機体を設計してくれたノイ先生のためのお礼なんだけど言って無かったっけ？」

そういえば、なし崩し的にスーパードに付き合ってもらって、なし崩し的に彼女も一緒に来ることになったから事情を説明してなかった気がした。

「うむ、それでだ。ニュービーズインパクトという大会があるのだが、ジルベルト君、真君と一緒に参加してみる気はないかね？」

「別に構いませんけど、それって3人参加前提ですよね？」

情報が転送されて、内容に目を通す。

アリーナで15戦以下は問題ないと思うが、3人1組だとあと1人必要になる。

「まあ、大会の主催者にコネがあるし、別に2人で参加しても」

「あの、私もシユミクラムやりたいです」

「ふむ、シユミクラムの経験は？」

「ありませんけど、がんばります！」

「まあ、良いんじゃないですか？ 幸い大会まで時間がありますし、一週間に一回くらいの訓練で。別に優勝を狙う必要も無いでしょう？」

そのおっとりした雰囲気に対して運動神経は良いし、何よりセカンドなので、経験を積ませればものになるとは思う。真ちゃんもコクコ

ク頷いているし、楽しければ良いよね的なノリでがんばればいい。

「そうか、まあ優勝賞品の豪華ホテルでの旅行に心惹かれる物があつたのだが……」

「ジルベルトさん、優勝を目指しましょう！」

「あ、ああ」

レイン嬢がすごい張り切っているのだが、彼女の場合、金持ちなんだから自分で行けばいいのに。それとも、「親は親、自分は自分」で、その辺の区切りがきちんとできているご家庭なのだろうか？

こうして俺たちは、シユミクラム大会で優勝を目指すことになったのだが……監督(?)と新入部員のノリについて行けない俺と真ちゃんはちよつと苦笑いを浮かべるのだった。

スーパージルベルトワールド another 1

o n e d a y 2 . 8

勲は犠牲になったのだ

徹夜明けで家に戻って来て、非番ということもあり、遅めの目覚めをしたわけだが、キッチンから調理の音が聞こえてくる。

どうやら娘が何かしているようだ。あの子とはあの事件以降まともに話をしていないが、そろそろそんなことをする年になったのか。私も年を取るわけだと、今は亡き妻を心に浮かべる。

今思えばあれの死も不可解な点が多かったが、今となってはどうしようもない。

私は間違はなくレインの前で偽りを処分したのだから。

そして、鳴り響く轟音。

轟音!?

思考を軍人のそれに切り替え急いでキッチンに向かうと、色々なものが散乱した状態のキッチンの中で煙に咳き込んでいる娘がいた。

「お、おはようございます、お父様」

「あ、ああ、おはよう。レインさつきすごい物音が聞こえてきたが（料理?）大丈夫なのか?」

「大丈夫です。その、今日お友達の家料理を持っていくのですが、味見して頂けないでしょうか?」

友達か、いや、この場合は敢えて聞かないでやるのが男親と言うものだ。正直、聞くと余計なことを言ってしまうそうになるし。

「ちなみにこれは何だ?」

「ミートパイです」

ミートということは肉のはずなのだが、いや私の知るミートパイはパイ生地であるので茶色のはずなんだが、何故これは形容しがたい色をしているのだろうか?

「そうか、では頂くとしよう」

意を決してそれを口にした。色は悪いが、味はふつ……。

「グハア！」

肉と一緒に青臭いえぐみが口の中を包み込む。

「お父様？」

「レイン、一つ聞きたいんだが、レシピ通りに作ったんだな？」

「は、はい。でも健康のために野菜のペーストを」

「悪いことは言わない。今日はそちらにあるマフィンだけにしない。マフィンはレシピ通りに作ったんだね？」

「だ、大丈夫です」

「この片付けは私がしておくから、着替えて早く行ってきなさい」

「でも、お父様、お仕事は？」

「今日は非番だ。私だって料理の片づけぐらいはできる」

わかりました、とレインが着替えを終えて家から出て行ったのを確認して急いで水を飲むが、脂汗が止まらない。

あんなものを出したら多分、友達とは溝が開いてしまうだろう。

「ああ、私だ。申し訳ないのだが車を回してくれないか？ ……いや、ちよつと病院を手配してもらいたいのだ。違う、ただの食中りだ」

私は部下が駆けつけるまで意識を保っていたが、部屋の片づけと部署に対する対応を命令して気絶した。

気がつけばよく知る軍病院で目の前には娘がいた。

「あの、お父様」

「レイン、そのお友達とはうまくいったかい？」

「はい、でも……」

「ならいい。今日はもう帰りなさい。それと料理が得意なお友達がいるならその子にきちんと習いなさい。教わることは恥ではない」

時計を確認すれば夕方で、担当医曰く1日の検査入院をした方がいいとのこと。

幸い、現時点では急ぎの仕事がなく、書類ならここでも見られるので了解した。

「しかし、男親というのは難しいものだな」

「母親がいても男親は難しいものですよ、大佐」

聞けば彼にも14歳の娘がいて、そろそろお年頃らしい。

「男女の同権をどれだけ訴えても家事全般ができることはマイナスにはなりませんし、家内にちゃんと仕込むようにします」

環境は違えど苦勞は変わらずということに親というのは難しいものだと言った。

end

one day 3. 1

クッキングガーデン

side 水無月の料理ができない方

「まこちゃんの料理か、私も付いていけば良かったなあ」

最近、私の愛くるしいまこちゃんこと水無月真は、私達の主治医であるノイ先生の関係で知り合った友達と食事会なるものを開くべく外出中だ。ノイ先生は腕はいいが、性格がアレな医師ではあるものの、尊敬に足る人物には変わりなく。その友達も脳症であることを知っていても構わないで付き合ってくれる人たちらしいから安心して送り出したわけだが、そうなる暇なのだ。

「甲はまた千夏とデートだし」

門倉甲。最初はまこちゃんとのことで色々あったけど、良いやつだし身近に異性が居なかったということもあって多少は意識している相手だ。別に付き合いたいとかそういうわけではないのだが、夢で私と甲がその……くっついたりしているの、たまに頬が赤くなるがこれは欲求不満とは思いたくない。

「千夏は良いやつだけどね」

渚千夏はシミュクラムの件で甲に誘われたらしいが、あのサバサバしている性格は好感を抱くには足ると思う。むしろ、問題は甲の幼なじみ若草菜ノ葉の方だろう。あれだけラブラブビームを向けられながら反応がないというか、幼なじみとして育ったから女の子として意識されていないような気がする。

二人が甲を間に並ぶと千夏の背後に赤いオーラを纏った狐が、菜ノ葉の後ろに緑のオーラを纏ったたぬきが現れるのだが気のせいだと思いたい。

「余計なことを考えないで何か作るかなあ」

まこちゃんから料理は自分か菜ノ葉が居るときにだけすることを言われてはいるのだが、今日はどちらもないし、材料だって卵、豆腐、豚肉、ニラくらいだ。

「まあ、パパッと作っちゃいますか」

レシピを検索してダウンロード。

道具を揃えて、調理開始。

「ふふふーん♪」

おう、今日は随分快調に進むものだ。もつとも基本的には豆腐をゆがいて卵と豚肉とニラでとじるだけだから失敗しようがない。味見しても悪く無いのだが、そう、ちよつと物足りないような。

そういえば、ノイ先生から万能調理ナノマシンを作ったから試してみたいと渡されたのを思い出した。ノイ先生曰く「素材が本来持つポテンシャルを最大限に引き出すものだ」ということらしい。一応専門はナノ工学なので、そう極端なハズレは無いだらうと少々かけてみて味見すると……。

「甘い！ 砂糖なんか少ししか入れていないのにこの甘さは何!? そのうか、これは豚肉とニラが本来持つ甘さね。ふんわりとした卵の感触も前より良くなっている気がする。それらの味が染みこんだ豆腐を食べたときに広がるハーモニーは！」

私だつてやればいけるじゃない。

ご飯と一緒に食べた後、これならみんなにも安心して食べられると思つてラップに包んで出しておく。まこちゃんにも自慢できるわね。

side 水無月の胸部がない方

今日は色々な収穫があった。レインさんともそれなりに親しくなれた気がするし、シユミクラムの大会にも出る事になった。ちよつと作りすぎたのはみんなで分配したので、全員に一口分ぐらいは当たるだろう。

ドアを開けるが人気がしない。何かあったのかと慎重に居間に向かうと、そこには仰向けになったみんなの姿が。

甲先輩、 亜季先輩、 千夏先輩、 雅先輩、 菜ノ葉ちゃん。

「こうせんぱい……?」

揺さぶってみるが反応がない。

「おねえちゃ」

ここに居ないおねえちゃんを探してお姉ちゃんの部屋へ向かうと、ベッドにもたれるように倒れるお姉ちゃんがいた。走りなぐった字で「先生、 ナノ、 料理」と書いてあった。

「おねえちゃんー!」

音の消えた如月寮で私の声だけが響いた。

「いやあ、まさか食べ物に作用するんじゃないかと、食べた人間に作用するとは思ってもよらなかった」

情報を最適化した結果、美味しいと判断したのだが、セカンドの場合情報が多すぎて処理しきれずにブラックアウトしたというのが真相だった。幸い2日間だけの入院で済んだが、以後おねえちゃんには料理をさせないというのが如月寮裁判控訴審で可決されている。

「呼吸するだけで美味しいという情報が流れてくるのは、ある意味地獄だったよ」

甲先輩はあの不幸な事件をこのように供述している。

ちなみにこのナノマシンだが、改良を加えて媚薬的なナノマシンとして売りだされたのは別の話だ。

end

スーパージルベルトワールド3―1

シミュクラム戦というのはアリーナと呼ばれる空間で行われる。当然非殺傷設定だが、それを除けば同レベル程度の間人同士のやりとりが楽しめるので、ユーザーだけではなく観客も結構いる人気の娯楽だった。

「まあ、古代のコロッセオしかり、近代のボクシングしかり、人間の闘争本能未だ衰えずということか」

対戦相手のシミュクラムをいなしながら俺は一人呟く。

現在1対1で対戦中。相手は格闘仕様だが、俺の構築した陣を突破するほどの堅さを持ち合わせたタイプというより素早さと高火力で押し込むタイプのようなから、相性的には有利だ。

俺の基本戦術は待ちだった。

地雷と地雷をばらまき、後ろから狙撃。陣を突破された場合は、投げナイフと電磁鞭を使って戦う。硬い相手には不利なのだが、ベシツクなタイプであれば問題ないだろう。

爆発音と共に機体をボロボロにしながらも突破してきた対戦相手が銃を構えるが、それを回避しながら鞭を振るい止めをさす。ここはシヨック死でも起こさない限りは安全なので、その分俺も容赦するつもりが全く無かった。

もつとも殺し合いになっても容赦する必要は全くないのだが。

『勝者 ジルベルト』

アナウンスが上がると共に俺は電子体に移行し、一息つく。余り歓声が上がらないのは、俺のスタンスが基本的に静であり、面白みに欠けるからだろうと思うのだが、俺のポジションを考えるとダメージを負うようなら危ないので、このやり方が効率的なのだ。ここがエンターテイメントの場であっても無茶して観客を喜ばせる義務はないだろう。

「相変わらず如才なく勝利するな」

観覧席に戻ってきた俺にノイ先生の意見に苦笑した。

「まあ、正統派でないことは認めますけどね」

「で、問題は？」

『試合を開始してください』

アナウンスと共に試合が開始される。

「ふむ、確かに筋は悪くないが勢いに欠けるといいうか」

「基本的に優しいんですよ。だから、傷つけるという行為に対して戸惑う。死なないとしてもね」

「まあ、娯楽に転用できるようになったものの、シミュキラムはあくまで兵器だ。これで楽しもうと考える神経の方がどこかおかしいのさ」
「まあ、世界もある程度安定すると多少は退廃的になるということですね。余裕があるようで無いのが問題ではありますが」

世界的に見て紛争は比較的収まってはいる。反面、それは人口の膨張を意味しており、どう考えてもパラダイムシフトを必要としていた。まあ有り体にいえば俺がかつて生きていた時代と似たようなものなのだが、俺が死んだ後あつちの世界はその辺の問題を解決したのだろうか？

「その辺は政府にがんばってもらおうしかあるまい。今後は宇宙開発やナノマシン分野に予算が投じられると私は思っているよ。政府直轄のドレクスラー機関だってナノマシンの研究を進めていると聞く。それに、一市民である我々はその日その日をまじめ……とまではいかないが、食うために働くのが精一杯だろう。そういうのは税金をもらって食っているお偉いさんがすればいいのだよ」

「ごもっともで。ああ、負けてしまったか」

アリーナでは、勝敗——レイン嬢の敗北——が決していた。しよんぼりしながらこちらに向かってくる少女の姿は、悪いことをしてしよんぼりする仔犬のようで、ちよっとかわいく感じる。

ちなみに彼女の姿はいつものようなお嬢様然とした姿ではなく、ノイ先生コーディネートのデニムに白いジャケットを羽織った少しラフな格好だ。美人は美人というだけで何を着ても似合うなあ、というのが正直な感想である。

「お疲れさま」

「また負けてしまいました。私には才能が無いのでしょうか？」

「レイン君は真君やジルベルト君を基準に考えているから勘違いするかもしれないが、シミュクラムをはじめ一週間でその上達ぶりは並以上だ。君が今試合に出ている理由を忘れたのかね？」

「それは……戦闘の雰囲気慣れる為です」

「そうだ。幸い試合まではまだ期間がある。勝つに越したことはないが、しばらくは戦場で冷静に対処する方法を考えた方がいい」

レイン嬢の機体もノイ先生が設計したのだが、先生が極限まで趣味に走ったネール・エージュや俺の志向に合わせたグリモアと違い、彼女の機体は射撃中心という普通のコンセプトだった。

サーチ範囲が広いという特性を生かして射撃をするという部分は俺に似ているのだが、彼女の場合はジャマーの展開なども可能なのでチームを組んだ上でとても心強くなる予定だ。

だが、同時に彼女が的になると不利になるので、その辺は改善しなければというのが現在の実戦訓練の趣旨である。相性的には真ちゃんほど絶望的ではないので、順調に成長してもレイン嬢には負けないだろう。

別にレイン嬢に才能がないというわけではなく純粹に相性の問題で、同じタイプであるならば性格が悪い方が勝つということだ。デザイナーズチャイルドがネットに特化したセカンドに勝てるというところが奇異に思えるかもしれないが、肉体の延長線上と考えれば運動神経の良さはネットでも役に立つことに変わりはなく、考えようによってはバランスがいい。

もちろん基本的にセカンドのネット上における優位性は変わらないのであるが、相性勝負に持ち込めるレベルなら問題ない。第一、普通のセカンドでも本気になった真ちゃんに勝てるとは思えない。そ

してそれは新人戦になんちゃって新人を入れるようなものだし、真ちゃんも知り合いにあまりばれたくない。つまり、それとなく盛り上げるためには戦術で戦う必要がある、その幅を広げるためにはレイン嬢の成長が不可欠と言うことで、現在はシングル戦と俺とのタッグ戦で、どの状況で、どの戦術が有効なのかを見極めていた。

「さて、これから……」

団体戦の観察をしようかと思っただが、アリーナが騒然となる。どうしたのかと覗いてみると闖入者が妄想についてシユミクラムで批判している。

「いつも思うんですが、反AI主義者はどうしてシユミクラムという電子の鎧を纏ってその辺を否定するんでしょうか？俺からしてみれば技術的には同系統のはずなんですが」

「反AIといっても妄想そのものを否定する勢力、生物学的AIを否定する勢力と色々いるからなあ」

「しかし、あいつらも暇人ですねえ。あつ、ケニツヒスだ」

黒と赤をベースにした威圧感を与えるデザインの機体から聞こえてくる声に残念ながら聞き覚えがあった。心の中で否定したかったのだが、レイン嬢の顔を見るとどうも同じ事を考えていたらしく、顔を見合わせる形となり、ついため息を漏らす。

「知り合いかね？」

「俗にいう同じ学校の嫌われ者同士ですね。まあ、別に俺は彼が俺の生活に影響を与えない限りは生きていても死んでいても構わないのですが」

「ジルベルトさんとあの男が遠ざけられる理由は違いますが、彼は典型的な鳳翔の生徒です。正直死んでくれればいいと思っっています」
レイン嬢に関してはあのような被害があったので言うことが辛辣であるが、鳳翔の生徒としても男としても弁護の余地がない。というより最近俺やノイ先生に充てられたのか毒が強くなって気がするのだが大丈夫だろうか？

もちろん、俺たちの会話をしている中でも舞台上で話は進んでいる。

『甲くん、受け取りたまえ！』

アリーナに突き刺さる巨剣を、白と青をベースにしたシユミクラムが手に取り一閃。

「ケニツヒスって美形で優秀なのに、どこかギャグキャラっぽいよな」
口を開かず黙っていればまともというのが彼に対する評価である。

「ギャグキャラですか？」

「いや、今後もこんなことあると厄介だから、3ヶ月ぐらい長期入院してくれないかなと思って」

まあギャグキャラは爆発してもすぐ復活したり、どう考えても死んでるはずのダメージを負っても次の時には平気で登場しそうな気がするから無駄だとは思うが。

「そう言うことならば手を回していいナノを」

「ジルベルトさんがあんな男のために手を汚す必要がありません！」

「冗談だよ。それに言い方は悪いが、あのシユミクラムの人にあいつが粘着すると俺はとっても助かる」

「……どなたか知りませんがご愁傷様ですね」

俺と彼女の中では因縁付けられる可能性が120%くらいだと思っていた。残りの20%は取り巻きたちの分である。俺は厄介ごとに巻き込まれるであろうシユミクラムの中の人に心の中で合掌した。

おまけ

『暇人の憂鬱』

妹魂：あら、佐藤さんはそういう理論は嫌いかしら？

佐藤：別に否定はしませんよ。ただ、どっちかというバランス派なだけです。

御大将がログインしました

妹魂：お久しぶりね

御大将：ご無沙汰しています。しかし今日は大変だったよ

佐藤：研究室を爆発させたとか？

御大将：佐藤君は僕のことをマッドサイエンティストか何かと勘違いしていないかい？

佐藤：まあ、その辺はいいですけど、何か問題でもあったんですか？

御大将：僕の問題じゃなくて教え子がちよつとね。まあ結局は事なきを得たんだけど。

佐藤：ああ、先生業も大変ですね。気楽な学生ですつといたいなあ
妹魂：佐藤さんは働き出したら飽きるまでやるイメージがあるけど
佐藤：飽きたらまずいですよ仕事。でも、探偵業とかいいかもしれ
ませんね。助手はshinさんにやつてもらってリアル・ネット両方
で見つけます、みたいな

御大将：……それはちよつと怖いかもしれない

妹魂：そうね、寝首をかかれないうちに注意しないと

佐藤：や、二人ともどれだけ後ろめたいことしてんだよ

妹魂：大人になるって大変よね

御大将：まあ、刺客には困らないからねえ

佐藤：もしかしてこのチャットは危険人物が多いのではないだろう
か？

妹魂：申し訳ないけどあなたに言われたくないわ

スーパージルベルトワールド3―2

鋼の肉体が迷うことなく銃弾の中に飛び込み、仲間のピンチを救い、熱量オーバーの機体を反転して撃破。形勢は逆転し、彼らの勝利が確定した。

「いや、主人公キャラだよなあ」

俺はその光景を見て、多少演技じみているとは思いながらも両手を挙げて口から言葉を出した。

「主人公ですか？ 物語とかの？」

「うん。元々あった天賦の才を努力で磨いて、友情に厚く、そして勝利をつかみ取る。人間生まれたからには、そういう立場に一度はなってみたいものだな」

現実はともあれ、男として生まれたからには、誰もが正義の味方っぽい役割をしてみたいと思うのだ。勝利を飾ってハイタッチしている少女との関係は友達以上恋人未満といったところだろうか。

前世では、それなりに男女の付き合いはあったが、やっぱり若い男女の青春群像は微笑ましいものだど、同世代の肉体を持つジルベルトの中の人こと佐藤弘光は思う。

「私からしてみればジルベルトさんだって充分に主人公のような気がします」

「そんなことは無いと思うが……そうだな、レインは献身的なヒロインタイプかな」

多分一度決めたら一途に尽くすタイプだろう。

「そんな、でもそうですね。いつも側にいたいと思っています」

何か納得しているようだが、だからこそ本当に悪い男に引っかかるなければならないと思った。親御さんとはうまくいっていないようだから、男との関わり方の面倒を見なければと思うのだ。

「お待たせしました」

「お疲れ様。やっぱりリミッターをかけても真ちゃんは圧倒的か」

いつものように試合を終えてきた真ちゃんの頭をワシヤワシヤと撫でる。

「もうジルベルトさん、あんまり子ども扱いしないで下さい」

「悪いとは思っているんだけど、何となくね。それより相変わらずすごくトリッキーな動きして、よく酔わないね?」

あの凶悪なビットは本戦までは封印することを決めていた。だから、彼女は基本的に高速移動による接近戦だけで戦っているのだが、それでもそこらのユーザーでは相手にならない。この辺が才能なんだと感心していた。

「そんな、でもやっぱりシユミクラムで戦うととても楽しいです。こう、水を得た魚のような」

「うれしいのは分かるけど思考漏れているよ」

「あう」

「それなら、そうと早く言ってくださいよ!」

「まあ、何はともあれ、次の対戦相手は彼らだ」

「そう、遠距離、中距離、近距離ととてもバランスが取れているチームだ。」

「あ」

「知り合い?」

「そうなんですけど……実は私がシユミクラムをやっているのを教えていないんです」

「まあ、彼女も結構色々あるし、そうなるよ。」

「まあ、何とかなるだろう」

「こつちもあまり関わりたい訳ではない。漠然とした勘なのだが、彼はトラブルに巻き込まれそうな予感がするのだ。」

「さっさと終わらせて撤退しよう」

「そうですね」

「はい」

「レインは俺の意図が分かったようだったし、真ちゃんもこの場ではあまり望んでいないのだろう。」

side 門倉甲

姉代わりである亜季ねえから自分の適正に応じて強化されるシユ

ミクラムを作ってもらい、シユミクラムの師匠である久利原先生から筋もいと評され、事実、多少負ける事はあっても着実に勝ち続けていた。

対戦チームは戦闘回数はそれほど多くなく、勝利したときも接戦であることが多かったので楽勝だと高をくくっていたのが過ちだったのだ。

「本当にあいっすらビギナーかよ！ 雅、サポートできそうか？」
「無理だ。あの白い機体がちりマークされて動きようがない」

雅の相手をしている白い機体の実力はおそらくトップレベルだろうと思っていたが、反面、他の二人は劣るワントップのチームだと分析していた。だから、雅になるべく時間稼ぎをしてもらって俺と千夏で相手を撃破、3対1にもつれ込ませる予定だったのだが、前提が崩された。

青い機体のパイロット——RAINだったか——の実力は俺たちが想定した範囲内だが、意外としぶとい。弾幕とジャマーを巧みに使い、千夏に決定打を与えさせない。そして問題は俺と相對している機体。

どういう技術か分からないが、センサーに反応する地雷と、反応しない地雷があつて迂闊に飛び込む事ができないのだが、動かなければ青い機体ほどではないが遠距離からの射撃が飛んでくる。

技量的には、白いのは俺より腕は上で、目の前の黒いのは俺と同じくらいだろう。青いのは接近戦さえできれば千夏なら容易に蹴散らせるが、問題は雅が白いのを止めておくのが無理だろうという点だ。

この状況を打破するためには無茶は承知でこの地雷原を突破するしかない。

覚悟を決めた俺は飛び込むことにした。数は多いが、思った通りそんなに威力は高くない。

「逃がすか！」

黒い機体が慌てて後退するが俺は踏み込んで大剣——レセクトンブレイド——を叩きつけた。完全に手応えが入ったと思った瞬間、周囲が真っ白になりセンサーが全部効かなくなった。

「何が起こった!?!」

その直後、外部からの衝撃。耐久ゲージがレッドラインを割り、シミュグラムは動かなくなった。俺の戦いはそこまでだった。

3対2となった以降は言う必要も無いだろう。

千夏は何か青い機体を撃破したものの、雅が白い機体に撃破され、その後千夏が白い機体と合流した黒い機体の2対1となって倒された。

正直、ここまで鮮やかに敗北を喫したことは今までなかった。

「負けたんだな」

試合終了後、俺は対戦相手——あの黒い機体の使い手——を追いかけて走った。

「おい!」

その男は年頃は俺と同じくらい。ルビーを溶かしたような赤い髪が印象的だった。美形というのはやっぱり世の中には居るのかと妙に納得させられる。

彼は俺を見るとアゴに手を当てて考え込むようになってぶりを見せ、その後肩を叩いた。

「まあ、人生色々あるけど頑張れ」

よく分からない言葉を掛けられてぽかんとしている俺を余所に男は去っていった。隣にいた美人さんも軽く会釈をして小走りで男を追いかけていく。彼女がRAINか白雪なのだろう。

まるで狐につままれたような錯覚に陥った俺は、雅と千夏の元に向かうと正直な感想を告げる。

「世の中広いよなあ」

同世代とは思えない異質さは本戦で当たるとすれば驚異だろう。個々の強さもそうだが、戦闘ではなく作戦が強いイメージを抱いた。

「でも、次はもつと練習して勝とう、甲」

「そうだな。今回は相手が上手だったけど、次は負けないぞ」

こいつらが仲間で良かったと思うと共に、俺はライバルの出現に心躍らせるのだった。

side out

「まさか、この段階でカードを切る羽目になるとは思わなかった。我慢できない相手に助かったけどな」

俺の持っている手札の一つ、ファントムは動く物に反応するロジックを組み込んだ幻影なのだ。攻撃をすれば強力なEMPを展開してセンサー系を行動不能にするが、使っている間はメモリの消費が激しく他の行動に移行できない。

さらに長時間展開できるものでもないので、持久戦になったらアウトという欠点だらけであり、一度使えば二度目は警戒するだろうから一発ネタなのだが、他にもバリエーションあるし、戦術や破壊力という点ではネールエージュのカードの方が遙かに重要なので切っても惜しくはない。

「確かに強かったですね」

「荒削りだけど、最初に見たときより強くなっているとは思うよ。才能か、よほどいい師匠が付いているのだろう」

「でも、そんな彼らに勝ちました。私たち負けませんよね？」

「さてな、優勝できないと俺が自腹で君達を温泉に連れて行かなければならないし、全力を尽くすさ」

そう、そもそも俺たちがこの大会に参加することになった事の発端は優勝賞品の温泉旅行だった。そのために優勝を目指すはずだったのだが、なぜか優勝できなければ俺とノイ先生が折半という形で温泉に行くことになったのだ。正確にはノイ先生は自分の分を出し、レインと真ちゃん俺が出すという形だ。

「さしずめ『陰謀、闇討ち、勝利』といったところか。卑怯すぎない程度に勝利をもぎ取るとしようか」

今の表情を後日レインはこう評した。

「悪の幹部ですね。それもまたジルベルトさんの魅力なんですけど」

スーパージゼルベルトワールド3―3

「真ちゃんの友達棄権しちゃったな」

先ほどの試合を見ていたのだが、赤いシミュグラムユーザーの負傷が大きすぎて棄権を選択したのだろう。

同じ大会に参加している敵対関係な間柄ではあるものの、もう少し彼らを見ていたかったというのはある種のファン心理なのだろうかと思うと、つい苦笑してしまう。そう思えるほど短期間における彼らの技量の伸びはすさまじかったのだ。

「さて、本戦も残り8チーム。いや彼らのチームが棄権したから7チームになるのかな？」

結果から言うと敗退したチームが復活して8チームとなったのだが、上位チームに渡される商品は渡されるようだ。

ちなみに決勝は3連戦で、先に勝ち上がったチームは相手チームが決まるまで休憩を取れる仕組みなので、スピードも計算しなければならぬ。

「どうあれ、ようやく決勝だ。適当に頑張るとしようか」

side ノイ

「おや、こんな児戯に顔を出すとは珍しいこともあるものだな、橘社長」

モニター越しではあるが、私の前に現れたよく知る人物。電子体であるのに血色の良さそうではなく、ある種の無機質さを感じさせる。「姪っ子の作った機体に興味があったのよ。あと、あなたの作った機体もだけど」

アーク・インダストリー社長橘聖良。今世紀に於けるサイバーネットにおけるオーソリティにして、ノインツエーンの弟子。間接的な遺産の継承者。

「姪というと、君の秘蔵っ子の西野亜季君か」

自分との接点と言うとA・F・Aのつながりくらいなのだが、もみ消されてはいるものの、あのバルドルに仕掛けた人物だと聞いてい

る。

「それにしても、彼すごいわね」

彼とはジルベルト君のことだろう。今も余裕をもって相手の攻撃を捌きながら反撃してチマチマ削っている。派手さはなく確実な手段なのだが、ルールを考えればもう少し手早くやった方がいいと思う。

「シミュクラムの腕としては真君の方が遙かに上だと私は思うが」

「確かに戦闘の適正という意味では、真さんは群を抜いているわ。今の甲さんでは無理でしょうね」

「甲？ ああ、あの青いシミュクラムのパイロットは門倉永二の息子だったのか。道理で素人ながらセンスがあるわけだ」

門倉永二とは、年に一回会えるかのレベルだが、定期的に近況を報告しあう程度の知り合いではある。彼の部下であるジゼルとは知らない仲間でもないが、そう言えばしばらく彼女とも遊んでいないな。

「でも専門家の私が気になるところは別よ。彼、周囲が気づかないレベルで、自分の都合の良いように構造体のパラメーターを弄っているわ」

専門家どころか、権威である彼女の発言の意図に気づくのに数瞬を要した。アークがスポンサーの大会のステージとなる構造体は、当然アークが構築している。構造体は火力によつて壊される可能性はあるが、意図的にパラメーターを弄るとなると、話はまた別だ。

「性格が特殊なのは私も認めるところではあるが、そっち方面のに関しては普通の人間だぞ」

「範囲は仮想半径10mといったところかしら。妨害をするというより自分が行動しやすいようにロジックをねじ曲げている？ それとも……」

私の言葉に反応せず独白を続ける悪い癖が出ているようだ。アーク社の社員は彼女と日常的にコミュニケーションを取れるのだと思うと感心するところである。

と思った矢先、橘社長がモニターの向こうへと手をかざすと、それは消失すると共に、私の前に人型の何かが出現する。

「せっかくだからこっちで見た方が早いわね」

アーク社の中枢からここまで文字通り移動したのだろう。構造体では出ることは自由だが、事故の可能性を考慮して入るポイントは大抵決まっている。だが、それはルー尔的な意味であり、知っているならさしたる問題ではない。もっとも知っているという大前提がそもそもおかしく、それもほぼ一瞬でということになると電腦における彼女の實力がよく分かる。

「私からしてみれば、あなたの方が異常なのだが」

「仮想内では、ロジックを熟知して手間さえ惜しまなければ何でもできるわ。それにアーク内ほどではなくてもここも庭のようなものだし」

手間を惜しんだように見えない橘社長の言に啞然とするなか、複数のモニターが現れ作業を開始し始めた。本社で彼女が同時に展開する数に比べれば少ないが、それでも常人の比では決してない。

「ロジックを熟知していれば文字通り何でもできる。でも、彼にはおそらくその知識はなく、無意識の領域でそれを成している。多分、彼自身も気づいていないと思うけど、今擬似的に位相をずらしているわね」

「すまん、私は専門家でないので、私の分かる内容で説明して欲しい」
「つまり擬似的に当たらない状況を作っていると言っても言うのかしら。あの青いシミュグラムがジャマーを展開しているから、そう言う物だと納得してしまうのよね。ロジックをねじ曲げているか、相手に幻を見せているか、AIを誤認させているか」

「つまり、それが彼の特質かね？」

「彼が意識してそれができるのであれば、現状のセキュリティ関係は意味をなさないのでしよう。電腦症患者の症例に近いものもあるけど、医者から見ると全くそういう傾向はないんでしょう？」

「真君の声は聞こえるようだが、彼女の場合はチューナーが会えば聞こえてしまう。そもそも普通のデザイナーズチャイルドで電腦症になった例はほとんど聞いたことがない」

「つまり特別な存在ね。電子体やプログラムに干渉できるあなたの能

力に近いと言えれば近いけど」

「私に近いか」

ノイという存在は特別である。まず出自という点では他の追随を許さないだろう。翻ってジルベール・ジルベルトはというと、デザイナーズチャイルドとしては普通の存在だ。思想的にはAIでも反AIでもなく、思想的にはどちらかという私や橘社長側の人間。他人にモラルを説く割には自分のことはどうでもいいように扱う享樂的な行動。

「別に彼には世界征服を企むようなタイプではないし、放っておいても害はないよ」

「そうね。それに私もこんなつまらない事で『友人』を失うのは良くないことだし、私の全能をもつてしても突破できない一般コミュニティもあるのだから不思議ではないわ」

「いや、待ちたまえ。どう考えてもそれはどこかおかしい」

あの橘聖良ができないといえるような一般コミュニティがあつてたまるかと思うのだが、今の私に彼女の心境など分かるはずもない。分かるのはそれが彼女にとって愉快なのだろうということだけだった。

side —

『ニュービーズインパクトも残るチームはあと2つ！ 残る2チームはどちらも圧勝を続けてきました！ 勝利の女神は一体どちらに微笑むのか!?!』

最終戦は遮蔽物のあるステージだった。相手は超近接型と援護の機体に、トラップを多用してくるチームだ。おそらく勝ち残ってくると思っていた俺たちは、それ対策用の準備を入念に施してきた。

「あのトリッキーな動きをする奴さえ押さえ切れれば勝つたも同然だ」

チームの要であろう白い機体を押さえ切れれば、後は俺たちの火力で押し切れる。故に全員がスタンスモッグを装備していた。

「あの白い機体には飛び道具がない。そんな風に考えていた時期が俺

にもあつたのさ」

白い機体から放たれる複数のマテリアル。その無駄の無いフォルムは決して飾りではなく、破壊のために存在することを如実に示していた。無慈悲に放たれる白い光のカーテンに、俺の意識は苦痛を感じることなく吹き飛んだ。

あの攻撃を受けたGさんは後に語る。

「いや、あれに対抗したいなら瞬間的に跳躍して高々度から射撃または蹴落とすとか、それ以上の火力で対抗するしか無いだろうな。俺だったら戦わないで逃げるよ」

『アリーナの白い悪魔』の誕生の瞬間だった。

side out

〈直接やるのもいいけど、砲撃はやっぱりロマンです〉

ああ真ちゃん、心の声だだ漏れだよ。やっぱり日常生活抑圧されているとぶち切れた時やばいんだなあ。良かった、俺は自分に正直に生きていて。きつと家庭でいい子でいようとするとサディスティックになりそうだし。

「今まで手を抜いていたのか！」

接近してきた機体がモニター越しで咆吼する。

「自分が少ないカードで勝負できるなら使わないだろ？」

相手の攻撃をいなしながら、俺も構えた。

「さて、当然俺もまだ切つてないカードがある。君の中での俺のデータは距離を詰められるのが好みではないと入れているだろう」

佐藤弘光は弱い男なので戦わずに勝つことを是とするが、ジルベル・ジルベルトとしてはやっぱりその生まれ故に運動神経がとて面白い。

「実際は彼女同様、本来接近戦が強いとしたら君の前提は崩れる訳だが」

一人が落ちた今、自分まで事前のデータを基に動いて相手の言葉が本当だったら万が一のチャンスも失われるが故に、簡単に動けない。

「俺は君だけを受け持っていていけばいいが、君は俺を倒して2対2に持っていかなければならぬ。俺は口が上手い臆病者だから自分を守るための嘘かもしれないがな」

彼の思考にまた一つ余計な情報と言う名の毒が入れられた。臆病者という要素は俺の今までの戦いぶりを見ていけば当てはまるが、それならばもつと簡単に勝てる戦術を立てればいいと考えるだろう。

さて、そろそろ時間か。

「大会MVPは譲るとしても、男の沽券に関わるので、少しは働くとするか」

力強い踏み込みで間合いを詰めると、用心のためか、目の前の敵は後ろにある通路に後退した。瞬間、相手の機体へと多数の銃弾が放たれ、壁の向こうまで勢いよく吹き飛んだ。

殺さないように威力を落としているし、当然セーフティが掛かっていたので、運がいいのか悪いのかは別として意識があるようだ。

「ま、またしても騙されたのか!？」

「いや、一撃で倒す方法は準備してあったよ。逃げた場合、準備させていたスナイパーでぶっ放すのは最初から予定通りだったから」

「性格の悪い奴めー」

顔は見えないが、おそらく悪態をついているのだろう。だが意識を失った彼にこれ以上構ってやる義務は無い。試合の結果はもう語る必要もないだろう。予想通り最後の一人も浮かされて、ビッドで打ち上げられて、小型ミサイルで爆撃されてレーザーでオーバークイルされた。本気になった今の真ちゃんはディアブロとかそんな感じである。

結果として大会は俺たちが優勝し、大会MVPは紛うことなく覆面の少女こと白雪。

もつとも俺にとつて重要なのは、一週間後に行く予定が確定した温泉付き豪華リゾートでの過ごし方であり、当然男一人の時間のつぶし方だった。火打ち石氏もこの間温泉に行ったらしいのでどのようにならしたのか聞いて参考にさせてもらおうとしよう。

そう言えば真ちゃんはノイ先生が責任を持つとして、レインってその辺のこと親御さんにきちんと説明できるのだろうか？

スーパージゼルワールド4―1

side 門倉永二

古い戦友から電話、それも本業用の回線が入ってきたから何かと思えば、依頼内容を聞いて呆れた声を出す。

「はあ……お前から連絡があるから何かと思えば……うちは傭兵と運送業はやってるがそっちは専門外だ。それにボディガードならお前の息の掛かったやつを使えばいいだろ」

「これは私のプライベートだ。だからこそお前に頼んでいるんだろ」

「これだから親バカは……」。

「娘のレインちゃんだっけ。エイダさんに似て美人になったか？」

「……私の強さは私似だから扱いに困る」

「それは何というか……まあ、ノイは知らない間柄じゃないから、それとなくならやつてもいいが」

「では料金はこれくらいで」

「使うのは一人だからそこから一割ぐらい引いて、その分嬢ちゃんに小遣いで渡してやれ。大丈夫だ。ちゃんと元は取れている」

緊急の場合やリスクが高いならともかく、危険性がほぼ皆無のボディガードでこの金額ならむしろ破格だろう。身銭を切るっていうんだからそれくらいでいい。

「分かってるって、骨休みに来たって設定でつかず離れずをすれば良いんだろ。泊まるホテルはそこだな……すまんが宿泊費は経費で落ちるのか？」

「それは大丈夫だ。部屋もなるべく近くなるように手配する」

詳細を詰め終わった後に、俺はコールをして、部下を呼んだ。

「お呼びでしょうか？ 大佐」

「割のいい仕事が入ったが、クライアントは女性を指名だ。よって大尉にその任を任せたいと思う」

「ではサポートにモホークを」

「一人でできる仕事だ。羽根を伸ばすついでにガキどもが羽目を外さ

ないようにしてくれればいい」

もつとも、唯一の大人が羽目を外す可能性の方が高いのだが……。

「了解(ヤー)」

フェンリルは何でも屋では無いんだと思いつつ、経営者の立場からすると美味しい仕事なので無碍にもできないのが何だかなと思わないでも無かった。

side out

chapter 4

夏色模様 summer vacation

side 水無月空

「しかし、まこちゃんが友達と旅行ねえ……まあ、ノイ先生と一緒にだつて言うから心配……うん、無事に帰ってきてね」

お姉ちゃんは冗談のつもりで言ってますが、もしノイ先生があれでも猫を被っていることを知ったら止めたのではないだろうか。

「まこちゃんはそんなに体が丈夫じゃないのだから羽目を外しすぎないこと。体調が悪かったらノイ先生にちゃんと相談すること。期待はしてないけどお土産はきちんと買ってきてね」

「うん」

「あと、まあ色々言いたいことはあるけど楽しんで無事に帰ってきてね」

「はいー」

「ここまででは良い話で済んだのだけど、問題はここからだつた。

「車が来たようね、私もあいさつを……ってアレ誰？」

そこには普段の抑えめのコーデイネートではなく、開放的な格好をしているジルベルトさんが。

「ああ、真ちゃんのお姉さんですね。いつも真ちゃんには色々お世話になってます」

「は、はあ、こちらこそ……って、もしかしてあなたも旅行に？」

「ええ、後一人拾って来る予定なのですが、聞いてなかったのですか

？」

お姉ちゃんがジト目で私を見ながら、ジワリジワリとにじり寄ってくる。

「まこちゃん、私男の人が一緒なんて聞いてないわよ。あの人ノイ先生の彼氏か何か？」

彼氏さんではないんだけど、友達以上恋人未満というか、ノイ先生は肉体関係OKだって公言しているし。でもそうなるならレインさんが……。

「ああ、申し遅れました、鳳翔学園2年のジルベル・ジルベルトです。真さんとはシュミクラムでよく相手をしてもらっています。今回は俺が宿泊券を4人分当てましたので、いい機会だから親睦を深めようと誘っただけです」

「同じ年？ それに親睦って……まさか、まこちゃんを狙って!?!」
「いや違いますって」

何というか普段はクールというか達観しているジルベルトさんも、お姉ちゃんが相手だと普通の17歳なんだなあってちよつと安心した。

「おーい、いつまで待たせるつもりだ。そろそろ出発しないとレイン君との待ち合わせ時間に遅れるぞ」

「ノイ先生、私、男の人と旅行だなんて聞いてませんよ!」

「ええい、空君はそろそろ彼女を放置したまえ。それにジルベルト君は、君より巨乳の同年代が迫っても平然としているような男だ。まあ、彼が貧乳好きという可能性も捨てきれんが。よく頭撫でるし」

ノイ先生が余計なことを言ってお姉ちゃんがますますヒートアップしそうだったので、背後からそろりと近づき、忍ばせていたノイ先生謹製の即効性睡眠ナノマシンを注射した。

「うつ……」

倒れそうなお姉ちゃんをジルベルトさんが慌てて抱きかかえる。

「真ちゃん一体なにをしたの?」

「ひみつです」

乙女には秘密が多いんですよ。

それからジルベルトさんにはお姉ちゃんを居間まで運んでもらって、置き手紙を残して出発した。もちろんお姉ちゃんからのコールは着信拒否。具体的な場所は教えていないから追跡もできないはずだし、お土産を買ってごまかすでしょう。

side 桐島勲

「少ないが小遣いだ。持って行きなさい」

「普段もらっているだけで充分です」

「レイン、過度な財貨は人を狂わせるが適度な財貨は人を助ける。それほど多い訳ではないからもらっておきなさい」

「……わかりました。それではそろそろ時間ですので」

「余計なことかもしれないが、羽目を外しすぎないことと……その何だ、夏は気分を開放的にさせるとはいえ、私はまだ孫を見る年ではないので、その辺だけは気をつけてくれ」

最後のは余計だとは思うのだが、親としては言わないわけにはいかなかった。嫁入り前という貞操観念まで強いるつもりはないが、それでも気を付けなければならぬのは間違いない女性の方だ。

「それは……まあそういう雰囲気になれば私もそのやぶさかとはいいませんが……その……ジルベルトさんは大人ですし」

まあ、調査した限りはレインから強引に迫らない限りはそういうことになる可能性は皆無だろうというのが彼に対する評価だが、育て方を間違ったのだろうか。

「レ、レイン、そろそろ時間だったな？」

「はい、行つてきます」

出ていった娘を見送ると、立て掛けている写真立ての彼女に笑いかける。

「エイダ……私たちの娘は元気に育ってるよ」

憎まれてもいい、元氣であつてくれればと思わずにはいられなかった。

スーパージルベルトワールド4―2

夏は開放的な気分になるらしいのだが、冬生まれである佐藤弘光は地元が夏になるとうんざりするくらい暑くなることもあって何となく苦手なイメージがある。ジルベル・ジルベルトとしての俺は暑さに強いのでどうでもいいと言えはそこまでののだが、考えてみると夏休みに旅行に出るといふ習慣がないので新鮮といえは新鮮である。

「結論としては基本的にはインドア派なんですな、俺」

「どう結論が出たのかは知らんが、アバンチュールを楽しもうではないか」

「それは構いませんが、それはさすがに年甲斐ないのではないでしようか？」

ワンピースに麦わら帽子と完全に避暑地に来たお嬢様の格好をしているノイ先生だが、実年齢が2X歳なので苦しい気がするのはなぜだろうか？ 似たような格好をしている真ちゃんはイメージ的に問題ないんだけど、比較するとどうしても違和感が。

「だが、私がアダルティックな格好をすれば違和感があるのも事実だ。レイン君や真君に合わせた格好をしなければ浮くだろう？」

それは残念ながら否定できないので、これ以上服装について言及するつもりはないのだが……逆にアダルティックというノイ先生の格好に興味があった。まあ、性的というより知的好奇心的な意味でだ。

「そもそも来たのはいいものの、アイスティー片手にだらけている君が信じられないのだが」

「俺的には優勝するところまでが目的であって、成果はまあ夏休み前半奔走したし、そろそろ行動基準をダメ人間に戻さないと」

社会人になってからはともかく、学生時代の夏休みは基本的にだらけて生活していた中の人的には、夏休み前半が半ば過ぎた気がするのでこころで手を抜かないと、冬までペース配分がうまくいかない気がするのだ。

「というわけで、今日はもう休みたいというか、まじめに動くのは明日

からにしたいです」

「仕方ないな。ではベッドに俯せになりたまえ」

手を引つ張られ、渋々ベッドに俯せになると、ノイ先生は馬乗りになって俺にまたがる。やっぱり見た目通り軽いなと思う。

「本職ではないが体の構造はわきまえているから、まあ悪化することはないだろう。うーん、なんだかんだ言っつきちんと鍛えているではないか」

「セクハラは禁止ですよ」

とは言うものの、ノイ先生の体温の高めな手がサワサワと筋肉を触るのが心地よく、ウトウトし始める。そして、俺はつい夢の世界の住人になってしまった。

side ノイ

寝顔だけ見ると普通の子どもなんだがな、と寝てしまったジルベルト君を見て思う。

全然警戒されていないということは信頼されていると思っいい。「役得と思っいいよう」

彼は手負いの獣のように警戒心が強いから、慣らすまでえらい時間が掛かった。真君のように庇護欲を抱かせる相手には甘いのだが、それでも本能的な警戒は未だ解いていないと思う。レイン君に対しては……まあ彼女は思考はともかく私たちと違って立派に性的な対象なので気を使っているという所だろうか。その辺がどう考えても10代な気がしないのだが、私が彼の立場ならむさぼるな、きつと。

「さて、王子様も寝たところだし、私も自室で色々と準備をするか」
静かに彼の部屋を出ると、見知った顔を見つけた。もちろん、ここで会う予定などみじんも無かったのだが。

「どうして君がいるんだ、シゼル？」

門倉永二の部下で傭兵団『フェンリル』に所属するシゼル・ステインブレツシエル中尉。電子戦はもちろん、潜入なども無難にこなす若きエースといったところだろうか。ついでに言う私のおもちゃでもあるが、最近遊んでいなかった。

「最近まで仕事が続いていたので、休暇を取ることになった。まあ、私はこんなリゾート地では落ち着かないのだが」

嘘ではないが、真実を全て語っている訳ではないのだろう。彼女が原隊を離れて単独で休暇を取るという状況が怪しいし、そもそも格好に違和感が。

「まあ、シゼルが休暇と言い張るならそれでも私は構わないのだが、その格好で押し通すつもりか？」

リゾート地のイメージとはマッチはしているものの、義体とはいえ、バランスの取れた肢体をアピールするような格好は男性の目に見える。

「いや、海外のリゾート地だとこのような格好が基本なのだが、国内ではまずかつただろうか？」

考えてみれば南米ってそういう文化圏だったのを忘れていた。私なんかは基本的にここにいたから文化的背景はこっち側なのだが、シゼルの場合、助かってから各地を転々としていたのでアイデンティティが確立されておらず、良く言えば染まっていない、悪く言えば郷に入らないといったところだろうか。

「ふむ、では良かったら私とお茶でもしないかね？ 誘った相手は眠りの園に行ってしまったのでな」

「初日から……そうだな、久しぶりに情報交換でもしようか」

side out

「久しぶりによく寝た気がする」

そういえば、ノイ先生にマッサージしてもらったわけだが、つい寝てしまったのを思い出す。時計を見ると最後に確認した時から2時間くらい経過していた。

さて、体力も回復したし、どこかに行こうか。

ラウンジにお茶をしに行く ●

レインを探す

現状をチャットに書き込む

ラウンジに行くと、ノイ先生が見知らぬ女性と一緒に、甘ったるそうなケーキとコーヒーに囲まれて会話に花を咲かせていた。

「おや、ジルベルト君ではないか。こっちに来たまえ」

「では失礼して、初めましてジルベール・ジルベルトです。ノイ先生には世話をしたり、世話になったり、被害者だったりする間柄です。もしかしてシゼルさんでしょうか？」

ノイ先生の友人に甘い物に目がない友人がいると聞いたことがあるので多分彼女なのだろう。本質的に彼女も友達が少ないし。

「シゼルだ。ここでは構わんが、私が甘い物に目がないことは秘密にしてもらえないだろうか？ 職場でのイメージもあるので」

「そうですね？ 見目麗しい女性が甘い物を食べて破顔する光景というのは、世の男性にとつて貴重だと思えますよ。シゼルさんの普段とは違う姿に心奪われる同僚もいると思いますが」

「ジルベルト君、私の前でシゼルを口説いていると認識しても良いのかね？」

「いやだなあ。ノイ先生の友人で、尚且つ、美人に対しては最大限の礼儀を尽くすのは常識じゃないですか」

きつそうな彼女のああいふ姿はいわゆるギャップ萌なのだが、そこまで話を広げるつもりは毛頭無い。俺のいた時代だときつとバリバリのキャリアアウーマンなシゼルさんは好みではないが、美人であることを否定する要素は皆無であるし、俺が彼女の職場に近づく可能性は多分無いだろうから、思ったことを口に出しても問題ないのである。

「そ、そうか……しかし、ジルベルト君だったか、君はノイのことをどう思っているんだ？」

「波長の合う友人ですね。別にロリコン嗜好はないので安心してください。いくら何でも欲情はしません」

「それなら……問題がない……いや問題があるか？」

彼女の人間像を多少修正、やっぱりノイ先生の友人なので、変人枠に半分突っ込んでおこう。

スーパージルベルトワールド4―3

―21世紀のいつかのどこか―

世の中のお子様が夏休みを謳歌している今日この頃。社会人である俺は帰宅してビール片手に週末は家でまったりとを過ごす決めていたのだが、携帯がなり、画面にはバカその1の文字が浮かぶ。

「はい、こちらドクターイエロー、本日の営業は終了したのでおととい来やがってくださいませ」

通話を切り、お手製のカツオの塩辛をつまみながらニュースを見ると、またバカその1が。

「んで、何の用だ？ 金を貸すのはいいが、きっちり取り立てるからな」

『ドクターイエローって何者だよ、佐藤、お前週末暇だろ？ 暇だよな、暇に決まっている。だから、泊まりがけで海行こうぜ』

どうやら、福引きでホテル宿泊券が当たったものの、彼女と別れて以来女に縁が無かったバカその1こと雪村史郎は、俺を誘うことを思いついたらしい。

「独り身の俺が言うのもなんだけど、同僚とか誘えよ。気になるやっかないのか？」

『同僚って言ってもナースはみんな男持ちで、余計な噂が立つたら困るだろ』

バカというのは性質であって、頭はいい雪村は顔だって普通だからお買い得なはずなのだが、どうも女にもてない。高校時代に俺も間に入って紹介した彼女もつきあい始めてから3年は続いたのだが、結局別れてしまった。

「はあ……まあ、ホテル代出してくれるならいいけどな」

『じゃあ、車はそっちの負担で頼むぞ』

「オーケー、どこに迎えに行けばいい？ お前の家に行けばいいか」

『お前が来ると妹がうるさいから……』佐藤さんとお話してるの？

里菜にも変わってよ。もしもーし佐藤さんお久しぶりです。元気ですか』

「あー里菜ちゃん、久しぶり。俺は元気だけど里菜ちゃんも元気そうで何よりだね」

雪村里菜ちゃんは雪村の妹でお嬢様学校に通う見目麗しい少女なのだが、兄貴である雪村の前では当然のこと、俺の前でも猫を被らないので元氣娘といった第一印象は未だに堅持されている。

『女子校だから男の人に縁がないのが難点ですけど……それよりおにいと何話してたんですか？ どこかにお出かけするとか』

「たまには友達でどこかに行きたいなって話だよ。そろそろバカに変わってくれないか」

『はい、今度デートしましょうね、はい、おにい佐藤さん』

「お前、俺何かより里菜ちゃん連れて行ってやれよ。たまには妹にサービスしてやれ」

『バカかお前、何好きこのんで妹の面倒見なくちやいけないんだよ。まあ、お前が里菜を連れて行くのならチケットを譲るが、手を出したら責任取らせるけど』

「里菜ちゃんがかわいいのは別として、少なくともお前を兄と呼ぶような人間関係はごめん被る」

両親と姉弟ともに普通の会社勤めの佐藤家と父親は病院経営で自分も大学病院に勤務している雪村家とでは、釣り合うはずもないのだが、どうも俺は家族ぐるみで雪村家に気にいられている。特に里菜ちゃんは俺たちより7歳も下という事で自分も妹のように可愛がったし、向こうも兄みたいに慕ってくれている。

ただ、最初に会ったときは小学生だったが、年を重ねるにつれて、どうも男として認識されているような気がして距離を置いているのだが、家柄とか考えると友達のお兄さんポジションが妥当なのだろう。

—サイバーパンクを生きるいつかのどこか—

「まあ、結局里菜ちゃんは付いてきて一騒動あったんだけどな」

「はあ……それで里菜さんとは誰なんですか？」

現実に戻るとビキニの上に水色のパレオを付けた桐島レインが居るのである。基本的に締まるどころ締まっついて出るところは出ている彼女は、他の同行者（真ちゃんとノイ先生）に比べると非常に目立つ。

ふと、悪友である雪村の妹である里菜ちゃんを思い出してみると、性格こそ違うものの、上流家庭の令嬢（年下）をあしらう方法を学習していたようだ。

「雪村里菜、とある物語の主人公の友人の妹。野郎だけで一泊二日の小旅行に行くはずが、着いてきてその後はどうだったかなと思いつくとしていたのだけど、中々思い出せないのがもどかしいというか」「私も昔のドラマのシーンを何となく覚えていますが、その前は曖昧ですから記憶なんてそんなものですよ」

レインの態度が良くなったのを確認しながら、佐藤弘光の記録とはどれくらい価値があるのかと思いを馳せる。極端な話、佐藤弘光として培ってきた経験には価値があるが、佐藤弘光の記憶には特に価値が無いと思っている。もうあの頃に戻れるわけでもないし、さつきのようにふとそういえばこんな事もあったなと思いつく程度だ。

生まれた時代がバルドフォースの時代であるなら、必死にタイムスケジュールを追ったりもしたのだろうが、平和な昨今を考えれば本来は兵器であるシミュクラムも趣味の範囲内だし、別に囚われなければいいと思っていた。

「しかし、中流家庭の俺にしてみると長期休暇というのは中々肌に合わないな」

「私は小さい頃はニースとか行きましたよ。今思えば日本の海より青かったと思います。もつとも、ここ数年は遊びに何て行きませんでしたが」

「しかしあ年頃の娘に同年代の男が一緒であることをよく容認したなとは思うけど」

何となくだが、基本箱入り娘の彼女を心配して護衛とか監視とかが人知れず入っているのではないだろうかと一応警戒したいのだが、軍人が手配するならその道のプロに決まっているのだから俺ごときが

気付くはずもない。

「さて、俺はちよつと泳いでくるけど、レインはどうする?」

「ご一緒してもよろしいのですか?」

「本来なら俺が勇気を持って誘わなければならんだからレインはもつと自信を持つように」

「では、行きましょう」

レインに手を引かれてプールに向かう俺に対して怨嗟の視線が纏わり付くが、内半分が彼女連れなのだから男の業は深いと言わざるを得ない。

「どうしました?」

「何でもありませんよお嬢さん」

「そういえば久しぶりに聞きましたね、そのお嬢さんって呼び方」

「そりゃ、親しくなれば固有名詞を使うさ。ノイ先生だって、最初は『先生』って呼んでたんだから」

意識せずに女性を呼び捨てにするというのは難しい。まあノイ先生はノイ先生だから別にいいが、ここまで馴染んでしまえばもう認めざるを得ない。

「レインも真ちゃんも俺たちの仲間なんだから」

「今は認められたことがうれしいですけど、次はもう一歩先ですね」

「よく分からないけどがんばれ」

「はいー」

俺だってそれなりの時間生きているのだから、彼女が俺に抱いているのが何であるか分からない訳ではない。だけど、吊り橋効果が切れれば冷めてしまうような恋愛に何の意味があるのかという思いと、精神年齢的に真ちゃんほどでは無いにしろ、レインに手を出すのも犯罪だという俺個人の倫理的な問題もある。

世界は色々難しいのである。

おまけ

ジゼルレポート

1日目

偶然を装ってノイに近づくと、確か半年ぶりくらいなので、話を続けていると彼女の同行者であるジルベルト君と会話する機会に恵まれる。ノイと気が合うというからどれくらい思考がぶつ飛んでいるのかと思いきや、普通の青年だった。

そして話を続ける内に彼もまた彼女の被害者なのだと思うと変な連帯感が生まれていることに気付く。

2日目

ターゲットと友人達が一緒にプールに向かうので私も合わせてプールに向かうのだが、ノイから派手なのは厳禁と言われてしまうので、大人しめなものを購入。経費で落ちるのか大佐に相談しなければならぬ。監視の途中、ジルベルト君が一瞬こつちを凝視したようだが、首を傾げ再びターゲットとの会話を続ける。何となく勘が鋭いとは事前の報告で受けていたのだが、本人にそつち方面の訓練を受けたという情報は無いので考えない方がいいと考えるべきだろう。

しかし、ターゲットも男性の目を引くが、ジルベルト君ももう少し筋肉が付けば注目されるのではないかと愚考。だがノイに伝えると怪しげなノイで実践しそうなので黙っておくことにする。

夕食時はノイに誘われて同じテーブルで過ごす。食事会の話聞き、ジルベルト君曰く「天才でも基本をという基点から始まっている。まして凡人なら基本を殊更意識しなければならぬ」とのこと。我々軍人にとっても重要なことだと感心するが、彼が本当に17歳なのかという疑問が浮かび上がるが情報は白だ。強いて問題があるとすればノイが相手だと年が結構離れているという所だろうか。

スーパージゼルベルトワールド4ー4

『暇人の憂鬱』

佐藤：ただでさえ怠惰に人生送っているのに欧州的な休暇の取り方はどうも……

御大将：学生なんだからもうちょっとアバンチュールに過ごせばいいのに

佐藤：男女比1対3の慰安旅行でアバンチュールというのもちよつとですね

sinさんがログインしました

sin：学生の身分でリゾート地とかいいですかねえ

佐藤：sinさんも旅行中？

sin：ええ、絶賛リゾート地で遊んでいますけど、運と実力の賜物とはいえ贅沢覚えると良くないと思うんですね。あと、姉からの通信が怖くて遮断中

御大将：お姉さんに黙っていたとか？

sin：男の人と一緒にですけど、思春期のお姉ちゃんからすると男女が一緒＝間違いが起きるという式ができているのではと

佐藤：おお、さすがは自称大人の女。でsinさんの付き合った人履歴は

sin：女の過去は詮索しない物ですよ

御大将：これが姉魂さんなら、姉さん以上に心を揺さぶる人ならいつでもOKとか言うんだけど

佐藤：あれは一種の病気ですから、sinさんも適当なところで異性に対する好きを理解しないとダメな大人たちになるから

御大将：それ僕も入っているのかな

佐藤：むしろ、御大将は早く結婚して嫁と健やかに生きた方が幸せですよ。まだ引き返せますって

sin：さつき来てなんですけどそろそろ出掛けるので失礼します

！
佐藤：じゃあ俺もそろそろ、御大将も体調管理をしつかりと、では

side 水無月真

私の世界は狭い。サイバースペースにおいてどこまでも飛んでいける電子体とは打って変わって、リアルにおける人間関係は脆弱と言っている。

始まりは施設だった。私に親はいない。水無月という姓は研究所で後見人をしてくれた水無月博士の姓をもらっただけ。親身にはしてくれたが、どこか観察されているような雰囲気であった。お姉ちゃんこと水無月空だけが私にとっての絆だが、私と違ってお姉ちゃんは社交的だ。というか鋭いようで鈍いというのだろうか。鈍いようで鋭い甲先輩と対照的で、もしカップルだったらステキだなと思う。もともと甲先輩には既に千夏先輩がいる。千夏先輩はお姉ちゃん以上に大雑把だけど器が大きい。私の体質は別としてああいう性格だったら人生楽しかっただろう。

脳症の人間はいずれ死ぬ。死は人である限りは避けられない定めだが脳症になって死亡したケースを見る限り、人として幸せな死に方をした人は誰もいない。死ぬのは怖い。だけど私の死を悲しむ人が居てくれるならそれは少数であって欲しい。だけど緩慢と死ぬのを待つのは嫌だ。だから生きた証が欲しいのだが、甲先輩のお母さんの話を聞く限りでは子どもにトラウマを与える可能性が大きいので、子どもを作るのは問題だ。生まれる命に責任が持てないし、万が一お姉ちゃんが育てる事になったら生活能力がマックスになるか、特殊な環境に適応したニュータイプになりかねない。

10年後の私は何をしているのだろうか。勧めに従ってアーク社で働いて居るか、心変わりをして人を愛して子をなしているか。あるいは既に境界線を喪失して病院にいるのだろうか。

思考の海に沈む私を現実に取り戻したのは外からコール。モニターで見ると赤毛の青年が立っていた。

「真ちゃん、そろそろ出掛けるよ」

「……はい」

ジルベルトさんは私のことを妹のように扱う。レインさんに対してはある種の遠慮があるようだ。ジルベルトさんにとってはノイ先生は恩人で、レインさんにとってジルベルトさんは恩人なのだが、私たちはノイ先生を介して知り合ったに過ぎない。でもワシヤワシヤと髪をなで回すあの手はどこか気持ちがいい。男女として火が付くほどには熱くなく、怠惰に生きられるほど温くない暖炉の火。

「しかし、何もしないで生活できるというのはあまり精神衛生上良くないと思うんだよ」

「そですか？」

「一度高級なアイスクリームを食べるとラクトアイスが物足りなくなることからね。今日の夕方の花火を見終われば、苦学生再びって感じで。自分ができることは自分でした方が気が楽」

それはわかる気がする。ジルベルトさんも男の人なのにとっても家事が上手いし。反面、他人に触れられるのが好きではないと言うことだと思う。その辺は私も似たような物だと思う。どんなに親しい人でも触れられたくない所はあるのだ。

「しかし、いつになっても花火の美しさだけは変わらないな」

この人欧米系のはずなのだが日本文化に馴染みすぎていてかつ違和感を覚えないのはなぜなのだろうか。

side ジゼル

「うーん、自然体というかあの組み合わせは意外にしつくりくるな」

結局、護衛対象と要注意人物との間に過度な接触は無かったとレポートを上げるべきなのだろうか。あの年代だと特殊な嗜好がない限りは護衛対象はとても魅力的に見えると思えるのだが。

「彼は一体何者なのだ？」

「シゼルが年下に興味を持つとは新しい発見だが、ジルベルト君は我々の常識で考えない方が無難な男だ」

確かに、シユミクラム戦での戦闘データも見たが、トリツキーな動きをしている反面、陽動と迎撃などをプラン通りに進めていることが

ら、思考型の人間であると予想できる。正直、あの年であれだけのことが出来るなら軍でも引く手あまただろう。

「彼は将来何になるんだろうな」

「傭兵としての評価は？」

「見た目ほど柔ではないし希望するなら紹介する」

「ジルベルト君は思考ゲームは得意だが実際のドンパチはどうかかな。多才ではあるが、最先端名の技術者や軍人やるより真君と一緒に料理屋でもやる方が似合っていると思うぞ。ただ真君の場合は体がな」

南米で造られたデザインナースチャイルドであるということは大佐から聞いているが、彼女は事故で脳症を患っているらしい。

「ジルベルト君が突拍子もないアイデアを持つてくる可能性は捨てきれないが、彼は天才ではないからな」

そんな都合のいい話はフィクションくらいなものだ。残念だがそんなものに縋りたいと思う時期は既に終わっている。

「それで、仕事は無事に終わりそうなのかね」

「……明日で終了だ」

「そうか、レイン君も合流したようだし私もあの輪の中に入ってくるでしょう」

護衛対象者が合流したのを確認したノイは、ごく自然にあの輪に入っていく。分かっている何事も無かったようにしてくれた友人には感謝すべきなのだろうか。

side 桐島レイン

「勇気を出していくべきでしょうか」

明日には家に戻る。ネットで調べた『夏は男女の仲を進展させる』とか『男を惹き付ける行動100』などは残念ながら効果が無かったようです。こうなれば一発逆転を賭けて部屋に飛び込むかと思うのですが、踏ん切りが付きません。

「でも、春のあの頃を思えばかなりの前進です。クリスマスまでには何とか」

淡雪が舞い降りるクリスマスの街並みを彼と過ごしたいなんて一

年前は想像にもありませんでしたが、これはこれで楽しいと思う自分がいます。

「お風呂にでも入ってゆっくりしますか」

既に日が変わる時分、露天風呂で月でも眺めながら頭の中を整理したい。決めた私は、バスタオルとタオル、その他一式を持って露天風呂の看板に入ります。

みれば浴衣が入っているかごがあるなので先客がいるようです。

ドアを開けて入ると岩陰に隠れているようですが1人入っているのが分かります。

「んー♪ ふんふー♪」

side out

「……どうしてこうなった」

出発は午後なので夜遅くまで温泉に入っていたのだが、ドアを開けて入ってきたのはよく知っている人物だった。咄嗟に見えないように岩陰に隠れる。

「んー♪ ふんふー♪」

鼻歌を歌う彼女に対してどう考えても俺は無力というか、前にもこんなことがあったような。そう、あれは里菜ちゃんが混浴と知らずに入ってきてそのあとに大騒ぎになった不幸な事故だった。

湯けむりが多ければ逃げ出す事ができるが、どう考えてもレインの前を横切らなければならず、ダメージを受けずに向け出す手段が思い浮かばなかった。

「うーん、いいお湯。本当に来て良かったなあ」

幸い向こうは気付いていないようだが、デザイナーズチャイルドの俺とて湯にのぼせない訳じゃないので、持って10分くらいか。

5分経過……レインは全然出る気がないようで、顔は見えない物の惚けた声が漏れてくるのが分かる。そして、何だかんだいって若い今の体が恨めしい。

8分経過……ようやくレインが出る。結構危なかったので助かったというべきだろうか。それにしても入っている間に男女が入れか

わったのか謎である。

「でも女の着替えとか長いから脱衣所には戻れないしな」

しばらく湯冷まししなければと待っていた。それから10分ほどたち、向こうのドアが開いたのを確認した俺はもう一度湯を被って体を温め直し、脱衣所に戻った。

「……今レイン君が出たところだが、どうして君が温泉から戻ってくるのかね」

「俺が先客です。チラツとしか見ないで出るまで待つてました。あと、女性なんだから前隠して下さい」

「ひんそーでちんちくりんな体だからあんまり気にしないのだが、今度家族風呂で一緒に入ってそういうプレイをしてもいいぞ」

「いいからタオルで巻けよ!」

「今ちよつとキュンと来た。今からお風呂でお姉さんといかがわしいプレイを」

うん、ノイ先生の裸体に欲情しないのは普通だと心から思うのだ。

「結構です、お休みなさい先生」

「うむ、あの美術品のようなレイン君の裸体が脳裏を離れないかもしれないが怖いお姉さんが見張っているから余計なことをしないようにな」

ああやつぱりなと思いつつ、今は早くここを離れたかった。

そして当然のことながら次の日、俺は口止め料として少くない出費を強いられたことだけは言っておかなければならぬだろう。

おまけ1 お姉ちゃんは心配性

ようやく帰って来た如月寮。寮の前に立つお姉ちゃん。何かニコニコしているし、追求の手を逃れられるかもしれない。

「おかえりなさいまこちゃん。お姉ちゃん、突然のことで怒っちゃったけど、まこちゃんも考えてみればもう学生なんだしそこまでうるさく言う必要がないと気付いたの」

「おねえちゃ」

やつぱりお姉ちゃんは私の自慢のお姉ちゃんだ。お土産を渡して

たくさん楽しい話をしようと思ったのだけど、突然後ろから羽交い締めされる。

「まこちゃんはこのに至る経緯を素直に話すか、私特性のおいしいプリンを食べながら話すか選択肢があると思うのよ。いや、何というかまこちゃんに男の人はまだ早いというか、姉を差し置いて何青春を謳歌しているのかとか」

「七色に光り輝く物質をプリンと呼んではいけません」という標語の元、封印されたプリンを妹に食べさせるとか人としてどうでしょうか。うう、というか本来ならお姉ちゃんは充実した青春を送っているような気がするのにどうしてこんなに残念な子になっているのでしょうか。

まあ、別に言って困るようなところは何も無いし、最悪ノイ先生かジルベルトさんの家に逃げ込んでしまえばいい話ですし。きっと甲先輩と千夏先輩に充てられたんだろうなと思いつつ、コクコクと首を縦に振って寮内に連行されていきました。

おまけ2 闇よりの干渉

現代では珍しい手紙が届いたのは夏休み前の最後の日曜日。可愛いらしいレターであるが、裏を見るとごく丁寧に脅迫状と印が押してある辺り、作成者のダメ方向なセンスを感じる事ができる。

『暑さも峠を越しいよいよ秋、いかがお過ごしでしょうか。』

ニュービーズインパクトの際のジルベルトさんのご活躍を拝見して心から勇気を与えられ一筆したためました。

これからもご活躍を期待しております。

追伸

混浴の浴場から桐島さんが出てきたあとにあなたが出てきたことについて、武勇伝を聞かせてくれたらうれしいと思いますので、ぜひ生徒会長室まで足を運んで下さい。

あなたの学園の生徒会長より』

「……最悪だ」

俺に対して何か視線を感じていると思ったが……それは想定して

いなかっただというか、金持ちなんだから普通に海外で過ごしてくれよとツツコミてえ。

こうして新学期に対して一抹の不安を感じながら俺の8月は終わりを迎えようとしていた。

スーパージルベルトワールド5—1

鳳翔学園は閉鎖的であると言われると、比較対象を星修学園に求めれば確かにそうだろう。だが、エリートを育成するという思想に基づいた教育は自分には適してはいないとしても、効果は認めなければならぬだろう。

奨学制度がなく、膨大な入学金を考えればここに入れる生徒の家は最低でも中流以上で当然卒業後の付き合いも期待される場所であり、場合によっては将来の結婚相手が居たりするというケースも何例かはある。

ちなみに星修の場合、セカンドであればほぼ入学可能であるし、奨学資金もあるので各地から才能に秀でた人間を集めやすい。どちらにも一長一短があるだろうが、ここにA I派やら反A I派やらの思想が入ってくるのが問題なのだと、『古くさい人間』の佐藤弘光は思っている。

だが、ジルベル・ジルベルトは今までその考えを外に出したことはない。ノイはもちろん、チャットの面々にもだ。ツールであるなら捨てる構わないが、システムとなってしまうては変えることに長き時間を要する。反A I派は代替する何かを提案すべきなのだ。

とまあ、なぜこのような考えに至っているのかというと、新学期早々こんなところにお呼ばれされているからである。

chapter 5

学園生活 school Life

「で、なぜ私は会長室なんぞに呼ばれているのでしょうか会長」
「夏休みに大立ち回りをしてくれた後輩の顔を見たいと思ひまして、それにあなたから私のところに来て下さったんじゃないかしら」

鳳翔学園生徒会長室は生徒会室に隣接して備え付けられている。生徒会室もサロンのような様相を呈しているが、生徒会長室はまるで書斎のようだなとここに来るのは今日で4度目だがいつもながらに思うのだ。

ウォルナット材のデスクの上に存在する端末だけがここがSF的な世界であることを主張するが、もしそれが無ければ、重厚なこの部屋は俺が生きていた時代であると疑わないだろう。

「まさか、こういうのも何ですが、割といい男に映っていましたね俺」生徒会室の主である六条クリス先輩は俺が苦手としているタイプだった。俺の知るお嬢様と言えば桐島レインだが、先輩の場合、大企業の経営者という本格的なお嬢様で、レインが世間知らず気味であるのに対し、彼女は自分の容姿や立場の使い方を理解している人物だ。『鳳翔の姫』などというあだ名が付いているが、俺からしてみれば女帝（エンプレス）だろうか。

できれば関わり合いになりたくないのだが、向こうから呼び出されれば出ざるを得ない状況に追い込む手腕は見事としか言いようがない。

ことの発端は夏の長期休暇が終わる直前に自宅に郵送された手紙と同封された写真だった。中には女性と一緒にいる俺の姿が。プールや食事の風景はまだいいのだが、どう考えても温泉に遠くから撮られたと思われる写真があり、体の部分こそぼやけているものの、一緒に入っていた人物が特定できるものだった。

この先輩は不祥事を表に出すような人ではないから、呼び出すためのネタで、以後使わないにしても安心することはできないだろう。

無意味な歓談が続き、いつまでも本題を切り出さないのだから聞いてしまおうを口を開きかけたところで、彼女は聞き慣れた言葉を口にした。

「鳳翔の雛は未だ鳳ならず。されどいつか鳳となつて旅立たん」

「ああ、鳳翔で唯一気に入っている教えです。もつとも、私は燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんのスズメとかカラス側なので理解できませんが」

「あら、ジルベール君は本気でそう思っているの？ なら、今いる鳳翔の生徒のほとんどはまだ孵化前の雛になってしまうわ」

彼女は基本的にビスクドールのようなのであるが、時折見せる優雅な微笑む。この微笑にどれだけの人間が騙されているだろうか。

「俺もあまりここに長居したくないので本題に入っていたただけると助かるのですが」

「知っての通り、生徒会長としての任期が終わるわ。自我自賛をする訳ではないけれど、私の在任中は基本的に大過なく終わったと思っ
ます」

「大過なくですか……一部の跳ね返りの件はどうなるんですかね」

主に暴力事件とか、レインと俺が知り合うきっかけとなったアレとか。後者はともかく前者は余所様を巻き込んだ問題だった気がする。

「あれくらいなら、もみ消せるわよ。その為の権力なんだし」

いいところの坊ちゃんが事件をもみ消すという話は生前もよく聞いた話だが、こちらでもあまり変わりはないようだ。問題はこの人が手を回している部分なのだが。

「ご存じの通り私の任期は今月で切れます。正確には引き継ぎとか、後見とかがありますので11月頃までは籍を置きますが権限は委譲しなければなりません」

「先輩なら、適当な後輩に禅譲として裏から糸を引っ張ればいいじゃないですか。先輩の為なら頑張る人が結構いると思いますよ」

何しろ見た目は美人で、その凜とした表情は男女問わず人気がある。

「じゃあジルベルト君、やってくれる？」

「嫌ですよ。何を好きこのんで自分の人生の鳳翔色を強めなきゃならないのですか」

「即答するわね。会長になれば、寄付金からプールされている会計機密費使い放題なんだけど」

「確かに昨年の一時期は困窮しましたが、現在は生活をしていく上で困らないので、あまり有効な勧誘方法ではありませんね」

それがどれくらいの金額になるのかは興味はあるが、使うことにはあまり興味がない。俺の態度に困ったわねと頭を抱えるそぶりを
るかと思うと、手をポンと叩きとんでもないことを口にした

「では、今なら私の体をもれなく好きにできる権利というのはどうか
しら」

ノイ先生も同じようなことを言うが、この人も本気か冗談か分からないのが非常に困る。

そして残念ながら俺にはそれを上手くかわす経験値が不足しており、仕方ないので引き出しから答えを出すことができない自分が恨めしい。

「会長、ストレスが溜まっているならカラオケ行きますか？」

「あら、彼女さんを連れて行かないで男女二人だと勘違いされそうだけども」

「言っておきますが、俺は誰とも付き合っておりませんよ」

さて、彼女とは誰を指していることやら。レインに関しては何となく美人であるし、スタイルもいいので食指が動かない訳ではないのだが、どうしても庇護欲が優先してしまう。真ちゃんは妹ポジションだし、ノイ先生は惜しむらくはスタイルが永遠に変化しない可能性が高すぎる。

「デートの約束については保留して、本題に入りましょう。こちらをどうぞ」

差し出された紙——これだけ文明が発展しても重要なことは紙と筆記だったりする——の束に目を通す。

「デザイナーズチャイルドの犯罪率ですか？」

「デザイナーズチャイルドは生まれつき強固な肉体や優れた頭脳を持つけど、社会に適合できずに犯罪に手を染めてしまう方も残念ながらいます。社会に適合できないという意味ではセカンドでも一般人でも大差はないと思うけど、やっぱり目立ちますからね」

デザイナーズチャイルドが本気を出して殺しにかかれば、義体化した人間ならともかく一般人など赤子の手をひねるような物だろう。もつとも、プロからしてみると雑といってもいいのだろうけど。

「それが教育によるものなのか、先天的なのかは今の所不明。だけど、おそらく10年以内に一定の結論を政府は出すはずよ。ジルベルト君はこの学校が政府から支援を受けているのは知っているわよね」

「ええ、実際、政府高官の子弟もいると思いますし」

金持ち学校は基本的に寄付金がすごいのだが、政府からの

「私の考えでは現在の鳳翔の教育はいささか偏っていると思うの」

それはまた大胆発言だ。正直言って鳳翔生であることを象徴しているような彼女からそういう言葉を聞くとは思わなかった。

「そこでジルベルト君に聞いてみたいのだけど、潜在的に鳳翔の教育方針を良しと思わない生徒が何割くらいいると思う？」

「3割から4割でしょうか。どうしてもここは競争社会の縮図ですし、親の地位とかも色々面倒ですから」

「つまり、それが潜在的なあなたの支持者といえるわね」

「仰る意味がよく分かりませんが」

鳳翔にとつて自分は変わりものであり、そもそも支持されるようなことをした記憶がまるでない。

「あなたが目立てば目立つほど現状に不満を持つ人間はあなたに期待する。気づいていないかもしれないけど、意外と人気あるのよあなた。全員がエリートで居続けられるわけじゃないし」

「あんまり余計な期待を背負わさなくて欲しいですね。俺は自分の欲望に素直に生きたいので」

「他の生徒だつてそう思っているはずよ。でも、お手本があるのと無いのでは意味が違うでしょ？」

でも、俺をお手本にしているっぽいR・K・さんは最近、清純風お嬢様という当初のイメージからずいぶん逞しくなってきたのでそれを喜んでいいのかたしなめるところなのか悩むところである。もともと、俺よりもノイ先生やら、行きつけの店の悪い大人たちの悪影響を受けて酷くなっているのではとは思わないでも無い。この間のことも含めて、いつか彼女の父親に会ったときに殺されるのではないかと戦々恐々としている今日この頃であり、今の所会う機会がなさそうなのは大変望ましいところだ。

「私から、ジルベルト君が積極的に何をして欲しいということはないわ。ただ、あなたが周囲に注目されるということは、鳳翔のジルベルトとして見られていることを頭の片隅に覚えておいて欲しいだけ」

さて『鳳翔の』という言葉がついたジルベルトというのはどういうキャラなのだろうか。きつと、反A I的なことを掲げたり、星修とい

うだけでケンカを売ったりする輩なのだと思う。そしてそういう輩が身近にいることも理解していた。

そこから星修より優れた人材を輩出する方法など話合ったわけなのだが。

「星修と団体戦でシミュラム戦で勝つてのはとても魅力的だと思うんだけど」

「二対一の一発勝負なら勝てる可能性がありますが、それは個人の技能であって、意味がありません。実際の軍事演習の形に落ち着くと思いますが、その際にうちが勝つ可能性は限りなく0です。それとも六条先輩と俺が無双しますか？」

「それでは本末転倒よね。私たちは天才を育てたい訳ではなく、使える人材が揃っていることを証明したいだけなのだから」

六条クリス、こう見えても学園内のシミュラムの総合成績一位である。

指揮官適正、情報処理、個人戦闘全てにおいてトップクラス。正統派の人物で頭が切れるという時点で俺に勝ち目はない。しかし、星修には白い天使のような悪魔(俺命名)こと水無月真が存在しており、まともな武装している限り勝率は限りなく低い。

「ローマは一日にしてならずか。今月中には後継者を決めなければならぬけど誰にしたらよいものか」

「頑張ってくださいとしかいいようがないですね。では、そろそろ失礼します」

ドアを開けて出ようとする俺を呼び止めた彼女は、笑みを浮かべて俺にたずねる。

「デートの件ですけど正統派の映画館デートでも構いませんよ」

「それは、先輩の好きな人との為に取って置いてください」

「やっぱりこの先輩は疲れれると思いつつながら酷く納得がいく答えを見つけることができた。」

「姉貴にそっくりだからか」

弟は姉に敵わないというシンプルな答え。

「ジルベルトさん」

「ああ、レインか。どうしたこんなところに」

「会長に呼び出されて何か言われたんですか？」

「話すとそれなりに長いけど、要約すると、好き勝手やってもいいから自重しろというのと、デートのスケジュールを考えておけるところだろうか」

こちらから提案した手前、断るのはとても恐ろしい。昔は目の前の少女を連れて行くところも一応の考慮をしたものだが、経済感覚的には庶民と大して変わらなかったので楽になっただろう。

「で、デートですか!？」

「そんな畏まった物じゃないけどな。時間ができればの話だし」

「でも、そんなことがしたら大変ですね」

「レイン、俺は人生の中で彼女ほど完璧な人間を見たことが無い。その辺は適当にごまかすような女性なのさ」

結論から言うと彼女との全く艶のない逢瀬その1はそれなりに問題になるのだが、当の二人はケロっとしたものだたとsinさんに話すとなぜか腹筋崩壊したようで、例のツンデレのお姉さんにごまかすのが大変だったとのこと。問題は艶とは無縁な逢瀬になるのだが、それはまた別の話である。

スーパージルベルトワールド5―2

秋の澄み切った空の下、学園の門は多くの人たちで溢れかえっている。

「ジルベルトさんこちらです」

エスニック調の2WAYワンピースにサンダルという出で立ち。青いハートに十字パールの革ひもチョーカーが魅力を引き出していると思う。俺にとってはおなじみの桐島レイン嬢の服装はそれほど目立つ訳ではないのだが、やはり素材がいいと目立つのはやむを得ないのか、男性諸氏の注目を集めている。また、同時に俺に対する視線を感じるのだが、彼女の虫除けの役割を自認している身としては、今更気にすることでもない。

俺たちが今いるのは蔵浜の学園都市群。俺たちが通っている鳳翔とは駅を挟んで向こうにあるこちらはアークインダストリー社など最先端企業の研究機関が集まっており、俺がイメージする未来都市像に近いといえた。

そして星修学園。セカンドの総本山というイメージが強いのだが、実質セカンドの人間をパーセンテージにした場合6割ぐらいしかない。セカンドが研究者になることはあっても研究者≠セカンドではないのだから妥当な数字といえよう。もつとも、10年後にはほとんどの人がセカンドで占められる可能性もなくはないが。

そして、俺とレインは今星修学園の学園祭に来ていた。俺たちのシミュクラム戦の相棒であり、俺のエア妹でもある水無月真から招待を受けていたのでせっかくだからと来ることになった。本来ならノイ先生も一緒に来る予定だったのだが、20世紀の頃には人命奪っていた病を悉く対処した今際に於いても駆逐できなかつた病にかかつて動けなかつたのだ。

「しかし、医者の不養生というけど、まさか風邪とはなあ」

「ノイ先生お手製のナノマシンで強制的に回復させることも考えていたようですが・・・」

「臨床試験を経ていないものにどれだけ信用があるのか不明だから、

タマゴがゆ食べさせて寝かせといたよ」

ノイ先生はドクターの資格を持つている医者であり、收入的には医者と言いつても構わないのだが、その本質はマッドが付く科学者なのだろう。そういえば、以前開発したノイ印の万能調理ナノのバージョンがさりげなく2になっていたのだが、俺の周辺に被害者がいないのでどういう形で実験しているのか未だに謎である。

「しかし、焼きそばはどこに行っても焼きそばなんだな」

最先端技術の発表の場であると同時に学園祭であるのだから、昔ながらの学生屋台なんかもあり、ワンコインでおつりの出る焼きそばを食べながらブラブラ歩いている。

余談だが。焼きそばは紅シヨウガはないほうが好みだ。青のりはあつても構わないが、人と会う際は気を使うのがマナーである。海鮮と肉のどちらがいいかと問われるとその時の気分によるが、豚バラ肉を使ったのがやっぱりベターだろうか。残念ながら食べに行く機会に恵まれなかったが富士宮焼きそばとかいうB級グルメが当時人気だったな。

「よし、今度焼きそばを作ることにしよう」

「あのジルベルトさん。焼きそばを食べながら焼きそばを作る話はいささか変だと思うのですが」

いつからか定例会になった食事会のネタはここに決まったのだが、心の声が出ていたのかレインにたしなめられてしまった。

「そういえば、真さんに連絡しなくて良かったんですか?」

「忙しいだろうし、彼女には彼女の付き合いがあるだろうし」

誘って貰ったものの、彼女が何の出し物に参加しているかは特に聞かなかつた。参加していない場合は高い確率で彼女のお姉さんが一緒である。彼女はレインとは違うタイプの美人に分類されるのだが、どうも苦手意識がぬぐえないのだ。

どうやら彼女は俺を真ちゃんを誑かす悪い男と考えているようで、俺もその点は考慮しないでもないが、どちらかという諸悪の根源はノイ先生だし、15にもなった人間に対してはいささか過保護すぎるように思える。

一度きちんと話し合えば、性格的には竹を割ったようなイメージがあるので誤解が解けるような気もするのだが、現状ではそこまで積極的にしたいとは思わないのが現状であった。これ以上自我の強すぎる女性が視界が増えて欲しくないとはいえるのだが。

「じゃあ、ジルベルトさんは何が目的で星修の学園祭に？」

「最先端技術というのに興味があったことかな。あと、アセンブラに関する講演に関して興味があったんだ」

「アセンブラですか、確か新世代ナノマシンでしたよね」

「今のナノマシンでも驚きなのに次世代は全くイメージできないからな」

詳しい内容は分からないが、自己増殖して知性を持っているらしいそれは、俺がイメージするSFの産物そのものである。若干、某男子ならみんな知っているロボットアニメの自己増殖・自己再生・自己進化する存在やら、文明を崩壊に導く最終兵器が脳裏をかすめるが、生きてる間にそこまで行く可能性は皆無だろう。

それでも人間とは果たしてどこまで行けるのだろうかと問いたくなる時がある。橋を造り、船を造り、車を造り、飛行機を造り、とうとう宇宙船まで造った人間は最後にどこに向かうのだろうか。電子の海か、あるいは太陽系を更に星海の果てを目指すのか。

ジルベール・ジルベルトとしての実と佐藤弘光としての虚。

未だにこれは夢なのではないかと疑う時もあるが、意識は前を向いている。30になる前に死んだ男が掛かった二度目のメラニコリーを経てそろそろどう生きるかを考えてもいいだろう。正直自分が何に向いているのかは分からないが、料理店でも食っていける気はする。卒業まで一年以上あるのでじっくり考える余裕がある。

アセンブラに関する展開についての講演会は、学生の他に、業界関係者とおぼしき人間が幾人か見られた。研究者である久利原直樹氏がモデリングを使いながら説明をする姿を見て、学生にも分かりやすいと感心するところではあるのだが、あくまで企業や同業者に対する説明としてはいささか不満が残る部分がある。

「しかし、あいつらは成長をしないよなあ」

「ええ、で何で彼らは休日にもかかわらず制服を着用しているのでしょうか」

目の前では、やれセカンドがエイリアニストやら、デザイナーズチャイルドの優位性を説いてバカやっている男と取り巻きたちがいた。なるべく俺としては関わりたくないものであるが、シロアリを見つければ駆除しなければ家全体がやられてしまう。

「鳳翔のブランドが彼らのアイデンティティなのさ。さて、そろそろ止めに入るとしようか」

ちなみに我が鳳翔学園は制服着用の義務は特でない。

暴力と恫喝で物事を解決しようとする同期に呆れつつ、ポケットに入っていた硬貨を掴み、久利原氏に殴り掛かろうとするケニツヒスの後頭部に放った。

指弾あるいは羅漢銭と言われる技術なのだが、せっかく一般人よりポテンシャルの高い肉体なのだからと練習した結果、結構威力がやばいことになっている。

「ウガ」

後頭部に直撃した一撃は意識を刈り取ることに成功したようだ。

一般人なら下手すると致命傷になりかねないが、デザイナーズチャイルドなら気絶ですむだろう。

「ケニツヒス。理論には理論で対応しろといつも言われているじゃないか。犬じゃないんだからそうキャンキャン吠えるな。ほら、お前達もご学友を連れていったらどうだ」

連れを一睨みすると取り巻き達はケニツヒスを抱えて出ていったと邪魔者が出ていったところだが、どうもみんなの注目が俺に集まっているようだ。

「先ほどはお見苦しいところを。ついですが質問させていただいてもよろしいでしょうか?」

「あ、ああ。構わないよ」

「鳳翔学園に在学するジルベルトといいます。先ほどのアセンブラに関する研究の今後の課題等につきまして、大変勉強になったのです

が、一つとても気になる部分があり質問の席に立たせていただきました。先生の講演でアセンブラの理論、今後の課題は分かったのですが肝心の部分が抜けているような気がするんですよ」

「肝心な部分？」

久利原氏は怪訝な顔をするが気にせず続ける。

「ええ、私はこの分野について全く素人ですし、ここに聞きにいらした皆さんも知りたいとは思っているのですが、アセンブラが完成した場合、何ができるのか。つまり得られる果実が何なのか知りたいのです」

「それは・・・アセンブラが完成すれば無限の可能性が」

「それはPR的な意味の話です。まず何に利用できるか、何に利用したいのかを久利原先生は明言していません。さらにお渡しいただいた資料を見ると経済効果などに関する項目も無い部分が気になりました」

何でも切れる剣が仮にあるとして、料理人なら肉や魚を切るだろうし、木こりなら木の伐採に使うだろう。剣客なら当然人を斬るのに用いる。

アセンブラというのはそういう趣旨のアイテムで何でもできるのだが、扱う人間が何を目的に利用したいのかということが、とても重要でそれについて聞きたかったのだが。

この人の話には、アセンブラの完成に対する情熱は感じることはできても、自身が描く『アセンブラで何をするか』が無かったのだ。

「本来道具とは何かをするために開発するもので、手段と目的がすり替わっているのではと疑問に思いました。故に伺いたかったのですが、現段階では明確な目的がないようですので、この質問はここで打ち切らせてもらいます。この研究が実を結ぶことを期待しております。失礼しました」

言い終わると俺は着席した。この後もいくつか質問があったが、明らかに久利原氏の弁舌は講演中ほど冴えない。彼は研究者として若いので、経済的な話題を提案できる人間が同時講演をすれば印象も変わったのだが、何とか微妙である。

ただ、俺の関心はすでにアセンブラから農業科で行われる『荒地でも育つ食物の開発について』にシフトしていた。

講演会が終わり立ち上がり、講堂から出ようとする後ろろから声が掛けられた。

「おいー」

見覚えのある顔は、真ちゃんの友人であり、この夏（主に真ちゃんが）熱い戦いを繰り広げた正統派主人公か。

「あの子の決勝ラウンド敗退は残念だったな」

正直言つて彼らが棄権しなければもう少し手間取っただろう。そういう意味では楽できたので感謝すべきである。

「そーいや、お前らあの時、手を抜いて・・・じゃなくて、さっきの講演の質問は何なんだ。久利原先生だつて色んなことを考えて」

「いや、その思いを口に出さないと世間に伝わらないし、予算とかスポンサーが付かないだろ」

この講演会の協賛にアーク社が無かつたのはその表れだと思ふ。つまり、秘密主義なのかどうかは分からないが個人への不信が研究への不信に繋がるパターンに陥っているといつてもいい。彼にしてみれば研究ができればいいのかもしれないが、スポンサー達はそれによつて生み出される成果を期待しているのである。予算という名のリソースは有限であり、他人を蹴落としてでも確保しなければならぬ時がある、と元社畜は思うのだが、まあ学生に言つてもしょうがない。

「その通りだよ」

「先生」

そこには久利原直樹氏がいるが、その表情は暗い。

「あの時、ぼくは何がしたいのかを明確に言うべきだった。この研究が日の目を見るときに胸を張つて答えられるようにするよ。甲君、ぼくはここで失礼するよ」

頭を垂れ、久利原氏が立ち去つた。

「悪いけど俺も失礼する。連れを待たせているんで」

「あ、ああ。俺も余計なこと言った。悪かった」

そこにいた真ちゃんに目礼をし、レインも頭を下げて講堂を後にした。

久利原氏に関してはあれだけ思ってくれる生徒がいるのだから多分、あの人自身は良い人なのだろう。世の中に不幸があるとすれば、良い人が良い功績を残せるとは限らないという点なのだ。

「レインは久利原氏のことをどう思う？」

「そうですね、いい人だとは思いますが、何とか危険な感じがします」

最近、人を見る目が養われてきたレインの評価は俺と概ね一緒だった。物事に対する捉え方が俺たち寄りになっているという前提があるが、基本的に彼女は聡明である。

「危険という？」

「女の勘ですから何とも」

ちよつと口角を上げた仕草も魅力的に見える。これだから美人は。「こんな変人と積極的に関わることを決めた人間の勘は果たして信用できるかどうか」

そして最近、すっかり俺たち側に染まってしまったご令嬢たるレインさんはこう切り返すのであった。

「少なくとも今の私は以前より自分のことが好きになりました。それで充分です」

「こんな風にした俺たちが言うのも何だけど、まじめに親父さんに顔向けできないなあ」

1年前、彼女がこうなるなんて誰が予測しただろう。不変の人間なんていないが、桐島レインの人格を形成する上で俺たちが与えた影響は確かにある。願わくは善き影響であればと思うのだが。

「いや、私は充分に感謝しているよ」

後ろから渋い声がかかり、俺は振り向くと、カジュアルなジャケットを着た長身の40前後の男性。

「お父様!?!」

「確か、ジルベルト君だったね」

「鳳翔学園2年、ジルベール・ジルベルトです。レインさんとは、いい友人として付き合っています」

その目付きは鋭く、全く隙がない。

だが、その鋭さも長くは続かず柔和な表情に変化する。

「友人か・・・まあいい。ジルベルト君、君はこれから暇かね?」

「申し訳ありませんが、これから興味のある発表会に行きたいと思っております、お嬢さんに用事でしたら、俺はここで別れますが」

「いや、私は君と話がしたいと思っっているのだよ。その講演が終わるのは?」

「午後3時です。それ以降だったら大丈夫ですが、お仕事の方が忙しいのでは?」

「私だって四六時中仕事をしている訳ではない」

初見なのだが、娘から聞く父親像とはあまりにもかけ離れていた。

(なあ、レイン、性格はまともない人っぽいじゃないか)

(ま、まあ最近はそんな気もします)

軍用のチャントではないが、簡易的な疑似ネットワークで繋がったレインも困惑気味のようなのだ。

「まあ、いい。レイン、申し訳ないのだが彼を借りてもいいだろうか。埋め合わせ方法は何か考えるので」

「分かりました」

つまり、仕事関係か、彼女にまつわることなのだろう。レインもその辺は理解しているのか、特に反論しなかったため、俺は今日のスケジュールを多少修正することと相成った。

スーパー・ジルベルトワールド5―3

学園祭で必要な用事を済ませてレインと別れた俺は、自宅に戻り、ラフな格好からシックな格好に着替えた俺は、指定されたホテルのレストランに向かった。

待ち合わせの時刻の10分前に到着したのだが、それよりも早く到着している桐島氏を見て、やっぱり軍人は事前行動が基本なのかと感心させられる。軽くあいさつをし、席に促されたので着席すると、改めて自己紹介をする運びとなった。

「レインから色々聞かされているかもしれないが、改めて自己紹介しよう。統合軍極東方面幕僚団所属桐島勲だ」

確か大佐だったと聞かされていたが、幕僚団所属ということは何となく参謀関係か、大将辺りの副官なのだろうかと当たりを付けているのだが、生前は軍事オタで無かったので、まあ30代後半で大佐まで行けば基本的にエリートなのかなという事で納得した。

「鳳翔学園2年、ジルベル・ジルベルトです。レインさんとは、普通の友人関係だと思えます?」

健全ではないが、爛れた関係でないことを証明するのはとても難しいことだ。雛鳥の刷り込みじゃないが、大分毒されているし。

「娘と君がどういう関係なのかは後にしよう。今日は別の件で君に相談があったのだ」

「相談ですか? ごく普通の学生である私が軍人の桐島さんの相談に乗れるかどうか。まあ、ここの料理分くらいならがんばりますけど」
てつきりレイン関係の話がメインになると思っていたが、見当違いだったようだ。とりあえず学生のジルベル・ジルベルトから一応社会人をしていた佐藤弘光に思考をシフトする必要があるようである。

「実は私もアセンブラの講演会について参加していたんだよ。久利原直樹とはある件で因縁浅からぬ関係ではあるのだが、君の質問内容は関係者からしてみると盲点だった」

俺がああ場で取った行動にはいささか問題があるが、それは前段階の処理という側面が強く、質問内容自体は別に問題がないと思うのだ

が、関係者的には違ったらしい。

「文系ならいざ知らず、経済ベースに乗らない研究なんて役に立ちませんからね。しかし、軍人が出張してくるところをみると、久利原氏は過去に軍人の縄張りもしくは統合政府隷下の施設で何かをやらかし、あなた方はそれを疑っているということでしょうか?」

「頭の回転が速くて助かるが、つまりはそういうことだ。ジルベルト君はアセンブラについてどの辺まで知っている」

「えっと、今日の講演で知る前段階の知識ですと、キム・エリック・ドレクスラーが概念を提唱して、自己増殖をして、ある種の人工知能というか知性を持っているのですかね」

「では、それを理論化したのは?」

概念を提唱し、理論を構築し、実際に実証して、普及させる。研究のプロセスは乱暴に言ってしまうとそんな話になる。確かに概念の部分はドレクスラーが提唱し、久利原氏が実証しようとするとなると、理論は誰が作ったのだろうか。

生物学における進化ののミッシングリンクではないが確かにその部分が欠けており久利原氏もそこには触れていない。知らないのか、あるいは知っていても言えないのか。

「そう、久利原直樹は、実現段階まで持っていこうとしているが、理論を固めたのは別の人間だ、いや存在と言ってもいい」

存在と勲氏の忌々しげな顔から察するに、過去にぎっと詰め込んだ知識の中から想像に値する今世紀最大のマッドサイエンティストの名が浮かんだ。

「つまり、ノインツエーンですか。彼本当に多趣味というか何でもやってたんですね」

レオナルド・ダ・ヴィンチは芸術家であり建築家であるが、その他の方面にも強かった。もちろん、実現可能かどうかは別として多くの発明の案も遺している。ノインツエーンもはじまりが兵器だったのに、研究という分野で多岐に渡る。

「忌々しいことだが、現代社会はあれの技術によって謳歌しているよなものだ」

彼の存在の狂人ぶりは忌避されるべきだが、恩恵が大きいのも事実だ。痛し痒しとはまさにこのことなんだろう。

「では久利原氏はノインツエーンの弟子……という割には若いですよ。孫弟子か何かですか？」

渡される紙の束、つい2ヶ月ほど前に学校の生徒会室で似たようなやり取りをしたことがあるのだが、今回は件の人物に対する報告書だった。ところでこれ、部外秘ではないと信じたい。

受け取った俺は口に出しながら調書を読み上げる。

「久利原直樹、生年は……で、出身は……。家族は死亡、苦学して星修に入り、大学に進学……ああ、この人も人口知能友愛協会の会員なのか。専攻は当然ナノエンジニアリング。見たところ普通の経歴ですよ。しかし、この出身地って確かナノ汚染地域指定で、最後土地ごと焼き払った場所ですよ。」

「確か、君の年齢だと3歳くらいだと思ったが」

「過去に起こった政府レベルの事件はなるべく覚えるようにしていますから」

あの当時は現状を把握すべく、必要そうな事件や情報は片っ端から頭の中に入れていったのだが、まさかこんな形で役立つとは思わなかった。

「つまり久利原氏の家族の死因もナノ汚染が原因ですね」

ナノ汚染の土地で作った作物や水は、人体に多大な被害を与える。つまり彼の根底にあるのはナノ汚染で、それを除去するためにこの研究に進んだと思うのだが、それを口にすることなくカルテを読み進める。そして、必要としている情報が欠けていることに気づいた。

「彼のカルテは無いようですが」

「カルテが必要なのかね？」

「そうですね、久利原直樹という人物は基本的に理性的であることを旨としているが、生徒に慕われているところを見ると温情深い側面もあると思います。そういう人物が予想外の行動を起こすというのは親しい人に危機が訪れたか、自分の健康に不安があつて目的を達せられないか」

報告書にざっと目を通したところ、直近で親しい人物の為にアセンブラが必要とは思えなかった。真ちゃんも彼に近い人物といえるだろうが、今のところ安定している彼女のためというのは想像しがたい。

「つまり、強迫観念から行動を起こしたと君は考えるか」

「本来の彼の性格は、99%をなるべく100%に近づける石橋を叩いて渡るタイプ。あなた方に疑いを持たれるような、例えば5割程度なら絶対に動きません。つまり第一に自分の体に対する不安、第二にその時に動くのがもつとも効果的な確率が高かったということと、第三にしようか。例えば協力者にウィザード級のハッカーが居たとか」

「多分50%でも、それ以上の確率を引つ張り出せないなら勝負にでざるを得なかったのだろう。そして、結果としては成功した反面、目をつけられているのが現状のようだ。ただ、これくらい大きなニュースなら知っていてもいいのではないかとは思うのだが、その辺に詳しいいとなるとなんちゃってハッカーのエディにでも尋ねてみるか。」

「この話はどう考えてもやばいので意見を述べたのもう無関係でいたいのだが、何となく知っておいた方がいいという曖昧な判断をした。ふと桐島氏をみればメモを取りつつ、何かを考えているようだった。」

「なるほど、いや参考になったよ。では、料理を出すとしよう」

本題は終わり、食事をしながら雑談に入るが、話題と言えば、またレインの話ではなく、最近の経済事情やらの話だった。

「しかし、君は何というか同世代の人間と話しているような錯覚に陥るよ」

「俺は、学友より街中の知り合いが多いせいとか、桐島さんと話している方が楽ですけどね」

「といっても社会経験的な意味では30代前で終わっている若造が偉そうなことを言っているに過ぎないのだが桐島さんが笑っているところを見ると、印象的には悪く無いようだ。」

「私は娘より息子が欲しかったよ。息子なら殴ればいいが、娘は難しい」

「レインさんは頭がいいし根性が据わってますから、本音を話せばそりや衝突もするでしょうけどきつと解決しますよ」

考えてみれば姉さんも親父と反りが合わずによくケンカしてたが、母さんからしてみればあれはじゃれ合っているだけでケンカの範疇に入らないそうさ。娘にとって父は最初の男であるとはよく言ったものである。

「君はご両親とはうまくいっていないのかね」

「自然に生まれた弟に愛情を注いでいるのでいいんですよ。俺にとっても基礎遺伝子の提供者に過ぎませんし、経済的にはすでに自立している状態ですから」

物心ついたときには自分が異質であることを隠そうとしなかった。デザインナーズチャイルドは体と心の成長の速度の差異が問題なのだが、幸い心が育ちきつている自分にはメリットがあつたのだろう。それでも高校1年のはじめまではおとなしくしていた方だ。

「確かプログラミングのバイトだったかな」

超一流にはなれないが、頑張れば一流半程度の仕事はできるのでとりあえずプログラミングのバイトもしているが、やろうと思えば料理店のバイトでもできる気がするし、この頃はそっちの方がいいのではないかという気もする。いくら金を積まれてもノイ先生の実験には関わりたくないが、そっちは多分最終手段である。

「おかげさまで助かってます」

娘のそばにいる男の素性は調べているというか、本質的にこの人も神経質だな。久利原氏とは相性が悪いというかある種の同族嫌悪だと思えば納得がつく。

「それで、レインは君から見てどう思う？」

政府の人間としての桐島氏、大人としての桐島氏を経て、ようやく父親としての桐島氏と話すことになりそうさ。

「知り合った当初は世間知らずのお嬢様でしたが、今ならどこに出しても恥ずかしくありません」

これは本心である。知り合った当初は関わらない方針だったが、あまりにお嬢様然として意志が弱かったので方針を変更して、偏向的で

はある者の色々なタイプの人間と関わらせ対処方法を学ばせた。かくして俺の知っている桐島レインが誕生したわけだが、後は将来の恋愛対象が彼女を受け入れるか、相手か彼女が折り合いを付けるかというレベルだろう。

「いや、そうではなく」

「人間としては好きですが、女性としては正直分かりません。向こうは俺のことを1年のときから知っていたようですが、俺にしてみればようやく半年経ったぐらいです。ああ、別にお嬢さんが女性として魅力がないわけではないんですけど、その辺がよくわからないわけです」

「では、君は別に気になる女性がいるのかね」

最近は学校付近はレイン、夜は先生、たまに真ちゃん遊びに来て、料理をしたりするというサイクルが構築されていた。たまに六条先輩が絡むときがあるがそれはまた別問題である。

「まだ、遊びたいという意味ではないですが、身を固めるのには若すぎますから、あまり意識していませんね、ただ」

「ただ？」

「レインさんはあなたの一人娘ですから、やがてそれなりの家に嫁ぐのかもしれませんが、兄代わりとしては、なるべく彼女に幸せになつてほしいです」

もともと、順調に成長した5年先のレインだったら即家出してしまいう気がするが。桐島氏も思うところがあるのか目を細めた。「そうか」と相づちを打ち、再び食事に入った。

どうやら、いつの時代に生まれてもかわいい娘は父親の悩みの種らしい。雪村の父親である康隆さんも息子には厳しかったが、里菜ちゃんとのボーイフレンド候補には目を光らせてたし。

何というか不器用な親子だが、知り合ったのも何かの縁だし、橋渡しできる部分があれば協力しようかと心に決めたのだった。

もともと、今日の出会いは、年末まで続く目まぐるしい事件の前触れだったことに当時の俺は気づいていなかった。

おまけ・桐島さんちの親子

ジルベルトさんとお父様は今頃話をしている頃だろうか。
おそらく私のことだろう。

もし、私に付きまとうなとかお父様が言うのなら、私にも覚悟がある。

3ヶ月分くらいの生活費と、夜逃げ用道具は常に用意してある。
ノイ先生も困ったら全うな仕事を紹介してくれるとってくれた。
そして、お父様が帰ってきた。

私と目が合い、何を言われるかと思えば、想定してのとは全く違っていた。

「レイン、早く女性として認識させないと、一生妹扱いだぞ」

「は、はあ」

それだけを言うと、自分の書斎に入っていった。

一体、ジルベルトさんはお父様に対してどういう話をしたのだろうか。

とりあえずわかったことは。

「この準備必要なくなりましたね」

ほっとしたような、残念なようなそんな気分だった。

おまけ・普段アレな人がかわいいパジャマを着て寝込んでいるというのは萌えるよね。

ああ情けない。過労でぶっ倒れたのはともかく、風邪を引いて寝込むなんて何年ぶりだろうか。

しかし医者として看病することはあっても、看病される側だったことはあっただろうか。

「ノイ先生、料理できましたよ」

ジルベルト君がいい匂いと共に部屋に入ってくる。体を起こすと、土鍋とデザート、お茶のようだ。

「今日は中華粥にしてみましたがお食べられますか？」

「アーンしてくれば」

「もう仕方ないですね」

冗談のつもりだったのだが、随分手慣れている気がする。しかし、こうなったら引つ込みがつかないし、素直に甘えることとしよう。

「熱かったら言ってくさいね」

湯気が立った中華粥を口に入れると味がまだよく分からないが、多分うまいと思う。緊張して味が良く分かっていない訳ではないのだ。

そして粥を食べ終わったら杏仁豆腐とミカンの缶詰を食べ（さすがに自分で食べた）再び布団に入る。

「じゃあ、俺はそろそろ帰りますから安静にしてくださいね」

「もう帰って……いや君に風邪を移したら大変だからな。この埋め合わせはちゃんとするからな。そうだ君が風邪を引いたらネギを使った民間療法を試してやろう」

「……いや遠慮しておきます。一応鍛えていますしとても嫌な予感がありますので」

そうしてジルベルト君はカギをかけて帰ってしまった。

そんなに大きくないはずなのに少し部屋が広いなど感じてしまった。

スーパージルベルトワールド6―1

人間は人生の内に何度かは自分とは何かを問うことがある。思春期の頃には自分が特別であると認識するために色々考えたりするし、死を前にして自分の人生とはどんなものだったのか走馬燈が流れるという。俺ことジルベル・ジルベルトは佐藤弘光という人間を核にした存在である。デザイナーズ・チャイルドという要素も重要ではあるのだが、これは身体的な特徴であって精神面への影響を与えなかった。あるいは、一度死んだ身んだという記憶が残っていることが、人はどのような存在でも死ぬということを意識しているのが理由かもしれない。

「結局は人間の行き着く先は人間でしかない、人間は生き物だから死ぬ」

サイバークノースなんていう思想もあるらしいのだが、人間の精神って基本的に長い時間に耐えられるのかどうかという疑問が出てくる。不老不死というのは延々と続く死に対するアプローチで、かの橘社長もリヴァイアサンを用いてそれを実現しようとした。ファンタジーなら血さえ吸えば数百年を生きる吸血鬼という存在もいる。だが、アキレスもジークフリードも不死ではあるものの弱点を持っていたし、吸血鬼なんて日光はダメだ（これはアルビノや光線過敏の人間をそう呼んだ可能性はあるが）、ニンニクはダメだのある意味弱点のオンパレードである。

まあ死ぬ可能性は置いとくとしても、人間が不老不死の存在となるには解決すべき問題があると思った。体内時計のリズムが狂い過ぎると自律神経の関係か専門じゃない俺にはわからないが、精神にも異常を来す。人間も生物であるので、カマキリのように交尾したら食われるというのは極論だが、子供を作ってある程度育ってしまえば、後は死を待つのみという状況が来る。しかし、そこから長すぎればどうやって過ごすのだろうか。人間は男性は精通、女性は初潮が来れば基本的に生殖は可能であるが、10代から可能ということになる。ファンタジーのエルフの結婚適齢期は寿命が300年くらいと設定

してある場合、100歳前後。それはそういう生命のサイクルで生きることが前提なのであり、仮に人間の寿命が2倍になったとしても、性成熟が30代くらいに来るわけではない。生物的な欠陥をどう埋めるのか。

暇人の憂鬱

佐藤：と俺は考えているのですが、専門っぽい姉魂のご意見は？

姉魂：そうね、じゃあ逆に聞くけど佐藤さんはどれくらいの時間なら人間は耐えられると思うのかしら

佐藤：そうですね、本来の寿命である120年前後の3割増しである150年が適当なところでしょうか。

姉魂：佐藤さんがその気なら200年くらい生きそうな気がするけど……どうも私の先生だった人と同じ雰囲気があるのよね。韜晦とどうか超越している辺りが

佐藤：姉魂さん中で俺がどういう認識をしているのかは今更気にしませんが、俺的には適当に生きて適当に死ぬだけで構わないし、一人で全部する必要はありませんよ。ダラダラ生きるだけだったら意味がありませんし。

姉魂：制限が無いと人間は進歩しない……なるほどその意見はあるわね

佐藤：研究なら他の研究者が引き継ぐかもしれませんが、芸術や文学は本人がやらなきゃ意味ありませんからね。もっとも明日できるからとその日を無駄に過ごしてしまう人は芸術分野には向かないかもしれません。

姉魂：じゃあ、自分が2人いたらどうするのかしら

佐藤：昔のコミックで見ましたが、嫌なことを相手に押しつけるんですよ多分。そろそろ夕食の時間ですし、哲学的な解釈についてはこの辺にしておきますか。姉魂さんもたまにはリアルで暮らした方がいいですよ。

姉魂：忠告はありがたいけど、今リアルに戻ったらリハビリからはじめなければならぬレベルなのは確かだね

佐藤：……いや、まあ、その何というか……がんばりましょう。

御大将さんがログインしました

佐藤：どうも。

御大将：これは、タイミングが悪かったな。

佐藤：もしかして俺に用事でしたか？

御大将：いや、別に今でなくてもいいんだが……ちよつと自分の研究に行き詰まりを感じてね。

佐藤：興味はともかく生活はごく普通のジャンルに生きてるのでそつち方面の相談されても無理ですよ。

御大将：それは理解しているよ。ただ、技術的な面もそうだけど、何の為に今の研究を始めたのかと思うと……袋小路に入ったネズミみたいな気分だよ。

姉魂：あなたはまだ若いんだからそれほど焦らなくてもいいのに
佐藤：御大将はきまじめだから自分がかんばらないとつて考えるかもしれないけど、物事には他者と時間が必要なことがあると思う。壁にぶつかったなら人か時間が必要なんだろうな。

御大将：二人の言うとおりでね。ちよつと気が楽になった。じゃあ、今度は楽しい話題で話そう。

御大将さんがログアウトしました

佐藤：相当切羽詰まっていますね。

姉魂：みたいね

スーパージルベルトワールドchapter6

厄介事 Human Error

side 桐島レイン

「どうも余り機嫌が良くないようだがジルベルト君と何かあったのかね」

ラ・ヴィータで偶然、ノイ先生を発見した私は一緒に軽めの食事を取ることにした。最初は他愛もない話だったが、話がジルベルトさんのことになる、どうも私は自分の胸の内を表情に出していたようだ。

「別に、最近ジルベルトさんが私より父と一緒にいる時間が多いからって拗ねている訳ではないですよ」

そう、たまにはどこかでデート——例え彼がそう認識していなくても——に誘ってみてもあまり反応が良くない割に、父に呼び出されると二つ返事で行くのは面白くないのも事実。私の家で話し合いをした場合は、会話することができるのは嬉しいが、二人の会話を知ることができない自分がかもどかしい。

「ほう、桐島勲大佐か。あまり意識はしていなかったが君は彼の娘さんだったな」

「父をご存じなのですか？」

父は代々続く軍人の家系だが、ノイ先生に知られているとは思っていないかった。

「直接の面識は無いのだが、ある件で繋がっているところだ。それは別としてジルベルト君もまた変なのに捕まったなあ」

「私が言うのもおかしな話ですが、父は生まれつき制服を身に纏ったような融通の利かない性格ですよ」

言いたいことは色々あるが、生真面目な役人体質である父が変わりに分類されるとは思っていない。

「だが、そういうタイプほど、自分と異なるタイプに惹かれるものだよ。君だってジルベルト君のおかげで私好みが変わったじゃないか」

それが良いことか悪いことかは別として、他人の顔色ばかり伺っていた自分の考えを口にできるようになったのは悪くないと思うのですが……その手つきが問題だった。

「あの、ノイ先生。胸は自前ですのぞ」

生前の母もどちらかと言えば大きかったので、私もそういうものだと思うっている。もつとも、多少食生活が改善されてから服がきつくなったのも事実だが。

「ふむ、セックスアピールに乏しい私や真君はともかく、君に対しても性的な目で見ないとはジルベルト君は男としていただけじゃない……いや、まあ全くダメというわけじゃ」

最後の方は聞き取れないが、呆れているようなノイ先生の表情の中にもジルベルトさんへの親愛の情を感じ取ることができている。

「あの、前から思っていたのですが、ノイ先生にとってジルベルトさんはどのような存在なのでしょう？」

「弟のようであり、兄のようであるが、偶然出会って、話してみたら意外と相性が良かったということだろうな。まあ、結婚相手としては悪く無いが、恋愛対象としては今一刺激が足りないな」

「刺激が足りませんか？」

「伊達に君達より長く生きていないさ。機会があれば君の父上にも聞いてみたまえ」

私の人生の中であれほど刺激的な存在を見たことが無いのですが、ノイ先生は恋人には向かないと言った。その理由は私にはまだわからない。ノイ先生も父も分かる事が私にはわからない。ノイ先生は私よりもジルベルトさんと付き合いが長いから理解できるが、父にも劣るといえるのは納得ができない。そして渦巻く感情を整理するとその根底にある者が嫉妬であると知った。

「どうやら、私はノイ先生や父に嫉妬してるみたいです」

「何、愛憎は生きるうえでの糧だよ。それに親が生きているというのは良いことだ」

そういえば私はノイ先生の家族というものについて聞いたことがない。真さんはお姉さんと星修の寮に入っているし、ジルベルトさんの場合は、一人暮らしだが家族は健在だ。話題に上がったことが無いということもあるが、ノイ先生の家族関係について聞いたことがなかった。

「ノイ先生のご両親は健在なのですか？」

「母親は知らんが、父親は死んだよ。もともと墓が大きすぎて掃除する気にもならないがな」

墓が大きいということは資産家か何かで、ジルベルトさんや私のよ

うに反発して家を離れたのだろうか。

「しかし、ジルベルト君もまた厄介な問題に巻き込まれていなければいいが」

「いくらジルベルトさんでも政府レベルの問題に巻き込まれてることは無いと思いますよ。どうせ、私に対しての愚痴ではないですか？」

「どうやら、父は気に入っているようなので、結婚とかになると話は別だが交際は問題ないだろう。つまり、一番のライバルは目の前の彼女なのだが、恋愛対象としては不足というなら私にもチャンスがあると思いたい。しかし、真さんを含めたこのぬるま湯のような関係も悪く無いと思っている。」

side out

「アセンブラはメリットもあるけど、現段階ではデメリットの方が高い。特に地上での利用に関しては」

それが目の前の青年の出す意見だった。考えている様だけを見るどころにでもいる線の細い青年なのだが、天才の閃きというより積み重ねた知識から導き出す答えは説得力があるのだと何度かの会話で確信した。

「それはグレイデーを想定した場合かね？」

「まあ、それもあります。完成したら桐島さんはまず何に利用されると思いますか？」

「……兵器だろうか」

軍人の自分が言うのも変な話だが、最先端の技術というものは戦争に関わることが多い。というのも予算として認可されやすいというのも理由の一つであるが、発明した人物はただ発明した物でも使う人間によっては兵器として利用できることは歴史が証明している。有名なのはダイナマイトを発明したノーベルだろう。

「目視しながらアセンブラを起動して殺人の方法は有効です。後はアポトーシスをロジックに組み込めば完璧でしょうか。つまり、成功したらしたでそれに対する抑止手段を考えなければなりません。正直に言うと、面倒ですよ」

「制御できればな」

「最悪なのはとりあえず使える段階です。世に出すなら完成形で出さなければならぬでしょう」

デザインナーズチャイルドやセカンドでも思考の回転速度は最終的に資質と環境に寄る。答えを導き出す能力は天才型の彼女とは違うが、非常時に有用な能力だ。タイプも性別も違うが、何か新しい世界を見せてくれるという期待感をもたらす。ジルベール・ジルベルトもそういう意味では選ばれているのだろう。本人がどちらかというところ平穏や安定を望むのに。

「では、君はどうすればアセンブラは日の目を見ることができると思う？」

「まず第一段階としてアセンブラで宇宙開発、そして宇宙に移住して100年単位で浄化。まあ地下や海底都市で暮らすという選択肢もありますけど、火星開発は閉塞感の打破に繋がりそうですね」

最後の一言は年相応の発言なのか、商品を紹介する際のメリットをアピールしたいのか判断に迷う。レインにその話をすればその辺も魅力だと惚気るのだろうか。

「話は変わるが、最近レインはそのどうなんだね」

「いえ、特にはとていまずか、最近桐島さんとかこういう話をする人が多いので、余り会っていないんですよ。個人的に」

道理で最近機嫌が悪いのかと冷や汗をかく思いだった。

「そ、そうか……若者の貴重な時間を不意にしまい申し訳ない」

「いえ、若い女性と知り合ったのだからここ半年くらいの話で、俺的にはこっち側が楽で良いんですけど」

「君くらいの年齢だと女性に興味がある頃だと思ったのだが、枯れると言われないか？」

「黙ってれば言い寄ってくる女性はいますが……中身が伴わない女性ばかりよ」と

つまるところまだお眼鏡にかなう女性は居ないということなのだろう。

「ちなみにジルベルト君として娘の評価は？」

「そうですね、あと2、3年磨きをかければ宝石のように輝きますよ。ただ、友人として不幸な結婚だけはさせないことを祈ってますが」
今更お世辞は言わないだろうから、3年後が勝負。それまでに誰かが彼の心を射止めた場合はレインには悪いがすっぱり諦めてもらおうと心に決めた。

スーパージルベルトワールド6―2

佐藤弘光は特にめざましい功績を挙げて表彰されることがなければ、罪を犯して警察に厄介になったこともない、日本人としてはごく普通の立場だ。資格の認定書以外の賞状といえば、中学校時代に陸上競技大会で2位に入ったくらいだろう。

中学時代といえば、隣のクラスの担任が道徳にやばい理由で捕まったり噂に聞いたが、なぜそれを思い出したかというところ、現在目の前に展開される光景に現実逃避したかったからに他ならない。

この発端は星修の学園祭で空気が読めないバカを排除したついでだったのだが、どういう因果かジルベル・ジルベルトを取り巻く状況は加速度的に平穩から外れている気がした。

桐島氏から呼び出されて、アパート前に止められた高級車に乗ったのだが、どう考えてもトラブルの予感しかしない。

「あの桐島さん、俺たちはどこに行くのでしょうか？　というかどうして目逸らしてるんですか」

「例の件で君の意見を聞きたいと各方面からあつて。私は一応一学生だからと止めたのだが、宮仕えの悲しいところだ」

「というかそっち系の集まりなら目隠しとかするんじゃないのですか？」

「重要ではあるが、機密ではない場所でやるから大丈夫だよ。今回は学者も呼んでいるしな」

そして車は蔵浜市街から出て1時間ほどの場所にある研究所らしき場所に入る。一見普通の研究所に見えるが、警備の警戒レベルがどうか、空気が学界的なそれではない。まあ、内容が内容なのだからと納得しつつ、50人は入れそうな会議場に入ると、すでに軍人や官僚、そして科学者のような人たちが集まっている。その中にはこの中には場違いな背格好の少女もいた。彼女を遠目から覗き見ると、彼女も俺に気づいたようで、手のひらをひらひらと俺に振る。

しばらくすると、人も全員が集まったのか、会議が始まった。今更ながらアセンブラの理論等の話が進んだのだが、その辺は専門家のお

話なので、やばそうな話だけを抽出すると、そもそもの発端は2年前の清城市のバルドルハック事件まで遡る。そのバルドルの中にはあのノインツエーンのデータが眠っているらしい。

「すみません、俺じゃなくて私の浅学で申し訳ないのですが、どうしてバルドルにそのデータが存在するんですか」

「簡単なことだ、追いつめられたノインツエーンは清城市に存在するバルドルに灼かれて死んだ。もともとデータが実存していることの証左にはならないがな」

俺の質問に答えたのは普段の緩い格好ではなく、ダークスーツを身に纏ったノイ先生だ。

ノインツエーンの研究は宝の山であるので、抜き出そうと考えた人間は枚挙にいとまがなかったが、結果を出した人間は一人もいなかった。

「その後、関係者は継続的に調査したが、何も反応が無かった。これで話が終われば、時代を変えた男の最期という話で済んだのだが、神父の登場で話が変わってきたからな」

グレゴリー神父はサイバークノース派の一人で、ドミニオンという教団を創立したが、その過激な教義は容易にサイバートロに発展。偽りの世界からの解放は彼らにしてみれば救うことに他ならなかった。彼らの目的が何かはわからないが、バルドルを一時占拠したものの、最終的に一般の信者は集団自殺を遂げ、教祖であるグレゴリー神父も全身に銃弾を浴びて死亡した。

以後十年近くバルドルは反応を見せずに都市システムを管理する機械に落ち着いていたのだが、2年前に引き起こされた星修学生によるバルドルハック事件で状況が変化した。ハックされたバルドルは異常なデータを示したことでやはり何かあるのではという疑惑が生じた。この件に関して事件を起こした星修の学生が処分されているが、限りなく黒に近い灰色ということで、久利原直樹はマークされるに留まった。

しかし、今年に入って彼はアセンブラというナノ工学における究極の形を証明しようとしている。この際、データの入手方法は考えない

ものとして、問題は実験の成功率だった。

「あの人、頭は良いと思いますが、咄嗟の事態に対応する才能はなさそうですね」

どちらかという手札を多く準備して、事態に応じて切っていく俺と似ていると思う。

「それに関しては橘社長に改めてお話を伺いましょう。ここに至っては過去には目をつむる方針です」

アークインダストリアル社社長にして星修学園理事の橘聖良は例えモニター越しであっても迫力を感じさせる。橘姓と社長という組み合わせは何となく不安になる要素があるが、悪人には見えないので良しとしたい。

「私の身内がハッキングツールを作ったのは確かね。その後のバルドルの異常については実際に聞いて見ないと分からないけど、私たちはこの件については全面的に協力しましょう」

明日、この件について改めて話し合うことになったのだが、立場上学生である俺の出席はどうなっているかという公欠扱いとのこと。ギリギリではないが、「病弱」なせいでたまに休む自分としては補講を受けずに済むなら越したことはない。心ある先生からはあからさまな仮病良くないといわれるのだが成績は平均より高いのだから妥協して欲しい。

「しかし、君がこんなことに関わるとは出会った当初は思わなかったよ」

とはノイ先生の言。

「それを言えば先生ってなんちゃって科学者で、医者でしたよね？こんなところに呼ばれる人じゃないでしょ」

Dr. ノイは専門分野がないタイプの科学者だ。シミュクラムの作成から、ロボットのプログラミング、ナノテクノロジーも趣味レベルならやってのける。彼女もA・F・Aの会員であるから天才側なのは間違いないのだが、自分の本職は医者だといっているので評価的には、何でこの人いるのかな的な疑問である。

「いや、私も呼ばれるまでは理由が不明だったのだが、まあ来てみれ

ば、生まれて以来の因縁に引きずられたところだ」

人間踏み込んで良いところと悪いところがあつて、少なくとも俺たちはその一線を越えたことが無かった。ジルベール・ジルベルトは佐藤弘光という人間であつたという荒唐無稽な設定があるのだが、それを目の前の女性に告げたことはない。ましてや、この世界が虚構を前提に成り立っているなんて言つても意味が無いし、そちら側の住人になつてしまった俺にしてみればもうどうとにでもな―れな話なのだ。

side 水無月真

私は自分が無力だと思ひました。最初はわずかな兆候であつたけど、気のせいだと思ひました。いえ、思ひたかつたのです。

「あーん」

夏が終わり、秋が深まつていくと、次第に追ひ詰められている様になつたのです。私は何も言えなかつたというか、そもそも私はまともに話せません。

「もし、私がどうにかなつたら止めてね」

正常と狂気の狭間に揺れるあの人を私は止めることができるのでしょうか。というか、マジで衆人の前であーんとかやるの止めてください。

「甲、そのこゝは寮なんだからもう少し節度を持つてというか暑苦しいから近づくなー」

甲先輩と千夏先輩のラブラブフィールドに当てられたお姉ちゃんがどうとうブチ切れました。最近は何か吹っ切れたようです。

「そうだな、こゝういふのは二人きりで」

「……甲」

リア充爆発しろ！

まあ、お姉ちゃんはいいのですが、人生のどん底にいる菜ノ葉ちゃんがやばいです。転科試験は落ちましたし、甲先輩は空気読めないし。

目が死んでいますというか、光が無いです。

どうも気づいているのは私だけのよゝな気がします。

信じたい、信じたいけど料理に何か盛られていないかと最近不安でたまりません。

この間は空の鍋をお玉でかき混ぜていたのですが、お呪いの類なのでしようか。

そう、最近の如月寮は空気が最悪なのです。

今の私にとつての安らぎは、ジルベルトさんちでたまに行われる食事会と、クウちゃんの癒しだけ。

この纏わり付くような重たい空気を吹き飛ばしたのは如月寮に取り付けられている今時珍しいインターフォン—もちろん見た目だけで中身は最新式ですけど。

「ああ、失礼だが、西野亜季君はそこにいるだろうか」

「亜季先輩、お客さんです」

「私……」

亜季先輩がのそのそモニター端末に向かうと、よく見知った人達がいまいます。

「私はノイ、こちらはジルベルトくん。早速で悪いがバルドルのハックツール一式を用意してくれたまえ。これは統合政府、統合軍ならびにアーク社、つまり橘社長からの正式な要請であって残念ながら君に拒否権は無い」

亜季先輩の表情が青ざめていくのが分かりました。

「……おばさまに確認してもいい？」

「それは構わないが、中で待たせてもらってもいいかね。茶などはいらん」

亜季先輩が自分の部屋に戻っていくと、ノイ先生は呆れた口調で呟いた。

「ノイ先生にまこちゃんに、あの金髪の美人に今度は亜季先輩。おのれジルベール・ジルベルト」

ああ、まだ誤解してる。どうしてうちのお姉ちゃんは思考が直列回路なのでしようか。

決して恋に破れてしつとの心が芽生えているわけではないと信じたい。

「いや、だから真ちゃんは妹ポジションであって恋愛対象ではないって」

「うちのまこちゃんはこんなにかわいいのに、恋愛対象じゃないなんてそれはそれでむかつく……って、まさかあんたホモ」

「そういえば、レイン君がお父上と一緒にいる時間が長いとぼやいていたがもしや」

「や、ノイ先生は悪ノリしないでください」

ジルベルトさんはお姉ちゃんのこと苦手なのですが、意外と相性は良いのかもしれない。

といっても、レインさんは意外とメタ思考入るし、ノイ先生もいままから無理にこれ以上人間関係を複雑にする必要はありません。

……別に、リアル妹ポジションが欲しかった訳ではないのです。

この話は脚色して佐藤さんに送ることにしましょう。

side out

結局西野亜希を新たに加えて研究会上に戻ってきた俺たちは改めて、証言者である彼女の話聞くこととなった。

「つまりハッキングツールを使用したとこまでは概ね成功したが、その後久利原氏が倒れてバルドルにも異常が見られたので、咄嗟に理論爆弾を使ってバルドルを緊急停止させた」と

西野亜季の証言をまとめるとそういうことになる。

これによって、西野亜季が罪に問われるかという点、司法取引の一面があるし、そもそも一学生に突破されるようなシステムを運用しているなんて発覚したら、関係者が全員路頭に迷うだろう。

何より彼女は橘聖良の姪御であり迂闊に手を出しようなものなら何が始まるのかわからない。

ここで情報をもう一度整理すると、アセンブラを完成までこぎ着けることができる何かバルドルに眠っているのは確かだと言うことだ。

「ノインツェーンが自殺してから、バルドルにダイレクトにアクセスした人間はどれくらいいますか？」

嫌な予感が脳裏を掠める。聞きたくはないが聞いてしまった。

「様々な人間がアクセスしているが、接続者のように特別な反応をする人間は居なかった。その彼女も死んでしまったので、正規にアクセスができる人間は多分この世にはいない。もっともどこかの機関が接続者を作ったりしなければの話だが」

『それに関してはお互い様ね。私はあの悲劇を二度と起こさせるともりはないからこそ、今回も全面的に協力を約束したのよ』

「話を進める前に確認したいのですが接続者って何ですか？」

橘社長と桐島氏はどうも俺が知っている前提で話しているし、バルドル関連の何かであることは理解しているのだが、そういう話してなかったな的な顔をされるとこっちが困る。

「とある人物のことを接続者と呼んでいた。もっともその人物は死んでいるので、公式上接続者はもういない。どこかの違法研究でクロールが作られている可能性は否定できないが」

それからああでもない、こうでもないと言は続くのだが、まとまらず、

「では、結局誰かがバルドルにアクセスしなければならないということですね」

「そういうことになるな。そして残念ながら具体的な対処策がない」
まるで再現性の無いバグをどうにかして再現するようなものだが、

時間も無いので慎重かつ緊急にこなさなければならぬだろう。

どうするこうすると紛糾する中、俺はいつ家に帰ることができの
だろうかと思案していると橘社長は俺を指さした。

『なら、私はあなたを推します。佐藤さん』

「俺？　というかあなたは？」

俺を佐藤呼びわりする人間を俺は知らない。佐藤は某所で名乗っているHNであり、リアルでは彼らの正体がわかっていないからだ。

だが、推測でそれができる人間と言えば……。

『最初から私はあなたが鍵になると思っていた。そう、いつも通りあなたが納得のいくやり方でやればいいわ』

つまり俺を巻き込んだのは桐島氏ではなくあの人だったということだ。

「ここに至っては文句を言いませんが嵌めましたね 妹魂さん」

『能力のある人間は働くものよ。私なんて24時間働いているわ』

引きこもりでも世界有数の企業の社長になれる実践者がここにいた。

『何ならアークに来る。あなたなら亜季さんを立派に支えられるわ』

おそらく、西野亜季が彼女の後を継ぐのだろうが、実務関係とか俺に押しつけるつもりだ。

「何だ、君は橘社長とも知り合いだったのか」

「まあ、ここ1年くらいの付き合いなんですけど………そういえば暇人達の集いには来たことありませんでしたね」

誘おうかと思っていたのだが、結局誘わずじまいだったことを思い出す。

「待て、私もジルベルト君には期待している。これは本人の意志に任せるべきではないだろうか」

何か桐島氏も会議ということ忘れていないだろうか。もしかして、俺って就職活動の必要ないのだろうか。

「将来的な問題はさておくとして、バルドルの件に關しましては万全のバックアップが望めるのであれば私は協力します」

レベル的にはリヴァイアサンより弱いことを望みたいが、とにかく数より質がいい。

「じゃあ永二さん呼びましょう。仲間外れにしたら怒りそうですし」

「永二か………仕方ないな」

「まあ、バルドルとかノインツエーンの単語が出てくると割安に協力してもらえるしな」

橘社長、桐島氏、ノイ先生の大人達の会話を余所に人嫌いというか、そういう空間が苦手な西野亜季は俺に呟いた言葉というと。

「あのおばさまにツッコミをできる人材はとても貴重」

そんな目で見られても、とえらい反応に困ったことだけを記録として残しておこう。

スーパージルベルトワールド7-1

『暇人の憂鬱』

佐藤：本当に面倒だな

御大将：どうしたんだい佐藤君

佐藤：臨時のアルバイトが非常に面倒といいますが、ちよつと準備不足かもしれない

御大将：ああわかるよ、僕も今仕事の準備で忙しくてね。本当にこれで良いか迷うよ

佐藤：まあ、やると決めたらやるしかないですよ。先延ばしできるとは思っていたんですが、伸ばせないのが辛いところです

火打ち石さんがログインしました

火打ち石：人は運命には逆らえないからな

佐藤：どこまでが運命なのやら

火打ち石：今日この日に俺達が今ここで語った他愛のない話も後から考えれば意味があるのかもしれない。

佐藤：そうですね、しかし、仮に運命とやらがあるならもう少し準備期間を与えて欲しいところですが……

御大将：確かに、だからこそ人はどんな結論かわからない未来に対して備えるわけだ

chapter 7

外的要因 External factor

初めて会う門倉永二という人間は『親父』という言葉がよく合う人物だった。

「甲くらのガキをバルドルに接続させるなんて聖良さんも勲も何を考えているんだ！」

ちなみに、彼のいう甲とは夏の大会で戦ったヒーローのことで、橘社長の甥でもあるらしい。

調整された自分がいうのもなんだが、才能を語る上で遺伝子というのは馬鹿にできないものだ実感するのである。

「大体、その久利原って先生を捕まえちゃう方がはるかに楽だろ。俺は専門家じゃないからわからんが、狂信者にグングニールのスイッチ預けるような状態なんだぞ」

「アセンブラの推進派と反対派で軍部も政治家も対応が分かれている。決定的な証拠がなければここに至っては止められないんだ」

軍側の立場を代表して、門倉氏と旧知の仲である桐島大佐が反論する。

実際のところ、人道の面から考えれば、政府や軍の子飼いである人物ならともかく、ハイティーンの学生に世界の命運を委ねるのは間違っている。

もしかしたら別の世界の命運なんともものは掛かっていなく、仮に失敗しても最小限の被害で終わるのかもしれない。

「だから俺はあのバルドルは停止させろってあの事件の後、散々言っただよな。あそこで止めておけばエイダさんだって」

「それは言うな」

『二人ともそこまでしておきなさい』

ノイツエーンの死後、ネット分野における彼の遺産を継いだのは現在二人をたしなめている橘聖良だった。

遺伝子関連は統合政府側が管理しており、鳳翔学園などをモデル校として社会に与える推移もあわせて研究している。

他にもさまざまな分野があるのだが、アセンブラを含むナノ産業はリアルに対して与える影響が大きく、宇宙開発や食糧問題など解決できる、有体に言えば特需を生み出せる分野なのだ。

だからこそ、危険性があっても研究が続けられ、久利原直樹という人物の登場によってようやく形が見えてきたといえるだろう。

ところで、論文を書くにあたって参考資料を記載することは必須なのだ。

自分が佐藤をしていた大学生時代の話になるが、何をベースに論文を作っているかわからないと意見が指導教授から入った。正しさの

根拠が分からないかという話だ。

学生ならそのまま丸写ししていいかチェックする意味合いが強いのだが、専門家だと特に理系分野だと、結論に至る過程が重要視される。

ペニシリンが偶然に発見されて実用化できるのに10年かかるように、理論化し、体系化しなければ意味がないのだが、久利原直樹の論文にはそれがない。

つまり要所要所の出所がはっきりしていない。

ここでその欠けたパーツを埋めるのはノインツエーンであるのなら、どうやってという疑問符が次に浮かび上がる。

そして、仮にその情報がバルドル経由で引つ張れるのであれば、他のノインツエーンの研究も引き出せるということになる。

そしてそれが可能であるならば、バルドルの価値は計り知れなくなるだろう。

だが、それが可能かどうかは実践してみなければわからない。

「ちなみにジルベルト君はあの中に何かがいると思うのかね」

「個人的には、久利原氏を吹き飛ばすより、永二氏が言うように、バルドルを吹き飛ばすことがお勧めなんですけどね。ノインツエーンがいるか、どうかはわかりませんが、人間あると使いたくなりますし」
権力闘争に巻き込まれたっぽいのだが、それに関しては全力で隠蔽してもらおう。

「つい、一年位前までは一般人だったんだがなあ……」

「安心したまえ、君は最初から異端だったんだ。それがわかりやすい位置に來ただけさ。まあ、それは置いておくとして、これを持っていきたまえ」

ノイ先生から手渡されたのはありふれたドッグタグだった。

「何ですかこれ？」

「ちよつとしたお守り代わりだ。ネットに持っていけるから身に付けておいてくれればいい」

「変なプログラムとか仕込んでないですよね？」

「気休め程度の保険だ。それを使うことは多分ないさ」

「では開始します」

『何か危険を感じたらすぐに戻ってきなさい』

「あるのを期待すればいいのか、ないことを期待すればいいのかはわかりませんが、大丈夫ですよ。どんな状況でも何とかしますから」

そして、西野亜季制作、橘聖良改良によるバルドルへのハックツールを使ってアクセスを開始する。

この辺はミッドスパイアの管理データ……こつちも違う。

どこからアクセスすればいいのか検討がつかない。

『どうかしら』

「何もないですね。ノインツェーンに癖とかありませんでしたか」

『反転（フリップ・フロップ）……逆アクセス。ジルベルトさん、逆からアクセスしてもらえないかしら。データとデータの継ぎ目にデータを忍ばせて、結論部分から繋ぐ』

「理論はよくわからないので簡単に指示してください」

「それは難しいわね、彼は実証してから埋めていくタイプだから。そうね結論に関して検索をかけてくれば多分出てくるわ」

大胆というか大雑把というか半ばあきれながら、アセンブラについての項目を確認していく。

「っ！ 見つけま……」

『ジルベルト君逃げたまえ!!』

ノイ先生の声が聞こえ、慌ててアクセスを解除しようとするが、数瞬早く何かに引っ張られる感覚が俺を襲う。

世界（ロジック）が歪み、そして俺の意識は閉ざされた。

「ジルベルト君、起きたまえジルベルト君」

聞きなれた声に反応して起きあがるとノイ先生がいた。

「……ノイ先生？ どうしてここに？ ここは？」

バルドルマシンが設置されていた構造体ではない。

まるで生きているように脈打つ空間。

正常な感覚の持ち主なら耐えられる気がしない。

「私の特質でな。意図的に電子体やシミュグラム、AIなどに混じることができるとだ。本当に保険のつもりだったのだが……どうやら用意しておいて正解だったな。まあ、私からも聞きたいのだが君はジルベル・ジルベルトでいいのかね」

「まあ、生まれてからはジルベル・ジルベルトのつもりですが」

「だが、今君は自分がどのような姿か認識していないようだが」

ノイ先生は身に着けていた手鏡を俺に渡す。

「……何で俺が」

黒髪に黒い瞳、そして左耳たぶのほくろ。

それは、かつての佐藤弘光の姿。

服装もあの日に死んだときのものだと思う。

「ええ、確かに先生の知っているジルベルトです。ですが、どうしてこの姿なのか」

前世の姿ですなんてこの場で説明するのは難しいというか未だに思考が混乱している。

「なぜなら、ここは真実がさらされる聖域だからだよ」

カツカツ、と音を立てて近づいてくる。

無意識に内ポケットの投げナイフを弄ろうとするが、あいにくこの姿にそんなものは装備されていない。

現れたのは、豪華な僧衣をまとったスラブ系の男。

「世界の迷い子にして、境界を超越するもの。神と等しく選ばれ、そおして孤独なる存在……」

一度見た資料で俺はあの男を知っている。

「世界は君を招き入れるために生贄を差し出し、そして君を地上に落とすとした」

男は続ける。それは神聖な儀式のようだった。

「作りだされた物でありながら、人を越え、AIを欺き、機械を翻弄する」

それは祝詞のような、あるいは神から預言者に伝えられた詔のようなものだ。

ドミニオンの教主グレゴリー神父は、俺を指差した。

「君だよ、AC20009―3101623」

「AC20009―3101623?」

「ああ、君ほどに聡明な存在でも、真実に気づかないとは何て残酷にして数奇」

「こいつは何を言っている?」

変な話だが、生まれ落ちてはじめて脳内で警告のアラームが鳴り続けている気がした。

「だが、故に神は君を欲している。ジルベル・ジルベルト、否その脳内チップAC20009―3101623に刻まれた存在」

「何が否定された。」

「俺を構成する何かが。」

「俺が脳内チップ?」

脳内チップとは、ネットにアクセスするための脳内に埋め込まれるバイオチップの……。

「そう、かつてジルベル・ジルベルトとして存在していた魂に注ぎ込まれた毒は瞬く間に肉体を支配し、君となった。脳内チップと電磁パルスによって人の意志を支配しようと試みたのとは全く違う、脳内チップに独自の自我が宿り、宿主を駆逐した。これを奇跡と言わず何というのかね」

「あ……ああ……!」

「落ち着きたまえジルベルト君!」

ノイ先生のスナップの効いた平手打ちが混乱した意識を元に戻す。

「神子、彼が成したことは真実であり、一人殺しても、仮に百万を超え人を殺しても罪に問われることがない。なぜなら」

『彼は上位世界の存在だからです』

「上位世界? パラレルワールドは量子力学的に仮定できたとしても、上位世界などどうやって説明するのだ。それならお前の言う神・ノインツェーンも上位世界の存在だと言うのか」

「あの方はこの世界を正しく導くために生み出された存在です神子。だが彼は零れ落ちたのです。異なる世界から墜ち、脳内チップに宿り、ジルベル・ジルベルトという存在に宿った。すべてはこの日の

ために」

「バカバカしい。お前を操っているクソ親父に言っておけ、慰謝料兼ねて遺産の受け渡しを要求すると」

「君もわが神の手を拒むのかねAC20009—3101623」

「……言いたいことはひとつだけ」

平穩に暮らしたいと思っていた。

ジルベール・ジルベルトの両親にとって自分は失敗作だった。

自分が異端だと思ったから納得して距離を置くのが幸せだと思っ
た。

それなりに不幸な人間はいるし、生きようと思えば何となるから世界を憎んだことはなかった。

だが、俺が電子チップの意志（バグ）だとして、そうでないジルベールは両親の期待にこたえられたのだろうか。

それでもSFの世界に迷い込んだ俺に手を差し伸べてくれたのは少女の姿をした自称医者だった。

俺はノイ先生に救われたのだ。

「生憎困っている知り合いの女性と初対面のおっさんのどちらかか
選べないなら迷わず前者を取る。これも野郎のサガだ」

「私には人の思考が理解できないが、いいだろう。君は神の慈悲深き
手を否定し、捨てられた神子の手を取った。よって神罰を与えよう
よう」

神父が消え、一体のシュミクラムが現れる。

そのシュミクラムはグリモアに似ているが、より攻撃なフォルムと
いうべきだろうか。

俺は急いでシュミクラムにシフトする。

どうやらそっちに関しては問題ないらしい。

仕掛けるかと思つたその時、向こうから通信が入る。

『ずっと中から貴様を見ていた』

思わず息を呑む。

「慕われ、褒められ、尊敬される。だが、それはジルベール・ジルベル
トであっても俺ではない！」

奇しくも同じ鞭を構えながら、幼子が泣き叫ぶように。

「お前を殺して、俺が、本当の」

そういうことはもうちよつと早く言っただけだと思ふ。

そう、具体的には俺が世界を認識する前辺りに。

「『ジルベルト』になる！」

「手遅れだ 『ジルベルト』」

この体の家主ことジルベール・ジルベルトと中の人改め、外の人佐藤弘光の生存競争がここに始まるうとしていた。

スーパージルベルトワールド7-2

俺が考える最強のメカとか子供じみた発想がある。

たとえば近接仕様のアサルトと砲撃仕様のバスターのパーツを組み合わせて作るV●アサルトバスター。

テレビ中では結局フルスペックを發揮できなかったが、大人になって冷静に考えるとあれも厨仕様だ。

まあ、後に機械というか、パイロットの方が厨仕様なガ●ダム作品も出て来たが、この世界はネットのロジックが適用されるとともにある程度干渉できるようなので、やろうと思えばできるはずなのだが。

「俺と一緒に育つたにしてはぬるいなあ」

それなりに独自性というか裏をかいてくるかと期待していたのだが、今のところ予想外の攻撃というのは来ていなかった。

地雷を設置する、ニードルガンを射撃する、鞭で叩く。

必要以上に近づいてこないの待ちゲームと化していた。

これは佐藤弘光のスタンスであって、どちらかというと言撃ポジションを意識した仕様。

一対一ではラチがあかないので、

「時間が推しているし、そろそろ動くか」

そうこれは陽動なのだ。

グリモアがジルベルトのシミュクラムに仕掛けはじめ、戦闘が始まると同時に『俺』はレーザー銃を構え、向こうで応戦しているアレに撃ち込んだ。

「相変わらず外道だな君は」

「いいじゃないですか、消耗せずに戦えるんですよ」

安全な場所から様子を眺めている呆れ顔のノイ先生に対して、俺はとてもいい顔をしているんだと思う。

「まあいいじゃないですか？ 先生の作ったグリモアが俺の窮地を救ってくれたということだ」

「確かに作ったのは私だが、シミュクラムをドローンにしてもう一つ用意する機能なんて搭載した覚えがないのだがな」

グリモアとは魔術書のこと。

俺がイメージした魔術とは召喚と使役であって、基本方針は丸投げ。

「バチエラはやっぱり天才だな」

実際にやったことがある人間でないと分からないが、オート操作だとしても、出し過ぎればメモリ不足でオーバーしてしまう。

リソースを減らしていたのか、処理速度を上げていたのかは窺い知ることができないが俺ではそんな器用なこととはできない。

きつちりジルベルトを拘束した俺は、脇腹に死なない程度に蹴りを入れる。

「グハアっ！」

挑戦的な目で俺を睨むジルベルトに俺は笑顔で語りかける。

「よう、出来損ない気分はどうだ」

「俺は出来損ないじゃない。俺はお前よりできる」

「できるかもしれないが、ジルベルト（おれ）を止めることはできないし、今更させる気もしない」

色々と努力した結果作りだした生活基盤だ。

曰く見ていただけの彼にはいい、そうですねかと譲り渡す訳にはいかない。

「何、世界は無数にあるんだ。別の世界では努力して住みやすく生きてくれ」

そして、ジルベルトの真下に穴を作りだし、沼に飲み込まれるように彼を飲み込んでいく。

「俺は、俺は」

完全に飲み込まれると穴は何もなかったかのように塞がれ、沈黙が訪れる。

「……何をしたのかね？」

「擬似的にESの海を創りだして放り込みました。運が良ければ違うジルベルトと一緒にされるはずです」

事前に橘社長から構築する理論だけ聞いておいて正解だった。

「私は、てつきり融合するかと思っただけだ」

「これ以上捻くれたら救われませんよ。さて、ここまで来たら一蓮托生ですし、改めて自己紹介を。ジルベル・ジルベルトこと佐藤弘光。西暦でいうと2000年代の人間で、死んだ後に佐藤弘光という前世を持つジルベル・ジルベルトとして認識してました。上位世界の存在かどうかはしりませんが、それなりにこの世界に関しては『知っています』」

正確にはこの世界の過去なのだが、別にそれは言う必要がない。

「つまり、今後は君をジルベルト君と呼ばばいいのか、それとも佐藤君と呼ばばいいのか」

「仲間内では佐藤でも構いませんが、公の場ではジルベルトをお願いします」

「私が知り合ったのは最初から君なので今更対応を変えても仕方あるまい。どうせなら、魔法使いとかだと面白かったのだが」

いつも思うのだが、俺はこの人に頭が上がらないというか、多分一生上がらない気がする。

「多分、根の世界に行けば魔法もありますよ」

世界という概念が宇宙の他の星と仮定していいのかは不明だが、探せば多分見つかるような気がする。

もつとも別に見つけたいとは思わなかったのだが。

「それでは私の方も語るとしようか。私は広義で言えばノインツエーンの娘だ。一時期アレは子どもを色々造ったんだが、結局成長しない私だけが残った」

それはニュースでも見た違法クローンの事だろう。

そして、造つては殺すをくり返したらしいので、人間の理解が追いつかず処分が決まったのだろう。彼女が保護されたのもその頃だ。

「まあ、あれがバルドルに不可逆的にデータを焼き付けて死んだ後は、保護施設に入り、学校に通って医者資格を得て現在に至る。成長しない体というのは命が助かった代償だと思っていたのだが多少欲が出た」

「つまり、成長するためのヒントがこの中にあると?」

「あると踏んでいる。それに学者としての私の専門は遺伝子関連にお

けるナノ分野の利用だ。アセンブラが使えるならそれができるはずさ」

てつきり、調理用ナノマシンとか、実際には見たことはありませんがエロエロ用のナノマシンが主だと思っていました。

「なら、俺も本気でやるとしましょう。どうせなら知り合いの為に努力するというスタンスの方がモチベーションも上がりますし」

この空間は相手の庭なのだが、同時にネットにラグなく干渉できる俺の特性も最大限に発揮できる。

人の心は何に由来するのか不明だが、そういうのは偉い学者が考えればいい。

それにこの秘密を知るのは俺とノイ先生だけだろうし。あるいは今ここを覗いている可能性がある向こうもそうかもしれないが。

「では行くとしよう」

side 橘聖良

「聖良さんはずいぶん冷静だな。あの坊主とノイが飲み込まれたんだぞ」

今二人の実体は事前に用意していたベッドに安置され、脳波をモニターされている。

永二さんはおそらく八重さんの時のことを思い出したのだろう。

「大丈夫よ、佐藤……ジルベルトさんだけならともかくノイがいるわ。それに私があの時と同じ過ちを許すはずがない」

佐藤さんに渡したプログラムはおそらくノインツェーンにも有効なはず。

二人ならその隙を突いて逃げ出す事が可能はず。

「大佐、佐藤なら大丈夫だ」

確かモホークといたろうか。

モホークとは古い言葉で『火打ち石』

「できすぎかしら」

つまり、ノインツェーンとバルドルに関わる人物が知らず知らずに集まっていた。

そう、始まりは全く縁のない佐藤さんだ。
できすぎている。

これは誰が描いたシナリオだろうか。

『神は賽を振らない。動かすのは常に人よ聖良』

「姉さ……」

そういえば、あれはノインツエーンの墓標であると共に、姉さんの墓でもあった。

もちろん、彼女の肉体は門倉家の墓地に眠っている。だが、電子体はここで死んだ。

「勲さんは、お嬢さんに真実を伝えたの」

「これが終わったら改めて伝えることにする。結局、彼がいて初めて我々は親子でいられたんだ」

ジルベール・ジルベルトが与えた影響は大きい。

「聖良さんと勲がそこまでいうなら心配はしないが、あの聖良さんが信用する理由を俺にもわかりやすく説明して欲しいんだが」

「ポーカールで勝負していたはずが、気がついたらブリツジで勝敗が決していた。認識的には境界が曖昧になる、そういう事ね」

「すまん、余計に分からなくなった」

「シユレーディングの猫とかの分野の話よ。ロジックに精通している存在に対する切り札だからきつと……」

問題なのは、彼が向こうに付く可能性だけど、多分ノイがいるからそれはないだろう。

向こうに付かれたらそれこそグングニールか何かでなぎ払わなければ対処のしようがなくなる。

もちろん、永二さんにも勲さんにも心の内を明かす訳にはいかない。

結局一番勝算の高い手段を用いたに過ぎないのだが、あるいは久利原直樹を拘束した方が良かったのだろうか。

いや、私もまたノインツエーンにとの因縁に決着を付けたかったのだ。

間違いなくあの中に師がいる。

コネクターが居なければ自由に動けないだろうが、あるいはそのルールさえも破ってしまいそうな彼との邂逅は我々に何をもたらすのか。

私たちができる事はすでに無く、結果だけを待つことができるのだった。

スーパー・ジルベルトワールド7―3

ここでグレゴリー神父について話そう。

情報兵器として『生まれた』ノインツエーンに一般常識―主に倫理的な分野―を教える為に派遣された彼は、人間としてノインツエーンを教化するはずが、逆にノインツエーンを進化、より天上に近づいた神の御遣いとして信仰することになる。

ノインツエーンが『自殺』する前に何かを伝えられたのかはしれないが、サイバークノーススを教義とするドミニオン教団を設立。

後はテロをしてGOATとのドンパチの果てに『集団自殺』とかいう話になるのだが……。

「つまり、この中で生きていたと考えてもいいのかな」

「そういうことになるな。まあこれを進化と呼んでいいのかは別だが、そうなる……」

「何か気になることも？」

「いや、終わった後に考えるとしよう」

ノイ先生が何を言いたかったのかは分からないが、現在の優先順位としては第一にここから脱出することだ。

「ちなみにノインツエーンとは交渉の余地があると思いますか？」

「私もだが人間はノインツエーンを理解できなかった。AIも彼を受け入れる事はなかった。人権は認められたが、自分をどう思っているという点については……アレが君くらい柔軟性を持っているとかぶっ飛んだ思考なら救いようもあつたのだが」

人間を素材として使い、機械の体に繋ぎ入れた存在は自らをどのような位置づけをしているか。

今更だが、ジルベル・ジルベルトのモードは思考である。

相手を分析してから行動に移る。

改めて情報を整理していくとノインツエーンは人間のひらめきと機械としての堅実さを兼ね備えた存在だった反面、人間としても機械としても中途半端だった。

例えるならノインツエーンは鳥にも獣にもなれない優秀すぎる蝙蝠

蝙蝠だった。

優秀すぎる蝙蝠は、自分が認められる世界を創ることを望むのだろうか。

「先生、ノインツエーンにも自我はあったんですよね？」

だから改めてノイ先生に確認すると、彼女は腕を組んで考え込んだ。

「あると認識した方が楽ではあるな。ただ我々と同じクオリアを持っているかという点と疑うところではあるのだが……ジルベルト君はなぜノインツエーンの遺した研究が中々進まない理由を知っているかね」

「確か、独自の言語体系で書いているからでしたっけ？」

「そうだ、とノイ先生は話を続ける。」

「もちろん、彼は我々の言語体系を理解したが、それは彼にとって美しくなかった。価値観が違うと言えばそこまでなのだが。理解できるのと理解したいのは別問題だからな」

プログラム言語でも好みがある。クライアントの要望でもない限りは自分が使えやすい言語で書くだろう。

これはプログラム言語の話だが、これを人間と当てはめようと思わした時に、ようやくノイ先生の危惧が理解できた。

「彼にとつて、人間はどう認識されているかが問題ですか」

「その通りだ。我々はお互いを人間と認識しているのは、クオリアと共通認識があるからだ。だが、ノインツエーンは我々と同じクオリアを持っているか分からない。犬は思考できるが、私たちは犬と対話できるかどうか」

それは人間としてのノインツエーンとしては異常だが、ノインツエーンにとつては正常なのだ。

逆に言うと、本質的に人間が理解できない生き物なのかもしれない。

幸いにして彼が新人類という可能性はないというか、彼の勢力は増えないのだ。

確かにシンパは存在し、それを増やすことはできても、それはノイ

ンツエーンと同じ存在になれる訳ではない。

「つけ込むならその辺か」

「ああ、ジルベルト君。その邪悪な顔で企むのは構わないのだが、そろそろお客さんだ」

荘厳なる教会音楽が流れる聖堂なら良かったのだが、おどろおどろしい空間と怪しげなおっさんの組み合わせでは救いようがない。

「己の片割れを殺してまで生きようとする人の性。すばらしい、すばらしいぞ！」

「全然躊躇しなかったがな。むしろ嬉々として追い出した気が」

「嫌だなあ、もう少し役に立つなら同居してもいいけど、あそこまでバカだと切り捨てたくなつた俺の身にもなつてくさいよ」

「だが、それは君が一つ上の階梯に登るための儀式」

「おお、別れを胸に秘めて少年は一つ大人になったのりか」

「今更青春的な話されても俺も先生もいい大人じゃないですか」

「そうは言っても、私の青春なんて灰色も良いところだぞ。監視が取れたのだからここ2、3年の話だしな」

ノイ先生の境遇もヘビーなんだが、どうも普段のギャップがありすぎて

「……話を進めていいかね。AC20009—3101623」

「ああ、すみません。正直進化とか世界征服とかには興味無いんで。というか、別に人類なんて一万年もあれば地球から物理的にいなくなるんだから別に今やる必要ないですよね」

「ほう……」

狂信者の好奇心を帯びたなまなざしが俺に突き刺さるが、敢えて無視した。

今必要なのは神父ではなくノインツエーンだからだ。

「俺は直接ノインツエーンとは関係ないし、人類の大半がそうだけどノインツエーンという存在は歴史の教科書に出てくるだけの存在だ。バルドルという性質上、こちらからアクションを起こさない限り何もできない。人類とノインツエーンは共存ではないが、棲み分けが可能だ。宇宙船を一台渡すから別天地を求めてもいい」

俺にはその権利はないが、オプションとしての譲歩は可能だ。

「進化した我々が、旧人類に慈悲を請うということか」

「死ぬことでしか高みに行けなかったあんたがいえるセリフじゃないだろ」

仮初めの永遠の中で生きる神父には悪いが、こちらも生きる権利がある。

「知識は死んだ後でも増え続けるけど、思考はそこから進まない。さて、道を空けてもらおうか」

正直、グレゴリー神父と話して得られるものは何も無い。

俺の認識では彼は既に死んだ存在だからだ。

「許されない、そんなことが許されるはずがない。『我々は』肉体を捨て高みに至ったのだ。未だに人の身に縋り付いているお前にそんなこと言われる所以がどこにある」

「ああ、やっぱりなあ」

「どういうことだ？」

ノイ先生は神父の豹変に驚いているのだが、俺には何となくわかった。

『電子体幽霊へネットワイヤードゴースト』は例外なく狂うんです。電子上のデータというのはあくまでネガですからね。ついでにいうと、アレは神父を核にした人達のなれの果てですから」

水坂憐という少女がいた。

彼女はとある実験で肉体は死亡したものの、電子体として存在していた。

彼女は知識は吸収できても、成長はしなかった。

エラーが蓄積されるが、歪なロジックで修復されるから彼女は存在し続けた。

世界を巻き込むほどの致命的なエラーが判明するまで。

さて、神父はどうだろうか。

神父は化け物ヘリヴァイアサンではなく、人間だった。

ほころびが生じたらそのデータを補わなければならない。

神父は同志を殺し、データを取り込んだ。

そして同志は神父になった。

人と人の境界をなくすことで自己を保存する。

「グレゴリー神父という個体を捨て、ドミニオンのグレゴリー神父という群体になった。ストックが続く限り存在し続けるけど答えが分かれば怖くない」

神父はある意味不死身であるが、それは残機が大量にあるだけ。

「さて、あなたは誰でしたっけ？ グレゴリー神父？ グレゴリー神父を定義するのは何？ 個としての定義、存在としての定義は？ あなたをあなたと証明してくれる『同志』はどこにいますか？」

「ぐあううううっ!!!」

声にならない声を上げたグレゴリー神父はシユミクラムにシフトし、俺もそれに合わせてシフトする。

「人は矛盾する。されど知恵あるいはひらめきで解決してきた。もはや知恵から切り離されたあんたじゃ矛盾に答えることはできないだろう」

佐藤弘光は孤独だったが、ジルベール・ジルベルトとしての今を気に入っている。

特別な力はそれを守るために使えばいい。

左手に鞭を、右手に銃を構える。

トラップ使いとしてはおそらくゲンハ並にたちが悪いはずだが、止まることはできない。

著作権とかそういうのを無視して俺は叫んだ。

「行くぞ神父、残機の貯蔵は十分か」

スーパービルベルワールド7-4

電子体と魂との因果関係を哲学者と宗教者と科学者が問うた時代に、一人の青年が神の存在証明をしようと思っていた。

洗礼名グレゴリー。東欧圏に生まれた彼は、目の前に広がる貧困に立ち向かうために努力する一つの若き神父に過ぎなかったのだが、転機は統合と反統合の戦争で捕らえられた兵器との出会いだった。

既存の信仰では救えない魂の救済への苦悩する青年は、魔神（マシン）と出会い、彼の見る風景の中では子羊は等しいことを知る。

この時から彼は本来の信仰に目覚め、ドミニオン教主グレゴリーとして活動を開始することになった。

統合政府はあるいは宗教界がもし彼を代表団に加えなければ歴史が変わっていたかもしれないが、残念ながら歴史にifはないし、あったとしても人間はそれを知ることとはできない。

既製品と違い、カスタマイズしたシミュグラムはどうしても自分のカラーが出る。

某体育会系インテリ革命家曰くシミュグラムは肉体の延長線上だそうだ。

まるつきり某機動武闘伝のノリなのだが、近接タイプはあながち間違ではない。

但し、真ちゃんやバチエラの運動神経は投げ捨てられているので、電腦強化型はビットなどを主体とする。

グレゴリー神父のシミュグラム「バプティゼイン」の特徴は重厚さにある。

かつてアレと戦った人達（桐島勲と門倉永二）に攻撃パターンを聞いたところ、接近と遠距離のバランスが整っていてしぶといのと。

「時に君は神を信じているのかね」

「証明できないが、現在進行形で存在はしてるが、もつとも救世主と破滅のイタチごっここのどの段階かは知らんけどな」

前提として知っているというかこれも破滅の影響なら人間ごときがどうにかレベルではない。

射出されたワイヤーマインを処理しながら俺はとにかく移動を続ける。

制御することにパラメーターを多く振っているグリモアは、元々一対一を想定した設定ではない。

サーヴァントという疑似シミュクリラムを行使することを前提としているので、装甲や耐久性は強くなり、正直距離を詰められたらおしまいなのだ。

そして、運が悪いことに相手は任意の場所からチェーンソーを出現させる特性を持っていた。

アレで止められた後に突っ込んできたら対抗手段がない。

だが、基本的に攻撃力の高くないグリモアの武装では一発逆転を狙うのは難しく、正直押され気味だが、そんなのは最初から予想していたこと。

「食らいつけ我が猟犬」

2体の犬型のウィルス兵器を作りだし命令を伝えると、電子の獣はワイヤーマインをかいくぐり神父の機体に牙を突きつけようとするが、神父は当然の如くチェンソーでなぎ払う。

だが、俺が待っていたのはその瞬間。

虚空から6発の弾がバプティゼインに襲いかかった。

「ぐはあっー」

迷彩化された7つのライフルビットから射出される6つの弾丸。最後の一発は特別なので今は使えない。

ネット上はネット上のロジックが当然存在する。それを法則ではなくイメージでねじ曲げたのが、歴史の表に出ることの無かった少女だ。

もちろん膨大な情報量という前提があったのだが、彼女がきっかけを作ったことで現在のネットがある以上、イメージ次第では何でもできることに大多数の人間は気づいていない。

「ああAIの侵略とかノインツエーンの陰謀ってこれのことか」

ジルベール・ジルベルトの皮を被った佐藤弘光は、それができるところを知っているし、今はその手段を理解している。

そして、ここはネット的にも閉じられた独立した空間。

処理の過程で発生していたノイズが感じられないのは、多分余分なものを捨て去ったからだろう。

限定されているなら何でもできる。

「神父に聞きたいのだが、設定された神と超越者ってどっちがやばいと思う？」

「設定された神？」

「実はこの世界、多元世界の一つで、根源世界のアヴァターの趨勢によってどれだけ文明が発展してもあっさり滅びるんだ。干渉できるのは救世主というプレイヤーだけだからさ」

「では我々が信じる神は偽りなのか」

それは彼がかつて信じていた神なのか、ノインツェーンなのか俺には理解できなかった。

「ネットに逃げ込んでも天秤が傾けば世界はリセットされる。そこに矮小な自我なんて意味を持たないし、ノインツェーンが現世に囚われている限りその掣肘から逃れられない」

まあ、リリーの出身世界よろしく、運が悪いと滅びるって感じで、実際には隕石が落ちるとか、地震が起きるとかそのレベルで終わるのだが、別にそれは今述べることはない。

「では、お前はどのようなだAC20009—3101623！」

「三次元が二次元に干渉できても、不可逆は無理だろう。それが答えだ」

雨は天から降り注いだとしてもその雨粒を天に打ち上げることができない。湖なり海の水が蒸発するプロセスを経る必要がある。

あるいはそこまで無意味に存在を継続したいわけではないが、数値化できない空間に自分を置けば災厄から逃れることは可能かもしれない。例えばロツカーの中に、あらゆる干渉を跳ねのける位相を作るわけだ。理論上はできるかもしれないが、それ意味あるの問題が常に付きまとうわけだ。

「では、全てが無駄だったのか。救われぬ運命の子はやはり救われな
いのか」

「少なくともお前によって救われた命があつたのだろう。ネットでし
か救済されない人間がいたとしても、現実に生きる人間は遙かに多い
のだから、そちらでがんばってくれば良かったのに」

結局、人間が救われる為には人間が努力するしかないのに、神に縋
るなんてと思つたが、多少の問題があつても平和な時代に生まれ、
元々宗教的に意識しない日本人と神の救済を信じるヨーロッパ圏の
人間じゃ期待するところが違うのだろう。

だからといって神父の犠牲になつた人達が納得できるわけじゃな
いし、種としての愚かさで滅びるならともかく個人の狂信に巻き込ま
れて滅ぼされたらたまつたもんじゃない。

「ケリをつけよう。輪廻があるのかは知らないが迷わずに死んでく
れ」

7 発の銃弾の内、6 発は不可視の魔弾、そして残る1 発は因果をね
じ曲げる魔弾『Der Freischutz』。

撃つた時には既に中つているそれは神父を構成する本質を打ち砕
く。

「ウガガガ……」

声にならない悲鳴を上げてバプティゼインは破壊され、そこには神
父だけが残つた。

「私には何が足りなかったのだろうか」

「踏み止まる勇氣だな。本当に戦わなければならぬ時はあるんだろ
うけど、同情も嘲笑もする気にはならないけどな」

グレゴリー神父は死ぬ。否、既に死んでいた彼が、今際に己を取り
戻したというべきだろうか。その理性的なまなざしは人を惹き付け
る何かを持っていた。

「私が言うべきではないが、救ってくれ」

それだけを言い残して神父は消滅した。

「救ってくれとは誰を指しているのだろう」

「知りませんよ。ただ、一番厄介だった神父が消えた以上、俺たちの仕

事はほぼ終わりです」

「今世紀最大のマッドサイエンティストを相手にその余裕は何か秘策があるのかね」

「正直、ここに来るまでは外から仕掛けてドツカンというのがベターだと思つてたんですけど、向こうが違う視点での自分を指摘してくれたおかげで、対策ができました。それより、ちよつと連絡しますか」

side 橘聖良

「あら？」

このネット全盛期の時代にただの文字だけを送ってくるのは彼くらいだ。

『届いてますか姉魂さん』

『届いているわよ佐藤さん。こつちに連絡できたということは概ね解決したと判断してもいいのかしら』

『自分たちが脱出する手段までは確保しましたよ。それでちよつと聞きたいんですけど、電子体幽霊化した人つてクローニングと電子チップの複製さえできれば元に戻るんですか？』

「理論的には不可能ではないわ。ただ、電子体幽霊になった被験者がいないのでぶつつけ本番になるけど」

一応準備はしていたが、結局あの時は無駄になつてしまった。

もつとも今となつては後悔が半分、安堵が半分なのだが。

『確か、クローニングは統合政府の許可が必要ですよ。まあ、その辺は技術交換とかで納得させましょう』

『それで結局神父はいたの？』

『もう、消滅させました。久利原直樹本人についての問題は解決できません。もつともアセンブラ問題はまた別ですけど』

あの不死身に等しい神父を消滅させたと彼は言つてのけた。

『どんな手段を使ったのかは聞かないわ。それで、誰の全身クローニングを申請すればいいのかしら』

その名前は意外なもの、いや彼らしいというかなんというか。

『分かったわ、成功したなら私の権限で、というよりあの人が無茶して

もやるわよ』

『では、こちら最善を尽くします』

通信が切れたのを確認し、私は賭けに勝ったことを確信する。

もし、彼が私たちと同じ時代に生まれていたら八重さんは死ななかつただろうと思う。

「悪夢が終わる」

「何かいったか聖良さん」

永二さんの問いに答えず私は独りごつ。

「今あの箱の中で世界を揺るがすパラダイムシフトが起きてるのでしようね」

一つの時代が終わり、始まろうとしているのかもしれない。

side out

「連絡は終わったかね」

「ええ、これでこっちの準備は終わりました」

神父を倒すという大前提が解決した以上、後はどのカードを切るかという問題になる。

「さてそろそろコンタクトを始めたいと思うのですが、ねえ……」

『ノインツェーン』

ノイ先生の姿をしたそれは悪意を浮かべて笑う。

「いつ気付いた」

「神父を倒した時です。気配というかパラメーターに変化があったので」

「なるほど、君もまた世界の見え方が違うのだな。ちなみに私から見れば君は白におぞましい知性体ではなく、黒い石版だな、そうモノリスとかいったか、もっとも私のクオリアによって見える姿に過ぎないのだが」

未知との遭遇か。

もっともこちらにしても未知との遭遇には変わらないのだが、その手の動かし方や表情はどこことなくノイ先生と似ている。

血のつながりは無くても親子だから似るのだろうかとどうでもよ

いことを考えるのだが、ノインツエーンは切り出してきた。

「君の提案を受けようではないか。別に私は邪魔だから滅ぼしたいの
であって、関わりなくていい状況になってしまえば問題ない」

1と0らしく、はつきりしている。

「では、そちらの必要とするものを言ってください。技術供与と引き
替えに渡します。俺に全権はありませんが、脅してでも取りますの
で」

今生で一番大切な人の命が握られているのだ。今までは世界の危
機だったが、今この段階をもって俺の問題に格上げされた。

しかし、これくらい物わかりがいいなら、別に問題なかったと思う
のだがやっぱりチャンネルの問題なのだろうか。

「それは、君が無意識に私に対して調整しているからだ。私はあれら
と話すときにはあれらの思考に合わせてコンタクトを取らなければ
ならないが、君との場合、私は私のことだけをすればいい」

典型的なそれしかできないタイプ、いや元々が情報兵器なのだから
それは甘んじるとして……。

「とりあえず、ノイ先生は無事なんでしょうね」

冷静に激高していた俺が最初に交渉したのは、当然の如く交渉相手
の娘の身柄の安全ならびに引き渡しというのが俺らしい。

「門倉八重は君たちの主観から考えるに性的魅力があつたとして、対
して我の被造物に拘る理由がいまいちわからないが」

彼は効率性を語り、俺は優先順位を語る。この価値観のすり合わせ
からスタートするのか。ああわかった、こんなことを繰り返したら
うんざりするが、これは確かに自分しかできないだろう。

すでに時間の流れが現実と切り離されているこの構造体内で、主観
的には長く、現実では短い交渉が始まろうとしていた。

スーパージルベルトワールドEND Neu

side 久利原直樹

今月に入って一段と強くなった悪魔の囁きがここ数日の間、聞こえなくなつた。

これは既に正気を保っているかどうか自信がない私にとって天啓だった。

「これを真君と甲君に」

データと鍵は別々にしておけば、それに二人の強さがあれば何とかなるはずだ。

その時、脳内に響き渡るアラームが私を襲う。

マインドハック！

私は立場上狙われることが多いため、防壁にも万全を期して展開している。

それをかいくぐつて来るとは相手はかなりの手練れ。

いつ朽ちるか分からぬ身ではあるが使命を果たすまでは倒れるわけにはいかない。

シミュグラムにシフトし、呼吸を整える。

備えよ常にと心掛けてはいるが、この緊張感は初めてシフトした頃から変わることがない。

だが、意外なことにシミュグラムの反応はなく、電子体がゆっくりと歩いてくるだけだ。

それは、かつて私の抱えている傷にメスを入れた赤毛の青年。

「たしかジルベルト君だったか」

「ええそうです。鳳翔学園2年ジルベール・ジルベルト。もつとも佐藤の方が存じ上げているかもしれません……ねえ御大将」

刹那、シミュグラムの強制解除。

いくら侵入者がいるとはいえ、ここは私の領域だ。

「ちよつと上書きするだけですから。おとなしくしててください」

一歩ずつ歩み寄ってくる彼に、私は恐怖を感じる。

セカンドにとってネット上で自由にできないとはどれだけ息苦し

いことなのかこの年になって思い知る。

「ちよつとだけ眠るだけです。起きたときには多分終わってますよ」

撃ち込まれた麻酔弾で意識がもうろうとした自分に囁くような彼の声を聞きながら私の意識は完全に落ちた。

「こちら佐藤、クランケを確保しましたオーバー」

『こちら火打ち石、もう一人の感染者を確保した』

『こちら姉魂、刈り取りは終了よ。まあ、こつちに関しては荒事ではないから大した手間では無かったけどご苦労様』

何か聞き覚えのあるように固有名詞が響く気がしたが問いかける時間は自分に与えられていない。

side out

ノイ〜Neu

久利原直樹氏が目覚めたのは1日後のことだ。

正確には処置が終わるまで電子体を凍結していたのだが、これで一応の解決を見たということになる。

「さて、どこからお話しましょうか。やはりアセンブラについてからですかね」

目が覚めた久利原氏は心なし顔色が良かった。

「それより確認なのだが、君が佐藤君なのかい」

「ええ、しがない文字チャット『暇人の憂鬱』の管理人の佐藤です。今回の侵入経路ですが、チャットの方からイーサーを経由して乗り込みました」

「なるほど、シンプルな手段だが有効だ。それで結局、君の正体は何者か。実は統合政府のエージェントだったとか」

陰謀説としては面白いが、残念ながら……まあ片棒担がされているのは事実ではあるが。

「いえ、星修で例の件について意見をするまではご存じの通りちよつ

と変わった学生でしたよ。それでバルドルに対するハッキングですが、政府見解としては無かったということになりました。アセンブラも久利原さんが独自に研究してここまでこぎ着けたということになります。追加資料渡しますので辻褄を合わせるようにして下さい」

「ちよつと待ってくれ、どういうことだ」

『『本人』の協力の下、ノインツエーンの自殺からドミニオン関連まで事実の洗い直しをしている最中です。これで責任を取るとなるかなりのお偉方の首を飛ばさなければならぬということになりました。お役所仕事としてはここに至っては秘密裏に無かったことにしてしまおうという結論に達しました」

バルドルに関して、破棄しなかった責任から始まり、グレゴリー神父とドミニオンに関する処理、バルドルハック事件など責任の方向が多岐に渡る。

玉虫色の判断が良いか悪いかの問題ではなく、追求し始めると收拾を付けるのに十年単位が必要なことと、そんなに時間があると良からぬことを企む輩が動き出し、その対処が必要となる。何より、その案件にいつまでも関与してられないので、世紀の大発見再び的な話で目を逸らすという結論で現在調整中である。

「つまり先日話していた臨時のアルバイトって……」

「久利原直樹がバルドルにハッキングした後起こりうる災害をどう抑制するか問題ですね、リアルの時間にして数時間、ネット上では二週間ほど、ノインツエーンと話す羽目になりましたよ。小さな子供が新しいことを覚えると聞いて聞いてと保護者に語り掛けるあれですね。すみませんこれオフレコでお願いします。当事者以外には橘社長……妹魂さんだけにしか

話していいので」

俺はその辺りは調整できたからだ話し相手することに疲れただけだが、もうやりたくない案件である。

「アセンブラの実験は成功させます。その後、将来的に火星への移住計画のナノテクノロジー部門の責任者として名目で宇宙ステーション勤務です。島流しとも言いますが、研究費と人材と資材に関しては

安泰ですよ」

元々、地上でこんな危険な実験をするのが問題だったわけで、密閉された宇宙空間ならバイオハザードが起きても宇宙ステーションごと吹き飛ばすだけで済む。これも高価と言えば高価なのだが、数百万の命と比較したら当然前者を切り捨てた方が早い。

今後の人口増加の試算や、予算の振り分け的にも宇宙開発というのは魅力だが、それに関しては既に俺の関わる領域ではない。俺は技術書の貸し出しまでは手伝うが、それ以降はまじ知らん。

俺がねじ込んだのは、外宇宙への探査機を一機送り込むということだ。

もつとも、何らかの『トラブル』でこちらとの交信が途絶えることはあるが、不幸な事故として諦めるしかない。成功するかどうかは別として、これだけは履行しなければならぬのだ。

「人間が欲があります。それ自体を罪と考える輩もいますが、利害関係さえ調整できれば人間は共存できます。怖いのはノインツエーンのように理解できない存在や、あなたのように何を目標しているか理解できない人間です」

「……君の欲は？」

「そうですね、発育不足で悩んでいる人を成長させたり、電子病で困っている妹分を助けたり、まあつまり自分の目の届く範囲での幸せの追求です。あなただって御大将じゃなければ口封じを進言してましたよ。知り合いに甘いといえませんが、人間らしくていいんじゃないですか」

そして、紙に記されたカルテを差し出す。

「ナノ汚染の被害は多少ありますが、何事も無ければあと短くてもあと30年は生きられます。もし、何だかんだいってあなたはこの分野の第一人者ですから、がんばってください。とりあえずは2週間後のデモンストレーションまでに体調を整えること。それと火打ち石氏から伝言です。『とりあえず一発殴る』と。殺さないようにと含めますけど、まあとりあえずは以上です」

久利原氏は何か言いたそうだが、俺は気にせず部屋を出る。臨時の

アルバイトはこれでおしまいである。

学生の本業は人間関係の構築を含む、様々な勉強であって、人助けではないのだ。

もう勉強しなくてもある程度取れる期末考査はともかく、出席日数はそれなりに考慮しなければならぬのだ。

12月22日

「おう、ジルベルト。しばらく顔を見せなかったが何してたんだ」

ラヴィータに入ると久しぶりに会うマスターを見て何故かほっとした。

「ちよつと荒事的なバイトが続いてね。一応期末考査も出なくちゃいけないし、やつぱり12月は師走だなと実感するよ」

「お前、師走なんて言葉よく知ってるな。まあいい、連れがお待ちだ」
いつもの席に向かうと、そこにはすらりとした長身の美人……になる予定のノイ先生だ。

「でも冷静に考えると、遺伝子弄った上でクローニングした方が早くないですか?」

「それは私も考えなかった訳ではないが、これでも20年以上慣れ親しんだ体だ。治療に効果が発揮しなかった場合は権限を行使することにするよ」

それにこの姿はこの姿で商店街でおまけしてもらえるのだとノイ先生は笑う。

今回のアルバイトの口止め料として俺とノイ先生はそれぞれ一つずつわがままを押し通す権利を与えられていた。

「しかし、残念だな。今の君では十全の力を発揮できないというのは」
「やろうと思えばできるんですけど、肉体と電子体をつなぎ止めていたものを捨ててしまいましたから、やり過ぎると本当に電脳症になっ
てしまいますからね」

ジルベール・ジルベルトとしての自我はどうも俺にとっての安全弁
だったらしく、それを放逐したからこそ、神懸かった処理能力を発揮

できたのだが、今まで無意識に遮断していた情報を今度は意識しなければならぬという問題が発生した。 電腦チップは結果的に特殊なもの、電腦特化されたデザイナーズチャイルドでもセカンドでもない身では、事象をねじ曲げるとかいう荒事はそれこそバルドルのように外界から隔離された領域では行えない。

それでも、ノインツエーンの置き土産を解析して売るだけで多分一生食いつぶぐれないということが確定している身としては、別にもう無茶したくないというのが心情だった。

「結局スーパージルベルトになり損ねたな君は」

「何ですかスーパーパーって、そんなキノコを食べたら巨大化するヒーローじゃあるまいし」

「差し詰めジルベルト君が本気を出せる領域をスーパージルベルトワールドとでもいうのだろうか」

ドアを開けるベルの音と共にレインと真ちゃんが鳳翔と星修の制服をそれぞれ纏い、こちらに向かってきた。

彼女たちと会うのも実に2週間ぶりくらいになるだろう。まあ、レインは勲さん経由で、真ちゃんは亜季さん経由で何となく知っているかもしれないが、別にその辺はおいおい確認すればいい。

「まあ、私たちは共犯で運命共同体だ。これからも頼むぞ」

夢か現か分からないけど、ここに存在するジルベール・ジルベルトこと佐藤弘光と、ノインツエーンの娘として作られたノイ先生は、幸せを得るために悪魔に契約書を差し出したエゴイストだ。

その秘密はお互いに墓まで持っていくつもりであるし、まあ、その、なんだ。

「早く年相応とまではいいませんがもう少し成長してもらえないと犯罪者扱いですからね」

「分かっているさ、君もこの瑞々しい肢体の内から味わっておけばいいものを物好きだなあ」

まあ、これからもそれなりに楽しい人生が続けばいいなと思うのだが……。

「ま、まだ、これから逆転します」

『佐藤さんもそろそろリア充爆発しろとか言ってもいいですか』

レインが腕を絡ませて来たり、ネットではsinさんこと毒舌妹的ポジションに落ち着いた真ちゃんからの心温まる提案を受けたりとまだまだ終わりは見えそうにない。

「ジルベルト君」

ノイ先生が背伸びして、首に腕を絡めて押しつけるように口づけした。

もちろん舌を入れて。

「手付けだ、浮気をするなら私も混ぜろ、以上」

久しぶりにこの店に来たけど、年が明けるまでは出入りできないなあど諦めムードで、何事もなく少しだけ明るい話題が飛び交うであらうクリスマスの予定を考えるとしよう。

END

世界0シリーズ こぼれ落ちる愛の雫

空は語り出した。

俺と自分が結ばれる世界を見つける為に気が遠くなるほどの長い時間を生き続けたことを。

「どうにかならないのかよ」

慟哭する俺に対して空はボソリと小さな声で言った。

「実はね、別に灰色のクリスマススを避けるパターンはいくつかあるのよ」

「え？」

希望がある、だが空の表情はあまり優れない。

「例えば、久利原先生がたまたま交通事故にあって死亡したり」

こいつ何かとんでも無いことを言いだした気がする。

「でも、そのパターンの分岐ではどうしてもまこちゃんとかくつついちやうのよね。何とかお父さんみたいだった人が突然死んでしまつて弱気になっているところを甲が親身になって、甲のお母さんも脳脳症だから、あの世界の甲も思うところがあつたんじやない。絶対離さない、俺が真ちゃんを守るんだつてね」

「……ちなみにその時の空はどうしたんだ」

「千夏と二人でやさぐれていたわ」

おそらくクリスマスパーティーで大暴れしているであろう美少女二人が脳裏に浮かぶ。

「私と甲が死なないという条件だけなら結構あるのよね。千夏と結ばれて自棄で私がクリスマスパーティーに参加していたり、たまたまレインと知り合つてそのまま仲良くなつたり」

記憶が流れてくる。

千夏に負けて奪われてそのままなし崩しでつきあい始めた世界。

クウのところにあまり行かないでたまたま知り合つたレインと仲良くなる世界。

何か桐島長官が「八重さんばかりか娘まで奪っていくのか門倉の男は！」と咆吼している気がする。

何だろこの重厚なシミュクラムと戦わされる俺の凶。

「凍結されたのがクウじゃなくてコウの世界もあったわ。その世界では甲と亜季先輩がラブラブ関係に。菜ノ葉が試験に落ちているときに深く慰めると幼なじみ効果か菜ノ葉と付き合うことになるのよね」「甲は弟のことを好きになるお姉ちゃんのこと嫌い？」とにじり寄ってくる亜季ねえが、慰めるために菜ノ葉とあんなことになっている俺がいる。でもファーストキスがニラの味なのは正直嫌だ。

「そうやって色々見ている内にむかついてきて、どうやったら私が灰色のクリスマスに甲とデートにこぎ着けることができるのかわからなくなってる」

空は慟哭するが正直俺が泣きたい。

「もう私が甲とクリスマスを過ごすための分岐を見失っちゃった」

「私、メインヒロインよね。今人気投票やったらクウより下なんてことないよね」

↓まあレインの人気は不動なんだが。

俺は空のことが好きだから良いじゃないか。

実はジルベルトが

何か脳裏で選択肢が浮かんでいるのだが、AIからの天啓じゃないよな。あと最後の選択は死んでもごめんだ。

「落ち着こう空、何か手があるはずだ」

正直やり直しができるなら、アレな性格の空をどうにかしたい。

くそ、これもノイツェーンに感染してしまった影響なのか。

「いくら設定をやり直しても私と甲の仲が進むと灰色のクリスマスが起きる。私って地雷キャラなの？ 周囲もろとも爆発させる疫病神なの」

泣いている空に対してかける言葉が見つからない。

そりゃ料理の腕はあれだし、勢いがつき始めると周囲が見えないし、暴走機関車みたいな性格だもんな。

学園時代は色々振り回されたよなあ。

ああ何か昔を考えていたら疲れた。

「聞いているの甲、ねえ甲ってば」

俺は考えることを放棄した。

げーむおーばー

リトライ？

分岐α1 降り止まない雨はなく、月はやがて優しく照らす

久利原先生が死んだ。

何度連絡を取っても応答がなかったので、心配になった同僚が警察の立ち会いの下部屋を開けると、毒薬入りの薬を持って倒れた先生を発見。

すぐに病院に連れて行っただが、すでに死んで2日は経過していたらしい。

現場に残っていたのはアセンブラの研究論文と後は頼むと書かれた遺書。

当局は研究に悩んだ末の自殺と断定。

以前に聞いたように先生には家族がいないので、同僚の人が喪主となって葬儀が行われた。

俺や雅にとつてはちよつと年の離れた兄のような存在で、気さくないい人だった、ともはや過去形にしなければならぬことに対する寂寥感は計り知れない。

葬儀には俺たちも参加しあの感情を表に出さない亜季ねえが号泣し、何故か親父と似た感じのするがたいのいい男が慰めていた。後で知った話だが、かつて如月寮にいた先輩らしい。

「真ちゃんは？」

空は憔悴して首を横にふる。

「あれからずっと寝込んだまま」

「……そうか」

久利原先生の死を聞いて真ちゃんは倒れた。

それから3日間、真ちゃんは部屋から出てこなかった。

俺にとつてその姿は何故か死んだ母さん呼び起こした。

俺は正義の味方になりたかった。だから俺は。

真ちゃんは亜季ねえのプライベート空間で膝を抱えてうづくまつ

ていた。

「探したよ」

真ちゃんは何も話さない。だけど思考が漏れてくる。

『私が悪いんです。久利原先生がどういう状態かわかっていたのに曖昧な態度を取って』

「それは真ちゃんの責任じゃないよ。久利原先生が焦っていたのは俺もわかる。確かに悲しいことだけど、俺たちは生きているから前に進まないよ」と

「……」

「なあ真ちゃん。俺の死んだ母さんが脳症だったという話を知っているよね」

真ちゃんは頷いた。

「母さんは日に日に弱っていくのに親父は戻ってこない。だけど母さんは親父のことを正義の味方って信じていた。結局母さんの死に間に合わなくてそれからぎくしゃくしてるんだけど、今度時間ができたら親父と話そうと思う」

『……何をですか？』

「親父のこと、母さんのこと。それから真ちゃんのこと」

『わ、私のこと？』

「ああ、お姉ちゃん思いのやさしい子だったこと。普段は喋らないけど本当はいっぱい話せるってこと。そして俺が守りたいってこと」

真ちゃんはきよんとして、その後顔が赤くなり、怒濤のように思考が流れていた。

『わ、私のこと守ってくれるって。それってもしかして私のことが。でも甲先輩にはお姉ちゃんや千夏先輩や、亜季先輩とかステキな人がいっぱいいて。なのはどうして私何ですか』

「千夏はケンカ友達で、亜季ねえはお姉さんだからな。空はちよつとわからないけど、でも今一番大事にしたいと思うのは真ちゃんだから」

『甲先輩は卑怯です。エッチだし、かわいい女の子を見るとすぐ目移りしちゃうし、ムツツリスケベだし、それからええとええと』

真ちゃんの思考がどんどん流れてくる。

そうか、真ちゃんにそう思われていたのか俺はと思うとちよつと凹む。

「まあ、結論から言うとな俺は真ちゃんが大好きなんだよ」

『私も好き、大好き、愛してます。だってありのままの「私を受け入れてくれる人だから」

真ちゃんは口を開きはつきりと言葉にする。それは初めて聞いた彼女の意志だった。

「私、ちよつとでも他の女の子を見たら嫉妬するような悪い子ですよ」それは年相応の女の子の姿だ。

確かに久利原先生の死は悲しいけどその代わりに真ちゃんの症状がよくならと思う自分がいた。

「俺も女の子と付き合ったことないから、その辺は二人で少しずつやっついていこう」

side 敗北者

12月24日 クリスマス

「ま、まさか真ちゃんに甲を取られるなんて」

私の悪友である渚千夏は黄昏れていた。

そう、私の妹である水無月真は門倉甲と付き合うことになった。

知ったのは今月になってから。夕食の際に宣言されたのだ。

久利原先生が亡くなって、それを慰めている内にそういう関係になつたらしい。

その後のことはすごかった。

おめでとうと祝福したものの、菜ノ葉ちゃんは一日閉じこもるし、亜季先輩はマインドハックが何とか言い始めるし、当然レインには私からそのことを伝えなければならなかった。

「お前真ちゃんの姉なのにどうして気づかなかつたんだよ」

「知らないわよ」

門倉甲。

最初はただのスケベ野郎とか人形好きとか思っていたけど、実際は

ちよつと違つていて、誰かの為に一生懸命になれるやつ。

私もちよつと良いかなと思つていた。

「自覚する前に終わつた恋だったのよね」

「私は、甲を取られるとしたら空だと思つていたよ。それとも甲つてその胸がないのが好きなタイプだったのか」

学生は本来飲酒は控えるべきだが、千夏はヤケ酒するように飲んでいる。

私も実はアルコール分が入っていたりする。

「それなら菜ノ葉の方が幼なじみだしアドバンテージあつたでしょ。理由なんて知らないわよ」

「それで、如月寮初のカップルはどこにいるんだ」

「甲のお父さんから貰つたホテルのディナーチケットでデートよ。おめかしして行つたわ」

今日は帰つてこないかもと言つていたが聞かなかつたことにしよう。

「うう、本当なら甲の初めては私のはずだったのに。やっぱり小さいのがいいのかあ!」

「ああ、もう今日は飲むわよ。こんな日に女二人でやってられるか!」
その後のことはよく覚えていない。

起きたときにはいかがわしいホテルらしきところで、下着姿で寝ていて、隣に渚千夏が同じような姿でいたけど気にしてはいけない。

世界0

「見なかつたことにしよう」

私はその世界の行く末を放棄した。

どうせ久利原先生がいない世界だから滅びるにしても近い未来ではないだろう。

「姉としての自分はうれしいけど、女としての自分は負けた感じかなあ」

そうして私は違う分岐を探し始める。

目指せ私と甲が結ばれてクリスマスで良い展開になる分岐。

プラグイン「百合の証」が追加されました。

分岐2 ニラにはニラを

菜ノ葉です

今までのチームバルドヘッド作品では金髪がアレだったけど、今回は金髪キャラがぶつちぎりの人気なので最下位っぽいです。

菜ノ葉です。

公式的に髪の毛が緑なのはニラの食べ過ぎだとか言われてるとです。

菜ノ葉です。

とうとうシユミクラムの正式名称がニランナー呼ばわりされて泣きそうです。

菜ノ葉です、菜ノ葉です。

世界0

「というわけで空先輩には私の強化計画を考えて欲しいんだけど」

「あのね菜ノ葉。これでも私には世界の命運をどうにかするとういう大切な役目があるんだけど」

菜ノ葉は単独で空のいる島に来た。

「でも、先輩って暇っぽいですよ。たまになんかにやけてますし。端から見てたらちよっと不気味なんですけど」

観測の結果に一喜一憂姿はどう見ても不気味だ。

「あんだ私にケンカ売ってるの・・・まあいいわ。それで菜ノ葉の強化というとやっぱりニラかしら」

菜ノ葉といえば、ニラと幼なじみ属性。

幼なじみ属性はもう極まった感があるので、残りはニラしかと失礼なことを空は考えていた。

「先輩、確かに私はニラが好きですけど違いますよ。強化したいのはシユミクラムの方です」

「シユミクラムねえ、それって私より亜季先輩の専門分野だと思うんだけど」

日常生活ではあれだが彼女達の先輩である亜季は特級ウィザードの天才。甲たちのシミュクラムであるカゲロウも亜季の作品である。

「菜ノ葉もカゲロウをインストールすればよかったのに」

「はつきり言って適正がないと言われました。私に動かせるとしたらあれぐらいだろうって」

確かに彼女はセカンドにもかかわらずその辺がダメだった。

常にネットに繋がっているからといって全員が全員そっちの方向に適正があるわけではない。

「となるとやっぱリアルかな」

「何か方法があるんですか？」

「うん、旧世紀の研究で、特定のパルスを流し込むことで能力の向上を目指すというやつ。まあ洗脳に近いんだけどね」

記録されていた画像を渡すと何かプルプル震え出した。

「い、嫌ですよ。そんなの」

「そう？ エロエロな菜ノ葉って需要があるかもしれないわよ。何か欲求不満だし」

「それなら先輩がやれば良いじゃないですか。クウちゃんをたくさん使ったプレイとか」

「私は主役というかメインヒロイン何だからそんなことする必要は無いでしょ」

「巷ではヒロインってレインさんで、空先輩は主人公疑惑が浮上しているんですけど。何か空白の期間に実は肉体関係を結んだとか」

「私は甲一筋よ」

「私だってそうです」

「やめましょう。何か不毛な争いになってきたから」

「そうですね」

「つまり、菜ノ葉ちゃんにも必殺技が必要という方向性でいいかしら」

「そうですね」

「じゃあ、こんなのと、あれと、あの要素を」

空は適当にパラメーターを弄ってその情報を別の世界に送りはじ

めた。

世界2

アセンブラの起動は目前で絶望に苛まれる俺たちを前に菜ノ葉宛にメールが送られてきた。

「・・・何これ?」

「どうした菜ノ葉」

「う、うんよく分からないんだけど、私からメールが?」

自分からメールってそんな旧世紀のスパムメールじゃあるまいし。

「なんて書いてあるんだ」

「モニターよろしくって」

「はあ?」

データはシミュクラムの武装とアセンブラの制御プログラム。

「制御プログラム!?!」

「菜ノ葉、そのデータを亜季ねえに転送」

「うん」

「これどうやって?」

受け取った亜季ねえが驚いている。

あの特級ワイザードの亜季ねえが驚くプログラムって。

「これなら、短い時間で何とかなる」

そして俺たちは電子体になってダイブする。

「奥で待ってる菜ノ葉。必ず守ってやるからな」

「私も戦う」

「ダメだ。お前に万が一のことがあったら」

「守られているだけじゃダメ。私だっががんばれるんだから」

↓わかった

無理だ

「わかった。でも無茶するんじゃないぞ」

「うん」

菜ノ葉の機体は普通のアイランナーを改造したものだ。

「いづくよー」

ケイジブレードっぽいニラが敵を貫き（※1）

分裂したニランナーがアイランナーMのように集団で敵機体にとりついて爆発（※2）

そして

「な、何で、菜ノ葉がこんなに強いんだよ」

千夏が巨大化したニランナーに押しつぶされていた。（※3）

それは俺も知りたい。

この後久利原先生が登場して、アセンブラがどうのとか言ってるけど、その時にはアセンブラの書き換えが終わっていた。

何か最後のあがきで菜ノ葉に襲いかかろうとしたけど、シユミクラムから大量のニラが生えて消滅した。（※4）

その後は、完璧に制御されたアセンブラで周辺を一気に浄化。

俺たちは復興事業に協力するわけだけど。

「何か腑に落ちないよな」

「どうしたの甲？」

「いや結局、あのメールっていったいどこから来たものなんだろう」

「神様からのメッセージだったり」

「ドミニオンの神父じゃあるまいし、そういうのは余り信じたくないけどなあ」

「何だって良いんじゃない。今私すごく幸せだから」

まあ、それも良いかなと思った。

問題は色々ある。でも菜ノ葉と一緒に乗り越えられる気がした。

世界0

「・・・菜ノ葉は今のままでいいと思う」

分裂とか増殖とかとの相性が良すぎるのか、敵を圧倒的に蹂躪する菜ノ葉は、はつきり言ってバランスブレイカーだと空は思った。

「そうですね、残念だけど私は私のやり方でがんばります」

ありがとうございますございましたと礼を言って消える菜ノ葉。

「本格的に訓練させたら一番強いのかも」

とりあえず無為な時間を削れたのが良かったのか空は再び世界の観測に入る。

「全エージェントへ、ニランナー強化プログラムは危険なので以後凍結」

ニランナー強化計画（廃案）

分岐5 貧乳萌えというか貧乳にコンプレックス
持っている人に萌える方向きの何か

それは水無月空とノインツェーンによる世界の刈り取り場。
勝ったり負けたりをくり返しているが決定的な勝利はない。

そしてその合間に水無月空は色々と相談を受けることが多い。

そう、今回も水無月相談員は相談を受けるのだ。

「私の胸を大きくしてください」

「まこちゃん、人間でできることとできないことがあるの。諦めて」

思いつめた表情の妹から出た突拍子もない発言に、御夕飯があるからお菓子は食べたらだめと諭すように姉は優しく諭すことにした。

「どうしてですか、ベースがスタイル抜群の甲さんのお母さんで、亜季先輩はもちろん、お姉ちゃんだって十分大きいんだから私だって大きな遺伝子はあると思うんです」

「そう言われても、いいと思うわよ。胸が小さいとデザインも選べるし」

何のデザインかは言わないのが花である。

「これもノインツェーンの陰謀ですね」

「じゃあ、覗いてみる？ ああ、モニター作るからそつちで見えてね」

呆れて物も言えない空は、ある意味仮想空間の支配者よろしく虚空にモニターを作り出した。

3、2、1と古き良き時代のムービーよろしくカウントされ、そしてタイトルが現れる。

『水無月真における微成長記録』

「な、何ですかこの悪意あるタイトルは？」

「ああ、別に私がやったわけではなくてエージェントが担当世界の門倉甲の深層心理を読み込んで適当なタイトルを付けただけだから」

「それはそれで酷いじゃないですか」

「それはごつちにいる甲に文句を言えば？ 大本は同一人物だし。ああ始まるわよ」

後でブチギレた妹が甲を壁に追い込んだ上で胸倉を掴みながら、10分近くも泣きつつ問い詰めるのかなと思いつながら映像を続ける。

便宜的世界5とラベルが貼られたこの世界。

平和かどうかは別として、自分たちの周りは少しだけ穏やかになって、久しぶりに従姉妹である亜季の元を最愛の人と訪れた帰りのこと。

甲は恋人である水無月真が不機嫌な顔をしていることに気がついた。

何か気にくわないことでも言ったのかなとさりげない話を振ってみるが何も話さない。

困り果てた甲の横でかわいらしい口から出た言葉は彼の予想外だった。

「甲さん、この間亜季先輩の胸元を見てニヤニヤしてた」

「そ、そんなことないよ」

その発言に冷や汗が流れるがなるべく正常な口調で否定した。

確かに、リアルでも少しずつ頑張るようになって栄養と適度な運動（といっても普通に行動しているだけとも言いが）をした従姉妹の一部分はさらなる発展を遂げていた。

具体的に言うと同より揺れる。

疲れたからおんぶを要求され、仕方ないから背負ったのだが、何とか格別だった。

そういえば急いでいたから付けてなかったとか。

何をとは言わない方が幸せである。

「私の胸が小さいから、いつか私を捨てて亜季先輩の胸に行くんだ」

「俺は真ちゃんの手にフィットする感じの胸も好きなんだ」

「大きいのと小さいのとどっちがいいんですか」

「いや、大きいのも小さいのも人それぞれだから」

「私は甲さんの好みを聞いているんです」

ジリジリとにじり寄る恋人に甲はたじたじで、でも脳裏には学園時代の空の面影を感じることができる。

ああやつぱり空の妹なんだなあと変な納得をしつつ打開策を考えていた。

「俺は小真ちゃんの胸が好きなんだー!」

「甲さん」

「真ちゃん」

勢いよく力一杯抱きしめて、これで機嫌が治ってくれたかなと思っただのもつかの間。

「じゃあ、亜季先輩の前で大きな胸は嫌いなんだって言ってくれますよね」

小悪魔は突然理解不能なことを宣った。

「え?」

「甲さんは私の胸さえあればいい。そうみんなの前で言ってくれますよね。そしてピーして、ピーしてするのは私の胸だけだって言ってくれますよね」

「あの真ちゃん?」

「あの無駄に大きな脂肪の塊をもみしだいて、ペシヤンコにして塩をぬりぬりして腫れ上がれさせて使い物にならないスクラップにしてやりたい……!」

「落ち着くんだ真ちゃん」

「この世界はまやかして、本当の私の胸はお姉ちゃんに負けないくらい大きなはずなんです」

「この世界が現実なんだよ」

甲は決意した。

この世界の平穏を守るために夜な夜な頑張つて愛する人の胸を大きくしよう。

巨乳弾圧の宗教団体なんて作られたらたまったもんじゃないし、ナノマシンで胸を大きくするとかやりかねない。

料理が上手で、仕入れた知識が豊富なのか床も上手な彼女だが、この胸のことになると恐ろしかった。

巨乳の為にアセンブラを利用された日には、自分たちの師も草場の陰で泣いてしまうだろう。

甲は子どもができれば胸が大きくなると頑張ったが無理だったと
きにノインツエーン陰謀説を立ち上げるのは別の話。

世界0

「ねえ、まこちゃん」

「……何でしょうお姉ちゃん」

「私だって思うのよ。自分の料理の才能のなさは、デザインした段階
でもで努力じゃどうにもならないと」

「も、もしかして料理したんですか」

「料理で部隊が作戦行動不能になってからもう諦めたわ。合成食材で
も貴重だもんね」

さらに仮想の食材調理で戦闘不能にできるなら兵器転用した方が
いいんじゃないでしょうか、と生き残りの部下であるRさんは証言す
る。

「で、でもそれと私の胸は関係ないじゃないですか」

甘いわねと前置きをして、姉は告げる。

「私の料理ですらこれなんだから、肉体的な部分なんてものそれじゃ
ない?。」

「じゃ、じゃあエージエントの力で私が生まれる前から干渉を」

「私ができるのは灰色のクリスマス以降よ。そんなことできるなら前
段階でノインツエーンを倒しているわ」

「お姉ちゃんってあんまり役に立たないんですね」

「久しぶりに会った姉に対する返事がそれ? まこちゃん私にケンカ
売ってるの?。」

なにげにこの姉妹は沸点が低かった。

そこからやれ天災料理やら腹黒とか低レベルな口げんかが続くが
割愛。

「そういえば私達ってケンカらしいケンカしたことなかったわよね」

「私もお姉ちゃんも遠慮してましたからね」

一瞬の沈黙の後、姉妹は声を上げて笑い出す。

「今日はもう帰ります。また来ますね」

「うん、待ってる」

ここはサイバースペースの終末。

全時空の未来が定まる所。

そこで懸命に生きる少女の他愛の無い物語がまた一ページ。

分岐1 MASA

平穏と正義を天秤にかけるとき、9割の人間が平穏を選んだとしても納得するだろう。残り1割はバカか英雄なのだ。

灰色のクリスマスで人生を狂わされた人間は何人もいるが、俺の生活基盤そのものは狂わなかった。幸いなことに両親は無事だった。

狂ったのは人間関係だ。事件の後、亜季先輩とは比較的早くに連絡が取れたが、他のみんなとは連絡が取れなかった。避難所での生活は苦しくないと言えは嘘になるが後に妻となる少女を守らなければという使命感が何となく自分を支えていた。それに仲間達と再会できると信じていたからだ。

避難所生活をはじめで一週間、甲と再会した。甲はえらい美人さんを連れていたのだが、あの日デートしていた空がいない。

その時の俺は再会できたうれしさから「トイレにでも行ってるのか」とする口で話すが、ボツリと「死んだよ」と答えた甲の暗い声を聞いて後悔した。

「冗談だろ相棒。あの空がそう簡単にくたばっちゃまうわけないじゃないか」

「アセンブラが暴走して……空がと」

「分かった、もういい、これ以上は言うな！」

おそらく、リアルタイムである瞬間をみてしまったのだろう。

「雅……俺……空のこと守れなかった。母さんに間に合わなかった親父と一緒にだ」

泣き崩れる相棒の姿に、俺はただ時間が過ぎるのを待った。

「俺は真実を知りたい」

落ち着いた甲が吐露した言葉。

空は確かにいい子だった。だけど彼女の復讐のために自分の人生を犠牲にするつもりはない。

「そうか、俺たちは親友で何となく同じ道を行くのかなと思ってたけど別れるみたいだ」

甲は自分のせいで空が死んだと思っている。いや思いたがっている。親友として止めるやるのが友情なのだろうか。菜ノ葉ちゃんも亜希先輩も千夏も真ちゃんもどこにいいのか、いや生きていくのかすらわからない。身近な人物をこれ以上失いたくないと思う反面、男として貫かなければならない部分があるのも理解している。

「それであの子はどうするんだ」

さっきの美人さんは、俺の連れと色々話しているようだ。

「レインは置いていく。父親を探して何とか」

「そうか。でもお前も親父さんに連絡を取るべきだ」

「親父とは……その」

「もちろんそんなことは知ってる。俺たちは確かに学生としてはそれなりの腕前だ。先生に戦い方は仕込んでもらったからそこいらのチンピラ程度に負けるつもりはない。だけど生き残り方を知っているわけじゃない」

「……生き残り方」

「目的を果たすまで死ぬことは許されないし、差し違えて死ぬとか空が許すわけ無いだろ。だから生き残るための技術をどこかで学べ。親父さんのところが嫌なら信頼できるところを紹介してもらえ」

門倉甲の才能は群を抜いている。多分何もしなくてもある程度はいけると思うけど、今のままなら多分途中で終わる。だからこそそのアドバイス。

「これからの時代、どうなるかわからないが、俺は俺のできる精一杯を試してみせるさ。まあ、たまには飲みに行こうぜ」

「あなた、起きて下さい」

結婚して2年目となる妻に起こされて、学生だった須藤雅から都市自警軍（CDI）の刑事である須藤雅に意識を切り替える。

「ちよっと懐かしい夢を見た。あの日、甲に会った夢を」

「……そう、門倉さんと会ったのもあの日が最後ですものね。私たちの結婚式にお呼びしたかったけど」

妻の家族は行方不明だったので、紆余曲折あつて一つ屋根の下で暮

らしはじめ2年前に籍を入れた。あの日のことを思い出すことは辛いのだが、トラウマがフラッシュバックするようなことはない。おそらく現在が慌ただしくて過去に囚われる余裕がないのも原因かもしれない。

「死んでなければいつか会えるさ。料理のうまい嫁さんを自慢してやる」

「あらあら、じゃあ腕に縊りをかけて作らないとね」

ミッドスパイアは人工的な都市であり、ここから外に出れば数年前では考えられない現実が広がっている。それでも俺は作られた日常を大切にしたいと思った。

妻と軽い口づけを交わして、仕事場に向かうと、今年入ってきた新入りが挨拶をしてきた。

「須藤先輩おはようございます」

「おはよう、今日は一番区の見回りだ。危険は無いと思うが油断しないように」

「はいー」

昔、戦争を知らないこともたちという歌があったそうだが、こいつらより少し下の世代は平穏を知らないこともたちということになる。そして簡単に先生に伸される立場だった俺が、今では人に教える立場になるとは時間が経つのも早いものだ。

「雅の旦那、元気ですかい」

巡回中に知り合いの情報屋であるジョニーと出会った。警察に入ってから知り合いだが、警察では教えてもらえないような情報の掘き方を学ぶという貴重な体験をさせてもらった男だ。

「仕事が多くて嫁さんの相手もできないくらい忙しいな。一帯の元締めが変わってからやりにくいつたらありやしない」

代替わりしたボスと癒着しない程度のコネクションを作る作業を思うと気が重くなるが、ジョニーは薄くなった頭を叩きながら大丈夫だと言った。

「高尚な使命感を持つ人間は俺らのことをわかってくれないが旦那は

掃きだめを理解してますからね。新しい元締めもその内、旦那となれ合った方が楽だとわかりますぜ。あんたに助けられた奴らだって結構いやすしね」

「そう思ってくれるなら嬉しいがね、そういえば何か用事があったんじゃないのか」

「確か、旦那はアセンブラ狂いの門倉と知り合いでしたよね。今こっちに来ていますが、ドンパチがおこりそうなのかと知りたくてね。こっちも戦場に踏ん張る趣味は無いんで」

「甲……門倉が？ 知らないが、何かわかったら教えてやるよ」
「助かりますぜ」

ジョニーと別れた後、新入りは怪訝そうな表情で俺を訝しむ。

「田中、俺は正義より安定を守ることを選んだ男だ。もし不満なら担当を代えてもらう」

「……雅先輩は、ああいう輩が安定に繋がると」

「警察機構は基本的に情報に於いて後手に回る。だから情報屋で補う。しかし俺たちの情報は流さないように注意しなければならない」

世間話の中でも注目すべき情報は結構あるということを俺は先輩から学んだ。もう一人いた同僚はそういうやり方が合わなかったらしく、別の担当に付いたのだが、情報が足りなくて殉職した。

「俺たちは乏しい予算の中で市民の安全を守らなければならない。悪となれ合っても、悪に染まらないようになれ。そうすれば長生きできるし、CDIの人間が一人少なくなれば統治能力を落ちることを意識しろ」

一番大切なものを守るために妥協することは人間が社会で生きる上で大切なことなのだ。もし一切妥協せずに物事を達成できる者がいるならそれはおそらく人間ではなく英雄と呼ばれる存在なのだろう。俺は切り捨てることができないう大切なものを手に入れてしまった。だから妥協して生きていく。

「さて、あいつは何のために戻ってきたのやら」

願わくは守るために俺たちが争うようなことはないようにしたいものだ。

分岐6 ノインツエーンは静かに暮らしたい

ノインツエーンは考える。

己の存在理由とは何かと。

自分の存在は現実にはすでになく、その魂のみバルドルという箱の中にいる。

精緻な1と0の世界。

完全なる調和によってもたらされた世界だ。

そのような存在になってからは私は時間の感覚がよく分からない。元々その辺に執着するような人格ではなかったのだが、私はこの中で静かに理想とする社会が生まれればいいと思っていた。

ノインツエーンは考える。

時折、私とコンタクトを取ろうとする存在が現れる。

私の持っている知識を欲しているのだ。

愚かな話だ。

確か旧世紀の神話に知識を得る為に目を差し出した神がいた。

彼らは何を代償に知識を欲しているのだろうか。

私という存在は既存の概念の延長線上に存在はするだろうが、人間がそれを理解できるとは思えない。

私の弟子の幾人かはその技術を盗んでいった。

私の理論を聞いて、理解して、自分流にアレンジしたと言っても良いだろう。

だが、私に直接触れるなどという愚行は毒を飲むようなものだ。

私という存在に飲み込まれ、変質し私の望む世界になるように動く。

別に私がそれを望む訳ではないが、禁断の果実を手に入れて時間を進めるのなら、滅びもまた早めなければならぬという自然の摂理だ。

ノインツエーンは考える。

八重という個体について。

彼女との出会いは衝撃的だった。

限定的とはいえ、彼女とは意志を共有できる。

それは「喜び」だった。

だが、いやだからこそ彼女にとってそれは境界を曖昧にする物なのだろう。

門倉永二という個体が彼女との間に子どもをなした。

私も子を持つということに興味を覚える。

不確定な存在を作りたいという「欲求」を当時の私は考えていた。

私を理解できる存在が増えれば私の足りない何かを埋められるのではないだろうか。「期待」したのだ。

そうして色々試した。

今考えれば若気の至りとも言うのだろうか。

世間では狂気の沙汰と言われているが。

ノインツエーンは考える。

空という個体について。

彼女は私の若気の至りの技術に基づかれて作られた存在だ。

別の個体である真は相性が良すぎて面白くない。

故に私はこの個体を気に入っている。

私は今この個体と繋がっている。

へその緒で母体と繋がっているような状態だろうか。

彼女の持っている感情が流れてくる。

喜び、怒り、悲しみ、不安、嫉妬、狂気……エトセトラ

私という存在が確立する以前に捨てたもの、それを学んだ時、私は完全な存在になれるのだろうか。

ノインツエーンは静かに暮らしたい

END

分岐7　そして神はニラとなる

「どうとう来てしまったんだね甲」

門倉甲は様々な困難を乗り越え、今ここに来ていた。
全ては世界を救うために。

「菜ノ葉？」

「そう、甲の幼なじみで嫁にしたいヒロインNo. 1の若草菜ノ葉だよ」

「お前は確か緑色のクリスマスで死んだはずだ」

「うん、確かに若草菜ノ葉としての人生は終わったけど、アセンブラによって生まれたニラと意識が融合して種を拡散。市場に出回ったニラを食べた人同士でネットワークを形成してこのアリウムの中でずっとあなたを待ってたんだよ」

アリウムって何だよというツツコミをする気力は既に無い。

「聞いてくれ菜ノ葉、お前がここを管理しているならニラの暴走を止めてくれ！」

「どうして？　ニラはベータ・カロチンやビタミンA、ビタミンC、ミネラルが豊富で、昔から胃腸に効く野菜として親しまれている食材で、ニラの煮汁は文明が発展する前までは奇跡の霊薬として信じられていたんだよ」

「だからって……これ以上ニラ中毒患者を作らせる訳にはいかない！」

今や世界はニラ中毒による荒廃が進んでいた。

仮想にいる時間を増やすことでどうにか保っている状態である。

「ねえ、甲。どうして私が甲にニラ料理を作ってたかわかる？」

「いや……お前がニラ好きだからだろ」

「違うよ、ニラの葉は、萘白（きゆうはく）という生薬で強精、強壯作用があるから、お母さんがお父さんをと結婚するときに餃子で誘って押し倒して私ができたんだ」

菜ノ葉の母は自分のことを実の子のようにかわいがってくれていたが、そんな一面があると思うと血の気が引くような気分だった。

「だからね、私と甲の赤ちゃんもそうならいいなって。うん、ニラを食べて愛し合つて、子どもが産まれる。これほど幸せなことつてないよね」

「……違う」

それは明確な拒絶。

「俺の知っている菜ノ葉は誰かのために一生懸命に頑張つて」

「うん、あなたの知っている菜ノ葉はあなたに好かれたかったからそういう女の子を演じたの。知ってる？ 女は大好きな人の前では一流の女優さんなんだよ」

信じたものが崩れ落ちた甲の元に菜ノ葉はゆっくりと一歩、また一歩と歩み寄る。

「甲もニラを食べて、私も食べれば幸せな気持ちになれると思うんだ」
着ていた服を脱ぎ華奢ながらも女性らしいフォルムの裸体が甲を抱きしめようとした。

「そこまでだー！」

「あなたは緑色のクリスマス以来行方不明だった久利原先生！」

「久利原直樹はあの日に死んだんだよ甲君。今の私は草刈りの風ウインドとでも呼んでくれたまえ」

「久利原先生、どうしてこの空間に入って来れたの。ここは私と甲だけのプライベート空間のはずなのに」

「菜ノ葉くん、君は覚えていないんだね」

ほわんほわんにわにらー

回想

「久利原先生」

「どうしたんだい菜ノ葉君」

久利原直樹がアセンブラの開発に対して充実を覚えていた頃の話。

恩師でもある若草夫妻の一つ種である菜ノ葉に対して年の離れた妹のようにかわいがっていた。

「もうすぐアセンブラが発表されるんですね」

「そうだ、君のご両親の夢でもあったものを私が発表できるのはうれしい限りだが、君のご両親は」

「はい、あの事故で命は取り留めましたが」

反A I派によるテロ事件で命を狙われた若草夫妻は奇跡的に命を取り留めたものの、未だ目覚める気配はない。

「そうか、私にできる事があれば何か言ってくれたまえ」

「じゃあ、お願いではないんですけど、これを預かってもらえませんか」

手渡されたのは緑色の一本のペーパーナイフだった。

「これは電子体アイテムだね」

「はい。世界を救うためのお守りです。もし何かあつたら甲に渡して下さい」

「それなら最初から甲君に渡せばいいじゃないか」

「いえ、先生なら何年かかっても甲に渡してあげれると思うから」

その時の菜ノ葉はまるでもうすぐ散ってしまう桜のように儚かった。

回想終了

「これは君が甲君に渡すように頼んでおいたものだ。あの日、ニラの海に飲み込まれながらも無事だったものの、体のダメージを回復されるのに2年も掛かってしまった」

ニラの海とはアセンブラが暴走してニラと化して人々を襲った事件のことで別名緑色のクリスマスと呼ばれている。

以降、蔵浜周辺には人々に襲いかかるニラが猛威を振るっていた。

恐ろしいのはその繁殖力でグングニールで一度は焼き払ったものの、三日後に再生。

そしてグングニールにハックして機能が停止した現在、人類はニラとの対決を余儀なくされている。

星修学園は学園都市ではなく、ニラと戦う最前線基地として生まれ変わっている。

門倉甲は菜ノ葉の敵を討つために軍隊に入り、GOAT (Global Union Observation Alliumra

mosum Team(統合軍対ニラ対策班)として戦い続けていた。
そして、ようやく反攻作戦が展開され、ここまで来たのだ。

「甲君、これが菜ノ葉君から預かっていたものだ」

手渡された武器を見て菜ノ葉の表情が変わる。

「それはニラソード。あらゆるニラを滅ぼすというニラを断つ剣。どうしてここに」

「甲君なら君を止めてくれると信じてたからだ。ニラを倒せるのはニラだけ。あのニラがアセンブラを元に行っているなら、理解できる。君を倒せばこれ以上ニラが増えることもない」

久利原は決意した。

いずれ地獄に堕ちる身であっても、この身は信念に殉じると。

手を汚すなら幼なじみの甲ではなく自分がすべきである。

「覚悟したまえ菜ノ葉君」

久利原は趣シユミクラムにシフトし、刀を構えた。

「そうですね、多分先生には私のことが理解できないと思います。だから先生も」

『私たちの一部になりましたよ』

それはアイランナーだった。だが、大きさがアイランナーの5倍を越える大きさであり、緑色の翼が生えている。

それがニラであることに気づいた。

「このシユミクラム、ニランナーtypeΩを前に絶望し、朽ち果てて下さい」

「いやちよつと待って、いくら何でもそれは無いわよ」

私は菜ノ葉を揺さぶる。

「イライラしたからやった。酒に酔っていたから覚えていない」

「そもそも何でニラが暴れ出すのよ。生態系の崩壊か何か？」

「空先輩なら分かってくれると信じてたのに」

「菜ノ葉？」

「タイトルパッケージから外れ」

「ウグツ！」

「アナザーはもちろん、本編に入る前のレインさんのシナリオまで新規に書き起こされたのでまたメインヒロイン不要論がプレイヤーの中で取り上げられ！」

「グハッ！」

「クウはいらない子っていうかむしろ空はいらない子じゃないですか」

「もう止めてください菜ノ葉さん！ もうお姉ちゃんのライフポイントは0です」

まこちゃんが必死に菜ノ葉を羽交い締めにする。

「確かに出番は増えたけど……これじゃあ私ネタキャラだよ」

「私、人気投票2位だったのに、どうしてこんな」

「お、お姉ちゃん、大丈夫です。あくまでメインヒロインはお姉ちゃんですから。」

「じゃあ私がレインに勝てる要素を上げてみて」

長考の後震えながらも口を開く我が妹。

「シミュクラムの腕と勢いですね」

「それって女性として必要な要素かな。もしまこちゃんが男なら私とレインどっちを選ぶ？」

「もちろん、お姉ちゃんに決まっています」

「じゃあ何で目をそらすのかしら」

「重力に囚われた巨乳は死ぬべきなんですけど、確かに後ろ三步引いて男性を立ててくれるのはとても魅力だなんて」

「……世界はいつもこんなはずではなかったのに」

分岐8―1 ノーマルエンド（R18シーン当然無し）

とりあえずアセンブラの流出を防いで、神父を殺したことで灰色のクリスマスが発端になった一連の問題は一区切りついた。

「しかし、これからどうするかなあ」

俺とレインは話し合って、レインは家に戻ることにした。

これからも一緒に居たいと言われても、当初の目的を果たした今、若い男女が行動を共にするのは健全ではないだろう。

レインみたいな美人が恋人ならと思わないでも無いけど、アイツはあくまでパートナーと思いたい。

ちなみに俺とレインに対する手配は、多分聖良おばさんの政治的な力によって解除されていた。

まあ、手配といっても参考人を確保したいということと、レインの行方を把握しておきたいという半ば公私混同のレインの親父さんに問題が無いわけでもないのだが。

とりあえず、傭兵業はお休みして、久しぶりに昔の友人と会うことになり、俺はCDFの刑事である雅と酒を飲み交わしていた。

「良ければCDFで働かないか？ お前だったら歓迎するぜ」

「今更警察官ってのもなあ。親父からは家業を継いでうるさいし」

「ああ、門倉運輸の」

門倉運輸とは傭兵団フェンリルの隠れ蓑だ。

才能というか適正を考えれば悪くないんだが、今すぐ硝煙の世界に戻る気にもなれない。

「桐島長官にGOAT入りを奨められたけど、思想的に反AIって訳じゃないから微妙」

「だよなあ、それよりGOATと言えば千夏はどうしたんだ。アイツの都合に合わせたんだろ？」

「お待たせ」

「お、来た来た」

千夏は軍服ではなく、シックなスーツを着込み、淡くだが化粧もしている。

学生時代の千夏はそういうのに無頓着というか健康的な少女というイメージが合ったのだが……。

「ん、どうしたの甲?」

「いや、よく見たら美人になったなと思って」

「照れずにそんなこと言えるなんてあんたも擦れたんだね」

「実はまだ記憶が戻って無いんだ。だから俺の知っている千夏や雅は星修の頃のイメージだから、一人だけ浦島太郎状態だな」

「……甲」

「ははは、その話は置いておくとしてもう一度乾杯といくか」

かくして、星修時代にトリオを組んだ三人が、実に数年ぶりに再会することになった。

「それで、甲。あんたこれからどうするの?」

「どうって……考え中だけど、一応仕官教育は受けても俺の最終学歴って中卒だからなあ。今更まともな職に付くのは難しい」

「学校か……私たちも大して変わらないんだけど、実力がものをいう社会になったし」

何か空気がどんよりし始めた。

やべえ、何か俺致命的なこと言っちゃったか。

「私もちよつと悩んでいるんだ。今までは久利原……先生を追いかけていたわけだけど、ああいう形で不審な死を遂げられるとね」

久利原先生は、ドミニオンのアジトで死んでいた。記録では俺たちがドミニオンのアジトを抜けた日に死亡している。

結局、あの人は何をしたかったのか検討もつかない。

だが、結果として終わってしまったというか、変な話だが俺たちに達成感はなく、それはGOATの千夏も同じだったようだ。

「人生を捧げていたものが突然無くなるっていうのは二回目かな、最初はサッカー、それに今回のこと」

「……千夏」

「それに雅に子どもができる年だと思うと、そろそろ相手を見つけな

いとは思わないでも無いのよね」

雅の奥さん―これまた、雅にはもったいないステキな女性なのだが
―の妊娠が発覚したのが1ヶ月前。

今日はその近況報告も兼ねていた。

「て、おい」

「アークの橘社長が、二元星修のよしみで全身クローニングの資金を出
してくるって話になったの」

今の千夏は灰色のクリスマスマスの件で全身義体とは聞いていた。

その彼女におばさんは、全身クローニングの資金を出すと言った。

確かに一般人には高額だが、彼女にしてみればさしたる金額ではな
いのだろう。

「長官も援助はしてくれるって話だし悪くないなって。でもねえ
……」

「何か問題があるのか?」

「もう成年したから実質違うけど、私の後見人って桐島長官だったん
だ」

「そうか……」

「私も、あの人をもう一人の父親のように思っていたんだけど、最近家
に呼ばれることが多くてさ。まあ、これは甲にも原因があるんだけ
ど」

「俺?」

レインの親父さんとはミッドスパイアに入った時と、レインの今後
について話した時ぐらいしか面識の記憶がない。

「長官、あんたの相棒と一緒に家に暮らすようになったんだけど、間が
持たなくてたびたび食事に呼ばれるんだ」

そういうや、父親とはあまり仲がよろしくなかったなレインは。

まあ、俺と親父も似たようなもんだけど。

「で、突然話が始まるんだよ。やれ、『見合いをしてそろそろ身を固め
ろ、その気があるならさっさと門倉君とくっつけ。渚くんだって、彼
に気があるみたいだが』。え? どうしてそこで私の話題になるか
と思ったら。あの女、勝ち誇ったような顔をして『お父様、失礼です

けど、私が渚中尉より女としての魅力に欠けている訳じゃないですか。それに私は中尉の公私に渡るパートナーですよ』って爆弾発言するし、その内長官が乗り込んでくるかもね」

千夏の言葉に俺は顔が真っ青になった。

公私ともということとは、俺とレインつてまさか、いや一緒のホテルであそこまで無防備で大丈夫なのかと疑問が無かったわけでもない。「すまん、男としてこんなことを言うつもりは無いんだが、全く記憶にない」

「じゃあ、少なくともここ数ヶ月はそういうことをしてないというわけか。じゃあ、私が宣戦布告してもいいのかな」

「千夏?」

「うん、やっぱり色々あったけど私は甲のこと忘れられない」

その晴れ晴れとした顔は、俺の知る渚千夏だった。

「……あのさ、二人でいい雰囲気作るのいいけど、俺のこと忘れられないよ」

そして、ジト目で見ている須藤雅（既婚）の声にその空気は消えてしまうのだが、ドキマギした感情が止まらない。

落ち着け門倉甲。お前は思春期の学生じゃないだろ。

「うん、クローニングで星修時代の身体で出れば、あの時の約束も果たせるし」

思い出せないのだが、思い出した方がいいような、思い出さない方がいいような話を千夏がしている。

こうして門倉甲の人生はリスタートを切ることになったのだった。

分岐8―2 リアル世界の同居人（パートナー）

飲み会の後に現在住んでいる安アパートの階段を上り、廊下を歩くと俺の部屋の前に体育座りしている何かがいた。

「あつ……」

それはかつて雨の降った如月寮の軒下でうずくまっていた誰かを彷彿とさせる。

そう俺は彼女を知っている。

「真ちゃん」

「お久しぶりです先輩」

灰色のクリスマスからようとして行方がわからなかった水無月真がそこにいた。

「ミルクで良かったかな」

温めたミルクを差し出すと真ちゃんは両手で持って飲み干した。

「……温かい」

体が少し温まったからか、表情から強ばりが無くなったのを確認すると、俺は意を決して話を進めることにした。

「でも驚いたよ。どうしてここがというか、今までどこにいたんだい？」

「実は、あの日からずっと電子体だけで存在していて、実体を探してたんです。色々とおつたんですが、ようやく解放されて」

彼女もまた重たい人生を送っていたそうだ。

だが、彼女は特殊な例であったとしても、この時代を幸福に生きている人物なんて一握りもない。

おぼさんの庇護下にあった亜季ねえはともかく、雅なんかは本当に運が良かったのだろう。

「それで、行くあてもなかったから先輩の所に。やっぱりご迷惑でしたか？」

「迷惑とかそういうのじゃなくて純粹に驚いただけだよ。それで真

「ちゃんは今からどうするの？」

彼女は施設の出身で家族といえばアイツだけ。

そして、唯一の家族だった姉はあの日に永遠に失われた。

「今のところ考えていません。以前のコネを頼ってノイ先生のところにお世話になるのも悪くないですけど、暮らすとなると……」

ノイ先生も親父といい、真ちゃんといい交友範囲が広い人だと変に感心する。

それにアダルトショップで暮らすというのは精神衛生上良くないし、あの辺は治安が良いとは言えない。

ノイ先生には失礼かもしれないが、あいつの大切な妹をそんなところには置くわけにはいかなかった。

俺の体はあの日から成長を遂げているが、心は星修の学生時代のもの。

逆に真ちゃんは色々と変わった部分があるけど、体は知り合った当時と変わらない。

星修学園2年の門倉甲がタイムスリップしたら当然他の人は成長している。

レインをはじめ、みんな親切にしてくれるが、それはいつの門倉甲に対してなのだろうか。

今までの話を聞く限り、俺はあの日以来レイン以外とは関わりがなかった。

だが、俺の心には地獄の日々の記憶が抜けている。

いずれは記憶が戻るかもしれないが、それでも思いを共有できない俺は孤独を覚える。

だから、昔のままの姿の真ちゃんを見て安心した。

アーヴアルシテイにはかつての学園都市が再現されているが、俺にとつての星修はつい最近まで存在していた街なのだ。

亜季ねえがこだわるのも分かるし、菜ノ葉が継り付きたいのも理解できるが、俺にとっては偽りに思える。

あるいは、記憶を失う前の俺だったらあれに郷愁を感じることができただろうか。

だからという訳ではないが、あの当時の雰囲気を残す彼女を見放すような真似はしたくなかった。

「ここだってそんなに広い部屋じゃないけど、もし良かったら」

「いいんですか?」

「何というか、俺の料理は大雑把だからさ、料理ができる人がいると助かるんだ」

理由なんて何でもいい、ただ肯定してあげること。

「でも、私もしばらくリアルで料理なんて作ってなかったから、先輩の口に合うかどうか」

「それでも空よりはマシだろ……って、ゴメン」

妹の前で死んだ姉を冗談のネタにすることはなかっただろう。

「いいえ、確かにあの日この世界のお姉ちゃんは死んだんです。一度成ってしまったことは覆せません」

その目は真剣だったが脳裏である言葉が浮かび上がった。

「この世界は偽りか、まるでドミニオンの教義みたいな」

「そうですね、ところで先輩。私が元ドミニオンの信者だったらどうします?」

「どうって……そうだな。聞きたいことがたくさんある。例えば久利原先生がなぜドミニオンに居たのかとか。結局神父とはどういう存在なのかとか」

結果的にドミニオンとは相成れないだけで、輪廻転生思想は歴史をひもとけばそれなりに存在する。

魂の本質が電子体に存在するかどうかという議論はあるが、そういうものと仮定すればいい。

「私の脳症がどういう性質か先輩は覚えていますか?」

「確か、セキュリティを難なく突破できる能力だったっけ?」

だから、亜季ねえのプライベート空間にも入ってくる事ができた。

「はい、でも私はこう思うんです。現実と仮想空間の境界が曖昧になるのではなく、世界に存在を固定できなくなるとというのが私、いえ脳症患者の最期なのではないかって」

「どういふこと？」

「セカンドは常に通信を続けているわけですが、送られてくる情報量に過負荷を起こしてオーバーフローする。では脳症患者はどこからその情報を受け取るのか。特異点に由来される並行世界。あらゆる水無月真が共有する経験。つまり、私が突破できるセキュリティはかつていづれかの世界の私が突破した経験があるが故に他の私はそれを突破できると仮定すれば……」

「まあ、あの特異点を見せつけられたら分からないでもないけど」
何しろ空間の時間を止めるだけの情報量なのだ。

個人がもしそれだけの何かを受け取ったら発狂するに違いない。

「そして、私は先輩があの日に死んで、お姉ちゃんが生き残った世界の情報を受け取りました」

「……つまり、俺と空の立場が逆だった世界ということか」

真ちゃんにはコクリと頷き、少し冷めたココアに口を付ける。

「だから、私、いえ無数の『私達』は可能性を探しているのです」

それは広大な荒野の中で一粒の金を探すような無謀。

「水無月真のネットワークは三回目の特異点を最後に今回の結果を一回目の特異点発生時の水無月真に送ります。あるいは第一回目の特異点以前に情報を送る手段を私達の誰かが見つければ大抵の問題は解決するんですけど……」

脳症患者は最終的に脳と現実が曖昧になるといわれる。だが真ちゃんには狂気がない。

これが妄想だったら、果たして正気とは何なのか疑うところからはじめないとダメになるだろう。

「送られる情報はそう多くありません。だから私は万が一の場合、障害を排除できるポジションである『ドミニオンの巫女』をする可能性が高くなります」

「もしかして、行方不明になっているドミニオンの巫女って」

「はい、そしてドミニオンの神父様の正体は多分久利原先生です」

「それはまた荒唐無稽だな」

俺は真実を知りたいとは思ったが、もはや知ってどうにかなる問題

でないのも事実だった。

だから、この話題はここでおしまいにしようと思えて軽い口調で言う、真ちゃんにはにかんだ。

「とまあ、これくらいトングデモな設定があると物語的には面白いですよね」

多分、これは本当なんだと思うが、それを冗談にしたいのだろう。

「三流ホロもびつくりのノリだけだな」

おそらく見た目は変わらなくても色々苦労したのだろう。

この辺りの切り返しの良さは星修学園時代の真ちゃんには無いものだ。

「そうですね。じゃあ、改めましてこれからよろしくお願いしますね先輩」

こうして新しい同居人^{パートナー}を俺は手に入れたのだ。

D I V E X

prologue ジルベール・ジルベルトの憂鬱

世界X（ペけ）

D I V E X prologue

《b》ジルベール・ジルベルトの憂鬱

《／b》

目の前には、金髪の娘。彼女は誰だ？ 俺は彼女を知っている。

「桐島レイン？」

彼女は涙を浮かべている。はて、ここはどこだろう。

「ここは地獄か？」

「え？」

「ジルベルトさん、どうしたんですか」

「ケニツヒス？」

デザイナーズチャイルドの優位性に何も疑わずに育つことができなかつた。

だが、目の前のケニツヒスはえらく腰が低い。

怯える桐島レインと脅す鳳翔の生徒。この組み合わせは俺が見ていたあの日の光景に似ている。

「お前達何をしているんだ！」

思考を辿っている俺を現実に戻したのは、あの白いシユミクラムユーザー。

「・・・門倉甲」

「女の子を囲んで・・・どうして鳳翔の生徒が俺の名前を知っているんだ」

初対面の男、それも星修の天敵と言ってもいい鳳翔の生徒が自分の名前を知っていたら不気味に思えるだろう。

「今日も彼女とデートか。真の姉も彼女のいる男を好きになるとは面

倒な」

「千夏とは別に彼女じゃ・・・それより、あんた俺とどこかで会ったのか？」

「ふん、星修のガキは出しゃばらずにそこら辺の草むらで盛ってる。帰るぞ」

バカらしい。鳳翔の星修もデザイナーズチャイルドもセカンドもあの化け物の前では優位性などない。

清城市の地下に眠り続けるノインツエ^{化物}ーン。そしてノインツエー^ンの作ったアセンブラ^{おもちや}に踊らされる愚かな人間ども。年末に日常が壊されることは確定した。俺には止める力も意志もない。予定通りならアセンブラが増殖し、グングニールが照射されておしまいだ。数十万が死ぬだろうが俺の知ったことじゃない。だがその先を生きるのならば必要なものはたくさんある。

「まずは金とシユミクラムだな」

「どうしたんですかジルベルトさん、さつきから変ですよ」

俺の知るイメージだと狂犬だったケニツヒスだが俺の前では借りてきた猫のようだ。

「俺達がガキの頃にドミニオンとかいうカルト宗教があったそうだな。この世界は偽りだと宣ったらしいが、誰にとつての偽りだったんだかな」

俺はケニツヒスらに別れを告げて町の中を歩き、無意識にある方向へ足を向けていた。SFに首を突っ込んでいるのに相も変わらず20世紀の雰囲気を出す店。ドアを開けるとベルの音に反応したのかテーブルにうずくまっている男が起き上がった。

「初めて見る顔だな。ここは鳳翔のエリート様が来るような店じゃないぞ。ひやかしなら帰ってくれ」

「・・・ピザトーストと水出しは今の時期だとやってなかったな。ブレンドでいい」

「了解」

いそいそと厨房の方へ行くこのマスター、名前は一度聞いたが、マリオ・マリオで奇妙な名前だったか。もつとも俺の名前も人のこと

は言えないが、世の中には代わったネーミングセンスを持つものがあるのだろう。あの男にしてみると前世ではもつとも知られている人間の名前らしいが。

待つこと10分、香ばしい匂いと共に甘い匂いが漂ってくる。

「アイスクリームのリキキュールがけは頼んでないが」

「ルーキーに対するサービスだ。厄介事さえ持ち込まないなら今後ともごひいきに」

マリオはそれだけ言うとカウンターのの中に入ってしまった。ピザトーストを食べる。残念ながら『俺』の舌はこの味に慣れてしまっていた。そして、無性に居心地がいい。自分が経験したことがないのに安堵する感情。反吐が出る。

注文したものを全て食べ終わると、支払いを済ませて店を出た。それと同時に少し汚れた白衣を着た女が入れ替わりにあの店に入ってしまった。

「下らない感傷だな」

俺はあの女に関わらない。

D I V E X I 求道者

それは夏

自分の両親は自分達をエリートだと思っているが、俺が「識る」人間と比較すれば人間としてできていない。あるいは重みがないとも言えはいのだろうか。

「子どもの人生をいじれる程度の力だな」

ジルベル・ジルベルトとして生きている俺はため息を付いた。佐藤という人格を持つ男はジルベル・ジルベルトの自我が発達する頃には融合していたが、俺はあの瞬間からジルベルトとなった。果たして俺に乗っ取られる前の俺はどんな人物だったのか。

「くだらん」

鳳翔学園の生徒は自分達のすばらしさと輝ける未来に対する希望があった。生まれ持ったスペックは高いのだから誇ってもいいだろう。もつとも、この大半が来年まで生きているかは不明だが。あいつとは別の感慨を抱いた結果、俺もバカどもと一緒に行動する気が皆無になった。

昼休みも一人でベンチに座る。今では珍しい紙媒体の本に目を通して、外で買ってきたサンドイッチを口にする。これもあいつの癖だ。解放されたはずだが、余計な癖が染みついてた。

そして再び本に目を通そうとすると遠目で俺を見つめる視線に気がついた。

桐島レイン。あいつと仲が良かった女。家庭環境に問題有り。近頃何度か見かけたがどうやら気のせいでは無かったようだ。

「俺に何か用か」

「い、いえ……何でも」

「自分の意見ははっきり伝えろ。押しつけられた環境に不満か。だが、それに対して流されなかったか。どうせ自分のことを分かってもらえないと。諦めるのは努力してからにしろ」

この女は俺なんかよりかなり優秀なのだ。デザイナーズチャイルドもセカンドも関係なく、優秀な人間はそれ相応の環境で育って力を

示してもらわなければ困る。

「星修の如月寮に水無月空という口から生まれてすぐに手の出る女がいる。そいつに伝え方を教えて貰え」

俺は自分が生き残ることで精一杯であり、女の人生相談にかまけている余裕がない。この女はあいつと同様にお節介な門倉甲ヒコロにでも押しつけければいい。

それは秋

確認はしなければならぬ。情報が足りない以上、かまをかけてでもアレが起こりうるのか知らなければならぬ。

「その理論を確立するための資料が見あたらない。じゃああなたはどこからそれを持ってきた？ まさか神からの啓示なんてオチはないよな」

久利原直樹は動揺していた。相手の仕草、特に目をよく見るのはアイツなりの人間観察術だ。

「それともどこかからハッキングでもしたか？ 強固な防壁を突破できるウィザードでハッキングツールでも頼んで」

続けて門倉甲の周辺を見る。みんながこちらを睨んでいるが、ただ一人違う反応を見せた女がいた。

「これは関係ない話でだったな。俺はここで退場する」

用件は済んだ、後はどうするか。部屋から出て数分後、ぶらついていると声がかかる。

「お前何様だよ」

「何様だと言われればジルベルト様だ。俺も自分で手を汚したくないから忠告しておくが、あの教師早めにネットにへのアクセスができない病院に隔離して治療させた方がいいぞ」

「どういうことだ？」

「詳しくは橘聖良の娘、いや姪だったか……まあどうでもいい、そいつから聞け。夜逃げの必要が無いならそっちの方がいい」

「亜季ねえに？」

「門倉永二にバルドルとアセンブラ、神父と伝えればどうにかなるか

もしれないがな。セカンドの暴走が招いた種だ。セカンドで刈り取ってくれ」

呆然と立ち尽くすセカンド達を尻目に俺は立ち去った。何より時間がない。

そして冬。

どうやら予定通りアセンブラの実験をするようだ。間違いなく失敗に終わるだろう。バイクに乗り、一週間分の暮らしができる程度の物資が入ったりリュックに背負った。既に俺名義で離れた街に住居を一つ構えており、そちらにも買い付けてある保存食を貯めてある。

だが研究所に入っていく一人の少女を見た。

「あのバカ女。どうしてこんな所に」

見捨てるか、所詮は他人だ。だがアレは世界は違えど水無月真の姉だ。あいつなら助けた。自分の周りだけが良ければいいという割にあいつはそれを拡大解釈する。見捨ててもいいが……。

やがて研究所から彼女は出てきた。これからすぐに移動すれば間に合うだろうが、電車に乗るでもなく、待ちぼうけを食らっていた。

仕方が無いと、俺はヘルメットを脱ぎ声を掛けた。

「おい、お前どうしてこんなところにいる」

「あんた確かジルベルト様？」

「何だそのジルベルト様とは」

俺はいずれ上に立つべき人物だが、今からそれもほぼ無関係の人物から様呼ばわりされる謂れはない。

「忘れたの？ 甲が何様って言われて自分に様付けた奴なんてはじめて見たわ。それより何の格好よ」

そういえばそんなこともあったな。

「夜逃げの準備だ。久利原直樹はあそこにいるんだろう？」

確かに耐衝撃のスーツを着てリュックを背負っている俺は変に見えるだろうが、背に腹は代えられない。

「え、ええ」

「なら早く逃げた方がいい。おそらく神父の人格によってデータが改

変されている」

「あんた前もそんなこと言ったけど久利原先生はちゃんとやり遂げるわよ。でも参ったなあ……行き先が違う」

次の電車を待っていたら多分間に合わないだろう。

「水無月空、妹も持っていたから橘聖良への直通アドレスを知っているな」

「知っているけど……何する気」

「お前が死ねば妹が悲しむ。これであいつに対する貸しはなしだ」

端末に映る橘聖良は俺が識るいつものような姿だった。

『あなた誰?』

「誰でもいいだろう。アセンブラの遅延式だ。ハッキングしてどうにか暴走を遅らせる。俺はこいつを連れてなるべく距離を稼ぐ。ついでに水無月真とノイを確保しておけ。政府や軍に確保されると厄介だ」

『いいでしょう。一つ聞きたいのだけど彼は神父?』

「詳しい原理は知らんが感染するらしい。どちらにせよグングニールによる照射でなぎ払い確定だな。さらに言えばまだ中にいるぞアレは」

『情報提供感謝するわ。あなたが無事ならその内お話を聞きたいところだけど』

「それならうまい飯でも食わせてくれ。もつとも四六時中寝ているあんたには食欲や性欲などは興味がないかもしれないがな」

俺達のやり取りが終わると水無月空は目を丸くしていた。

『どういふこと?』

「いいから乗れ。速く逃げないと溶けるぞ。これを背負って俺に掴まれ」

予備のヘルメットを渡す、それほど金のかかっていないものだが無いよりはマシだろう。

走り出すこと30分、後ろの女がスピード出し過ぎとか言っただけでいるが、異様な警報が周囲に鳴り響く。

それから5分後、天から光の柱が降り注いだ。

「なに……あれ？」

水無月空は憔悴していた。まあヘルメットを被せたにしろ、平均時速100kmを越えていれば当然か。

「アセンブラの増殖を防ぐために統合軍がグングニールを照射した。周辺部への衝撃波も含めればおそらく十万単位で死んだな」

俺も含めて、一年前まで普通の学生だった自分たちが享受していた普通の世界が一変した。

「あんた、こうなることが分かっていたのね」

その声に怒りはなく、現実逃避からくる確認だった。

「予知夢みたいなものだから自分だけが助かるために行動していた。もつとも確信を得たのは発表会でのあいつの反応だったがな。鳳翔の学生と新進気鋭の学者様のどっちの言葉に耳を傾ける？」

というよりあれだけの大物を説得したあいつが異常なんだ。

「私達、これからどうなるの?」

「助けた手前、アークまでは連れて行く。運が良ければお前の仲間にも会えるだろう。それともヒーローのところの方がいいか」

「ヒーロー? もしかして甲のこと? どうしたらいいと思う?」

「知らん。俺がお前を助けたのはあいつに劣る自分を否定したかったからに過ぎない。とりあえずは連絡を取ってみたらどうだ。それくらい時間は待つてやろう。現実を見ろ、お前がなすべきことはお前が決めるしかないんだ」

ドクターはあの女は世界が滅んでもしぶとく生き残るタイプだから心配する必要はないが、水無月真は無事だといいが。

そして未来へ

D I V E X 1

《b》 求道者

《／b》

D I V E X 2 恋愛不能症候群

久利原直樹の生い立ちに同情するとあの男は言った。ナノ汚染された土地で生きたのは運が良かった、あるいは目に見えない何かが生かした。宗教関係者なんかはそれを天命と呼ぶ。

さて、久利原直樹の故郷と同じように蔵浜をグングニールでなぎ払われ、それでも生きている「運の良い人たち」は何をしているのだろうか。

俺の目の前にする少年少女……といっても既にあの悲劇から6年経って肉体的には大人になっても精神的にはまだ引きずっている人間が何をしているかといえば。

D I V E X 2

《b》 恋愛不能症候群

《／b》

「失われた青春への渴望を満たす為に男の尻を追いかけている。武芸を嗜んでいたものらしく引き締まった臀部は」

「あんた何を言ってる……というか何書いているの？」

気が付けば目の前には少女というにはもうあか抜けてしまった存在がいる。

「10年くらいしたら売り出そうかと思っているノンフィクションのネタだな。門倉甲がいかにかに師を慕って、下半身も慕っていたということとを赤裸々に」

俺の話を聞いていた少女―水無月空は怪訝な顔をする。

「いやデザインナーズチャイルドにおかしいのが多いのは熟知していたけど、何で甲が久利原先生の下半身を狙っているという話になるのよ！」

「腐れ縁でお前らに付き合っているんだからそれぐらいは見逃せ。それとも門倉甲とお前の赤裸々な夜を流してやっても良いんだぞ」

何せこいつら、戦士としての適正はあっても生活力がない。特に料理の腕に関して女どもは……もつとも桐島レインは仕込んだ今では

それほど悪く無いが、目の前の女は無理だった。それに費やす労力を考えたらどこから浮浪児をそれ用に教育を施した方が早い。空の妹がいればそれ辺の苦労は激減したのだが、無いもの強請りしても現状意味がない。

「まあいいわ。それよりあんた、ここに久利原先生いると思う？」

「おそらくこの街に潜伏しているとは思う。だが、今回の目的地にはいないだろう。これは作戦前に話したはずだ」

「私も甲も一応あんたと同じ教育受けたけど、結局は兵隊で、作戦の立案とか折衝はあんたとレイン任せだから指揮官のあんたには従うわ」

校風に問題はあったが、鳳翔は教育機関として効率良く知識を詰め込むことには長けていた。もっともそれを実践に活かせるか別だが。しかし、星修のやつらには必要最低限の知識と特化した分野というアンバランスさ。あいつの見立て通り門倉甲は俺より強いが、リアルでの戦闘や作戦立案能力などを含めれば俺の方が上だった。

「だが、この集団の核はアイツだ。俺は効率良く生き残る方法を提案しているに過ぎない。作戦行動に不満があるなら閨で訴えろ」

その程度で顔を赤くして……いつまでこの女は初々しきを出すつもりだ。

「どうしたんですかジルベルト大尉」

「何でもない少尉。門倉……中尉は？」

「経路の最終確認です。それよりいよいよ明後日ですね」

清城市でドレクスラー機関、もしくはそれに近い組織に突撃を掛ける。情報としては正しいと思うが、一抹の不安がある。

「この作戦乗り気じゃないの？」

「あの日から生き残る為に何度も戦闘したが、乗り気だったことは一度もない」

勇敢な人間ほど早く死んだ。俺は生き恥を晒したくはないが、意味もなく命というカードを切りたいとは思わない。

「今回の作戦に参加する人間にはあの日に身内を失った人間も少なくない。俺からしてみれば失ったものがないお前らが居ることに違和感を感じる」

「そう？ 人間って理屈だけで動く訳じゃないしね。私としてはあんたが今現在も一緒にいることの方が驚きだけど」

「久利原直樹の人格次第で世界が減びるといふのは悪夢だ。俺が安心して眠りにつくためには殺すしかない。そう考えればたどり着くの便利な駒は使うべきだろう」

「あんたの思考は最低だけど、そのおかげで生き残っているわけだから文句は言わないわ」

「お前のうっかりで命の危険に晒されたことも多々あるが、脳天気さに救われているのだから仕方無いな」

「それに私は生き続けてまこちゃんを見つけないければならないの。あなたは生きていると断言してくれるからそれはそれで心強いだよ」

「お前ら、相変わらず仲良いなあ。俺が嫉妬する程度には」

気がついたら紙袋を抱えた門倉甲が戻って来た。

「美人なのは認めるが、女としての魅力には欠けている」

「何ですって！ あんたこそ顔はまともだけど、口を開けば毒舌かつ自己中のナルシストじゃないの」

まあそれでも好きな相手に告白できずに万年生理前だった『彼女』の姉に比べればまた良い方か。

「欲求不満女の相手は門倉に任せる。さて少尉、戻って来たばかりで悪いが、ちよつともう一度下見をしたい。付いてきてくれるか」

「はい」

余計なお世話かもしれないが明日死ぬかもしれないのだから好きにさせてやろう。

「悪かったな少尉、まあちよつと飯でも食べながら話そうか」

あれから6年経った。彼女は門倉甲に恋をした。そして振られたというより想いを伝える前に終わった恋物語。もし水無月空が溶けていたなら、門倉甲は目の前の女性と未来を歩んだのだろうか。だが、運命は変わった。あるいは俺がねじ曲げた。彼女は舞台上上がる前に引きずり下ろされたのだ。その辺のケアは余計なお世話をした俺の仕事だった。

「少尉はお父上と連絡は？」

「最後に連絡を取ったのは3年前、マレー半島の時です。ネットを調べればお互いに生きているのは確認できます」

「君も門倉甲も親が生きている内に面と向かって文句を言っておくべきだと思いがな」

正直に言えば彼女には真つ当な生活をして欲しい。その為には和解した方がいいに決まっている。

「まあいい、どうせ近い内にGOATも来るだろう。その時に話せばいいだろう」

「何故GOATが来ると思うのですか？」

「俺達は今回異なる情報筋から今回の話を聞いて確率が。高いと踏んだ。噂ならC D Iが捜査する程度だが、事実として認識したならGOATが動かざるをえない」

軍は暴力装置であるがそれでもお役所仕事である以上、行動に移すまでに時間がかかる。通常の大隊規模から旅団規模に再編成される際に二週間から一ヶ月ほどかかるだろう。俺達はその合間を縫って行動しなければならぬ。

「うん、まあ値段の割に味はいいな。特に魚のムニエルはいい」

「父はAIが嫌いなんです」

「俺でも君のお父上の立場なら憎むと思う」

詳しいことは知らないが理解はできる。人は尊厳を傷つけた相手を許すことはできない。だがそれを知らないはずの俺がとやかく言うことはしない。

「空さんが大尉を信頼する訳が分かる気がします」

「まあ、俺と『遊んで』ストレス発散できるなら上官としては妥協できる範囲だな。少尉も我慢せずに色々と言った方がいいぞ。この集団の心臓は門倉甲だが、血はサポートである君だ。君に万が一があつたら困る」

「それは上官としてですか？」

「あの日、我らが同窓はどれくらい減ったんだろうな。まあ学生時代はそれほど親しい仲では無かったが、それでも同期が生きていた方が

いいだろう」

「どうして大尉、いえジルベルトさんはあの日……いえ何でもありません」

多分彼女が言ったのはあの日だろう。ジルベルが死に、そして生まれた日のことだ。

「風が吹いたとしか言いようがないな」

「え？」

「多分どこかには君と父上が良い関係の世界もある。ああ君達はよく似ている。まずはお父上をやきもきさせる男に挨拶させるといい。古典的な話になって外野はとても面白く感じるだろう」

多分彼女の心配をすることは俺の人生取って余計なことなのだろう。そもそも水無月空を助けた時から感じていたことだ。俺はヒーローごっこに興味はない。

「悪いな本当なら明るい話題を振ってやりたいところだが、そういうのは水無月姉に任せているから」

「不器用……でも、そういう人嫌いじゃないですよ」

これが贖罪あるいは代償行為だと分かっている、あるいは自分より彼女を守るべきだと思う俺は、強くなったのか弱くなったのか分からない。

side ■■■

空に抱かれて眠っていたはずの俺は、気がついたら再びあの場所にいた。

「中尉、ご無事ですか？」

「あ……ああ俺は無事だ。他のやつらは？」

レインの声が聞こえる。確か俺達以外は全滅のはずだが、聞かないと変に思うだろう。だが返答は俺が予想した物と全く異なるものだった。

「イージスを展開に成功した人たちは無事です。今は大尉が撤退の指示を取っています。周辺は……さんが索敵しています」

さっきのEMPの影響で突入した人員は俺達以外全滅だったという事実と違う？ それに大尉って誰だ？ そしてアラートと共に白と赤をベースにし、弓形の武器を持つシミュグラムが近づいてくる。俺はこの独特のフォルムのシミュグラムを操るやつを知っている。

「甲！ 無事みたいね。アイツに任せていた部隊の人員は撤退したわ。後は私達が撤退すればいいけど、かなりのウィルスが展開されていて……」

「空？」

「何よ」

何故、空が水無月空がここにいる？ 混乱する俺の思考を止めたのはレインからのコールだった。

「大尉より連絡。撤退ルートを確保したから早く来いとのこと。連絡事項は作戦終了後のブリーフィングでお願いします」

「了解、甲、あんたさっきの影響で調子悪そうだけど戦える？」

「あ、ああ」

その後、何も分からず俺は『二人』に誘導されてログアウトし、目が醒めたら車の中だった。

D I V E X 3
K o u i n W o n d e r l a n d

「おうリーダー、あんたも無事みたいだな」

あの時は俺たち以外は全員動いていなかった。だが、目の前には粗野だが、歴戦の風格を感じさせる男がいる。

確か通称「マッド」だったか。うまく思い出せない。

「まあ俺達は運が良かったんだろうな」

周りを見ると脳死した人間が何人か居た。

「そうだな……」

「ま、これ絡みで美味しいなら俺はいつでもはせ参じるから、大尉殿に交渉しておいてくれ」

マッドがいう大尉って一体誰のことだ。

「ああ、確かに伝えておくよ」

「期待している」

ひらひらと手を振り、笑顔とともに男が去った後、入ってきたのはレインと■だった。

「目覚めるのが遅かったから心配したわ。電子チップに影響が無いか見て貰った方がいいかもね」

「甲中尉、今日の作戦を覚えていますか」

「ドレクスラー機関の連中が持ち込んだと思われるナノを追うのと、久利原先生の足取りを追う？」

二人は心配そうに見ていたが、俺の言葉を聞いて安心したようだ。

しかし、この世界はどうなっているんだ。何故俺と空が同一に存在している？

「中尉、無事そうで何よりだ」

黒い軍用コートを着た赤髪の男が入ってきたことで混乱に拍車をかける。

「大尉、中尉はどうやらEMPの影響で記憶に混乱が見られます。一度確認をした方がいいかもしれません」

「そうか……この辺りだとドクター・ノイの所だな」

混乱する俺を『大尉』は怪訝そうな顔をして一瞥する。

「……仕方無い、俺も付いていこう。少尉は生存者に追加報酬、それと死亡者に対しては受取人が居るなら受け取れるように」

「了解」

俺はこのクソツタレな世界で大切な人たちを救う。それが俺達（かどくらくらこう）の願い。

だが、現実突きつけられた銃だ。

「単刀直入に聞こう。お前どこから来た門倉甲だ」

銃を突きつけている大尉。知っているが余りにも俺の知るあの男と乖離している。

「……何の話だ 俺以外に門倉甲がいると?」

「ジルベルト君、彼―門倉甲君は大規模なEMPの影響で脳内チップが破損している。一時的な記憶障害だと思うが」

ジルベルト・ジルベルトと名乗る男はまるで世界の全てを嘲るように笑った

「……ドクターノイ。ノインツエーンの娘。特殊な技能として他のNPCやシミュグラム、電子体に憑依することができる。『俺』の持っている知識だが、あなたは生い立ちはともかく後者について知っている人間は?」

「門倉甲」がいつかどこかで知る可能性がある話。あいつの発言を聞いてノイ先生が驚愕し、首を横に振る。

「何故君がそれを知っている」

「こことは違う未来を歩んだであろう並行世界。バルドルの中で『アイツ』と『あなた』がした会話を聞いていた。仮にノインツエーンと同程度の情報量を操作できるなら、同位体のデータをダウンロードさせるくらい簡単にできるはずだ」

こいつは俺の知っているジルベルトじゃない。俺の知っているジルベルトっていうとプライドが高くてずるいが残念な男だ。

「はつきりと言っておく、俺達が知っているのは灰色のクリスマスの後に再会した水無月空と大衆の面前で接吻かました映画に出てくるような男で、お前じゃない」

そして俺の胸ぐらを掴んで吼えた。俺には彼の言葉に反論することはできない。

「お前が事故でそうなったのか、意図的にそうなって成り代わろうとしているのか俺は知らないし知りたくもない。だが、お前は門倉甲を殺した。この部隊を統率する身としてはどの段階でそれを伝えるべきか躊躇している。桐島少尉については俺から説明するが……水無月中尉は多分3時間も一緒に居れば気付くだろう。俺ですら違和感を覚えたのだから四六時中一緒にいる彼女が気付かないはずがない。それを一時的な記憶喪失でどこまで誤魔化せるか」

「……どうして違うと思うんだ」

「神父と戦う上で一番怖いのは、自爆を厭わない狂信者ではなく侵食だ。だから作戦前と作戦後で電子体に異常が無いかチェックする。加えて俺はゆらぎ……これは俺の感覚的なものだが。まあ人間って目を見ればだいたい分かるしな。ドクター……タバコ駄目「駄目だ。ここで吸って良いのは唇と乳と陰○だけだ」……あなたもぶれないなあ」

紙コップの注がれたコーヒーを飲み干し俺を見た。

「俺達の知る門倉甲は戦士だが墜ちていない。正義なんて人の数だけあるが、それでも灰色のクリスマスの悲劇を繰り返さないために、何より久利原直樹を救うために動いている」

「先生のことも知っているか。つまり神父との関係も」

「俺が知っているのはノインツェーン内にいる本体の神父だが。生きて罪を償うという段階をとうに過ぎているから俺は殺した方が後腐れがないし本人の為にもいいと思っっている。だが、門倉甲と水無月空は救えるなら救いたいと言っていた。こんな世の中でお人好しだと思いが、だからこそ悪を知る俺が、理不尽を生きる俺が気まぐれに手を差し伸べるのだ」

よく分からないがこいつも俺と似たような立場の違うジルベルト

なんだと気付いたとき、この世界は救いは必要無いことを理解した。

「教えてくれ、お前が助けたのは俺か、空か」

「水無月真の姉の方だ。お節介だとは分かっていたが助けた」

その言葉にこいつは真ちゃんに借りか何か知らないが手を差し出すに足る理由があるのだろう。

「お前は俺の知るジルベル・ジルベルトではない。俺は世界0のコウと呼ばれるシミュラクラが別世界の俺達の情報を収集、統合した存在……」

そして復讐者で自分の為に自分を殺したエゴイストだ。

「でどうするのかね。電子チップの復元なら私の専門分野に引っかけが、上書きされた記憶、それも電子化されたデータを弄るとなるとそれこそあのクソ親父クラスのキチガイじゃないと無理だぞ」

「門倉甲と水無月空に関しては保険があるから大丈夫だ。また上書きになってしまるのが問題だが、この仕事の直前だったのが幸いだっとな」

「どういうことだ？」

「シミュラクラに二人のデータのバックアップを入れてある。コストの問題があるから難しいそうだが、クローニングさえできれば、本来の意味で個を継続させることができる。電子体のバックアップを使ったある意味不死だな」

聖良おばさんが方舟計画を実施しようとしていたのは知っていたが、シミュラクラにデータを保存する？ それは空とクウが融合したような。

「つまり外付けにデータを移し、必要に応じて復元する。古典的ではあるが電子体でそれをやるとするのは些か乱暴なのではないかね。それに人一人の情報量というのは多い訳ではないが完全にコピーすると異なるなら別だ」

ノイ先生の言う通り、下手したら自我の境界線が混ざり合い、存在の定義があいまいになってしまう。

「この件には俺も一枚噛んでいる。アイツほどではないが、電子体の改変については何とかしよう」

アイツとは誰のことだ？ 聞こうと思ったが苦々しい表情を見て
思いとどまった。

「俺はアイツやドクターノイみたいな異能^{バグ}でも、橘聖良や西野亜季の
ような奇才^{マッド}でも、お前や水無月真のような腕利き^{ホッドガー}でもない。だが、同
じ舞台上に立たなければ俺が強い。どれだけ経験を積んでもセカンド
は最終的にネットを前提にする。肉体を捨てた神父も同様だ」

そして最後に一言を付け加えた。

「現実世界^{リアル}を蔑ろにすれば足を掬われる。そんな当たり前を世界に刻
みつけてやる」

「君はどれだけ努力してもパーフェクトにはなれない」

それは短い間だったが、教えを請うた軍事学校の教官が放った言葉だ。

「君がデザイナーズチャイルドという生まれにあぐらをかくことなく努力しているのは知っている。このまま努力を重ねれば限りなく一流に近づくことはできるだろう」

だが、と教官は付け加えた

「世の中の一握りの化け物ならなおさら無理だ。体の使い方は教えるが、君が望む段階まで引き上げることはできない。バランスが良すぎるのも考え物だな」

「バランス？」

「満遍なくできるってのは理想だが、現実的には一点特化あるいは傾向を決めた方がやりやすい。カードが5枚あつて強弱が付いているなら決断がしやすいが、それが同程度の強さなら決断がしづらい。オールラウンダーはあらゆる状況に対応できるがどちらかというと後手に回りやすい」

だが、視点を変えれば長所であると教官は続ける。

「君にやる気があるのであれば、大隊規模の指揮官ぐらいは容易に努められるだろう。勝利という結果をもぎ取るために何も君が戦う必要はない。」

門倉や水無月はシミュクラムユーザーとしての適正は君より上というか、特に門倉はあの門倉永二の息子だといわれれば納得できるな。長ずれば実戦部隊を率いることもできるだろう。水無月は……あーあいつは理論無視するから絶対お前か門倉が首根っこ掴んでおけとしか言えんなあ」

幾人ものひよっこ共を戦うものとして送り出してきた教官からみても、あのバカはそこ抜けているわけか。

「話は逸れたが、あの二人は電子戦では君より強い。だが肉体的な面では君に劣るし、コスト計算を含めた大局的、俯瞰的にもものを見る考え方は君の足元にも及ばない。君は兵士ソルジャーではなく指揮官コマンダーとして生き残る方が良いでしょう。ケリー教官も推薦状を書くから今から軍の門を叩いた方がいいと言っているしね」

それは予想された答。で納得はしているが、それでは意味が無い。だからこそ、先達には俺は問いかける。

「もし俺が化け物に勝つならどういう手段がありますか？」

門倉甲はシミュラムユーザーとしては素質だけなら多分人類の上から数えた方がいいと思える。俺が真つ当にやり合うのは不可能だ。ああいうのは、英雄とかそういう二つ名が付いてもおかしくない。

「さっきの話と矛盾するがなるべく多くのカードを使い相手を騙し、惑わし、本来の力を出させない。できるなら一点特化を自分ではなく他人に求めた方がいいな。どうせ門倉や水無月とは一緒にいるんだろうから。彼らを有効利用すればいい。ここの金だつてその為に君が出したのだろう」

「別に恩を売ってるつもりはないんですが」

「そういうのも含めて考えるべきだ。世の中の大半は金とコネとそれに付随して発生する暴力だ。目的の無い純粹な暴力での闘争しかできないのであれば、人類は氷河期辺りで絶滅してただろうよ。文明が発展し、スペックを上げたデザイナーズチャイルドやら機械化した義体、脳特化のセカンドやらで人類は相対的に強くなつたのかもしれないが、人間は強いから生き残れたのではない。狡猾さを研磨し続けたから生き残れたんだ。何故君がこの道を志したのかわからないが、君が100しかなく相手が200あるなら引きずり込んで他人を使つて消耗させて、最後に自分で止めを刺す。それは卑怯かい？」

その時の俺は答えを出すことはできなかった。あいつなら、佐藤弘光を名乗る男なら自分の持てる最適のカードを迷うことなく切る。だが俺にはそれができない。

「目が醒めましたか大尉」

懐かしい夢だった。ジルベル・ジルベルトの在り方を決めたやり取りだったが、あの教官はまだ生きているだろうか。思えば部隊の損耗や維持費などを考えずに済んだあの頃が一番楽だったと思う。

差し出されたコーヒーを口にする。クリームは好まないが砂糖はスプーン2杯。最初は自分で入れていたのだが、ある時から入れる必要がなくなった。

「古典的な口説き文句に、君の入れたコーヒーを毎日飲みたいというのがあつたらしいのだが、この地だと君が作った味噌汁を飲みたいだったか」

アイツの記憶の中の知識で俺は知っているだけだが、話題の引き出しの多さに関しては素直に感心する。

「大尉は私をからかって楽しいのですか」

ジト目で睨む少尉をからかう間柄というのもいつまで続くのやら。付き合いの長さからしてみれば「アイツ」と「お嬢さん」の付き合いよりはるかに長く、また違った性質のものなのだろう。変わらないのは彼女には還るべき場所があり俺にはその場所がない、否、場所を作ることはできない。異物は異物だからしょうがないと達観できるほど俺は強くない。

「水無月姉はからかうと面白い。だが少尉は……そうだな美人を言葉一つで唾然とさせられるならそれはそれで楽しいのかもしれない」

だがその前に成さねばならないことがあつた。それは詰まるところ俺の私怨ですらない。例えるなら絵に書かれた美人に、物語の英雄に嫉妬し、それを越えるための儀式に過ぎない。

「冗談はさておき、顔合わせをすることにしようか」

「短期間でそれを成し遂げることができた大尉の手腕には感心を通り越して呆れましたけどね」

上の感情のしこりはあつても利害の調整さえすれば会談すること

は問題無い。まあ桐島少将については多少の鼻薬を効かせたことは否定できないが。

side 桐島勲

「では、再度こちらが持っているカードを開示します」

レインと同窓の男で、現在傭兵部隊をまとめているジルベール・ジルベルト大尉が自分の握っている情報を告げる。

「アセンブラについてはコマンダーとプラントのどちらかを抑える必要があります。この場合、コマンダーは間違いなく久利原直樹でしょうが、プラントについてはよくわかっていません。あるいは人の可能性もあります」

人間を苗床にするという彼の発言に、主に研究者達が騒ぎ出すが、彼は続けた。

「停止コードについてはフェンリル、GOAT、アークで合意した場合のみ使用できるようにしてあります。これは情報漏洩を防ぐためですが、これが使えるかどうかは実物がないのでわかりませんのであくまで保険と考えてください。問題は久利原直樹の死亡がトリガーになっている場合です。停止コードが有効なら問題ありませんが、その辺の対策は専門家であるアークにお任せします」

軍事学校からの評価は突き抜けるものはないが、戦力を最大限発揮させることができる指揮官として得難い才能の持ち主だというもの。「ドミニオンと戦う上での問題は、神父と呼ばれる存在は一人でない可能性があることです。オリジナルはすでに死亡していますが、相性がいまいちと感染するみたいです」

電子体の偽装というより書き換えという技術について、橘聖良曰く不可能ではないとのことだ。

「原因はバルドルとの接触が原因だと思うのでさっさと破棄することを推奨します。ついでにそちらで保護しているコネクターを返してもらえませんか？ バルドル解体したら無用かと思えますし、人間があれを統御しようとして、数十年経っても無理なので、今後どれだけ続けても無理でしょう」

間違いなく彼はコネクター、つまり水無月真の現在の所在とその役割を知っている。

「それについては別の場所で」

「当方としては後々の面倒を避けたいから筋を通しただけです。あなたたちはメンツを守る。俺達は仲間を返してもらおう。それができないのであれば、俺達は抜けさせて貰います。当然そこからは政治の場で戦うことになるでしょうがね」

何より、灰色のクリスマスと称される事件に前後して、個人としては莫大というだけの資金と、それを背景とした有力者との繋がりを持つ男。もし軍人として歩みをはじめていたなら優秀な軍政家となるであろう。

「……バルドルは解体する」

「長官？」

長官とはGOAT長官の私ではなく、極東州の代表として参加している宇治原八雲長官のことだ。

「そもそも猫にピアノの上を歩かせた音の繋がりが曲として聞こえた。そんな奇跡を体現するのがかのノインツエーンだ。どれほどインテリジェンスなアイデアを持っていても、再現はおろか扱えきれなければ意味が無い。あの戦争で失った物は、ノインツエーンの技術である時点までは回収できたが、それ以降はどう見ても赤字だ。彼の弟子である橘社長に聞きたい。あれの遺した技術の解読に費やす時間と予算を別の分野、例えば宇宙開発などに回すのはどちらがより効果的か」

「おそらく後者でしょう。彼の遺した技術は魅力的だけど、一般人が狂人を理解することはできないもの」

「二度目の時点で解体すべきだったが、データを引き出せるのではないかと試行錯誤した。結果として門倉八重を失った。その時点で止めるべきだった。もういいだろう。それともセカンドやデザイナーズチャイルドを含めた人の衆知はノインツエーンという個に劣るものか？」

長官が我々を見渡す。

「我々は半世紀、長くても1世紀先という近未来にのみ責任を負えばいい。それ以上を背負おうというのは傲慢だ。そうではないかねジルベルト大尉」

「難しい問題はそちらでお考えください。私は自分が安心して眠るために最善の努力をするだけです」

20代の若造がこのプレッシャーの中でも平然と言葉を返す。果たして自分の部下にこれほど肝の据わった者がいるだろうか。そして長官は心の琴線にふれたのか、一瞬表情を消し、そして声を立てて笑った。

「君の物言いは非常に人間的だ。確かに食事をきちんとし、枕を高くして眠れる以上の贅沢はないな。桐島長官、君達が遺産を隠し持っていることは知っている。だが、宝箱が無くなれば鍵は要らないだろう？」

私は軍人であることに誇りを抱いているが、軍事というのはあくまで政治の一要素である以上、コントロールから離れるわけにはいかない。だが彼は、ジルベール・ジルベルトははじまる前に根回しを済ませていたであろう。

レインのこともあるが、できるなら手元に置いておきたい人物だ。

「被験者水無月真は、明日1200を持って解放します」

理想より現実を取った瞬間だった。

side 門倉甲

「まこちゃんの実体が見つかった!？」

「命に別状は無いようだが、リハビリが必要だと診断された」

俺の中に溶けた門倉甲の知識から、それが茶番であることを知るのは今話している上官と、今はまだログアウトできていない当人と、余計なことを知ってしまった俺だけだ。最愛の女性に対して黙ってきいたことは心苦しいが、世の中知らなければ良かったこともある。特に直情的な空にわだかまりを抱くなどというのは無理な話だ。

「すぐ会えるの?」

「しばらくは絶対安静だそうだし、何らかの後遺症があるかもしれないな

いからアーク系の病院で検査をする必要があるので、今回の仕事が終わったら会いに行つてやれ。もつとも橘女史が普通に生きているのだから問題がない気はするが」

「わかった、本当に良かった」

涙ぐむ空と、もらい泣きするレインを尻目に俺達は部屋を出る。

「天災でも起こらない限り、世界の命運は一握りの誰かが定めることだ。ましてや人間の命なんて軽い。まあ軽いが故に水無月真は目こぼしをされた」

ジルベール・ジルベルト。俺の上司で、デザイナーズチャイルド。そして俺の中に溶けた門倉甲にとつて理解できない生き物。決して尊敬できる訳ではないが、こいつはセカンドとかデザイナーズチャイルドとかの枠ではなく、一人の人間として戦い続けている。何故そこまでやるのかと疑問に思ったことがあったが、ようやく似たような立場になって理解した。

孤高にして孤立。誰もこいつの本質を理解できないが故に自己満足として久利原先生を殺したいと望む。別に先生を憎んでいる訳ではない、救いたいわけではない。仕事だからとか言い訳もしない。久利原直樹いや、その深奥にいる神父とその存在意義をかけて戦いたい狂人。

斯くしてこの世界は狂人に救われることになるのだろうか。そんな俺の心を見透かすようにジルベルトは嗤う。

「お前は門倉空とその周辺だけを考えて生きろ。知識が増えたからといって余計なことを考えると容赦なく死ぬし、それがその戸惑いが他の人間の害になるなら殺すぞ」

兎にも角にも俺の知識だけでは世界は救えない。政治的解決を目指すにはこいつの人間としての意志いや執念こそが重要になる。

「明日で決着を付けることができれば、それこそしばらくは楽になれる。もしたら嫁さん連れて父親ときちんと話してこい。これは命令だ」

「たまにお前が善人なのか悪人なのかわからなくなるんだが」

「善悪、喜怒哀楽、排他、利己、献身、崇拜、愉悦。そういうあらゆる

概念や感情を内に秘めた存在を人間というのだよ門倉甲。それだけは機械には理解できないだろうな」
作戦開始まであと17時間14分

D I V E X 5 姉と弟

君は何故戦うのかと聞かれたことがあったが、その時俺の言葉は「本能」だと答えた。

「ドクターもそうだと思うが、デザイナースチャイルドという生き物は総じて安定していない。肉体的な安定ではなく精神的な安定に欠く。この地には鷹が鷹を生むという言葉があるそうだが、それでもそれは連綿と続く遺伝子の持つポテンシャルを最大限発揮した結果に過ぎない。だが、デザイナースチャイルドは『目的』を持って作られた。そして生まれた子は常に親の目によって審査される。普通の子なら見捨てられるかもなんて微塵も思わないだろうが、残念ながら俺達はそうではない。幼少期に刻まれた恐怖が我々の心を苛む」

鳳翔という場所はそうやって傷ついた人間が傷を舐めあつて生きる籠だった。彼らは世間的に見るならエリートだが、心が折れて、歪な修理を受けて現実に解き放たれる鷹だった。少なくとも彼らは鷹で無ければならなかったのだ。

「できる奴は本当にできるんだが、中途半端はいけない。いつそのこと突き抜けてしまえば楽だったろうに」

当たり前のように成長し、母となり、老いていくという生き物のルールを無視した目の前の女性のよう。与えられた才能を無駄遣いすることを由としたあの男のように。

「ジルベール・ジルベルト、君は凡人ではない。それは才能的な意味ではなく精神的な意味でだ」

世の中にはマッドやら狂人と呼ばれる人種が色々いる。目の前の女もその一人であるが、あいつに生き方を教えた彼女の分析力を侮ったことはない。

「今考えるとだが、私を造ったノインツエーンは己の欠点を他者で補おうとした。結果としては失敗したわけだが、その残滓がデザイナースチャイルドと呼ばれるようになった。デザイン段階から目的意識が歪だったのだから、製品に不十分があつてもおかしくない。どれだけの人間が造られたかは分からないが、幾人かの人間は天才と呼ばれ

るようになったものの、偉人は今まで一人として登場しなかった。成功した彼らは、社会システムに興味が無かったからだ。天才は問題を容易に超克するし、そもそも問題が起きる現実の方を非難した。要は社会システムに対して働きかけをこななかった。自分が機械的になれる分野には強かったが、他者を介在する分野では大成しなかったというわけだ。その辺も設計者に似ているな」

彼女の専門はナノテクノロジーだが、デザイナーズチャイルドについては誰よりも詳しい。こんな世の中だから死はありふれたものになつてしまつているが、実験で使い潰れるような死に方を見た訳ではない。どれだけの同胞きょうだいの死を見続けたのか俺には想像もできない。彼女ほど人生が濃い人物はそう多くはないだろう。

「セカンドもセカンドで問題がある。彼らは現実と仮想の境界線が薄い。脳症がその最たるもので、橘聖良社長なんかは既に割切つているが、矛盾を解決するために2世代くらい掛かるだろう。どっちにせよ新人類を称するには足りない訳だが、話が横道に逸れたな。私が君を知つたのは灰色のクリスマス以降のことだが、正直言つて君との距離感を測りかねていた。どうして君は私を避けたのか。私を通して誰を見ているのか。まあ、君が概念的な意味で並行世界の住民であることを知つた今では、向こうの世界で私と何らかの繋がりがあつたのだろうと想像できるのだが、基本的には冷静を装うことができる君が……」

言葉には出なかつたが、その目が「何故意識して自分を避けるのか」と問いかける。いつかは聞かれると覚悟していた。明日死ぬかもしれぬのであれば目の前の女にだけは伝えてもいいだろう。

「そうだな。有り体に言つてしまえば『俺』はドクター・ノイを知っている。水無月空は水無月真の姉として、門倉甲は彼女の思い人として知っている。桐島レインについては、まあ今となつてもこつちでの付き合いの方が長いから色々な。久利原直樹のことも知っていた、アレに神父が潜んでいるのも予想していた。アセンブラの暴走については自分が生き残る程度の時間は稼げたから由としよう」

「それは君の主観か？　まるで客観的に情報を得ているかのように聞

こえたのだが」

自分でも話す内容に違和感を感じるのだから、聞いている彼女はもちろん疑うだろう。

「正直に言えば『俺』ではない『ジルベール・ジルベルト』を通じてだ。情報として詳しく知っているのはドクター・ノイ、水無月真、桐島レインの三人。更にいえば門倉甲の彼女は渚千夏だったな。水無月空の印象は過保護で空回りだ。そういった意味では橘聖良とよく似ている。魂については未だに解明されていないが、遺伝子レベルというなら身内なのだし似ていてもおかしくないのかもしれない」

こういう情報の分析に強いのは橘聖良の方だ、彼女は裏技は使えるし、ある程度詳しいがあくまで囁っている程度だ。

「ESに墜ちた俺は、気がついたらこの世界のジルベール・ジルベルトになっていた。これを知っているのは、ついこないだ自分と自我融合を起こした門倉甲とあなたで二人目だ。さらに言えばアセンブラの停止コードは取りあえず知っているから、世界が滅亡する可能性は皆無だろう」

詰まるところこれから起きる戦いは、俺たちの学生時代からの因縁を目に見える形で解決するための儀式に過ぎない。目に見えるケジメは付けるぐらいしか本当に意味がなく、巻き込まれる人間は知らないとはいえ、運が悪い。ぐくぐく近い未来の予測が終わった俺は消え去った後の世界に思いを馳せる。あの世界についてはこんなことが起きずに終わったのだろう。ノインツェーンが異常だとしてもそれ以上の異常の前には意味が無い。どうせ搦め手で終わらせたんだろう。真似することはできただろう。だがそれでは意味が無い。生きている意味が無い。門倉甲の言う水無月空は、その辺が理解できなかったようだ。感情を持ったシステムになってしまった彼女にそれを告げるのは酷だが、目の前にいたらおそろく言ってしまうだろう。「過去に目を向けるのは悪くないが、過去にこだわるのは辞めろ。周りを不幸にする」

後悔するのはいい、だが失ったものの代わりを見つけた方がいいと思ってしまうのは、喪失したものが俺の中に無いからだろう。遺伝

子上の親に興味は無い。灰色のクリスマスでこぼれ落ちた鳳翔の同窓にも興味がない。久利原直樹に興味があるのは、護るべき者を失い、仲間を切り捨ててまで欲しいものがあつたのかという狂気の源泉だ。

「思春期の若者は大抵自分探しをしようと思う。アイデンティティの確立を進学や他者との交流で達成しようとするわけだ。いくら鳳翔の生徒に問題があつても卒業してしまえば一区切り付く。仮想世界が当然のようになってしまつてからは年齢と地位が一致しないこともしばしばだが、それでも子どもはどこかで大人になる為に区切りを付けないければならない」

平和な環境なら学校からの卒業であるし、危険な環境でも何なかの区切りは付けるだろう。しかし俺たちは灰色のクリスマスとかいうよくわからないものによつてそれを中断した。もちろん軍事的な訓練学校は卒業して現在はPMCとして活動し、大尉待遇であるわけだが、体が成長しても心が区切りを付けたがつている。

「結局、今回のアセンブラにまつわる事件は、家族を失つた男の自分探しに巻き込まれた学生たちの自分探しを終わらせるために起きたと俺なら報告書に書くな。政治的な思惑とかそういうのはお偉いさんに任せればいい。だからこの戦いで生き残つても俺はもう軍務には携わらない」

「確か君統合軍からお誘いを受けていなかったか」

「誘いは受けたが乗るとは言っていない。灰色のクリスマス前後でかき集めた金は、活動資金として運用していたが、多目にボーナスを渡しても人一人ぐらい普通に暮らす程度の額はある。それで一旦自分の心を整理して自分のしたいことを決めるさ」

宇宙開発事業でもいい、荒廃した大地の再生事業、それこそナノテクノロジー分野でも良い。自分が成功させる必要が無い。所詮ジルベール・シルベルト(おれ)の資質は一芸に特化した何かではない。ただ、時間を掛ければそれなりに成果が出せるというのはいい。そういう生き方ができる人間は生き残れる。目に見える功績としてはこれ以上必要あるまい。だが、それもこれが終わってから考えればいい。

「ならば、どうなるにせよもう私達は出会うことはないだろう。さらばだ私の弟。私は君のことを誇りに思う」
「さらばだ我が姉。自分から会おうとは思わないが何かあったら連絡をしてくれ」

そうして俺たちは握手を交わす。

出会いがあれば別れがある。俺にとって知らないけど知っている彼女は、ある意味特別な存在であった。だから会いたく無かった。あの男を通しての彼女をどうしても意識してしまうからだ。今なら分かるが俺は子どもだったのだ。彼女はあの男にとっても俺にとっても必要だった。ただ求めるものが違った。彼女は俺にとって血の繋がりは無くとも姉だった。少なくともあの男のように恋人にしたいとは思わんが、生き方を尊いと思った。俺たちの関係はそれでいい。

D I V E X 5

姉と弟

side 水無月空

うちの司令官、ジルベール・ジルベルト大尉。指揮官としての適性は出身訓練校の歴史でも五指に入る才能の持ち主で、正式に統合軍士官学校へ進めばという声もあつたがアイツは断った。

「地位が欲しいなら最初から士官学校を目指した。技術が欲しいから訓練校を選んだ。それだけだ」

アイツは自己完結する能力、正確には電子戦能力を欲したが、残念ながら一流に踏み込むか踏み込まないかのレベルで、私や甲のような才能が無かった。セカンドとデザイナーズ・チャイルドの違いと言えどそこまでだが、物資の調達や資金の運用、情報の精査など全ての分野に於いて優秀なものだから、士官学校に言っていたら今頃中佐になつていていいのではないか、雑談の中でレインと話したら彼女も同意した。

「お父様も大尉のことを話したら高く評価しました。在野に置いておくのは惜しい人物だが、私の安全と天秤に掛ける訳にはいかないと。

公人としてはどうかと思うのですが」

そういう彼女と「大佐さん」こと桐島勲少将の仲は以前より悪くないというところだ。もちろん命がけの仕事に就くことを父親としては許容したくないだろうが、この物騒な世の中で計算ができるジルベル・ジルベルトがいるという状況は悪くない。

「しかし、今更だけどレインも物好きよね。どうしてあんな偏屈者がいいのか」

「と言われましても……空さんは甲さんが好きな理由を単純明快にいえませんか?」

「うーん言えるような言えないような。でもほら、何かあるでしょ。キユンとしたエピソードが」

「いえ特には。でも、黙々と仕事をする姿は、何となく父と似ているかも。自分ではファザゴンとか思っていないかったですけど」

父親を憎んでいても父は父という訳だ。私には理解できない感情である。

「でもアイツ、レインのお父さんと違って感情の機微には疎くないわよ。というか何だかんだいってマメじゃない? テッドの奥さんの誕生日の為にナノフラワー送ったりさ。意外と家庭持ってますええ、気が効くタイプかも。でも普段の言動がネックか」

交渉時のアイツは一流のネゴシエーターであり、戦闘時のアイツは命を賭けるに足る司令官なのだが、プライベートでは毒舌なのだ。私とは出会った頃から挑発してくる彼とはケンカ仲間という単語がしつかり合う。もう一人のケンカ仲間とは私が勝ち逃げした形で終わった。

「ねえレイン、私は多分運が良かった。あなたも混乱発生当初に甲と一緒にいて、割と早く私たちと合流できたのは運が良かった。私の友達の一人は運が悪かった」

「渚千夏中尉……全身義体化でしたね」

「グングニールの余波だって。もし私があの時ジルベルトに助けられなかったらアセンブラで分解させられていたか、グングニールで蒸発していたでしょう。だから私は運が良いのよ。使い切っていないの

か、死ぬ運命を覆したのか知らないけどまだ生き残っている」

アイツはこの戦いが終わったら解散すると言っていた。私としてもまこちゃんを引き取って、甲と三人で暮らしたいと思っていた。古参の仲間達は次の戦場に向かうか、市井に帰るだろう。少なくとも世界の存亡に関わるような事態に巻き込まれるようなことはない。せいぜいが企業同士の小競り合いや、国とゲリラの闘争に参加するレベルだ。

「レインは結局どうするの？ 私の勘だとアイツ失踪するわよ。すでに報奨金は振り込まれている訳だからもう後腐れないしね」

最初は私達だけだった。少しずつ仲間が増えて、政治的にも食い込んで、今がある。今生きている、そして前に進めているのはアイツのお陰なのは間違いない。嫌な想像だが、アイツいなくなったらまず金銭面で詰む可能性が高く、生の情報の精査なんて技能は特殊な才能だから行動範囲は著しく狭まる。政治的には聖良さん経由という紐付き。いやそもそも私は多分死んでいただろうから、前提が全く違ってくるだろう。

「今は違うと思いますけど私友達って空さんぐらいでした。だからというか何というか置いて行かれるのが怖かったです。命がけの世界に飛び込むのと、ひとりぼっちの世界で生きていくこと。どっちがいいのか考えたから今の私があります。最初は考える余裕もありませんでしたが、この仕事に慣れてきて少し余裕ができると考えるようになりました。自分はここにいていいのだろうか。大尉はそんな私を見て、仕事だと割切ればいいんじゃないかと言ってくれたんです。ジルベール・ジルベルトという人は本人は否定するかもしれませんけど維持するために意外と気を配るんです」

なるほどあの男の本質はやっぱり維持なのだ。自分のテリトリーを守るために努力をする。その方向性が割とおかしいが、味方であるなら心強い。

「ジルベール・ジルベルトはアセンブラに関する諸権利を放棄して、優先交戦権を獲得したわ。軍やフェンリルが梅雨払いをしてくれる。ドミニオンの教主グレグリー、そして久利原先生から真実を聞かなけ

ればならない」

しかし、そのアセンブラの情報に彼はどこで手に入れたのだろうか
と思考の海に沈みかけたが、苦笑した。

私にとつては行方不明のまごちやんが見つかった今そんなに無茶
はできない。だが、気を緩めれば死ぬのがこの業界だ。

「備えよ常にか」

「たまに甲さんが言いますねその言葉。有名な人の教えなんですか」

「ええ、もっとも教えてくれた人には備える時間がなかったのかもし
れないけどね」

亜季先輩の話、フェンリルのモホーク中尉の話を聞く限りでは先生
は生き急いでいたように思える。あの頃の私たちは子どもだった。
IFを言いだしたらきりがないとはいえ、どこかで止めることができ
たのか、やっぱり無理だったのか。だが、現実としては生かして罪を
償わせるという解決策を取ることはもうできない。彼の願望が何
だったのかはわからないが、すでに殺しすぎている。故に自己満足の
ために殺すというジルベルトの意見は全く持つて正しい。大げさに
いえば世界の存亡にかかわる問題の解決だが、私たちにしてみれば決
着をつける意味しかないのだ。ジルベール・ジルベルトは博打を嫌
う。やろうと思えば単独でもできたのに後のことを考えて行動する。
かくして準備は整った。ここから先は鍛えぬいた経験と運だけで生
死が決まる。

「あいつはこういうことを口にするのを嫌がるだろうけど、一段落付
いたら甲と結婚しようと思っっているの。恋人だったし、基本的にやる
ことやったし、胸のつかえが取れたらもうね」

「結婚式を挙げるのでしたらぜひ呼んでください。幸福のおすそ分け
もお願いします」

レインは私くらいしか友がいないと言ったが、女同士の些細な話が
できる相手はレインぐらいしかいない。そういう仲なのだ私たちは。
「任せときなさい。造花ではない生の花束を用意して渡してあげる
わ」

この灰色の空の下では以前より不幸が増えたのかもしれないけど、

それでも私たちは生きています。明日を生きるためにこれから最後の決着をつけなければなりません。

D I V E X 6 宿命の交わる時

ジルベール・ジルベルトは高レベルになんでもこなせる点が周囲から評価されてきたし、自身も自覚していた。20代の人間として彼ぐらい経歴を持った人間はそう多くないと言われている。知識と技能に偏りが無いので、真つ当な部隊運用から、ゲリラ戦、ハッキング、リアルでの暗殺、要人の護衛など本当に何でもできるが故に手段を選ぶことができる。

ただし、それは指揮官としての評価であり、シミュクラムの腕に関しては彼が率いる「アステリズム」の内でもギリギリ五指に入るといったところで、二大エースが強すぎることを加味してもそれほど評価は高くない。どちらかと言えば、どんな時でも生き残って目的を達成させることができる人間と評価するクライアントもいたがそれは別の話だ。

「お膳立ては終わった。俺のモラトリウムを奪ってくれた諸悪の根源にカチコミに行くぞ」

作戦を選ぶ自由がある程度与えられた彼は一番戦いやすい方法を選んだ。

すなわち、世界を駆け巡った時に得られたコネを使って高コストの同志を呼び、禁則事項で培った政治力で後顧の憂いを無くす包囲殲滅である。

ここで少しだけ過去を振り返ろう。

退場した『門倉甲』にとつて灰色のクリスマスとは全てを失った事件だった。多くの人間にとつても日常の崩壊を意味した。もちろんこの混乱を機にのし上がった人間が一握りいるだろう。だが2人の人間だけが、それを新生、あるいは再生の日だと位置づけた。

一人は久利原直樹の中にいる存在であり、もう一人はジルベール・ジルベルトである。ジルベール・ジルベルトは、久利原直樹を憎む気持ちは全くなかった。精神が耐えられずに運命の奴隷に陥った程度に思っている。それでも「彼」は良い人間だった。あの時無理にでも止めることはできただろうか。あるいは運命に挑んで負けたのは久

利原直樹ではなく、ジルベルトの方だったかもしれない。彼は人間の善性も悪性も信じていたが、奇跡を信じるよりは自分を信じる性だった。

ジルベルトは知らない。結果的に「彼」は勝てない。救ったのは自分が良く知る「あの男」であることを知らない。

D I V E X 6

宿命の交わる時

ドミニオンとの戦争は圧倒的優位に進んでいる。

傭兵と軍が連携し、アークがバックアップするこの状況で、彼らができるのは信念に基づいて殉教することだけである。彼らは社会的に見て悪であるが、悪と悪がお互いに正義を掲げて争うことは有史以来何度も起きた。歴史書に乗っているのはごくわずかである。多分歴史書にはサイバーグノーシスを掲げていたテロ組織ドミニオンはこの日を大打撃を受け、後日壊滅したとでも記されるのであろう。無論政府側が勝利すればの話だが。

ドミニオンは自分を捨てて戦える狂信者の集団だが、強者は居ない。門倉父と桐嶋父がかつて戦ったとされる神父はその特性上面倒そうだが、門倉、水無月両名プラス自分で何とでもなる。

だが、目の前の機体を見て俺は考えを変えた。雪あるいは天使を連想させる白いシミュクラム。ジルベルトはその可能性を無意識に排除していたが、考えれば彼女もまた関係者だ。

「噂のドミニオンの巫女か。さてどうしたものか」

『ジルベルト、あれはエースを当てないと無理よ。私か甲を残して先に行きなさい』

うちの二大看板の一人は、俺では勝てない。勝てるとしても時間が掛かると踏んだ。

「そうしたいところだが……少尉、どれくらいなら通信遮断ができる」

『それは味方も含めてですか』

「そうだ」

『120秒が限度です』

「分かった、では頼む。聞こえるな水無月真。お前の実体は取り返した。今なら捕えられていたということ。司法取引が認められる」

『あんた何言ってるの。まこちゃんがあのだミニオンの巫女って』

空が混乱するのも無理はない。電子体も実体も不明で、この作戦前に見つかったと俺から聞かされていたからだ。

『あなたは誰です。いえこの世界は今までのどの世界とも違う』

その言葉の意味を理解できるのは俺と門倉甲、そしてノインツエーンの眷属である神父Ⅱ久利原直樹だけだ。

「さて……俺が知っているのは多分枠外が理由であるがゆえに正直どうでもいいのだろう。俺も目的は何処までも八つ当たりでしかない。余談だが、君がどれくらい経験を積んでいるか知らないが、一番君を知っているのは多分俺だ」

あるいは『門倉甲』の方が上かもしれないが、癖を知っているわけではないだろう。何より。

「あのシミュグラム、ネージュ・エールは変則的遠距離型だが、本質的には変化がない」

ビット攻撃と多彩だが、待つより攻めるスタイル。『彼女』はおとなしそうに見えてその本質は攻撃的だ。機動力で向こうに勝てるはずがないが、対処法が無いわけではない。一番相性のいいのは同じロングレンジからビットより攻撃速度の速い空だが。所謂初見殺しが多いのだ。

「どうする、俺なら勝率8割、お前なら確率半々だが」

確かに俺の機体でまともなぶつかれば水無月真に勝てないだろう。二度も戦えば確実に負ける。だが初見殺しはこっちも同じだ。

『いいわ、あたしが残る。久利原先生の所にはあなたと甲が行きなさい。レイン、サポートをお願い』

『はい、わかりました。大尉、中尉ご武運を』

「では行くでしょうか、行くぞ中尉」

こうなることは想定していなかったが、むしろ都合がいい。ここから先は野郎オンリーで女子供は立ち入り禁止だ。

『全てが想定外の世界か。真ちゃんの言葉は正しいが間違いだ。未来なんてみんな想定できてるように見えて簡単に想定を超えていく』
「そうかもしれないな。俺もお前も存在として超越しているかもしれないが肉の体に脳みそと心臓が詰まった、腹が減れば眠たくもなる、満たされれば盛る人間であることに変わりない。それこそ伝説に聞くネットワイヤードゴーストやら機械の体であるノインツエーンなら別だろうがな」

翼の無い人間が機械を使って現実や仮想で飛ぶことはできても鳥のように思考しないように、人間の限界の本質はほぼ仮想に置くことで生理的に人間を止めている橘聖良でも変わらない。さて肉の体と己とは異なる思考を宿した久利原直樹は前者か後者か。

久利原直樹は一人佇んでいた。

「待っていた。おそらく最期の瞬間に立ち会うのは君か甲くんだろうと思っていた」

「外見と中身が異なる人間のパーティに一般人に招くわけにはいかないだろう。今のあなたは久利原と呼ぶべきか、グレゴリーと呼ぶべきか」

「今は久利原直樹だと言いたいところだが、君たちはアセンブラを止めに来たのだろうか」

「いや正直にいうとアセンブラの増殖式と制御式は此方で確保しているので、それはおまけだ。門倉はまた違うだろうが、俺はあの日の問いに答えてもらいたいだけだ。同志を犠牲にした結果は、何かプラスになったか」

欲望は肯定されるべきだ。欲望と欲望がぶつかり合い闘争が起きるのは仕方がない。だが、それによって目標を誰も達成できないのであれば意味がない。

久利原は答えない。当然だろう、自分が望んで破壊したならしかもか
く意志と体が乗っ取られて暴走したでは誰も救えない。

「俺があの日失ったものは仲が冷めた両親と学校生活ぐらいだ。だからそれに関して俺がどうこういうつもりは毛頭ない。正直にいうと

あの混乱の中で、金銭的に儲けた一握りだったからな。まあその儲けた金や傭兵としてちまちま稼いだ金も今回の作戦で全部掃いた。生きるために、維持するために金は必要だが、金の為にあくせくするのは大変気分が悪かったわけだが、それを捨ててみたらとても軽い。しらがみの多さから浄化して逃げたドミニオン諸君もそんな感じだったかもしれないな。まあいい。俺の中では聞きたいことは済んだ。後は門倉甲に任せよう」

久利原直樹のピークがいつ頃かは知らないが、百戦錬磨の『門倉甲』と融合し、肉体的にもあと数年でピークに達する門倉甲に仮想で勝てるはずがない。自分なら真つ当に戦わない。仮想でダメなら現実で対処すればいいがまあいいだろう。俺がやりたいのはその後だ。何よりこの戦いが終われば俺はドンパチから引退する。門倉は結局は困っている人間を見捨てられない男はどこかで戦うのだろう。

……

さて、どれくらいの時間が流れただろう。10分か15分か。久利原直樹は速度重視の攻撃型。対して門倉甲はオールラウンダーだ。正直遠距離攻撃こそ好みではないが、高機動で補える。本当に相性だけの話であれば高機動かつ空中戦も得意な水無月姉を連れてくるべきだったのだが、経験はないが姉妹喧嘩は早めにしておかないとこじれるからな。

どこかの『門倉甲』の記録によればアセンブラの起動開始までの時間制限がある時もあったそうだが、現状その傾向はみられない。

時間勝負ならともかく、万全ではない久利原直樹など恐れるものではない。やがて彼の機体は動かなくなり。彼の電子体は放り出された。

「遺言は聞かない。ただ覚えておこう、贖罪かもしれないが、優秀な生徒を育てた先生がいたことを」

「生徒でなかった君がそう言ってくれるのであれば私の人生もそう悪くない。ああ遺言ではないが、亜季君とモホーク、真くんにはすまな

かったと」

久利原直樹の電子体が爆ぜる。そして俺が待ち望んでいた相手が出来た。

「バルドルの中で静かに寝ていれば良かったものを」

俺に平穩は無かったが、取るに足らない日常はあった。久利原直樹の中にいたグレゴリー神父はそれを破壊した。ならば俺とて彼の信仰を破壊しても良いだろう。

「政府はバルドルの破棄を決定した。どんなに中に眠っているお宝じょうほうが貴重でも、開けられない扉と関わる度に失われる人材に諦めたらしい」

この作戦と同時進行でバルドルは停止作業に入る。トランキライザーも停止する。まあ嫌がらせとしては上々だろう。

「お前たちはアセンブラを使うことでこっちの行動をコントロールできると思ったのだろうか、前提が違う、眠り姫は妖精の魔法で死なないようになっているが、最悪の眠り姫の生殺与奪はこっちが握っている。いかに凶悪であろうとも弱者であるテロリストができるのは所詮一局集中だ。その一極集中は想像できないから怖いのであって、予想できるのであれば怖くない。おっとしやべり過ぎたか」

「そんなの聞いていないぞ」

「こっちにいる人間で知っているのは、お前の親父さんとレインの親父さんだけだよ。この大規模作戦こそが最大の陽動作戦だったわけだ。世界の破滅の危機に対してバルドルなんて些末な問題と誰もが考える。しかし、アセンブラをどうにかするのは対処療法であって、根本的な原因を切除しなければ意味がないだろう?」

『門倉甲』の主観によるジルベル・ジルベルト像は未だによくわからないが、伝えに聞く限りではサディストの嫌なやつである。翻ってあの男はどうか。勝ち負けに興味はないが思考の誘導が好きだっただと思える。さて自分はどうかと、勝つことが好きだが、ルールを付けたがった。それ以外では寛容であって面白いだろう。贅沢は大して好きではない。女を待たす趣味もない。もっとも、こんな変わり者に興味を持っている桐嶋もレイずきンの目をだましつつ適当に遊んでいたが。

「仮想の世界で事足りると思っっている存在は、現実には足を掬われる。お前の負けだよグレゴリー神父」

人の力とは何かと問われれば、数である。烏合の衆と言われることはあっても、少数が多数に対して対処するのは難しい。それを覆すには超人的な力がなければならぬが、ノインツェーンはともかく、グレゴリー神父は神出鬼没が手柄の宗教的指導者でしかない。そしてその程度であるなら俺でも事足りる。

過去に神父と戦った門倉父から聞いている、門倉甲からも傾向を聞いた。そして理解したがおそらくだが、戦い方は進歩していない。「つまらん」

想定から一步も踏み出さない、ああお前は強いのだろう。だが、結局は強いだけだ。その妄執に新しい色は加わらない。初志は貫徹するだろう。変化がないから。だから俺は普通に勝てる。

「俺は久利原直樹から一っだけ学んだことがある」

身に付けた技術と感覚で相手の装甲を切り裂く。

「俺は『門倉甲』から未来を聞かないまでも、久利原の弟子たちから何度も聞いていた」

三段蹴りからの裏打ちを叩きこむ。

「備えよ常に、俺は天才ではないからな。状況を予測して、予測に近づけるために考えていた」

人間だろうがAIだろうが動きに対して反応はする。だから相手がいるなら試行を繰り返せばいつか当たる。

「さらだば神父。俺だけは感謝しよう。面白い思考の日々をありがとう」

電子体に戻った神父に対して、俺もまた電子体に戻り手にした銃の銃口を向ける。この時のために用意した解放の銘を持つ銃。実用性は皆無だが、電子アイテムなら別に問題ない。

「あなたの僕をあなたの元へ送りましょう」

リベレーターを片手に捨てた信仰相手に対する祈りを口ずさむ俺はかなり皮肉が効いているだろう。

「主よ憐れみたまえ」

「終わったな」

門倉甲は感慨深く呟く。彼の本体は今何をしているのか気になるところである。

「終わった。さしずめ物語が終わわり、現実が始まるというところだろう。お前は大変だな。空を嫁に迎えると思うが、あいつの料理音痴は多分バグだ。お前の母親は料理がうまかったなら、水無月真は母親似だ。かわいそうに」

努力次第で何とかなるタイプもいるが、アレは俺では無理だ。

「そういうお前はレインをどうするんだ」

「さてどうしたものか、捨て犬を連れて帰る責任というものを今一番実感している」

「ああ責任は重要だ。しかし、お前はひねくれ者だが何だかんだで真面目だからそれはできない」

「なるほど、門倉甲は苦労人のようだ。ベースはお前だが、よくも悪くも影響が出ている。まあ、空との新婚生活の上では、疑われないように。まあ水無月真の方にはあらかじめ伝えておいた方がいい。彼女は鋭いからな」

現実の地獄を破壊した男が人生の墓場に足を突っ込むのは勝手だが、どうやら花嫁の方も終わったようだ。

『桐島長官、アセンブラは何も起きないようですね。後処理は任せますので離脱していいですか』

『ああ、ここからは面倒だが大人の時間だ。若い者は掴み取った勝利を謳えばいい。後処理の件でまた会うこともあるだろうがそれまでは自由にしてほしい』

『ではお言葉に甘えて。ところで長官、あなたの宝物の扱いですが』
『宝箱に入れておく類ではないが、扱いは考えたい。何ならもう少し君に預けておこうか』

娘は大事だが、やはりこの人も政治家か。

『それには及びません。私もこのところ仕事が続いたので、家に戻って部屋を整理しないとなりませんか』

『そのことについても折を見て話そうではないか』

面倒なことだ。まあ金の流れを追えば概ねわかるか。

『そうですね。まあ突然捨ててしまうのも問題なので使い道は考えましょう』

通信を切った俺を見た甲は呆れたような、尊敬したようなまなざしで俺を見る。

「知っているつもりだったが、やっぱり俺だったらこんなふうにうまくいかないな」

「適材適所といえばそれまでだ。俺はお前や空というカードを十全仕えた。そして目的を達した。懸案だった水無月真は奪還したのだしそれでいいんだよ」

多分俺は非常にすっきりした顔をしていただろう。

「当初の予定通り今回の作戦をもって部隊を解散する。色々あったが、お前には世話になった。退職金には色を付けておくから新婚生活の足しにしてくれ」

「再就職の斡旋はないよな」

「自分自身の予定も微妙なのに、斡旋なんてできるか」

実のところ、声掛けは色々あるのだが、今一モチベーションが。

「現実を見れば親父さんの会社に入るか、叔母さんの会社に入るかのどっちかだろ。軍も結果的にツテが増えたから縁故で紹介できるぞ。お前の技能ならアグレッサー部隊も務められるが、空は向かないから、夫婦一緒に働くつもりなら親戚頼っておけ」

門倉運輸を継ぐのはお前の役割だし、危険物の取扱もお前の仕事である。

「で、まじめにお前はどうするんだ」

「とりあえずは放浪だな。まあ本当に連絡が必要ならドクターノイにつなげてくれれば対応しよう。空や桐島からの拒否するからな」

しばらく余計なことはゴメンだと俺は両手を掲げる。まずは1年ぐらい前に連絡が取れたマリオの親父の珈琲を飲みに行くとしよう。ドクターは知ってるのだろうかと思ったが、まあ知らなかったらその内教えればよいものとする。

こうして灰色のクリスマスから駆け抜けていた灼熱の数年間は終

わりを迎えた。

D I V E X E N D R A I N

『世界の思想は統一されぬし、紛争は度々起こっている。それでもある日突然訳の分からない内に世界が滅びる危険度は大幅に減った。もちろんそれは公表できるものではないが。』

後はあなたの知る通りだ。初期の目的を遂げた俺たちは資産を分割して解散。門倉甲と水無月空は残念ながら働き口の方向性がそつちしかないので、保護監査されている水無月真と共にフェンリルに入った。銃を置けばと思うが、1年と8カ月で高校生活を終えてしまった半端者が入るのは、軍か傭兵かなんでも屋しかない。元上司としては誠に遺憾のだが、あの二人は基本的に金勘定が大雑把なのでとりあえずは鉄火場に身を置く決断をした。家業を継ぐために若旦那と嫁さんが入ったと思えば安泰とも言えるが、まあ食中毒でドクターのお世話にならないことを祈ろう。

桐島レインは、家に戻った。戻った後は特に知らないが、まだ若いのでから平穏な暮らしをしてみたいところである。

他の戦友、あなたにお世話になった奴らも世界中に消えていった。これから会うこともあるだろうが、二度と俺は彼らを使うことはない。そういうものだと考えている。どこか知らない街で会えたら適当に酒か茶を飲んで別れるだろう。

そういえばマリオの珈琲屋再開してたが、知らなかったのならばひ会いに言っしてほしい。なおドクターの身長は全く伸びてないし、胸部装甲も変わらないことを伝えたら微妙な顔をされたわ。

さて俺はと言うと、分配金とは別に政府から報奨金をもらったので、ご存知の通り世界を巡っている。まあ自己満足の類だが、色々やっている。ああ、もし俺が死んだら口座の金は姉であるあなたに行くようにしているから、その時は土に還ったと思ってくれ、何もなければくたばっていないと思ってくればいい。ではまた』

私は弟から来た既に現代では珍しい手書きの手紙を読んで嘆息した。

「まあ知っての通り、彼が死んでいないのは確かだが、見つけるのは困

難だ。正直諦めて普通の生活に戻るべきではないかなと私も思う」

「ドクター、いえノイさんの仰ることはもつともですが、私も女として決着を付けなければならぬことがあるのです」

「人格破綻者の私が言うのも何だが、彼は面倒くさい男だぞ」

「そんなことは知っています。でも誰よりも大人だと思っっているあの人がかわいいと母性本能が疼いたらこれはもうと思いませんか」

最初から類だったのか、朱に染まったのかは知らないが、もし私の表情筋が仕事をしているとしたら引き攣っているだろう。

「正直、あのメンツでは君は良識派だと思っっていたが……まあいい、それで君は私から何を聞きたいのだ。ああ弟の秘密は教えられないよ。これは私と甲君と弟が墓場まで持つて行くべきものだ。それ以外ならまあ聞いてやらなくもない」

さすがに、ある日突然人格が入れ替わったやら、未来予測ができていたやら何て言ったら狂人扱いだろう。

「大尉、いえもう大尉ではありませんね。ジルベルトさんは今どの辺に居るのですか」

「何故私を知っていると思う」

「女の勘とは言いませんが、強いて言うのであれば、あの人は意外と出不精です。確かに色々と回ったと思いますが、ホームになりそうなところを見つければそこに定住します」

なるほど伊達に何年も副官として彼を見てきたと言うわけか。彼も十分苦労したが、人並みの幸せを手に入れても許されるだろうか。まあ義理とはいえ姉弟を宣言したのだ。それくらいは許してくれるだろう。

「彼は今久利原直樹が暮らしていた地域で開拓をしている」

「確かナノ汚染でダメになった土地でしたよね」

「そうだ、アセンブラでナノ汚染を除去し、再び作物がとれる土地に再生するプロジェクトに参加している。態度こそひどいが、人を使うのは上手いからな。そういう理由で君のお父さんのスカウトは却下された。本人にその気があれば、将来的には軍なら中将、政界なら次官級ができそうな稀有の人材を遊ばせる余裕が極東にはないよ」

再生プロジェクトの成功の道筋を立てるまでの数年間は遊ばせていても、その後は政府のお抱えだろう。確かに甲君や空君は極東で十指に入る天才シミュクラムユーザーかもしれないが、彼らの名声を支えていたのは、ジルベルト君の運用能力だ。軍からスカウトを受けたがそれはパイロットとしてだろう。もちろん簡易的な士官教育を受けているからできなくもないが、教導役には基本向いていない。

「レイン君、ジルベルト君は現地の人間と共同作業をするときは、基本的にジルベルト君が現地の人間と組んで、甲君には精鋭を率いらせただろう」

「確かにそうですね。あの時はそれぞれ別の方がやりやすいと思っていたのですが」

「彼の最たる能力は人材のリソース振り分けに無駄がないことだ。能力と感情をパラメーター化して最適解を出せる。そういう環境だとプロジェクトは進みやすい。橘社長は彼を姪と結婚させて跡継ぎにしたいと言っていた。それぐらい重宝しているわけだ」

まあ話半分だったと思うが、あの橘聖良がそこまで評価するのは彼ぐらいだろう。西野亜季は天才だが、残念ながら経営能力がない。まあ橘聖良自身も経営方面は実家から引き連れてきている幹部任せのところがあるのでどっこいかもしれないが人を見る目は確かだ。モテモテだな我が義弟は。

「まあアレは慣れてしまえば優良物件だ。だから早めに捕まえておけ」

そして私はカードを一枚彼女に放り投げる。

「これを見せればフリーパスだ。ただし絶対に無くさないように」

何せ、極東政府における特務用のIDだ。軍事以外のC級以下の施設ならほぼ入れる。ノインツエーンわの娘たでしか対処できないことと、というのは残念ながらそれなりにあるのだ。まあ餞としてはちょうど良いだろう。

「アレは頭のいい女が好きだが、完璧すぎる女もダメという嗜好的には常識の範囲内だから芽は十分にある」

上には受けがいいが、突発的な問題に対して守りが必要だ。彼女な

らそれを任せられるという思惑は理解しているからこそだが。さて、会わないとはいったが、家族として結婚式に呼んでくれるといいが。

D I V E X

レイン Rain

「済まない俺も専門家ではないが、専門家希望が俺より理論に弱いというのは……そばに居たのにあいつらから技術を少しでも奪おうとする気概はなかったのか」

自分は基本的に使う側で運用能力は周囲からも太鼓判を押されたが、教育には向いていない。ワンランク上げることは可能だが、一から育てるのには向いていない。

「そ、それは……」

「いいか、若草菜ノ葉、お前が亡き両親と、志半ばで散った師の思いを少しでも形にしたいと聞いた。正確には門倉および、西野亜希からの推薦があつたから、次世代農業研究所に入れたんだ」

若草菜ノ葉はナノマシン研究者である若草夫妻の娘で、アセンブラ研究者の久利原直樹の薫陶を受けた、たとえばエリートではないかと思うのだが、その実、元テロリストである。まあ彼女から被害を受けた人間も施設も皆無ではあるが、結果的に彼女はそういう立場の人間だ。まあ、現実的な話をすれば……

「やる気があるのは分かるのだが、実績が伴わなければ、このままだと研究所の食堂のかわいい姉ちゃんポジで終わるぞ」

まあ科学者系には備わっていない家事能力がほぼ完ペキで、顔もいい。ここでいい男を拾って結婚するという選択肢というか、夫を支えて間接的に目的を達成するというのは現実的だからありと言えればありだろう。

短い付き合いだが、人当たりもいい。幼馴染一行と再開したら失恋が確定し、もう仕事に生きるしかないという、ボツチにありがちな思考からの脱却と、経歴的なロンダリングさえできれば、結婚は多分できる。経歴的なロンダリングにしても彼女が何かをしていたわけで

はない。被害者として振る舞えばなんとでもなる。実際のところ、彼らの研究の一端でも覚えてくれれば儲けものと多少の下心はあったのだが、その機転が利くのであれば農業科には入らなかつただろうし、実際そういうノウハウを身に着けていたら、要監視人物扱いである。

結論としては、この女は研究職に向いていない。この手のタイプは、自分の世界を少しづつ広げることではできても、無から有を作るデザインセンスが皆無だし、場合によっては自分の世界を守るための強固に引きこもることもある。

「今更ながら西野亜希は完全に研究者だったな」

あとあいつもその類か。

「水無月、今は門倉だが、あの女が最初から門倉甲を好いていたかは俺も知らんし、当時の門倉がどんな思いだったのか俺にはわからん」

何せ、灰色のクリスマス以前に「俺」が門倉甲に会ったのは、渚千夏とあいつが逢引していた時と、学園祭だけだったからだ。元水無月にしても一回である。「知識」としても若草菜ノ葉に対する知識は殆どなかった。

「だが結果として門倉の一番は両方門倉だったな面倒くさい空だ。あの二人はお互いの良さを引き出せる組み合わせだった。空が料理ができないという欠点があるが、それは水無月妹が必死にやっているから置いておくとして。お前と西野亜季は、過去の門倉甲を見ていたそれが敗因だ」

「じゃあ……どうすればよかつたんですか?」

「知らん。未来は築くことができるが原則的に過去は取り戻せない。その上で聞きたいのだが、お前は過去に縛られて生きていくのか、それとも自分の未来を良い方向にするために生きていくのか。若干イリーガルだがコネのあるフェンリルで働くと言う選択肢を蹴ってこつちに来た意味を今一度自分に問いかけろ」

結局自分の運命は自分で決めるしかないのである。ムードメーカーとしては置いておいた方がメリットがあるが、本人の才能と志向が一致しなければ苦痛でしかないだろう。

部屋を出るとよく見知った顔があつた。この数年間の中で一番会話をした相手だ。

「久しぶりだな少尉、ではないな。改めて久しぶりだ桐島。こちらへは仕事か私事か」

少尉とは言っているが、あのあと今も現役でドンパチしている門倉夫妻と共に全員一階級昇進したみなされ、俺は少佐待遇、彼女は中尉待遇を受けている。ちなみに現在のポストは非公式だが中佐待遇での出向扱い。

「あまり驚いていませんね」

俺の知る限り一番の美人は彼女だ。私服のセンスはちよつとまあアレだが。それでも水無月姉のおかげで良くなったのだ。

「義姉から連絡があつたからな。何事かは教えてもらえなかつたが、仕事にせよ私事にせよ君が俺の目の前にいるなら俺が理由だろう。そして俺は基本的に君の訪問を拒否しないよ」

さて、自分はうまく表情を作ることができているだろうか。

「私今無職なんです」

「いわゆる高等遊民というやつだな。古来女性は花嫁修業の名目でいけたらしいが、俺なんかもう働きたくないし一人で生きるぐらいの金はあるなと思いつつ働かされているわけだが。職に関しては、まあお父上が許可したのなら君を秘書として雇うのはやぶさかではないが」
処理能力は段違いの上、自分好みの珈琲を入れてくれる。

「そちらのお仕事も受けたいと思いますが、オプションを付けて下さい」

彼女の瞳を見て、軽口を言うべきではないことは理解した。

「君が俺に抱いている感情を知りながら今まではぐらかしてきたのは謝る。君は美人で、女性としての魅力もたくさんある。好きか嫌いかでいえば好きだよ。それでも俺は自分のプライベートスペースに人が入るのは好きではない」

結果的に一番信用しているのが門倉甲であるというのは笑えない。次は空だろう。彼女は絶対必要ラインから踏み込んでこない。

「知っています。あなたは人間嫌いのきらいはあっても女性嫌いでは

ありませんし、普通に女性に欲情する。私からすればそれで充分です。昔は部下を連れて娼館に行くあなたに対して組織の運用側としては有用性は理解できても感情的にイラつくこともありましたが。今の私はあなたを良く知っている桐島レインという一人の女です。今なら嫉妬は許容されますよね」

自分に問えば、なぜあの男はノイを好いたのか。救ってくれたからだ。まあ性質的に相性が良かったのだろう。さて自分と桐島レインの関係を考える。救ったのもかもしれない。あれを救ったとカウントすればだが。共通項を考えれば俺も彼女も学校では異質で家族と仲がよろしくない。俺は親近感を持たないというか意識して避けていた。彼女が見ているのを知らぬふりをした。

「どうかしましたか」

「いや、俺の知っている『君』は今いる君より魅力的なのか。正直面倒だと思っただけもある。同じ顔で思考が似てることもあれば異なっていることもある。いい意味で変わっていないのは空だけだ。渚千夏が一番ひどかった」

彼女にしてみれば何を言われているかわからないだろう。これは俺と門倉だけの感傷なのだ。ああ認めよう。嫌悪しながらも俺はあの世界が嫌いではなかった。やろうと踏み出せば可能性はあったのだ。でも勇気がなかった。だが俺は俺でしたかないのだ。

「レイン」

多分、初めて彼女の名を呼んだ。考えてみれば『あの男』がお嬢さんから名前呼びしたのも結構後だったな。

「は、はい」

「1年間はお試しで頼む。それで問題がなさそうなら」

これからも生き続けなければならぬが、人生は長い。一人ぐらい巻き添えもとい、歩む者がいても悪くない。幸い考える時間はたっぷりとある。

「ええ、喜んで」

死後の世界があるかはわからないが、あるのであれば、そつちで見ているがいい久利原直樹。お前がしたかったことは俺がやってやる。

そして電子の海で待っているのであればいつか話をしよう、愚か者たちか紡ぐ、それでも前に進む物語を。

END

鏡面世界のヴェリテ 鏡面世界のヴェリテ1

???

初雪がちらちらと地上に挨拶し始める季節になるといつも思い出す。

彼と彼女は今どこで何をしているのだろうか。

「私も年を取ったと感じるわけだ」

感傷に浸るのは長く生きたものの性である。

「本日も平穏なり」

現生人類は後何人残っているのだろうか。新天地を求めて世界を旅した同胞たちは生き残っているのだろうか。

鏡面世界のヴェリテ1

俺は自分をジルベル・ジルベルトと名乗るべきか、佐藤弘光と名乗るべきか。あるいは自分がジルベル・ジルベルトだったというのは胡蝶の夢であり、目が覚めたら変わらない朝を迎えてたまに幸村たちとバカやりながら会社人として毎日を生きているのかもしれない。「などと現実逃避をしているのもばからしい」

すでに主観時間で何十年たったかわからないが、自分は探さなければならぬ。

「俺が探している君はどこにいるんだろうね」

水無月真を探す旅の基点について語ろう。

ある日自分が所属している学園の先輩で、才色兼備として有名な六条クリスがこんなことを宣ったのだ。

「こんな話するのもあれなんだけど、ジルベルト君って前世の記憶とかない?」

「先輩、電波系ですか?」

「いやいや、まじめな話。私の主観の君と、現実の君はかなり違う生き

物なのよね」

「……もしかして、ご同輩？」

「21世紀を生きた日本人」

「横須賀民です」

「あつ、私草加民。草加市の方ね。いやー原作キャラと違うから違和感あつたんだけど、ヘタレた時が素なのかちよつと疑っていてね。もしかしたらここから1年間で覚醒イベントがあつてイキリ民になるのではないかと観察していたのだけど、何か行動様式が自分探ししている日本人っぽいからと思つてね。もし違つてもごめん、ちよつと忙しくて適当なことを言つたわねでお茶を濁す予定だったのだけど、どうやら似た者同士で助かつたわ。あつごめんね。普段はお嬢様しなくちやいけなくて猫被つてるから、こういう日常トークに飢えててね」

オタ特有の長文トーク。本当にこの人同輩だ。

「でも君もまさか噛ませキャラに転生するとは運がいいのか悪いのか。まあ何があつても高確率で生き残れるのはうらやましいわ」

「えつと六条先輩。原作キャラって何ですか」

「バルドスカイのジルベール・ジルベルトよ。で私は追加キャラの六条クリス。悪役同士仲良くしましょう。とりあえずの目標は灰色のクリスマスの阻止で」

「ちよつと待つて、情報整理させて。話の流れが分からない」

原作って何。この世界がゲーム？ 六条先輩、俺そのゲーム知らないんですけど。

「もしかして並行世界の人間なのかしら。バルドシリーズは分かる？」

「わかります。バルドフォースは主題歌もムービーも名作」

「その次回作は？」

「デュエルセイヴァーでは。いや厳密にはバルドシリーズではないですけど」

「んー……失礼ですがお亡くなりになられたのはどの辺でしょうか」

「PSS3が販売してた時期ですかねえ。いや自分も知識としての記憶

はあるのですが、具体的な時系列に関してはちょっと難しいと言いますか」

「PS3かあ……いや私の趣味ジャンルだと携帯機あれば十分だったから結局手をでてないのよねえ。PS2時代はパラダイスだったんだけど」

あれ？もしかしてこの人、腐の付くジャンルの人なのか。大学時代の友人の水上の彼女の門岡さんが似たような感じだったが。いや初見の人を疑ってはならない。人間触れてはいけない領域があるのだ。

「まあ過去の与太話については、まだ時間的猶もまだあるし後日改めて話しましょう。ゲーム知識がないあなたに言いますが、1年後に世界は崩壊します……とまではいかないのだけど、とある事件によってこの辺は住みづらくなります。ぶつちやけますと、天上でスタンバっているグングニールがこの辺一帯を薙ぎ払います」

「その、バイオハザードの発生とか、突然アヴァターから破滅の軍勢がこんにちわするとかそういうノリですか」

「割と前者ね。わかりやすくいうと、劇場版ソードインパクト未満」

人類溶けるの？何が起きたらそんなことに。

「主犯はわかっているんだけど、残念ながら現在行方をくらませて登場するのが来年の春なのよ。私も一応実家の伝手を使って鋭意調査中なので年内に見つかったら。拘束して電子チップを調整してどうにかするわ」

表情は笑顔で、好きなゲームを見つけたらとりあえず確保しとくねくらいの軽い口調なのだが、目が全然笑っていない。あまり接点がない同級生らがクリス先輩は時折クールになるけどそこがいいとか言っていたが、この人の本質は敵対したら容赦なく潰すタイプで、遠目から見ている方が幸せになれるぞ。

「話が逸れたわね。色々手は打つけど来年11月の時点ですらもうもなかったら私は逃げるから、その時の為に準備しておくのをオススメするわ。お金も出世払いで貸してあげるから大丈夫よ。何なら体で払ってもらってくれてもいいわ。鳳翔は美男美女ばかりだから

ら色々と撈るのよね」

あつやっぱりこの人ふのもの黒だ。

斯くして、六条クリス先輩に巻き込まれた俺は、世界を救うために戦いを始めたのである。

普通に世界を救えれば良かったんだけど、世の中には必然性という名のフラグというものがあることをその当時の俺は理解してなかったのだ。

鏡面世界のヴェリテ2

???

電子の海に佇む魔王は夢を見る。

幸せな夢を、悲しい夢を、愛しい人の夢を。

すでに彼は世界を掌握することができた。

ただ何でもできることは、何もできないに等しい。

目が覚めた時に一人であることを思い出し、牢獄から出たいと希う。

人であることを捨てたことに後悔はないが、ずっとこのままというのは遠慮したいのが人の性である。

鏡面世界のヴェリテ2

ジルベール・ジルベルトの中の人こと俺はどうやら世界の危機に立ち向かわなければならぬらしい。主に自分の平穩の為に。

第一回対策会議として俺は我が校の学生会副会長である六条クリス先輩と一緒に素敵なカフェタイムを興じていた。中の人はともかく彼女は十数年お嬢様をやってきたので所作がとてもきれいなのだ。「対抗手段として色々あるけど、大きく分けて上策・中策・下策があるわ」

六条先輩は指を三つ折る。

「なるべくあなたが分かる単語で話すけど、疑問が出たらその都度説明しますが、まず下策から。キャリアーである久利原直樹の暗殺です。私の親、といっても義理だけど、方々に顔が効くから、現実と仮想の両面から彼の行方を追っています。短期的に考えれば彼の暗殺が一番手っ取り早いですが、問題があります。彼の持つ情報が彼だけではないパターンで、彼が死ぬと私が持っている前世の記憶が意味のない、つまり来年の春ごろに本当の意味で制御されないアセンブラが予想外のポイントで発生する可能性があります。そうなるとアウトです」

「何故そう思うのですか」

「彼、後天的な二重人格なの。で二重人格の元ネタがドミニオン教団というサイバーカルト集団で、本作の主人公の父親とその周辺が壊滅させたけど、末端すべて滅ぼすのは不可能だから、彼が匿われていたとしたらそういうコミユニティね。その集団と知識共有してたらしらみつぶしになるから辛いのよ」

終末思想信者は特に問題がない——よくも悪くもただのテロリストである——が、問題は科学の発展に犠牲はつきものだと思える科学者で、その対処が面倒なのだ。

「中策はバルドルを吹き飛ばします」

「バルドルってバルドバレットのバルドルマシン？」

「そう、私はパラルールワールド仮説を取ってるけど、バルドルとAIの優位性の問題で、バルドル側が優位になるとバルドバレットに、AI群が優位になると、今私たちが暮らしている世界に派生すると思うの。まあそれは置いておいて、バルドルは今はその超絶性能のスパコンとして社会に組み込まれているわ。でその一つに今作のラスボスがインストールされています。これが諸悪の根源なので、これを停止できればまあ、何とかなるでしょう」

「……なるんですか？」

「スタンドアローンだから被害はないというか、詳しいことは私もわからないけど、コネクター適性が高い人だけが接触できるだけで、相性が良くない人にとっては本当にただのスパコンなのよ。久利原は疑似コネクターとなったんだけどね。久利原の野心と、別人格というか浸食された仮想人格の目的は全然違うから、その動きを見せればこっちとしては対処しやすいというわけ。政府巻き込むから後処理が面倒なんだけどね。この辺一帯で数十万の人がいるわけだからその命と引き換えにはできないでしょ」

ここまでは至極真つ当な案というか俺の脳でも理解できたのだが、上策が問題であった。

「特異点を作り出して、アセンブラの制御式を入手します」

六条先輩は一瞬何を言い出したのであろうか。

「あの先輩、ゲームにおける無を取得とかではないんですよね」

「似たような感じではあるのだけど、私たちはこの世界の過去の出来事は情報として知ってるわよね。固定された過去の上に現在があるのは変えようのない事実だけど、未来は固定されていない。本来出会うはずがなかった私とあなたが未来についてあーだこーだ言っている時点でバルドスカイの本来のルートとは違うわけだけど、その変化は些細なもので、世界の収束あるいは歴史の修正力には勝てないわ。私の推測に過ぎないけどアセンブラ実験は行われる。ただどのタイミングで行われるか成功するか失敗するかが不明なのよ。久利原直樹の暗殺が下策と言ったのも実際はこれなのよね。少なくとも門倉甲が星修学園在学中のタイミングなのは間違いない。ただそのタイミングと結果が不明なので余計なことはしたくない」

頭がこんがらがってきたので整理しよう。

六条先輩的には久利原直樹の有無はそれほど重要ではなく、アセンブラの研究が漏れた方が重要である。つまりどこかでアセンブラの実験は行われる。ただし、1年後のクリスマスにそれを実行するとほぼ失敗するので、アセンブラの実験者を変えるか実行タイミングを変える必要がある。

「目指すべきところは理解しましたが、そこから特異点を作り出してアセンブラの制御式を入手するという結論に至るのですか」

「アセンブラの暴走するなら、完全な制御式で暴走を停止させるというのは分かるわよね。バルドスカイのEDの中にはアセンブラの制御に成功しているパターンがそれなりになるのでその知識を手に入ればいいのよ。でそれが可能なのが水無月真を起点とした特異点の呼び出しとなるわけ」

「誰ですか？ その水無月真って」

「原作ヒロインね。可哀想な生い立ちの少女よ。まあバルドシリーズで可哀想じゃない生い立ちのヒロインなんて一握りだからそこに関してあまり気にしなくてもいいわ。私だって若い頃にドミニオン教団に両親殺されて命からがら六条の家に取り取ってもらった過去があるし」

「……随分とあっけらかんに言いますね」

「物心ついたころには養女してたからね。義両親は過去のトラウマで忘れたという認識なんだけど、真実は白鳥さんという人格が六条クリスと融合した経緯で欠落した部分だから何とも言えないのよね。だから今生の両親は六条のパパとママでいいのよ。年の離れた義理の兄も姉もいい人たちだし、甥っ子もかわいい。だから私はあの人たちの普通を守りたいわけ。そんなときにあなたを見つけた。運命を変えたいミングだと思った。多分普通にしていたら、あなたは何となく生き残れたのだけど、済まないわね。何ならこの体好きにしてもいいわよ」

整った容姿に、服の上から見ても分かる均整の取れた体。一瞬いかかわしい想像をしたが、理性がぶん殴ってきたので首を横に二度振る。

「あら残念。私はジルベルトも中のあなたも気に入っているから。気が変わったら言っただけよ。でも残念ね。チートの能力があるならバルドルにハッキングして、情報を引き出すということができたのだけど、残念ながら私もあなたもちよつと不思議な生い立ちのスベック高い学生でしかない。そもそもそんなことできるバグがいるなら私たちが頭抱える必要ないもの」

「そうですよね。原作知識があったからといって、肉体はこの世界のものなのだからできることとできないことがありますよね」

先ほどのちよつと気まずい雰囲気霧散して、再びコーヒーを飲む。

「でその水無月真という少女に対して俺たちは何をすればいいんですか」

「いや提案しておいてなんだけど、出来ることがないのよね。彼女わかりやすく言えば水坂憐の低位互換なのよ。セキュリティはザルにできるし、電脳適性高いけど、それだけ。ただ別の特性があって、自分の持っているデータを同期する能力があるの。よって特異点さえ形成できれば、未来の水無月真からデータを引っ張ってこられるわけ。だから私たちは水無月真にアプローチするというより、特異点の生成

方法の模索がメインね」

「それは好感度の積み重ねで何とかなるものなのでしょうか」

「私は美少女だしあなたもイケメンだけど、残念ながらここはゲームの世界だけど、生きている私たちにとっては現実なのよね。地道に解決策を模索しましょう」

スーパージルベルワールドaftersstory
aftersstory1 魂の在り方前編

ミックスジューズは混ぜると元に戻せない。

某ファンタジーラノベの金字塔のキメラにされた青年も結局元に戻っていない。

だが某人類が全て境界を失った世界、どうやら元に戻るらしい。そういうえば、また劇場版作るとか言ってたが、チャレンジャーかな？

脳内の意味のない自問自答はさて置き、混ぜた電子体というのはどうなのだろうか。

「要素としては理解してるんですけどね。劣化コピーというか人形を作ることもできるならオリジナルが存在しても問題ない」

佐藤弘光の見解からすると不可能なのだが、理論としては可能である。もっとも抽出するというのがかなりイメージ的であるという問題はあるので、より具体的に知る人を用意すればいい。これが某7つの球を集める話なら、「魂をこちらに呼んでくれ」↓「生き返して」で済むのだが。

「それで、私が被験者になるわけか」

「NPC制作ができたのなら概念的にもできるはずですし、『彼』も理論的にはできるといいました」

レインの父親であり、とある事件で妻を失った桐島准将（この間昇進）に俺は伝える。

不可逆的なものを再生するというのは困難なのだが、バルドル内における佐藤弘光は人でありながら高次元の立場として、現世に干渉できる存在であるらしい。

場合によっては多次元解釈で、生存している桐島エイダのから要素をコピーし、こちらで播らぎを発生させてサムチエックをクリアすればいいらしい。

らしいの繰り返しではあるのだが、感覚的にはここならできそうと思うので多分できるのだろう。

余談だが、そのらしいを後押ししてくれている「彼」に関しては「意見交換」を行ってみれば何てことない知的生命体である。その辺の軸が他者とは違う自分としては使えるなら問題ないのだ。

「では、検証を開始します。初めてあったのは」

「8歳の頃だ」

「その時の印象は・・・」

「君はそれを聞くのかね。ここには橘社長も居るんだぞ」

「あら、別に他人の惚気なんて八重さんと永二さんで聞き飽きたわ。そうそう、私の甥の甲さんも最近は」

「すみません、イメージに余計なの混じるんで」

シスコンかつ甥をバカ可愛がりする橘社長を抑えながらデータを再構築していく。

ちなみに人物というのは主観と客観的評価によって異なり、今回は客観的評価によって電子体を再構築するという前代未聞の実験をしている。もっとも俺がやっているのは桐島エイダという欠片が埋まっている砂場に桐島勲という磁石を垂らしてかき集めていることである。電子体の定義については脳内チップという核によって構築されていたというのが定説だったが、現代では、脳内チップが焼き切れてもすぐに死ぬことはないと言われていた。極論で述べれば、ネット上に電子体が散逸しない方法さえ確立してしまえばいいというのが、研究者の見解であり、橘社長の提案する方舟計画の骨子でもあった。

ちなみに自分は桐島エイダさんを写真でも見ていない。見てしまうと、状況によっては未来の、それも自分が知らない桐島レインを呼び出してしまう可能性もあるからだ。

「八重さん、姉さんは無理なのよね？」

「彼女の場合は自分の意志で消去しています。残念ですが不可能です」

門倉八重という人物は、世界、いや、自分の大切な人を救うために自分の電子体を消滅させた。見えない形で保管されているのと、完全消滅させたのでは意味合いが違うことは権威者である彼女が分かる

ないはずがない。

結局サルベージできたのは彼女の最後の記憶だけで、これは後々門倉家に渡すことになるのだろうか。

スーパージルベルトワールド

after story 1

魂の在り方前編

その時俺は目を閉じて視覚を遮断していたわけだが気が付けば、桐島准将と、妹魂さん以外にもう一人いた。

「・・・エイダ」

レインがもう少し大きくなればこんな感じになるであろう女性、年の頃は20代後半だろうか。

「あなた？」

電子体の再生は亡くなった時点だったので、多少年の差はあるものの、似合いと言えば似合いだろう。ただ、いい歳した大人達が長時間見つめ合うのは時間の無駄なので話を進めることにした。

「すみません、桐島エイダさんで間違いありませんか」

「多分、そうだと思います。えつとあなたは？ 私はドミニオンに捕まって・・・」

「ジルベルトです。お嬢さんとはそれなりに親しくさせてもらっています」

「あのレインがあなたくらいの人と親しいということは5年以上経過したのね・・・レインはちゃんと育ってるのかしら。あの子ニンジンが苦手なの。克服できるといいんだけど」

克服というか、つい最近まで料理がある意味壊滅的でした、というのは少なくとも俺の役目ではないので夫であり父親である桐島准将に目で訴えるが、あろうことか逸らしやがった。

「ま、まあ、色々と話したいことはあるのですが、今から全員をここから専用の区画に移動します。橘社長」

橘社長は頷き、彼女を凍結した状態でバルドル空間からアークで構

築中の仮想都市に転送した。

「へえ・・・流星はアークインダストリーが制作中の仮想都市。ここま
で感覚がリアルだと現実と大差ないな」

「そうね・・・エイダさんは、こちらで用意した屋敷で暮らしてもらい
ます。そこで色々チエックをして・・・こっちは三ヶ月程度を予定し
ているけど、勲さんの方は？」

「ジルベルト君からの提案ということで4ヶ月で回ってくる。その
後、リハビリとかあるので日常生活を送れるのは一年後だな」

宇宙ステーションとアセンブラ研究ほどではないが、電子体と肉体
の因果関係を知るといふ点ではこの計画も貴重であった。といつて
も俺が関わるのは鳳翔の卒業くらいまでだが。

「ところでご夫妻で決めて欲しいのですが。リアルで会いますか？
ネットで先に会いますか？」

誰にとは言わない。これは佐藤弘光から頑張り屋の彼女に対する
プレゼント代わりだ。

「なるべく早く出られるようにがんばるわ。レインだつてそれくらい
待ってくれると思うし」

「そうですか？ なら、この一件はお嬢さんに知られないように気を
付けてください」

サプライズすぎて腰抜かさなきやいいなとその時は思ったのだ
が・・・某宗教の創始者だつて3日で生き返ったばいし多目に見てく
れるだろう。そう思ったとき、脳裏に危険な考えが浮かんただが、
敢えて無視した。

プログラマーがプログラムに干渉するように上位存在は下位存在
に干渉できる。宗教の奇跡つて基本的にテコ入れであることが容易
に想像できた。特に海を割る奇跡とかやらかした話はマッチポンプ
もいとこだし。まあ、世界が神の夢であつても全然構わないのであ
るが、なるべく死んだ後に目覚めて欲しいところだ。

「あなた、キレイな顔なのに眉間にシワを寄せる癖は良くないわよ」
「気をつけます」

間違いなく美人の彼女にドキマギしつつ当たり障りのない返答を

返す。まあ、正統派美人というのはいいものでだと思し、桐島さんってこんな美人さんが幼なじみとかどれだけ勝ち組だよと突っ込みたくなる。

俺にとって家族は遺伝子の提供者に過ぎなかったのだが、ああいうのを見ると家族というのもいいように思えた。

「エイダさんには、父娘ともども色々と話してもらいたいですね」

「あなたが私たち家族にとってどんな存在なのかも聞きたいわ」

「俺なんか通行者あるいは学生Aでいいですよ」

レインに関してはこれ以上俺に依存されても困るし、失敗しないようにがんばってもらいたいところである。

afterstory 2 Q. 日常が容易に崩壊するエロゲの登場キャラになった時の心境を答えなさい

「以前約束していたデートの約束をそろそろ履行してもいいじゃないかしら」

元鳳翔学園生徒会長にして、進学がとつくに決まっていた六条クリス先輩に誘われたのは1月も半ばを過ぎた頃のことだ。

ジルベル・ジルベルトの外の人こと佐藤弘光は、彼女のキャラが生前の姉に似ていても苦手である。

もちろん、現世における彼女に他意はないのだが、2、3ヶ月に一回のペースで俺を呼び出しては、どうでもよいことをあだこうだど話し合う機会が訪れており、世間体を考えるとノイ先生と違って何かと気を使うので疲れるのだ。

「てつきり忘れているものだと思います」

「あら、てつきりクリスマスに誘って頂けると思ってたそれなりに下着も買いそろえていたのにジルベルト君は女性に囲まれていて一人寂しく枕を濡らしていたのよ」

「確か六条家主催のパーティーに参加してましたよねあなた」

彼女の家である六条家は俗に言ういいとこの家で、代々軍人の家系で将官（例の件で昇進が確定した）の娘であるレインの家とは財政基盤が違う。

ちなみに俺の知り合いで一番金持ちかつ権力があるのは橘財閥の分家筋にあたる橘聖良の橘家で、当主である彼女と実質的な後継者である西野亜季嬢が一番の金持ちだろう。そもそも彼女は自信にその気があれば自力で稼げるタイプである。

もつとも、彼女たちがパーティーに出る必要があるかという点、必ずしも出席して愛想を振りまく必要は無いのだろうか。

「ジルベルト君のところにも招待状を送ったのですが」

「知り合いにアセンブラの研究者が居たんです。その成功を見届けて

からパーティをチャット仲間プラス諸々とする約束だったので」

正確には緊急の事態に備えて、俺は方面軍司令部に召集されていたのだが、別にそれを口にする必要はない。確かに届いてはいたのだが、お断りを入れたと思う。正確には俺ではなく、俺の意向を聞いた政府関係者の誰かがだが。

「それでデートと言いましたが、六条先輩をお誘いするとなるとどこがいいんやら」

「オーソドックスな場所で構いませんよ。私だって女の子ですから」
「でしたら、それなりに考えますので、10時に駅前で」

「じゃあ楽しみにしているわ」

どうして俺の周りの女性はまともなのが居ないのかと疑問に思いつつ、デートという言葉に思いを馳せる。

「はて、俺って生まれてこの方デートしたことあつたっけ？」

男女で出掛けるというのを考えるとノイ先生とかレインとかと出掛けたことはあるが、俺の認識的にはアレはデートじゃない。デートとはもう少し甘い何かがあるべきである。

「どうしたですかジルベルトさん？」

「デートの定義についてちよつと考えていたところ」

「は、はあ……その、どなたかとデートでもされるんですか？」

「うん、全部俺任せで六条先輩と。デートだからまじめにプランを考えないとな」

その辺について意見を伺いたかったのだが、いつの間にかレインは姿を消していた。会話をしていたのだから彼女は居たはずなのだが急ぎの用事でもあつたのだろうか。

スーパージルベルトワールド

afterstory2

Q. 日常が容易に崩壊するエロゲの登場キャラになった時の心境を答えなさい

sideノイ

ダッフルコートにスエードブーツを合わせた少女が駅前のもニユメントの前で待っているというのはとても絵になる。

遠目で見るものも多く、中には勇気を出して声を掛ける男もいたが、約束していた長身の男性が近づいてくると立ち去った。

「客観的に見ると美男美女だなジルベルト君と、えっと何と言ったわけ」

「六条クリス先輩です、ノイ先生」

「ふむ、しかしレイン君の格好はいつもと違うようだが」

「はい、父が万が一の時のことを考えて動きやすい格好をした方がいいと」

ベレー帽に機能性を重視したコートを羽織っている彼女は何だかんだ言って軍人の家系の出であることがよく分かる。

もっとも、懐に入っているスタンガンをどういう状況で使うのか全く想定が付かないのだが。

彼女の母親と比較してみると、彼女はどうも父親似のようだ。その行動力がプラスに働くなら良いのだが、マイナス方向に向かうと手が付けられない。

「まあ、その辺は彼女がどうにかしてくれるだろう」

「何か言いましたかノイさん」

「ああ、すまない。それで二人はどこに向かったんだ」

「どうやら、今話題の映画を見るようです。私たちも向かいましょう」

確か余命幾ばくかの少女が妄想で出会った少年と永遠を生きるか、死ぬと分かっている現実を生きるかを決める。

そんなストーリーだったはずだ。

「陳腐だな」

「そうですね？　美しいじゃないですか」

生と死はこんなにキレイなものでは無く、とてもおどろおどろしいもので、つい最近その手の話題に関わった身としては男女関係は適度に波乱がある程度で充分だと思いたい。

恋に憧れる10代と結婚が見えてくる20代の感覚の違いと言え

ばそこまでののだが、ジルベルト君ならともかく佐藤君の精神年齢だとレイン君は小娘になってしまう。もう彼、アクション映画とか、自然系の方が受けるのではないだろうか。

映画が終わり、映画館から出ると私たちも尾行を開始する。

ジルベルト君がセカンドだったら、とつくに見破られている範囲だが、お前のような普通がいるかと総ツツコミを受けたとしても末端性能としての彼は少々優れている程度だ。

「どうやらカフェテラスに行くようです。いつもジルベルトさんが行くようなお店ではありません」

本格的な英国式のお茶が楽しめる店のようだ。

ちなみに私たちはコンビニで買ってきたおにぎりを食べている。

私は大して目立たないのだが、レイン君は目立つため同じカフェに入らなかった。

「私のイメージだとレイン君はコンビニのおにぎりというイメージは無かったのだがな」

どちらかという優雅にサンドイッチとかパニーニとか食べているのが合っているだろう。

「手軽でいいですよ、コンビニって」

そういえば、彼女はつい最近まで本当に料理のスキルが壊滅的だったのを思い出す。

空君のスキルは致命的だが、改善の兆しがある彼女は、だんだんとレパトリーも増えている。

というか、桐島父が割と喜んでいて、そして彼女はようやくこのレベルかと多少嘆いていた。男と女の認識の隔たりは埋めるのが難しいな。

「そろそろ、また食事会を開催しようか。今度は何が良いだろうか」

「ノイ先生は見た目とは違って健啖家ですよ」

「私は食いしん坊キャラではないぞ！　そこ何年上を生暖かい瞳で見ているんだ」

私だって普段は普通に作れるが、ジルベルト君と真君がおいしい物を作るから任せているだけだという主張は彼女に受け入れられる事

は無かった。

side out

「端から見て私たちがどう思われているんでしょうね」

「まあ、普通のカップルじゃないですか。良い意味でも悪い意味でも釣り合いませんけどね」

六条クリスという人物は口を開かせなければ熟練の職人が魂を込めて作ったアンティークドールののようにも見える。

ジルベルトの姿は平均よりも優れているというのは自覚しているが、それでもこの令嬢のお相手となると力量不足だろう。

「そう？　まあ、そういうことにおきましよう。それにしても最初はちよつとポリュームあると思っていたけど意外と食べられるわね」

生前はコーヒー党で男と言うこともあつて俗に言う本格的なお茶会なんてものには興味が無かったのだが、意外と何でもできるマスターの薫陶の元、それなりに詳しくなっている。

そう、英国人のティータイムは重たいということ。

日本茶に和菓子とか、ケーキにコーヒー、紅茶なんてレベルじゃない、スコーンに、ペストリー、サンドイッチの三段とかザラである。

偏見とは分かっているけど、だから奴らは粗食に耐えられるんだと心から思った。

「逆説的に言えば彼らの未知の食物も受け入れる文化的下地は自国の料理が微妙なところから来ているのかもしれないわね」

あその国は調理方法がシンプルなだけで、素材さえ良ければ問題ないのだが、どうしても雑なのは仕方ないだろう。

「まあ日本式カレーが食べられるのは大英帝国のおかげですけどね」

世界が再編されるに従い、国という概念は薄くはなっているが、かつて地名や歴史としての価値が薄れているわけではない。

「そうね、さてお腹も一杯になったし、ちよつと付き合っただけで欲しくないところがあるの。できればあその二人を撒いてね」

「気付いていたんですか？」

「ちよつとした昔の杵柄よ。でもジルベルト君が気付いていたとは思

わなかったわ」

「映画館で気付きましたよ。今どこにいるかは分かりませんが、俺たちを見ることが出来る範囲内にはいるだろうと」

俺自身はセカンドではないのだが、無意識にチャンネルを作ってしまったことがあり、それでノイ先生が居ることに気付いた。

「まあ、いいでしょう。一応今日は先輩のエスコートということですから」

だから、一時的にリミッターを解除して、気付かれないように視覚を弄ったのを確認すると、俺たちはゆつくりとカフェテリアを後にするのだった。

sideノイ

「見失った！」

どうやら向こうは私達に気付いていたようだ。

「探しますか？」

「無理だ。君の所の会長は分からないが、逃げに徹した彼には到底対応しきれない」

一度やられたが、ジルベルト君はネットを介在して脳内チップを経由して脳にアクセスし、認識させないという齟齬を起こさせることができる。

これも一種のマインドハックなのだが、現代社会に置いては致命的だ。

特に常時ネットに繋がっているセカンドはネットに対して強い反面、搦め手に弱い。

「今回はここまでのようだ。気になるなら後で本人に聞けばいい」
「ですが！」

「女の嫉妬は少しならかわいいが、過ぎると男が引くぞ。それに、何か理由を付けければジルベルト君は付き合ってくれるだろう」

「そ、そうですね。ああ……いいかも」

レイン君がヤンデレとかストーリーカーになったら私では止めようがない。あと最近真君の悪い影響が出ているのかちよつと妄想が入ることがある。彼女の脳内のジルベルト君はどんなのだろうか。で

も、中身はアレだからなあ。

最近の10代の少女達を見ていると、生い立ちにめを瞑ると案外自分が常識人であることに気付くのだった。

a f t e r s t o r y 2 | 2 A. 私の大切なものを壊した責任取ってもらおう

無事にノイ先生とレインを撒いた俺たちが何をしたかというところ、俺がよく行くアパレルショップだったりする。

「このお店には桐島さんも?」

「確か一回くらいは連れてきましたけど、レインのイメージでは無いんですよね。彼女の場合、もう少し華やかなのが似合うというか。その点先輩はシックなのも似合いますし」

これはもう相性の問題で、六条クリスという少女はゴシック系の服も難なく着こなせる反面、白とかフリルの付いた服のイメージではない。

「それで、あなたが選んでくれるのかしら、ダーリン?」

「余りセンス無いですよ俺」

自分の服は何となくわかるというか、これだけ背丈のある男でガワがあればなら、単独ならなんでもOK、女性をエスコートするならそれに応じた格好をすればいい。対して他人のファッションに口出しできると言えば微妙だ。

「ジルベルト君、美術の成績はいまいちだもんね」

「知っていて頼みますか。では、姫が映えるように努力しましょう」

ダーリンとかいう単語は敢えて無視し、彼女が嫌がる姫という単語で対応する。どうも彼女相手だとペースが狂ってしまう。

そして気付いた事だが、彼女の買い物と言うのはレインと比較するとかかなり短い。別に提案に対して全てイエスというのではない。全パターンを試してみるというのではなく、一つのパターンに対して最適なものを2、3用意して、試すというスタイルのようだ。もっとも、普通の経済観念でどれか一つを絞らざるをえないような財力ではないのは理解しているが、それでも鳳翔のお嬢様方に比べれば自分というものを持っているだけでありがたいといえるだろう。

「結構高かったけど、本当に良かったの?」

会計を済ませて、ブランドロゴの入った紙袋を先輩に手渡すと、彼女は申し訳なさそうに俺に言った。別に俺たちは恋人でもないし、俺が彼女を好きでもないのは明白であるので、高い物を買ってもらえることを遠慮したのだろう。

「先輩から先輩へのささやかな卒業祝いでも思ってください」

それなりの店なのでかつての日本円にして6万くらい吹っ飛んだのだが、口止め料と言う名の臨時収入があるので、財布に関してはそれほど気にする事でもない。

「じゃあ、お言葉に甘えとくわ」

それからは道先でクレープを食べながら、昨今の経済状況がどうやら、最近話題のアセンブラについて語ったりして時間が流れていく。

「じゃあ、そろそろお暇しますか。どうでしたか先輩、一般人らしいデートは」

「悪い気分では無かったかな。でも、ジルベルト君。私もう一ヶ所だけ行きたいところがあるの」

「ホテルとかだったらお断りですよ、面倒ごとには巻き込まれたくないので」

「女としてプライドが傷つけられた気もするけどまあ、いいわ。私が行きたいのはあそこ」

指し示されたのはコンソールが置いてある店だ。

「ちよつと一緒に来てほしいところがあるの。デートは楽しかったけど、今日ジルベルト君を呼んだ理由はそこに一緒に行って欲しかったから」

「ネットに用事ならイーサーで待ち合わせでも良かったのに」

「それじゃあちよつと味気なさ過ぎでしょ。さて来てくれるわねジルベール・ジルベルト」

今まではどこにでもいるような可憐なお嬢様だった六条クリスが、鳳翔の支配者にして気高き姫と謳われる六条クリスに変化したと悟る。そうどこかサデイスティックな彼女に。

「いいでしょう……これもデートの内と考えて」

ショッピングで買った物はロッカーに預け、俺たちはコンソールか

ら仮想の海へとダイブすし、イーサーを経由して付いた先は鳳翔専用のアリーナ。

「今日は予め、私が招いた人以外は入れないようにしておきました」「先輩、まさか鳳翔最強決定戦をするって訳じゃないですよね？」

鳳翔学園において最もシユミクラムを操るのに長けているのは六条クリスであるというのが俺の感想だ。近接モードと射撃モードをシフトすることで戦術の幅を広げて、詰み将棋の様に勝利の可能性を削いでいくグリムバフオメットに対抗できる同年代のシユミクラム使いといったら本気になつた真ちゃんくらいなもの。

俺とてシユミクラム戦で易々と負けるつもりは無いが、遮蔽物の無い地形で彼女に勝てると思うほど慢心していない。だからこそ、ただ勝負するなら受けて立つつもりだったのだが、彼女の言葉を聞いて状況が一変した。

「それはそれで構いませんが、それはあなたの返答次第ですね、ジルベール・ジルベルトの皮を被った誰かさん？」

何を言っているのだ彼女は。

「例えばの話だけど大雪が降るはずの日の天候が完全に晴れたらどう思う。前倒しで勢いが弱まったとかならともかく、世界が一変したかのごとく晴れている。でもみんなに聞いて見たら最初から晴れの予報だったって言うの。私が知っていた天気予報つてもしかして偽りだったのかしら？ それとも白昼夢？」

「……」

「私の予報が確かならクリスマスに大きな花火が上がるはずだったのよ。私は残念ながらヒーローじゃないから、全てを見捨てても生き残りがかった。幸いパーティは蔵浜から離れていたから逃げ出すのもってこいだっただしね」

彼女の言う花火とはアセンブラのことなのだろうか。だが、その日の蔵浜は万が一の時のためにグングニールの範囲調整や、緊急支援のための準備を行っていてクリスマススのクの字も出なかった俺たちと違ってクリスマスムード一色だったはずだ。

第一、裏事情を知っていたのも軍部では方面軍司令官隷下、政治家

では州知事くらいなもので、富豪程度がこの件に触れられるはずがない。

「俺の認識では先輩は六条クリスであって、それ以上でもそれ以下でも無かったのですが、考えを改める必要がありそうですね」

何となく分かった違和感。今思い返すと、常に六条クリスはジルベール・ジルベルトに対して鳳翔らしきというものを問うて来た。そして、彼女の知るジルベルト像というのはもしかしたら遙か遠いどこかに行ってしまったジルベルトではないのだろうか。

「これはきつと八つ当たりなのよ。私が蓄えた力をぶつける先がどこにも無い。ならばあなたにぶつけるしか無いわよね、来訪者さん？」

はい決定。電腦チップに宿ったのか真っ当にやり直したのか知らないが、どうやら同輩のようだ。

「俺もいい加減巻き込まれるのに飽きたし、知らない間にストレス溜まっていたみたいだから可憐な美少女に八つ当たりしても文句言いませんよねご同輩？」

瞬間、俺たちはシュミクラムにシフトする。

「そもそも何よそのシュミクラム！ 無難にノーブルヴァーチユ使つて、半分雑魚扱いされてやられなさいよ！」

近距離に置いては盾、遠距離に置いては追尾される剣になる武装が厄介だ。追尾タイプに対してはこつちも追尾タイプと黒犬を放ち、牽制する。あの剣は、本体が呼び戻さない限りどこまでも追ってくるので盾に戻させなければ耐久力の関係でこちらが不利。同時に魔弾を展開し、時間差で魔弾を放つように調整。

「女性に猫を被るのは大前提とはいえ、根本的に違いすぎなんですよ先輩は！」

あの毒舌天使のまこちゃんがかわいく思えるほどの豹変ぶり。この人にとつてはシュミクラムはストレスの発散方法なんだろうけど、ここまで素を出したら世間的評価がやばいだろう。

不可視の魔弾を射出し、ようやく剣を引込めたが、レッドラインにはきてないものの耐久力的はおぼつかない。黒犬は瞬殺されるし、神父といい彼女といい、どうして俺の周りには俺の上位互換の奴らば

かり出てくるんだろうか。もう少し、力押しが得意な相手と戦わせるべきではないだろうかと心の中で愚痴をこぼしつつ、一時的にリミッターを限定解除。時間だと1分ぐらいが限界だが。

「増殖指定・対象・目の前のヒステリー娘のシミュクラム、セット……我がグリモアの名において食らい付けベルゼビュート！」

最近無理矢理覚えたナノ工学を利用して、ナノマシンを電子上の物として構築、データを1と0に分解する暴食の群体「ベルゼビュート」が射出する針も、剣も、盾すら瞬時に食い散らかし、グリムバフオメツトに接近する。

「いや、ジルベルト君止めて、溶かされる、本気で装甲溶かしてるわよこれ！」

「大丈夫ですよ、電子体ダメージは無いはずですから」

破滅の魔弾は容赦なくやっちまうけど、ベルゼビュートはその辺問題ないというか、パーティジョーク用に組んだロジックだからそのままで問題ないというか、強いて言うとなら

「除装すれば止まりますよ」

俺の忠告に従い、シミュクラムを除装した先輩だが、一つ問題があったことを思い出した。

「きやああああ！」

「そういや、元々服を溶かすプログラムだったの忘れてた」

眼下にはそれはもうスツポンポンの六条クリスの姿が。見た目より胸が大きいのを確認……つとそんなことをしている暇はないと頭を切り換えてすぐさま、ボックスにストックしてある服を投げつけ装備するように促した。

「はあ……もう散々。一応嫁入り前の肉体なのに見られちゃうし」

俺の電子アイテムは彼女の体格だとぶかぶかなので調整し、ようやく気分も落ち着いていたのか、話ができる状態になった。

「改めて紹介するわ、六条クリスこと前世の名前は白鳥友梨。趣味はゲーム全般、まあ18歳未満お断りのゲームも愛のためならやるわ」

18歳お断りのゲームが男性向けなのか女性向けなのかは怖くて聞けないが話しを続ける。

「ジルベール・ジルベルトの外の人こと佐藤弘光です。趣味はそつちと大して変わりませんよ。職業のぐく普通のサラリーマンでしたし」

「外の人？　まあ、前世談義は置いといて、あんたねえ、どういう裏技使ったら『灰色のクリスマス』を防げるのか教えて欲しいんだけど」

「すまん、『灰色のクリスマス』って何だ？　ホワイトクリスマスはこないだみたいに適度に雪の降るクリスマスだし、黒いクリスマスは豚足食べるものだと思ってるんだけど、灰色っていうのは吹雪の中で豚足でも食べるのか？」

「あー何だか話が見えてきたような。あのジルベルト君、ドミニオン教団とかノインツエーンとか知ってる？」

「この間ドンパチやったよ。ついでに言うとか神父は完全に消滅して、ノインツエーンは裏取引で外宇宙行きが決まってる」

「どうやってそんな超展開になるのか教えて欲しいんだけど、ジルベルト君、大前提として『バルドスカイ』っゲーム知ってるわよね？」

「いや、これバルドフォースの未来世界の話でしょ？　バルドルってバルドフォースの前の作品のバルドヘッドに出てきた神とか何とか。ここからどうなるのか知らないけどバルドヘッドの時代に行くんじゃないのか」

彼女の問いかけに俺も何となく話が見えてきたというか、もしかしてとんでもなく取り返しの付かない話になっているのではないかと不安になってきた。

「一応聞くけど、あなたが死んだのって何年だったか覚えている、具体的な年数が分かればいいけど、事件とか発売したゲームとかでも覚えていれば」

「何しろ今の人生始めてから16年も経ってるからなあ」

家族のこととかはうっすら覚えているが、個々の事象など遠い彼方だ。ああでもない、こうでもないと言葉の本棚を整理して、ふと思いついたニュースを口にする。

「確か沖縄の空港で飛行機が炎上爆発したニュースを見たような」

「ということとは2007年ね。あのねジルベルト君、あの後時間でいうと2009年に続編が出たのよBALDRSKYってゲームがね」「つまり俺たちが生きている世界はそのゲームが舞台?」

「正確にはその舞台になるはずだったのよ。アセンブラが暴走して、グングニールがなぎ払ってとか色々あるんだけど、原因となるアセンブラの暴走をあなたが解決しちゃったから」

それは確かに大雪警報が出ているはずなのに快晴になったという気分だろう。

「ちなみにそれってジルベルトも出てたんですか?」

「サディステイックなヘタレ悪役をやっていたわ。私の主観では間接的にゲームをクリア導いた英雄だし、カップリングも萌えるし」

脳内で逢ったジルベルトは、確かに強気な割にへたれっぽかったが、それより彼女の言うカップリングという単語の意味を聞きたくなかった。

「物心ついた時から、いつ灰色のクリスマスに巻き込まれるかと不安に怯えながらひたすらシミュクラムの修練をして、最悪久利原先生をやっちゃおうと決意したのに、私が最上級生に進学して原作スタートしたと思ったらなぜか桐島レインと水無月真は星修組よりあなたと一緒にいるし、ケニツヒスなんて代替キャラは出てくるし。もしかして同輩? とか思ってた色々カマかけても、普通の優秀な学生で非常に困ったわ。12月になったから方が一のことを考えて行動してたけど結局アセンブラが成功して無事に正月まで進むし」

話の流れを想像するに俺たちってかなり危険な綱を渡っていたらしい。

「それはご苦労様です。まあ、俺から言えるのは物語はもう現実になっちゃってるんで適当に生きていくしかないんじゃないですか。別に事件が起きるの分かっていてからってノストラダムスの大予言みたいに自棄にならなかつたらなら」

成績は相変わらず学年首位だったのでそれは無いだろう。彼女の場合、デザイナーチャイルドのスペックをフルに活用できる希有な存在なのだから。

「まあね。つまり私はとりあえず不慮の事故か、突発的な病気にならない限り、命の不安にさらされる必要は無くなったのね」

「そうですね、もし良かったら俺が作ったチャットに来て下さい。ダメ人間ばかりの集まりですがいい人ばかりですよ。問題児ばかりですが」

こうして、俺と六条クリスはノイ先生とは違う意味での運命共同体になったのであるが、別にお互い今更どうしようと思っていないので、男女関係とかには発展しないのは確定している。

「私の好みはガツシリした体格で、ジルベルト君はちよつと物足りないかな」

というのが彼女に対する俺の評価であり、俺としてもこれ以上面倒な女と関わり合いたくないというのが本心だ。

まあ余談だがチャット仲間には白鳥のHNを持つ人が増えsinさんこと真ちゃんとの舌戦を繰り広げるのは別の話だ。

ついでにどっかの大会で白い天使と黒い悪魔がそりや筆舌に耐えきれないような決戦を繰り広げるのも別の話としておきたいというか、機体にリミッター掛ける前に心にリミッター付けて戦えよお前達とその時の俺は思うのだがこの時点ではそんな未来と想定もしていなかったのである。

あと、クリス先輩の養父の方とはその後趣味友になって、お金持ちの人たちと一緒に色々遊んでいます。

a f t e r s t o r y 3 さようなら違う世界の私達

電腦症は不治の病であるということを知ったのは10歳になったときのことだった。両親が居ない施設出身の私たち姉妹にとってこの病気は重くのしかかる。

まこちゃんが人の心の壁を突き抜けることを知ったのもその頃。超能力とかではなく、思考を形成する脳内チップを介して何となく分かるというものだが、周囲の人間にしてみれば奇異な存在だったのだろう。

リアルで避けられると共に、ネットの世界でより先鋭化する電腦症持ちのまこちゃんは忌避された。私はまこちゃんを守るのに忙しくて、当たり障りのない知人はいても、心を許せる友達はいない。でも、仕方がないと言いつ聞かせる。

私はまこちゃんのたった一人のお姉ちゃんでまこちゃんを……

スーパージルベルトワールド

a f t e r s t o r y 3

さようなら違う世界の私達

s i d e 門倉永二

季節は春、世界から貧富の差が無くなることはないが、今年のクリスマスに神様からの贈り物によつて少しだけ明るい未来が見え始めた。今日この頃、俺はジルベルトの坊主と一緒に星修学園の如月寮に向かつて歩いていた。

「正直、あの寮に行くの結構めんどいんですよね。行くたびに何故か威嚇されたりするし」

「そりゃ、かわいい妹に寄りつく男なんて万死に値するだろうよ。俺だって八重と付き合いはじめた頃のまだリアル生活の割合があった。聖良さんの目を思い出す度に生きた心地がしなかったさ」

「あの人の姉に対する溺愛っぷりを文字チャットだけで延々と見せられた身としては同情します」

やがて、寮が見えてくると、入り口の前にネイビー系のカットソーに淡い桜色のロングワンピース合わせて着ている少女。一時は留年すると言い出したが、無事に大学に進学した亜季ちゃんがいた。

「おじさま？ それにジルベルトさん」

久しぶりに見る彼女は知り合った頃の妻を彷彿とさせるが、中身は間違いなく聖良さん系。良い悪いの問題ではないが……まあ、それは俺の役割ではない。だから親戚のおじさんらしく気軽に挨拶することにする。

「よう、亜季ちゃん元気にしてたか？ 甲はいるか、それと水無月の姉妹も」

俺と彼女たちが会うのは何年ぶりだろうか。もともと彼女たちは俺を知らないだろう。もともと定期的にレポートは確認しているので間接的には知っているという間柄だが。

世界を変えたノインツエーンの研究は多岐に渡るが、総合的に引き継いだ研究者は誰もいない。聖良さんの場合、ネット関係の継承者だと認知されているが、遺伝子強化などに関してはかじっている程度で素人に近く、先日問題視され、紆余曲折を経て画期的な研究として“公表”されたアセンブラに関しては全く分からないとのこと。これは氷山の一角であり、他の研究者も似たようなものだろう。

残された論文にしても、自分が分かればいいからと意味不明な羅列で書かれ、宝の山とはいえ、解説に10年も掛かって成果が出なければ研究者として報われないところから敬遠されていたノインツエーンの遺産。

コネクターと呼ばれた八重の遺伝子を研究している組織もいたが、俺たちが滅ぼしたので被験者は聖良さんに預けた水無月姉妹だけ。もともと容姿は八重に似ていないので関連性を疑われることもないし、聖良さんに至ってはトラップまで作っておいた。そしてノインツエーンの意味不明な研究を人間が分かるレベルに翻訳できる人物が現れたことで彼女たちの価値は皆無となった。

春の陽気に当てられたのか眠たそうな顔をする男。傍目には線の細い優男のイメージだが、重要なのはその中身だ。

事情を知る者の間では『ノインツエーンの後継者』と呼ばれているジルベール・ジルベルト―目の前の坊主がバルドルの中で取得したものは多岐に渡る。但し本人曰くあくまで全ての本棚の閲覧を許可されている司書でしかないとのこと。だが、同時に乱雑に別れている本を分野別に整理できる能力に長けている。

聖良さん曰く「才能的には普通だけど、実務家として流用する能力に長けている」とのことだ。

デザイナーズチャイルドという高い素養の持ち主であるこいつがどれかの分野を専攻すれば、少なくともその分野の大成は確立している。

斯くして、政府、軍、企業におけるジルベール・ジルベルトの争奪戦が始まろうとしていたのだが、先日鳳翔の3年に進級したこいつとしては「こじやれたカフェとか開きたいと思っっているんですけど」と世の科学者たちが絶句するような発言をして保留にしている。

おそらく、アーク系の大学に進んで、アルバイトしながら進路を定めるという選択肢になるのではないかと考えているのだが、勲も娘の関係から自分のところに引っ張りたいたいと思っっているのだろう。

「俺自身は遺産の管財人しているだけなのでさっさと受取人に押しつけて身軽になりたいんですけど」

と言っているのだが、今世界中で最も重要な人間の1人と目されるこいつがどこかの機関に所属することは確実。だが門倉永二としてはこれから交わされるやり取りの方がはるかに重要だった。

side 水無月空

甲のお父さん、門倉永二についてネットで調べたことがある。

表向きは門倉運輸という運送会社だが、その実態はPMC『フェンリル』の代表で南米で虐殺事件を引き起こした人物として恐れられている。まあその話も、敵対勢力が自分の施設を爆破してそれをフェンリルに擦り付けたとか。

ノイ先生に門倉永二について尋ねたことがある。曰く「愛妻家で本来は子煩悩だ。親子の仲が上手くいつてないのは残念だが、父親は妻子のために戦うのか本質的な役割だからあの時は仕方なかったろう」知り合った軍人のおじさんに知ってるかなと思つて聞いたことがある。どうやらかつては同じ部署で働いていたらしい。おじさん曰く「軍機だから詳しいことは言えないが、家族もそうだが、大切なものを守るために戦士は戦わなければならない。もつとも私は娘の問題を他人に丸投げした情けない父親だが」と苦笑していた。

そして目の前にいる門倉永二は明るくて気さくない人といったところだろう。

「それで、俺や亜季ねえが呼び出されるのはともかく、何で空や真ちゃん、それに」

今、私たちはアーク社系列のホテルの会議室みたいなところに呼び出されていた。甲は困惑しているようだけど、亜季先輩は何となく見当がついているのか、むしろ甲の方を心配そうに見ていた。問題は無関係な私たちだ。

「俺だつて家族の問題に踏み込みたくないんだけど、真ちゃんの病気にも関係する話なんで」

まこちゃんの病気？ それつて甲のお母さんに関係あることだろうか。

「ところで門倉甲に確認したいことなんだが」「な、何だ」

突如空気が張り詰め、私たちも息を飲んだ。

「彼女さんともうやつちやったの？ クリスマス二人きりでデートだったんだろ」

「親の前でそんな話聞くなよ！」

甲と千夏は恋人同士。それが割り切つたと思つた今でもちよつと心にのしかかる。しかし、次の彼から出た言葉にそんな感情は吹き飛んだ。

「とまあ、緊張もほぐれたところで、本題に入るけどまず簡単な方から話すか。脳症の治療の目処が付きました」

私は立ち上がり彼を見て、まこちゃんを見る。

「情報量のオーバーフローとでも言えばいいのでしょうか。セカンドは絶え間なくネットに繋がっているわけですが、ごく稀により適応させようとするようにチップが進化させちゃうんですよ。あるいは事故などで過剰な情報量を浴びせられたときに機能が狂う」

事故と聞いて私は心臓が跳ね上がる。しかし、もちろん彼はそんなことを気にするはずもなく話を進める。

「前者と後者の区分けは今後の学会に任せますが、適切に情報を処理するための回路を作ればいいということで、作って見ました。幸い真ちゃんのエラーパターンは門倉八重に酷似していたので」

「親父、本当なのか？」

「聖良さんとその分野のエキスパート、それにジルベルトの坊主が太鼓判を押したんだ。現時点ではこれが最良だろうな」

「川にダムを作って流れを抑制するようなものなので、もちろん情報処理能力は落ちます。本当はオンオフ機能が良かったのですが、アセンブラのコマンドーシステムのようなものを構築しなければならぬので、現時点では無理です」

「もう少し待てば、もっといい治療が受けられるかもしれないということね」

「ある意味 yes なのですが、現在は実験段階なので俺が主導して他の方にも協力していただいている状況です。そういうこともあり、治療対象者の選定は俺に委ねられますが、基礎理論が確立した後は他の専門家に委ねてしまいます。で空さんの疑問ですが、良くなる可能性もあります、数をこなした成功率が上がるという意味では正しいのですが、無理矢理レベルを3段階くらい上げたので、技術的な意味ではおそらく10年間は今回提案している方法が主流になるでしょう」

「俺には詳しい話は分からないんだが、あんたこの分野の科学者なのか？」

「デザイナーズチャイルドとしては標準的な身体機能を持ったごくごく普通の鳳翔の学生だよ」

「人工知能友愛協会が会員にしたいと言っていた」

人工知能友愛協会って亜希先輩と研究が認められて退職した久利原先生、あとノイ先生が入ってる団体でしょ。

「あーありましたけど、真実興味ないなあ。西野さんは入って何かメリットありましたか？」

「……そう言われると無い気がする」

何だろう、勧められてショッピングセンターのポイントカードを作ったものの、〇倍セールの際に行かないからあまり役に立ってないかな話は。天才がぶっ飛んでいるという実例を垣間見た気がした。

「ちよつと脱線しましたが真ちゃんの場合、先ほども述べたように門倉八重の症例に酷似しているので修正しやすいんです。今なら優先して治療が受けられる、悪くいえばモルモットなので後見人の方とも良く話して決めて下さい」

「私たちの後見人？」

「ええ、ここにいる門倉永二さんです」

「どうして親父が空達の後見人なんだ」

「それは彼女たちがあなたの妹だからですよ」

私は何を言っているのか理解できなかった。否、したくなかった。

side 水無月真

私たちは天涯孤独の身でした。姓である水無月も研究所で面倒を見てくれた水無月博士からもらったもの。何も持っていない私たちが特に苦労することなく星修まで進学できたのは何かしらの力が動いているのだらうとおぼろげながら感じていたのですが、ジルベルトさんはさりげなくとんでもないことをやらかす癖は最初に会ったときから変わっていない。

どうやら私たちは甲先輩の妹のようです。甲先輩のお父さんが後見人で、学業の資金の出所はアークか甲先輩のお父さんから何でしょう。

「軍機とか機密事項とかを端折って説明すると、門倉八重の遺伝子を弄って誕生したデザイナーズチャイルドが君達。ノイ先生の誕生にまつわる技術を応用しているから考えようによつてはあのダメ人も

姉と呼べないんだけど、そうなると俺も君たちの親戚になつてしまうのでその点は無視しよう。南米虐殺事件はそれにまつわる事件で、お母さんの遺伝子を悪用されないように奔走していたのが門倉永二と橘聖良の当時の事情。西野さんが門倉甲と会っていたのも子ども達の安全確保のため」

「どうして母さんの遺伝子が。電腦症とも関わりがあるのか」

「詳しくは俺も話せない。ただ、八重の遺伝子が狙われると分かったときに、お前を守るために手段を選ばないというのが俺と八重、聖良さんとの間で交わされた約束だ。寂しい思いをさせたのは悪かったと思うが」

多分、血のつながりのある甲先輩も危険だったんだろう。でも、甲先輩は納得していない様子だ。

「どうしてちゃんと話してくれなかったんだよ」

「話せばお前も首を突っ込むのは見えていた。俺と八重の子だからな」

「親父……」

「昨年末に、門倉八重の遺伝子が狙われる要因が無くなりましたので、あなたたちに対する警戒レベルが下がりました。今後は進路など自由に決めていただいて問題ありません」

「後は家族の問題なので俺は失礼します。真ちゃんの治療については後日正式に書類とか送りますのでその際にでも」

ジルベルトさんはそうしてこの混沌とした状況を放置して部屋を出て行った。私にある疑問を残して。

side out

呼び出されたのは俺たちがよく集まるプライベートスペース。ノイ先生と一緒に待っていると、真ちゃんが入ってきた。

「多分呼ばれると思ってた」

「ジルベルトさんに、いえ佐藤さんに聞きたいと思っていました」

「先ほど君のお姉さんに話したことは矛盾するけど、真ちゃんは俺にとって身内だからね。話せる範囲なら」

「甲先輩のお母さんの遺伝子に関わる事件と久利原先生のアセンブラは繋がっているのではないですか？」

「アザイナーズチャイルドにまつわる技術、アセンブラにまつわる技術、そしてセカンドにまつわる技術はある存在を基点としている。そういう意味では正解。バルドルへのハッキング事件は知っているかもしれないけど、あれに正規にアクセスするためには門倉八重の遺伝子が必要なんだよ、まあ正確にはそう思われていた」

そして多分真ちゃんが一番適正率が高いかなと思っっている。これに関して、クリス先輩こと白鳥女史にその辺を確認すると正解という答えを得た。

「データを確実に取り出す方法が確立したからね。御大将、いや久利原氏みたいのアレに人生を狂わさせる人は多分でないと思うよ。研究の発表で路頭に迷う科学者は責任持てないけどね」

「真君、大切なのはいつ壊れるか怯えることなく生きられるということだ。私も政府の監視から外れることになったし望外の幸運だったな」

面倒くさかったな親父のもめごとと宣うノイ先生を後目に、現状を振り返る。白鳥女史からことのあらましを聞いた身としては本当に奇跡の3乗位が起きたのだろうと、気にしないことにした。

「そういうことでしたら、私はこれ以上何も聞きません。それで私の処理能力ってどれくらい落ちるのですか」

「正直やってみないと分からない。基本的には脳症で無理矢理拡大した領域を塞ぐパッチなので、声が漏れることはないと思うし、プライベートスペースに侵入するなんてことも無理だと思う。もっとも、君達姉妹は本来膨大な情報量に耐えられるような形で調整されているはずだ。科学者の私としては特殊な事例が最初の症例だと困るわけだが、最悪ジルベルト君が何とでもできるので君が治るのはほぼ確定だと思うよ」

「佐藤さん、いえジルベルトさんもここ半年で遠い世界の住民になっ
てしまったんですね」

「こないだ将来の選択を聞かれたときに、ラ・ヴィータの親父さんみた

いにこじやれたカフェやりたいと言ったんだけど何言っただけ何言っただけこいつは？　って感じの目で見られた時は、全部のイーサーに同時ハツキングしてインフラズタズタにしてやろうかと思ったよ」

ちなみにああいう集まりには面倒なので佐藤弘光で通すことにした。ジルベル・ジルベルトで出ると一応えせ上流階級出身の身としては困るし、今更親とかしゃしゃり出てこられたらぶち切れるだろうし。

「そういえばそろそろ会食の時期だけど、次は何作ろうか」

「少し遠出してお弁当なんかどうでしょうか？」

「私もそろそろ料理の腕を向上させるべきだろうか、しかしアレのバージョンアップもなあ」

「あら、皆さんお揃いなんですネ」

タイミング良くレインも現れ、いつものメンバーが揃ったところで今後のスケジュールについて話を始めるのだった。

おまけ　その後の如月寮

気がついたら甲と空の関係が近くなっていた。

以前私は甲と空の関係について疑ったのだが、その時はシムクララだかシユミラクラが原因ということで事なきを得たのだが、不安だったのは事実だ。

そして現在の状況。何かあったとしか思えない。変わったといえば真ちゃんも変わったというか、むしろこっちの方が変わってしまったというか。

「それですね、ジルベルトさんがもしよかったら亜季先輩も来ないかって」

「知り合いばかりなのはいいけど、やっぱりちよつと不安」

「大丈夫ですよ。ちゃんと火打ち石さん、じゃなかったモホークさんが一発殴って手打ちにしていますから。でも人間って結構かんたんに吹き飛ばぶんですね」

ケラケラと笑う真ちゃんに、甲に対してもじもじ接する空って二人

の人格が入れかわったとしか思えない。

私の疑問が氷解するのは学園生活最後の夏休みが終わる頃なのだが、この時点では何ともいえない焦燥に駆られる私だった。

クローン技術というのはSFでよく出てくる要素のひとつではあるが、クローンで蘇った人間はかなりの確率で死亡しないし敗北する。その理由のひとつとして、クローンとして蘇った人間はオリジナルと同じなのかという問題がある。設定として記憶の転写はされるものの、記憶があるからといってオリジナルと同じ思考に至るわけではない。しかし、蘇生をする側はクローンに対して先人と同じことを要求するのだからたまらない。

詰まるところ、俺が今やっていることもエゴだったりする。

「ジルベルト君、ちよつと外に行ってみたいのだけど」

季節は夏が終わり、そろそろ木々の緑が抜け落ちようとする秋。蔵浜の総合病院内にあるリハビリ施設で、生まれて6ヶ月の彼女はとんでもない要求をしてくれた。

「ダメですよ。今は敷地内だけで満足して下さい。それより前々から思っていたんですけど、ちよつと若すぎませんか？ いやまあ、ご夫婦でそれでいいというなら構いませんが」

偉い人が病気になった時に入院する特別棟というものはこの病院にもあり、そこに帰る途中で大学生くらいの桐島エイダ（死亡年齢31）さんは宣った。レインが女として成熟すると多分こうなるのだろうと予測はしていたが、実物が目の前にいると俺の予測もあながち間違いではなかったようだ。

「愛にお金は要らないけど、愛を維持するためにはお金が必要になる。男はお金を稼ぐわけだけど、女は美しさを維持しなくてはならない。そんな感じでクローンに体を移したいという需要は女性に多いのよね。永遠に若い頃の自分を維持したいという理由で肉体を捨てようとした人もドミニオンにはいたわ。私はそういうのは興味無かったけど、子供を作るなら20代前半の方がいいからね」

どうやら桐島家には長女と18年くらい離れた同腹の弟か妹が生まれるようだ。知りたくもない現実だが。まあ、某社の女社長もリヴァイアサンの中では若かったようだが。

「後は、早く出た方が早く会えるからかな。母親としてして上げたいことたくさんあるもの」

「筋肉に関しては寝たきりで生命を維持してるエキスパートが開発した百年寝太郎君がありますから、問題ないですね。医者の話だと11月くらいには外出許可も降りると思いますよ」

肉体的な面に関してはそれほど心配していない。この研究の骨子は記憶とか精神分野の方であり、現在のところ支障が出てないので多分成功例として外に出るだろう。ただ、彼女の後に続く人物が出てくるかという話になると、予算との兼ね合いと、んな無茶苦茶なことができるのは俺かノインかというレベルになるのできつとしないだろう。実質的に彼女で最後だろう。クローニングはあくまで義体化した人や、不慮の事故で電子体だけが取り残された人に行われる行為であり、死者蘇生が可能となると世界に混乱がもたらされる可能性が極めて高いし。

スーパージルベルトワールド

afterstory 4

魂の在り方後編

side 桐島レイン

木々の葉も大分色づき、冷たい飲み物より暖かい飲み物恋しくなつた今日この頃。私がラ・ヴィータにドアを開けいつもの定位置でお湯を沸かしているマスターを確認すると、視線は何故か後ろに向き、その後不思議そうに首を傾げる。

「おやレインの嬢ちゃんじゃないか。ジルベルトとは一緒じゃねえのか」

「今日はジルベルトさんとは御一緒にいませんが」

「いやな、午前中に仕入れに出たらジルベルトとお前さんにそっくりな金髪のねーちゃんが一緒に歩いてたからてつきりお前さんかと思っていたが、一人で来たからな」

「金髪ですか？ 長髪でしたらクリスマス先輩も長髪ですけど」

「年は取ったが俺の視力はそんな悪かねえよ。まあ積極的に腕に絡みついてたし、レインじゃないと思って……」

あら、どうしてマスターはそんな顔を青ざめているのだろうか。おかしいですね、まるで悪魔が目の前にいるような。

「ちなみにジルベルトさんらしき人とその人はどちらに行きましたか」

「どうしたんだレイン君。マスターが蛇に睨まれたカエルのようなかわいそうな状態になっているぞ」

カラン、カランというドアが開き、同時に聞きなれた声が耳朶に響く。

最近身長が少しずつ伸び、体形も女性らしい丸みを帯びてきたノイ先生を見つけると、私は詰め寄った。

「ノイ先生、私に似た金髪の女性で、ジルベルトさんと仲のいい方に心当たりがありませんか」

「もう出ていたのか……外に出るなら郊外にしろと言っていたのに。そう、私の知り合いの奥さんがちよつとした難病で療養していたのだがつい最近退院の目処がついて、旦那も忙しいからジルベルト君が迎えに行ったのではないか。おつと済まないコールだ。……今はまずい、後でかけ直すから……いや娘の方が今こっちに」

「今なんて？ 何かお父様からのコールですか」

「い、いや何、ちよつとした仕事の相談だったんだが、急ぎではないので」

女の勘が告げている。これは絶対に怪しいと。そもそも今年に入ってからのお父様の行動は怪しかった。

「いいです、私が直接お父様とジルベルトさんに聞きます。今二人はどこですか？」

「わ、私は知らんぞ。どつちかに直接聞いてくれ」

ここ数ヶ月の不審な行動を今こそ明らかにすべきです。

side out

「レインに気付かれた？」

「俺達のことを誰かが見ていたようです。やっぱり俺と一緒に組み合

わせというのが目を引いていたようで」

俺達を知っている人なら彼女をレインとして認識するだろうし、仮に俺が目撃する立場でもそう思うだろう。俺の友人の実の母親がこんなに若いはずがないを地で行っている霧島エイダ（23+@）さんはレインのお姉さんで十分通用するだろう。

「というか、別にもうサプライズとかいいじゃないですか。電子体が破壊されてもまあ何とかなる余地はある程度の研究結果出てますし」
ノインツエーンの中（バルドル）という限定された状況だからこそのできたものなので、現実的に可能かどうかは分からないが、例えば崩壊したデータのバックアップができれば死亡はしない。問題はバックアップする仕組みだが、こればかりはあと50年ほど必要だろうか。

クリス先輩こと白鳥女史曰く、電子体だけでは生存が理論上は可能だが、現実的には不可能であるという結論を出されたことについては言及していない。自我融合が起きるらしいのだが、新世紀なんだとか、かいうアニメで人間の情報が溶けて赤い海になったとか、混ざっている状態で、きっかけがあれば再構築されるらしい。

『仕方がない、私も腹を括ろう。ジルベルト君は言い訳を考えて欲しい』

「言い訳も何も、死んだ奥さんに瓜二つな人を見つけて、家族のいない彼女に同情して密かに面倒を見ている間に愛が芽生えた設定か、電子体が奇跡的に生きていて、クローン申請して通ったの二択じゃないですか。これはプロジェクトの一環ではありますが、こんがらがった糸をどうにかするのは桐島家の役割だと思っんですよね」

個人的に言えば、北海道とか長野辺りで静養してくればばれることも無かったのだが、守秘義務の関係とかもあって水無月真とその家族の場合と異なり、一般人の桐島レインについては一切情報を渡すことができない。更に言うとうと戸籍上も桐島エイダは存在せずに、エイダ・リンクスという別の人間である。再婚した暁には桐島エイダになるが。

「二応、お嬢さんの前ではちょっと変わっているけど、ギリギリ一

般の学生という枠で交流してるんですけど」

「交際しているっていうなら良かったのに。私似の美人で胸だつてもっと大きくなるはずだから……それとも少女趣味なの？」

「……美人なのも認めますが、まだ18にもなっていない若造が付き合うのにはちよつと重すぎます。ほら、お嬢さんと付き合うと自動的に、結婚、軍への仕官ルートが決定してしまうのが。軍と政府と企業のバランス的に、全く関係ない人と付き合いたいと思うのはワガママでしょうか」

桐島さんほど積極的ではないが、橘社長も身内のどつちかを押しつけようかなと考えている節がある。ただ、特定の勢力に利するような動きがあると残りがうるさいということによりやく気付き始めた。

「そういえば、あなた結局どこに進路を決めたんだっけ？ もつともあなたの場合、どこを希望しても推薦確実だと思うけど」

「星修系列の大学で、自分で研究室を立ち上げる羽目になりました。軍というかあなたの旦那さんが結構粘ったのですが、あなたの件もありますし、そもそも軍と関わる分野も少ないので、こういう形に」

ちなみにクリス先輩が一年早く入学しており、猫を被るのをやめた彼女は使えるスペックをフルに使って研究をする傍ら、白鳥名義で怪しげな作品を発表して注目を浴びている。なるべく学内では一緒に痛くないもとい、いると男よけに使われそうなので関わりたくない。もつとも、1年後には研究室にいたことが容易に想像できるのであるが。

「八重さんもそうだったけど特殊な才能の持ち主つて大変なのねえ」
「まあ門倉八重さんの場合は本業と才能が合致したのでしょうか、俺の場合は本業が学生ですからね。まあ文句を言っても仕方が無いのは理解していますが、もう少しゆとりとか欲しいところですよ」

さらにエイダさんと話し込むこと20分、見覚えのある金髪の美少女が血相変えてこちらに向かって早歩きしてくる姿に合わせてスターウォーズのBGMが脳内で再生される。ついでにちよつと遅れて諸悪の根源の関係者ことノイ先生も付いてきた。

「ジルベルトさんー」

女は怒らせると怖い。というか今回は俺別に悪くない気がするんだけど。

「こちらの方を紹介して頂けないでしょ……そんな!？」

「エイダ・リンクスさん、北米出身でこちらに留学したという設定でしたっけ？」

「南米を訪れていた門倉さんが、知人に瓜二つだから連れてきたってという設定にすると聞いたけど」

「お、お母様?」

「何、レイン?」

「亡くなったはずでは」

そりゃ、目の前で自殺した母親がびんぴんしてたら驚くだろう。

「技術の進歩ってすごいわよね。肉体が死んでも電子体が無事なら何とかなるんだから。それにしても大きくなったわね。勲さんに似て私よりも背高いんじゃない」

そしてエイダさんは娘をそっと抱き寄せる。

「ごめんなさいレイン」

声にならない嗚咽を漏らすレインとエイダさんを残して俺とノイ先生は公園を後にした。

side ノイ

「親はいつまでたっても親であり、子はいつまでたっても子である。私や水無月姉妹のように真に造られた存在には理解できない感情だな」

父親がアレな私としてはケンカできるレイン君は人間として正常なのだと思う。

「ノイ先生だって親になれば分かりますよ。まあ俺も親になったことがないので気休めですけど」

「人間というのは不完全で他人と一緒にいることでしか繁栄できない生き物だということを実感する。だが」

様々なファクターが複雑に絡み合うからこそ困難を打破しようと衆知を集めて歴史を作っていた。そして一人ひとりが違うからこ

そ私は人間を美しいと思うのだ。

「親になってみれば分かるというが、つまり君は私を母親にしてくれるということか」

「幼女体型とはもう言えませぬね。もう少しお美しくなったら考えますよ」

その言葉に少し心音が高まるがすぐに冷静さを取り戻す。いいだろう、サイズがCを越えた暁には向こうから迫ってくるようなシチュエーションを用意してやるさ。

「これにて一件落着かな。一年間って意外と早かったですね」

そういえば去年の今頃は、アセンブラの件でんやわんやしていたからな。だけど去年は楽しかった。

私の時は止まっていた。新しい出会いがあっても、彼らは成長し、老いて私を置いて行ってしまふ。去年の一年もそんな年になるはずだった。ジルベルト君、いや佐藤君ともちよつとばかりのいい友達で、いつか別れが来ると思っていた。

でも今年は、前に進むための一年で、来年は更に前に進むことができる。永遠を求める人に行ってやりたい。未来に何があるか分からないけど、進める喜びに代わる物はないと。

えせ救世主物語1 ジルベルト「サイバー出身の人間はフアンタジーな世界に適応できるのか」

季節は春

ジルベルト・ジルベルトとして18年生き、無事に大学に進学した俺は、現在キャンパス生活を満喫している。

1年目から講義より副コンサルティング業の方が多いいのは気のせいだと思いたい。普通に進級して普通に卒業するというささやかな夢はまだ捨ててはいない。

「この大学ってアークの出資なんだから必要な単位だけ取っておけば、別にうるさくないわよ。だから私もここに進学したわけだし」

そう言うのは、大学3年生で俺が所属するゼミのゼミ長をしている六条クリス先輩である。鳳翔の一年上の先輩であり、紆余曲折を経て、親しい仲となった財閥系お嬢様である。

「そういえば、結果として西野さんとは別のゼミに所属しているのは何でなんです。いや俺的には都合がよかつたんですけど」

先輩と如月寮の西野亜希女史は大学1年次は同期だった。美人二人が一緒ということもあり、1年次はそれは注目を集めたいが、結局2年次になると、それぞれ別のゼミに所属するというか、実質的に自分たちが主催するゼミを立ち上げたのだ。

「亜希ちゃんは、たまに遊ぶぐらいの距離感ならいいのだけど、常に一緒だとずっと面倒見ることになって辛いから。今でも月1ぐらいは遊ぶわよ。でもあの子のアプローチってやっぱりネットで、私たちのアプローチってリアルを前提としたネットの有効活用だからゴールが違うのよね。あなただって門倉甲とずっと同じ空間にいたいわけではないでしょ」

なるほど、確かに門倉甲はいい奴だし、たまに飯食うぐらいには友好度を稼いでいるが、じゃあ一緒に議論したいかという微妙である。

そんな訳で、星修学園の如月寮組は2年次に進級すると通称西野ゼ

ミに所属し、俺とレインは通称六条ゼミに所属したわけだ。

「それはいいけど、あの子どうするの？ 1年後とか考えているかもしれないけど、例の如く大学の1年のサイクルは長いようで短いわよ」

2年次にゼミを選択しなければならぬのだが、どっちのゼミからも誘われているというか、うちは積極的に誘っていないのだけど、彼女はこっちのゼミに所属する気満々で、彼女の姉は自分の方に来なさいと。

「気持ち分かるのだけど、こればかりはもう」

自分の問題なら最終的に決断するのだけど、こればかりはアドバイスもできないし。

「まあ、先輩が知っている未来だったらそんなことで悩む余裕なんて全く無かったのでしょうね」

「この辺は全部吹き飛んで、グングニール発射の影響による気象異常。鳳翔も星修も無くなったから学歴ってどうなってたんでしょね。まあ、蔵浜周辺の人たちはほぼ即死だったと思うけど。ジルベール・ジルベルトは生き残ってたわよ」

未来は無限の可能性があるとはいえ、ほぼ確定している道を違う時代の情報が入ったカーナビが適当に誘導して結果として最良の未来に行き着く可能性はどれだけあるのだろうか。

「もし観測者がいたのなら悶絶しているでしょうね」

曰く、灰色のクリスマスから無数のフラグ管理をしている存在がいるらしい。絶対者とかいうわけではなく、敵対者と一進一退らしいけど。

「とにかく、そういえばクリスマスの日にデートしてたのは門倉甲と渚千夏のはずだから……そういえば誰かさんがフラグを潰しまくったから一人の女の子の不幸と人類の繁栄を天秤に掛けたということで諦めてもらいましょう」

その誰かさんが俺であることは予想できるのだが、フラグを潰された女の子は分からない方が精神衛生上いいし、今更どうしようもないよねっていう前提で俺たちは話しているのだ。

実際、俺は俺のベストを尽くただけで、クリス先輩も多少の不満はあるものの、納得している。もしかしたら佐藤弘光や白鳥女史のようによつちに来ていて人物がいるのかもしれないが、俺たちが現在生きていく未来の道のりは筋道が付いている。

「女同士が和気あいあいと楽しんでる風景も乙よね」

この性癖が鳳翔在学中に発覚しなかったことが一番の奇跡だとかから思っている。

「おや、こんなところに。誰かの落とし物かな」

前を歩いていたノイ先生とレイン、真ちゃんが立ち止まり、ノイ先生が道脇に置いてあった本らしきものを手に取る。少し近づくとつれてその装丁が赤地に金の文字で書かれていたことに気付いた瞬間、俺の脳裏にデュエルセイヴァーという単語が浮かびアラート代わりにF a t a l l y が流れはじめた。

クリス先輩こと白鳥女史の方を見たところ、同じ想像をしていたように慌てた俺はノイ先生たちに向かつて近寄りながら叫ぶ。

「その本を遠くに投げ飛ばしてください」

「何を言ってるのかね、ジルベルト君。落とし物なら交番に……」

『来たれ』

書から召喚陣らしきものが展開され、時間の流れが心なしゆっくりとしているように思えた。

全力で走る俺とクリス先輩。

そして、本を中心に展開される陣が消え去る寸前、俺は転移酔いに似た何かを感じて意識を落とした。

えせ救世主物語2 クリス「ダウニー先生の永久封印 刑のCGまだー」

意識を取り戻した俺は、他のみんなが倒れている中、優先してクリス先輩を起こした。正直に言うと、デュエルセイヴァーは買って全クリまではやったがバルド系ほどやりこんでいない。白鳥友梨は妄想のためかなり設定に凝っているのでかなりやりこんでいる。今はその知識が必要なのだ。

「クリス先輩起きて下さい」

揺さぶること10秒。別にデザイナーズチャイルドだから寝起きがいい訳ではなく、俺みたいにリズムができていて起きやすいタイプもいればノイ先生のように10分くらい布団の中でごねるタイプもいる。クリス先輩は前者のようだ。

「気持ち悪い……夢で大好きな人が女の人とキャハハウフフしている姿を見るとは」

「現実に帰れ白鳥」

「現実……二次元の恋愛は自由。二次元なら男同士もOKというか推奨。とはいっても今やなんちゃって二次元の身としては」

何度目かの再確認だけど本当にダメだこの女、腐ってやがる。ネットのジョークでは腐女史が進化すると貴腐人になるといいますが、こいつみたいなのを言うのだろうか。

余談だが、白鳥曰く「至った人は森羅万象あるゆるカツプリン^かグ^うを作れるの。カップリングの錬金術なのよ」と意味不明なことを供述している。そして恐ろしいことに伝道者白鳥友梨は現代に布教しているやべーやつである。さすがにレインとか真ちゃんに布教しないだけの良識はあるが、水無月姉妹の姉の方がちよつと……否、今はそれどころではないと、思考の海から抜け出して現実を見る。

「それで予想通り、召喚の塔にいるわけね私たち」

立ち上がって外を見れば、物理法則をちよつとだけ無視した高さか

らの眺め。

「まあ、俺は一通りやっただけなので覚えて無いからアドバイスよろしく」

「……というか、これ爆発した後じゃない。どうやって来たのよって話になるわね」

クリス先輩の話聞いてよく観察してみると片づけられているとはいえ、ところどころ破壊の爪痕があった。

「ベストなのは自力で元の世界に戻る。ベターなのは赤本でも白本でもいいから元の世界に戻してもらおう。転送装置そのものは王宮の地下にあるから座標軸と彼女さえいけば問題ないけどそれは保険ね。少なくとも半ば脅される形で関わるのはごめん被るわ」

世界の滅亡に一度直面して足掻いた彼女の意見は正論であるし、俺としても余計なことをせず元の世界に戻りたいというのが第一希望だ。

「ところで、クリス先輩の方は出せそうですか？」

「必死に演算してるんだけど、馴染まないかな。ジルベルト君の方は？」

「ニードルガンくらいです。魔弾の方は無理ですね。多分馴染めば大丈夫だと思うのですが」

根源世界であるアヴァターは何でもできる素地がある。ファンタジー系出身の人間ばかりじゃなく、機械文明が発達した社会も派生しているのであればシミュラムは無理でも、武装は具現化が可能になると踏んでいた。つまり、アヴァターという世界を電脳世界と仮定して、電子チップがデータを変換している。例えるなら日本の製品を海外で使うためにコンバーターを使用しているところだろう。

召喚器が過去の英雄の魂を用いて作られたというのは知っているが、俺達が必要としているのはどうやって具現化しているのかなのだ。まあ結論からいえば、発生するというプロセスだと認識してしまえばいいのであるが。手元にはシミュラムで使い慣れているニードルガンがある。射程こそ短いものの、発射速度を考えれば大抵の間は殺せる。魔物はわからないが。

「私には理解できていないのだが、そろそろ説明してくれないかね」

二人の会話に口を挟んだのは、最近によきによきと成長しているノイ先生だ。治療も3年経ち具体的に言うところそろやばい。真ちゃんがノイ先生の胸元を見て絶望する程度には。

「先生が本を捨てなかつたからですよ。まあノイ先生は奇妙奇天烈摩訶不思議な状況に慣れっこだからいいですが、二人にはどう説明したのか」

「サイバーパンクからファンタジー世界に飛ばされてもね。いつそのことゲームという設定にしちゃう?」

「レインだけなら何とでも誤魔化せますけど、電腦症当時ほどではないけども敏感な真ちゃんに悟られないとか無理ですよ」

電腦症を克服している真ちゃんは、何も考えずにセキュリティを突破できることはもうできないが、セキュリティを突破したという経験値そのものは残っている。つまり、ハッカーとしては未だに一流であり、そんな彼女を誤魔化すのはほぼ不可能とっていいだろう。さらに言うと、シミュクラムユーザーとしての腕は上がっているというのは最早チートというかバグキャラなのではないだろうか。格闘ゲームキャラを魔改造しちゃったみたいだ。そう例えるなら全力全開真。もつともクリス先輩からするとお前が言うなの世界なのだが。

「えーと確かシアフィールド学園長が記憶を操作する魔法が使えたはずだから、完全に空白じゃなくて最終的にそういうゲームでテストをやっていたという結果にしましょう」

人間の想像力は空白を埋めることができる、これもいわゆる錯覚という事になるのであろうが。

「ん……ジルベルトさん、ここどこですか?」

「頭がグルグルです」

レインと真ちゃんが起きたので、状況を説明しようとしたら、体中から色気が溢れている女性が塔の下から駆け上ってきた。

「あらあ、大河君達は2人だったけど、今度は団体さんねえ」

「失礼、俺たちも何となく理解はしているのですが、ここはどこなのでしょう?」

「ここは根の世界と呼ばれるアヴァターよ。私はここで教師をしているダリア。それであなたたちは何者かしら？」

「どこにでもいる普通の学生と狂気のマッドサイエンティストの組み合わせです」

「どこにでもいるねえ」

「ジルベルト君、狂気とマッドは同じ意味なのだが……」

クリス先輩とノイ先生の発言は無視するとして、ダリアさんの胸の大きさってバルド系で一番だよなと男として健全な思考が頭をよぎる。まあ、別に胸なんて子供に授乳する機能がメインであり、後はファッション上の問題である。強いていえば崩れない方が美人に見えるわけだが、それはそれで女性を物のように見ている感じで余り好きではない。

「とりあえず、説明できる方に詳しい説明をして欲しいのですが……」

「そうね、私が説明するより、学園長に話をしてもらった方がよいかもしれないわ。とりあえずようこそ救世主候補さん？」

「お初にお目に掛かります、ジルベル・ジルベルトと言います。まあぶっちゃけますと、元の世界に戻してもらえると助かるのですが」

学園長室には、30代後半の女性と20代の男性教師、そして俺たちを案内した

「ジルベルト君といいましたね。残念ながら召喚陣と呼ばれる施設。あなたたちの居た塔のことですが、機能が壊れています。そもそも壊れた召喚陣からどうやってあなたたちが出てきたかも調査しなければなりません」

それはもつともな話であるが、そもそもこの世界の特異性の前にはルールなんて皆無みたいなので話を進める。

「二つ、召喚士の力を借りる。二つ、空間移動するための術を覚える。三つ、違う転送施設を探す。あるいは俺たちが出てきたその召喚陣を直す。空間移動は次元断層を越えなければならぬので現時点では却下。現実的なのは他の手段ですが、俺たちの世界のポイントが判明しないと難しい。しかし、あなたたちは敵対勢力との戦いで忙しくて

「その余裕がない」

「あなたたちの世界には次元を渡る術があるのですか？」

「自分の世界のルールに当てはめて考えただけよ。それにゲームだとありがちな設定でしょ。それで漂流者である私たちを救う余裕があるのか聞きたいのだけど。あなたたちが無理であるなら別の手段も考えなければならぬし」

「手段ですか？ 私としてはあなたたちに救世主になって欲しいのですが」

「安寧の為に味方に殺されるとか嫌ですよ。既にそれぞれの主が定まっている以上、これ以上のユニットは不要でしょう」

「空気が固まったような気がする。ふとクリス先輩を見るとやっちゃったわね的な顔をしていた。」

「主とは何ですか？」

「ダリア先生が目を光らせている。いやあなたスパイだから知っているでしょ。」

「……ここで話してもいいんですか？」

「……後日改めてお話ししたいと思います。今日は部屋を用意しますので皆さんそちらの方で」

「そうですね、俺としても皆さんとお話して、俺達にとって何がベストなのか考えたいと思いますし」

目の前には、学園側、王国側、破滅側の人間が居る。究極的な話をしてしまえば、当麻未亜はおそらく救世主になれないので勝ってしまったら自殺するだろう。ダウニー・リードの吸収は有用な性質だが、器としては人間の枠を越えないので、力を手に入れても暴走させる。そしてロベリア・リードには最早資格がない。アヴァターは壊滅するかもしれないが、最終的に影響は無いと踏んでいた。

神の定義は分からないが、自業自得で世界が滅びる可能性はあっても、外敵の存在によって人類が減びることは多分ない。ましてや人間に最終決定権を与えて行使できるほど人間は強くない。正直、神の意図って完全な世界を創ることじゃなくて適度に文明レベルを調整して完全な破滅を抑える為じゃないのかと。おそらく文明の発展度と

破滅のモンスター、救世主の質と数でバランスを調整しているっぽい。

むしろ、俺達というイレギュラーが居ることの方が問題であるので、戻れないなら、安全な場所で生活するという選択肢が重要である。知るパターンでは学園に居ることが一番安全なのだが、できるのであれば王城の地下にあるという転送装置を使いたかった。多分、あれが本来、救世主を呼ぶための装置のはずだ。赤本か白本のどっちかの協力があればいい。

「反乱勢力を一ヶ所に纏めたところまでは良かったですけど、その後虐殺すべきでしたね。まあ千年近く前の話にしても仕方ありませんが」

「……ダウニー先生、彼らを客室にご案内して下さい」

「わかりました、こちらです」

ダウニーさんののに案内されて、まず女性陣、真ちゃんとレイン、クリス先輩とノイ先生、そして俺一人で部屋に分けられた。これだけいい部屋なら当麻大河はこっちでも良かったんじゃないか疑惑が浮上する。「何かありましたら、入り口にあります事務の女性に行ってください」「ありがとうございます。ダウニー先生とお呼びしてもよろしいでしょう。先生は何がご専門で？」

「魔法全般です。と言っても学園長には足元も及びませんが」

「彼女は純然たる魔法文明の出身者で元救世主です。あなたの吸収は優れた能力ですが、根本となる知識と経験の差がある以上遠くおよびませんと思いませんか、ダウニー・リード先生」

「……何者ですか？」

以前から思っていたのだが、ジルベール・ジルベルトというのは挑発的な部分が強いです。佐藤弘光の頃は普通の人だったと思うのだが、魂（ジルベール・ヘタレルト）の影響だろうか。

「物語に存在しないはずのバグですよ。今のところ、学園長とおお姫様ともあなたたちとも利害関係はないですけどね。まあ、アヴァターが壊滅しても多次元世界は崩壊しないので存分に殺し合ってくださいな」

「アヴァターは全ての世界に影響を与えます」

「うち、科学万能な世界なので地震程度は終わりますよ。それに俺達の時代の厄災はつい最近取り除いたので」

世界を手玉に取るような輩の登場は多分俺の世代ではないだろう。そう簡単にリヴァイアサンやらノインツェーンレベルの厄災が来られても困る。

アヴァターの影響というものは地震に例えられる。巨大な津波が発生した場合、近場は甚大な損害を被るが、遠くには影響が少ない。言うなれば、ミュリエル・アイスバーグやルビナス・フロリアスの出身世界はアヴァターとは離れており、リレイ・シアフィールドやロベリア・リードの世界は近いからもろに影響を受けたというところか。

「人が死んでも構わないのですか？」

「俺は一緒に来た仲間を無事におとぎ話の世界から現実に帰すという目標がある。意図的に殺したいわけではないけど、優先順位を怠るとかバカのことですよ。しかし、あなたは復讐者なのにこのような質問をするのは（する事自体が）ナンセンスだと思いますよ」

まあ、嫌いではないのだけど。

「そういえば、ずっと疑問に思ってたんですけど、ロベリアさんの召魂とルビナスさんのホムンクルスの技術があれば妹さん蘇らせることができるんですけど、どうしてしなかったんでしょうかね」

「か……可能なんですか？」

「情報の齟齬が発生しなければ多分。さらに言うと、傷の無い体もルビナスさんに頼めば簡単に作れた疑惑が。ああ、本人が彼女の肉体欲しかったというなら話は別ですけど」

理論的に可能なのと実現できるのかは別問題で、主に金銭や資源、時間などの制限がある。人間の犠牲とか差し引いたらそっちの方がお得なんじゃないかなと思うのだ。

「別に親の因果を子に背負わせるのはあれですけど、復讐する貴族の家、マナとか枯渴させて奴隷に落とすちゃえば解決ですね。というわけでその辺踏まえて白本に交渉しといて下さい」

今更だけど、この体トラブルを引き起こしやすいのかねえ。

えせ救世主物語3 ノイ「善人も悪人も皆等しく狂気にさらされている」

「英雄とは自分の周囲にある小さな幸せを放棄して戦える存在、復讐者とは自分の望みが叶うまで戦える存在だと俺は考えているのですが、この二つの存在の共通点わかりますか？」

「妥協しないことかしら。まあ後者はともかく前者は妥協していたら歴史に名を残さないから当然なんだけど」

佐藤弘光も白鳥友梨も前世では政治とかに格段の興味を持たなかったが、グダグダ批判しても何とかなる政治システムって優秀だったことに気付く程度には人生を生きた後に転生を果たした。

「さて、英雄と復讐者と統治者がいるとします。一番相手として楽なのは統治者です。常に味方ではありませんが狂人じゃないので大多数の利益が確保できるなら妥協が成立します。次に楽なのは復讐者ですね。復讐の原因を取り除けばいい。仕込みが要りませんが多分何とかなります。問題は英雄です。効率的に言っちゃえば候補者全員謀殺つてのが手っ取り早いですけど」

「私達が助かるだけって前提なら悪く無いわね。ただ、それは世界的に正しいかどうかの問題があるけど」

自分の時は情報を持っていなかったので好き勝手にできたが、今回のケースは事前情報を持っているだけに慎重にならなければならぬ。なるほど、白鳥女史の苦悩も分かるというものだ。

「済まないが私にもわかるように説明して欲しいのだが」

「要するに誰と与するのが手っ取り早いかですね」

デューエルセイヴァーデューエルセイヴァーを知らないノイ先生に説明しながら改めて情報を整理することにした。

「俺達の第一目標は帰還することです。英雄の目標は今回を凌いで次回に繋ぐことです、これは統治者の民を守るという目標と合致しているので両者は現状結託しています。復讐者の第一目標は破壊することです」

「支配ではないのかね？」

「そこが問題と言いますか、復讐者の勢力の頭目の復讐目標はすでに亡くなっています。いい空気吸って子どもと孫に囲まれて天寿を全うしたわけです。つまり言い方はあれですが彼らがしているのは八つ当たりですね。で復讐者には協力者がいますが、有体に言えば暇人の憂鬱のメンツが好き勝手にやるみたいな感じで、破壊・破滅願望はあるとしても過程もゴールも異なるわけです」

名前忘れたけど、金髪ボインの姉ちゃんのお兄様とか、ムドウだっけか、忍者の仇とかと、メサイヤパーテイ関係者では空気が違うというか、まじめに目的を果たそうと考えているのが赤本だけなのが泣ける。

「現実問題、復讐者の首領に関しては、復讐の要素を解消して、ちよつと統治者側が妥協してくれたら、1000年先まで先延ばしできるわけです。要するに久利原方式での解消ですね」

「悪役は悪役と連むのが妥当よね」

「嫌だなあ、俺たちは悪ではありませんよ。俺なんて学生なのに真つ当に税金を払っている選良ではないですか」

俺もクリス先輩もノイ先生も日常に適応した狂人に過ぎないのだから。

召喚された当日、人目のつかないところでダウニー先生と悪だくみを楽しむこととした。いや白鳥的な話ではないよ。白鳥は大河×セルかセル×ダウニーで悩んでいるところだから。俺には関係ない話である。

「俺があなたに切れるカードは一つです。一人だけなら死者を呼び出し、蘇生させる段取りを整えるということです。正確には俺が世界を誤魔化している間にネクロマティックで魂を呼び出して、ホムンクルスに固定すれば、死んだという前提が覆せる。つまり結果として最初から対象は死んでいないというカラクリですけど」

ネクロマティックは仮初めの生を与えるだけだ。封印されているなどの条件が無ければ肉体に固定化することは不可能。第一、違う器

に魂を入れて維持するのが困難なはずだ。これは肉体と電子体の関係に似ている。

「その条件を満たせることができるネクロマンサーはロベリア・リードだけ。アルケミストはルビナス・フローリアスだけ。幸い、前者は現世に蘇り、後者も伝があります。ですから選んで下さい。あなたを奴隷に落として人生を破壊した貴族を蘇らせて復讐を果たすか、あなたの妹さんを蘇らせるか」

「復讐を否定しないのですね」

「大義やら信念やらで世界と心中しかけた人間を知っていますからね」

基本的に俺は巻き込まれ型であり、ヒーロー願望は無い。ヒーローなんてものは眺めて楽しむ娯楽であればいい。古代コロッセオで、奴隷同士や奴隷対猛獣の戦いを楽しんだ人間は当時市民から貴族まで数多いだろうが、自分がそれらと戦いたいと考える狂人はごく僅かなだったろう。

「気まぐれで殺し合いをさせる人間がいるのなら、気まぐれで人を蘇らせる人がいてもいいでしょう？ 俺は手段を提案しただけで、実現するためには救世主側と破滅側の力が必要なので。別に世界なんて滅びる時に滅びますよ。やろうと思えば俺だって一週間くらいできますし」

何しろアセンブラー触れると死ぬーを生成してばらまくだけで簡単に世界の生態系が吹き飛ぶからな。

「冗談ですよね」

「必要な設備さえあれば作れますよ。広域魔法でなぎ払えば防げますが、一部でも残ればまた増殖し始めますから滅ぼすだけなら効率的ですよね」

「……私が問うのも滑稽ですが、あなた破滅願望無いですよね？」

「元の世界では働かなくても食っていける身分で、面倒だから行きつけのカフェのマスターのところでバイトしつつ、独立して料理屋なんかやりたいなと思っていますが」

「貴族か大商人の家のはみ出し者なんですか？」

「アイデアを売るので技術者になるのかな？　うちのメンバーの中だと貴族のカテゴリに入るのは銀髪の人ですネ？」

今世紀最大のマッドサイエンティストの娘、高級軍人の娘、遡ると貴族に連なる名門のお嬢様、財閥の親戚の娘……ジルベルト家なんて金持ちに入ってはいるけれど、いや金持ちなんだけど、すでに俺個人のパテントの方が上だからなあ。

「私なんて、両親に先立たれ……」

何か愚痴モード入ったぞ。ジルベルト始めて何回目かなこのパターン。年上の愚痴聞くために生まれて来たわけじゃないんだけどなあ。

「運命は我らを幸福にも不幸にもしない。ただその種子を我らに提供するだけである」

「何ですかそれ？」

「俺の世界の400年以上前の思想家が言った言葉です。何なら王家乗っ取ります？　マッチポンプでいいじゃないですか、活躍すれば英雄ですよ」

もしルビナス・フロリアスが生き残り、アヴァターに残っていたなら、民衆は傍系であるアルストロメリアではなく、ルビナスを中心とした新たな国作りをしただろう。正統性なんてものは乱世なら意味がない。

「君は……いやいいでしょう。どうせ学園長や王女様にも交渉をするのでしょ？」

「最初にあなたの元を訪れたことを評価してもらいたいですけどね。あなたのお仲間なら時間、場所含めて全て調整できるじゃないですか？　俺達にしてみれば大きなアドバンテージなんですよね。ではそろそろ次の交渉相手の元に伺いましょう」

俺はダウニー先生に会釈をして部屋を去った。しかし……。

「どうして思いつめた人間の部屋って似ているんだろうか」

御大将こと、久利原直樹の部屋もそうだったが趣味らしいもの一つもない。まあ、こないだモニター越しに会った時は華やかとまではいれないが何となく潤いを感じることができた。部下にも慕われて

いるし自分が斡旋した割にはいい環境なのだろう。何しろ、アセンブラを制御できた英雄で、統合宇宙軍の大佐待遇で勤務しているから女性からの人気もあるらしい。

「遅れて申し訳ありません。ちよつとダウニー先生と話し込んでいます」

「ダウニー先生ですか」

「はい、世界間の常識についてです」

嘘は言っていない。まあ俺の常識が世界の常識だったら困るが。

「個人的には嵐が来る前に王都にある転移装置で送り戻して頂けると助かるのですが」

「現状では無理です。そもそもあの転送装置は隣接する世界を移動する為のものであつて、世界を超越できるわけではないのです」

「学園長が次元の壁を渡って訪れざるを得なかった理由ですか。どちらにせよ我々は自分の世界の座標を知ることができません。地球つてご存じですか？」

「大河君と同じ世界ですね。ですが、あなたは次元世界に詳しくすぎる」
「その大河という方がどなたか知りませんが、二、三百年も時間が離れていけば常識は変わります。まあ『千年』も離れているわけじゃないのですけど」

「つまりあなたの世界では破滅の脅威が迫っていることは衆知の事実ということですか？」

「一般人は知らないと思います。ですがそれなりの地位にある人間は知っています。そしてこちらの方針としては放置です」

当然嘘だ。他の世界ならできる可能性もあるが、俺達は結果を知っているに過ぎない。

「ですが、破滅がアヴァターを蹂躪すれば全次元世界が」

「学園長は水に石を投げたことがありますか？」

「子どもの頃に遊びとしてやりましたが」

「石によって波紋が起きますけど、基点から離れば離れるほど影響が少なくて波紋が起きますよ。つまり影響度が低い世界であればあるほど被害

を受けない。つまりアヴァターの近くにある世界はアヴァターの状態が正常な状態では恩恵を受けることができますが、異常事態になれば当然その被害も受ける。辺境世界というか外周部はその辺影響受けないのでどうでもいいです。多分大地震で10万人が死ぬとか、干ばつで20万人餓死とか、戦争で30万人死ぬとかそんなレベルで終わりますよ」

それはそれで問題なのだが、人口が80億近くいると命って軽くなるし仕方が無い。加えて、人類滅亡がほぼ確定する災害の芽は摘んでしまったのでおそらく安全パイのはずだ。それこそ白鳥女史が知る世界(BALDRSKY)はアヴァターが壊滅した影響疑惑が浮かんでくるが。どうせ時間の流れなんてあつて無いようなものだし、逆説的に自分たちが解決したから特に問題がなかったという結果の可能性もあるのだが。

「一週間分くらいの生活費貸してくださいれば後は自活しますから放逐してほしいですね。自分の身は自分で守れます」

タイムラグ無しに武器を呼び出し突きつける。当然学園長も構えた。緊張感が漂うが、やがて俺は武器を消して両手を挙げた。

「冗談ですよ。あなたを殺してもメリツトは皆無です。あと聞きたいんですけど、どうして彼女の封印を解かないんですか？ 封印を手伝ったあなたが解除できないわけじゃないでしょう？」

「……何のことですか？」

「じゃあ話を変えましょう。オルタラを知りませんか。イムニティとの交渉は難しいからまだ彼女の方が」

「待ってください、あなたは何を知っているのですが」

「あなたがメサイアパーティの一人であること、千年後のお祭りの時期に救世主がいなくてもやっていけるようにフローリアス学園を創設したこと、そしてオルタラの力の影響で本来の世界に戻ったこと、次元断層のせいで間に合わなかったこと」

どれか一つでも違えば歴史は変わっていたのだろうが、今更だ。

「正直その執念には感心しますが……あなたは救世主候補に言うべきでしたね。主になってはならないと」

「あなたに私の何が分かるのですか」

「あるいはミュリエル・アイスバーグを名乗り英雄の名をもつて戦うべきでした。その隠している態度が最終的に王家からの不審に繋がっているのではないですか」

「私だってあと20年、いえ10年早く来たかったですよ。滅びた世界で拾った娘は何の因果かライテウスに選ばれた。私は選ばれなかった。だから」

「ミス・アイスバーグ。これクリス先輩、銀髪の人の考えなんですけど、救世主候補に選ばれる存在は渴望している。そして現状を打破しうる力を望んでいるのではないかと。あなたがどのような理由で選ばれたかは分かりませんが、それより大切な物を得てしまったからライテウスは次の使い手を選んだのでは」

何しろ現状に満足できる人間は変化を望まないのだ。変化を望むのは現状が素晴らしいにもかかわらず、より前へ進むことを欲する一握りの超人か、現在を受け入れることができず、かといって改善することもできずに不平を漏らす患者しかいない。娘を得たことで満たされたのか分からないが。

「召喚器は心の在り方によって出力が変わる武器です。まあ同時にアレから力を貰っているから監視されているも同然なんですけどね」

「それでは私達の時も」

「厳密に言えばアレは見ることでできますが干渉はしません。干渉するのは導きの書というユニットです。ユニットは自分の主となる人物を見定めるまでは全ての候補者を閲覧できますが、決まってしまうはおそらく見ることはできません。ユニットは主を選ぶのが本能であり、定めてしまえば相手のをぞき見るのは競争させるといふ観点からは相応しくない。だから現状では相手方に漏れませんよ」

「私、自分の世界に戻ってからは次元移動の魔法を学ぶのに必死で、その後はここに来るのが目的だったから交渉とか根回しとかがそれほど得意じゃないのよ。そういうのはアルヤルビナスに任せきりだったから」

錬金術師って材料集めるから交渉できないといけないからなあ。

もつとも、世の中には王国騎士団長より強い錬金術師やら、ドラゴンを仕留めちゃう錬金術師がいるわけだが。

「その辺の愚痴は後日聞きますが、俺的にはルビナス・フロリアの復活を提案します。どうせロベリア・リードも蘇っているんだから同窓会でも開いて愚痴を言い合えばいいんじゃないですか?」

「その件については検討しましょう。最後に聞きますが救世主候補しませんか?」

「仲間を守るためなら世界が滅んでも構わないとか思っている人間に期待しないでください」

「残念です」

同年代だったら口説きたくなるくらい佳い女が、幸せを捨ててまで願うのは……いやそういうのは他人がくみ取ってやればいい。失礼しますと学園長室を俺は出た。廊下を歩きながら今後の予定を確認する。

「後は王女様だけどうしたらいいのかねえ」

素直に密偵の人に仲介を頼むか、いつそのことアークまで乗り込むか。

1日目終了

えせ救世主物語 4 真「奇跡は起こらないから奇跡つて」

異世界召喚生活3日目

王都アークの旧市街にある屋敷の一室。

表向きはとある貴族の邸宅であるが、その実王政府の非常時に仕えるセーフハウスの一つだそう。というかそれ俺が聞いていいのかね。

目の前のピングロンドの少女は、差し当たって俺が差し入れた菓子（毒味済み）を食べ、茶を飲んで一息つくくと、舐めるように俺を見た。表情こそ興味津々だが、目はモノを見る、キチンと交渉できるタイプだ。

「お主が新たに現れた救世主候補か」

「別にそんな大それたものではありませんよ殿下、いえ陛下ですか？」
もちろん事前に情報は知っているが、何せ召喚生活3日目で詳しくぎると怪しいのでそれでいいのだ。

「統治者であるが、破滅の影響で即位がなし崩しになってしまった。敬称も王女陛下なる奇妙なもので固定されてしまった。面倒だからクレシーダあるいはクレアとでも呼んでくれ」

将来美人になる少女の目が死んでおられる。

「ではクレシーダさんで。余計なものを背負わされるのって嫌ですよね」

同志見つけたって目をしないで。そういうのはクリスマス先輩としてほしい。

「お主も中々面倒そうな人生を……まあ、何の因果かこんなところに漂流するのだから普通ではないか」

何故俺がこんなところで、お偉いさんLV3の彼女と茶を飲みながら世間話をしているかという、召喚生活2日目の朝に教師兼ポイン兼密偵さんにコンタクトを取ったところ、翌日ここに案内され、詰まらないものですが、と食堂を借りて仕上げた菓子を渡し、現在に至つ

ている。

クレシーダ・バーンフリート。ノイ先生と違って見た目と年が一致する少女は中々苦労性なようだ。まあ俺の知っている偉いさんトツブなんて苦労人が変人の二択だからなと思う。

「ちよつとファンタジーな世界で生きていくのは難しいので早めに自分の世界に戻りたい。ですが現状でそんなことをするのは難しいというのは重々承知なので自活まで一週間分くらいの生活費を頂きたいという交渉を学園長としているところですよ」

「お主は何ができるのか？」

「戦うこともできますけど、敵味方構わずフィールド内の全生物を殺し尽くす魔法とか使う人間って危険だと思いませんか？」

俺の瞳を覗いて、嘘でないことを確認し、それが誇張は入っても嘘ではないと知ると彼女は、両手を挙げた。

「全生物ということは一度使ったら以後manaを吸い上げて自動的に駆逐するタイプだな。最悪大陸全土が不毛の大地か。それこそ破滅だな」

クレシーダ王女は脳内でメリット・デメリットを計算し、どうやら天秤が赤字に傾いたらしい。

「普通の技能ですと医者とか、料理ができるとかですか。一応秘書の真似事とかもできますけど」

「では私が雇っても良いぞ。文官が足りないのよ。それで望む報酬は何か」

「協力いただけるのであれば地下の転移装置の使用ですね。一応別枠での交渉もしているところではありませんが」

「転移装置か、確かにアレは私が承認しなければ難しいな。しかしお主は何者だ。確か3日前にこの世界に召喚された割に詳しいな。別枠といったが、ミュリエルではあるまい。あるいは破滅側か」

わざと口を滑らし過ぎたとはいえ、判別する知性はある。

「破滅という現象、破滅として活動する人間、現世に絶望して破滅に加わる人間の区分は必要だと思いますが」

「ジルベルトと言ったな、お主に聞きたい。どうすれば問題を解決で

きると思う」

「それは抜本的な解決方法ということでしょうか」

「正直、それは次回以降にしたい。いや私の代でどうにかなる問題ならそうしたいが」

自分は軍事の延長戦上である政治の専門家ではないと断った上で次のように述べた。

「知り合いの言葉を借りるわけではありませんが、備えよ常に。つまり破滅が来ることが分かっているながら準備が足りなかったことが初手で致命的でした。あとそちらは正体を知っている前提で話しますが、学園長と腹を割って話すことができないことで、身内なのに緊張感をもたらす謎の状態に陥ったのもまずかったですね」

現状、彼女には伝えることができないが、ミュリエルは召喚器を使えなくても、ルピナス・フロリアスを戦場に投入することができる。マスターの力は失っても、オルタラと組めば疑似マスターと導きの書ができる。何より彼女がひたすら錬金術をするだけで、味方の生存率とモンスターの殺傷率にかなり影響が出る。

「つまり次回の為に我々は何とか現状維持をしなければならぬというところか」

「破滅という現象によるモンスターの増加に関しては討伐、救世主クラスを投入すれば何とかなると思います。なんか強そうな人たちも何とかできると思います」

俺の想定だと、リードさんちがこっちに寝返るから。

「クレシーダさんは召喚器とその使い手たちをどのように考えていますか？」

「難しい質問だな。召喚器は強力な武器だ。確かに頼もしいが、扱う人間は多感な少女……まあ今回は男がいたが。異世界の少女に振り回されるリスクは常にあると思っている。

「怖いですか？」

救世主クラスがとは敢えて聞かない。

「お忍びでも見たし、近くでも何度か見たが、私が持つ力でも行使することに躊躇するのに彼女達、いや大河は男だがどうしてあれをふるっ

て平気で居られるのかと思っただ」

召喚される時、あるいは召喚器を行使している間はそういう感覚がマヒしているのか。その視点は考えたことがなかったな。まあモンスターとはいえ生き物を平然と殺せる文明圏はそう多くないだろうし。

「多分伝承とかだと、破滅という現象が発生するから救世主が現れるというみみたいな記述があると思うのですが、俺の考えはその反対で、救世主を作る為の経験値として破滅というモンスターが居るわけです。参加資格がある人間は当然召喚器を持っている救世主候補だけです」

「つまりアヴァターとはそれを成すための箱庭という訳か」

自嘲気味に笑う彼女を見て、彼女が後10年、いや5年でも早く生まれれば今日の混乱は最低限に抑えられたであろうと残念に思う自分がいた。

「当麻大河に聞いてもいいと思うのですが、ここは蠱毒なんだと思うのですよ。救世主という次代の種を作るためにモンスターが人を殺し、救世主候補がモンスターを殺し、そして救世主候補が他の救世主候補や人を殺す。事実、壊滅的な被害があっても千年前を除いて語り部が残らなかったという事実は異常です。おそらくどこかの段階で勢力を二分するような事態に陥るのでしよう。あるいは生き残っても元の世界に戻されるか。今回対策ができたのはあなたのご先祖がこここの出身かつ王族の出身で、対策を立てる権力を持っていたからです」

「これを知っている人間は？」

「私と同行者の一人、あなたには今話しました。後はあなたも知っている過去の亡霊。もちろんこれは断片的な情報を元に組み立てただけで確証なんて全くありませんが、現状はこんな感じでしょうか？」

これが真実であってもここにやってきて3日目の男の話など所詮世迷い言に過ぎない。

「そうだな、この後食事が来るのでそちらも楽しんでいただきたいのだが、どうしてジルベルト殿は私にこの話をしようと思ったのだ」

「統治者には限界がある。つまり妥協が成立するわけです。俺が考えたようなシステムの場合対処療法が一番じゃないですか？ 神様か絶対者か知りませんが次元を超越している相手をどうにかするって不可能ですし」

状況さえ許せば俺が何とかできそうなのは別として、この世界の問題ゲームは世界の関係者に解決して貰おう。

「で、この状況について説明プリーズ」

「ちよつと遊んであげただけどまずかつたかしら」

「まずいも何も、えげつないトラップ持ちの先輩と完全空戦仕様の真ちゃんが本気になったら普通の人間は無理ですって」

俺が学園に戻ってきて見たのは、死屍累々になっている救世主候補達と、傷が全然無いクリス先輩と真ちゃんだ。

「あ、あんたもあれぐらい強いのか」

青ざめている少年、セル……そう確かセルロイド君だったかの質問に対して一瞬迷ったものの。

「いや俺はあそこまで人間捨ててないといよ」

真ちゃんとか頑張ればガルガンチュア単騎攻略できそうだし。

「ていうか、どうして真ちゃんもできるようになってるんですか？」

「そりゃ自衛手段は与えてしかるべきじゃない。世の中には当麻大河みたいなペドがいるかもしれないし」

余談だが、現在のノイ先生は身長164にバストは83と、とうに真ちゃんを抜いてしまった。そして残念ながらノイ先生の場合は抑制されていただけで、適度な栄養と運動をした結果、2年で18cmも身長が伸び、カップに至ってはDと今やちんまい先輩の面影はほとんど無い。そして真ちゃんには努力が実らない場合もあるという事実が浮き彫りになってしまった。まあ別に死ぬほど小さいわけではないのだけど相対的に小さく見えるだけで、当然子どもができれば大きくなると思うが。

「救世主クラスの人間ってやっぱり違うんだな」

「あれは俺達の世界の固有技能。もちろんあの子の場合、70億の上

から数えた方が早い部類だけだよ」

きつと魔法の世界ならドラゴンもまたいで通るぐらいの人間のレベルだけだ。

「それに俺達、救世主候補として召喚されたんじゃないやなくて事故できたようなもんだから。多分数日以内にはここを出ていくと思う」

「そんなに強いのに？」

「正直な話、俺の世界はともかく、暮らす環境としてはあれは娯楽のレベルなんだよ。覚悟が無い人間が暴発して内部から崩壊することの恐ろしさ、あんたも一度くらいは体験したことあるだろ」

セルロイド君は納得してくれたようだ。

「当麻兄妹も拉致同然で連れてこられたと聞くけど、俺はともかく女性陣が戻らないと多分世界がえらいことになる」

ナビゲーターがいればほとんどの経過日数なんて数分の誤差なんだが真実を知らない人間にしてみれば、重大な事実として受け止めるだろう。

「……どつちかというとななたが一年以上失踪すると軍拡とか紛争が再開しそうな気がするんだけど」

「いい加減、折衝する作業から解放されたいんですけど、ていうか先輩の実家までスクラム組んできたじゃないですか」

先輩の養い親である六条家は特定の分野に力を入れているというわけでは無いが、学園都市の出資者の一人であるため、何故か出席する羽目になった懇親会とかで会うことが多い。何とというか別に娘に悪い虫が付かないか心配するような親とか、シスコンマッドな人とか、個性的な年長者が多い中、六条氏は常識的な大人である。まあ趣味の領域を越えている気もしないでもない『脳内チップに連動して動く1m位の人型ロボット開発』で俺に意見を求めて一緒にやる仲ではあるのだが。

「お義父さんの趣味ね。でもあれって最終的に宇宙で活動できる人型ロボットにする計画が確か立ち上がってなかったっけ？」

「個人的にはナ●シコのエステ●リス的なやつがいいと思うけど、冶金分野をもう少し発展してからだから現状ではお遊びだよ」

「私はオーソドックスにザ●とかMSが好きなんだけどな。どっちにしても初期モデルは戦闘というより作業用だし」

俺がエステ●リスを推すのは操作方法がシミュラムの感覚と似ているからであり、先輩がMSを推すのは、作業用機械の延長として考えられるからだ。

「金持ちなのは何となく分かった」

「そもそも満たされている人間は救世主に向かないんだよ」

「それ、どういうことよ」

「召喚器は現状を覆すだけの力を求めるといふ強烈な感情の発露によって顕現する道具だ。普通の人間なら過ぎたる力を持つ事を恐れる。違いますか魔術師さん」

自分とよく似た色の髪を持つ少女に対して嗤うと瞬間的に魔法を出そうとした。彼女のグローブ型の召喚器『ライテウス』の宝玉が光輝くが、やがて光を失っていく。

「アヴァターでそれできるってえげつないわよね」

「根源世界だから全ての技能が使えるというのも考え物だよな」

「あ、アンター！ 何をしたの？」

「企業秘密かな。とりあえず君達が振るうような奇跡とかの類じゃないわ、純然たる技術による干渉による無効化だから安心しろ」

「ああ一応解説をしておくが、理論的にできるのと実際にできるは違うからな。そんなことできそうな異能は私の知る限り彼ぐらいなものだ」

ノイ先生の言うことは正しいのだが本当に身も蓋もない。

「そうね、あなた過去を取り戻したい？」

「過去？」

「取り返しの付かない出来事。例えばさささない言い争いでケンカとして仲直りをする前に相手が死んでしまったとか。家族が理不尽に殺されたとか。そういうときに無かったことにしたいと思うでしょ？ 例え友人を殺してでも勝ち取りたいと思う人だけがきつと救世主になれるのよ」

「私は……」

「クリス君、それはちよつと言い過ぎだ。濟まなかつたな。だが私達はこの世界で生きるために戦うだけの志が無い」

「あるいは理不尽に対して復讐する要素がないのよ。まあ真なら願いがあがるから救世主になれるかも」

「クリスさん、それどういう意味ですか？」

真ちゃんが黒い笑みを浮かべて笑い、クリス先輩は目を逸らしつつ胸を見ている。まあ奇跡でも起きない限りはどうしようも無いのかもしれないけど……別に極端に小さいわけでもないのにやんや言っている彼女達のおかげで緊迫した空気が解消したのは事実だ。

えせ救世主物語5 レイン「今更ですがここはどこなの
のでしょうか」

異世界召喚生活4日目

生命に対する研究に関しては、どこの世界でもそれなりにえげつないことをしていると思う。

思うに錬金術師はホムンクルスという存在を作るために、どれだけの命を犠牲にしてきたのか、死霊術師は魂の召喚と固定化という技術を確立するためにどれだけ殺して体系化したのか。身近な話で言えば、義理の父予定が生まれるまでにどれだけ殺したのかとか、その娘が生まれるまでにどれだけ弄ったのかとか。その果てに生まれたのがデザインーズチャイルドである俺たちである。

「賢者の石を核としたホムンクルスに、ネクロマティックで魂を喚び出して定着させる。ダウニー先生、その場合の問題点は？」

「ネクロマティックの成り代わりは術者で無ければ成功しません。反魂の術は一時的に死体に定着させるだけで、長く保つても一週間が限度」

「それはチェックサム判定で弾かれているパターンですね。情報の改ざんをすれば上手く行きます」

現在進行形でサイバーパンクな世界が暮らしている為に忘れがちだが、佐藤弘光が日本人として20世紀と21世紀を生きていた頃、違法ソフトウェアコピー対策としてチェックプログラムがセットされていた。そのおかげか知らんが、定期的にCD入れるのは面倒だなと思っただのは良い思い出。というかウイルス対策ソフトにウイルス扱いられていてゲーム出来ないよな話だったりする。

さて、サイバーパンクやらサイエンスフィクションの世界に生まれ落ちた訳だが、自分が電脳世界に入るというトントンデモなルール下であつても自分の複製を作つて同じ自分として行動することは不可能という法則はある。ビット兵器ですら処理が面倒なのに思考分割して自分を二つ用意するとか無理なのだ。唯一知る限りそんなことを

できるのは、肉体を捨てた神父であり、一が全、全が一になってしまっている。もはやあれは概念なのだとジルベルトたる俺は思った。

あるいは全次元レベルでそれを定めたルールがあり、矛盾が見つかったら排除されるという可能性もあるが、概念から抽出して固定化させる手段。情報の改ざんは、桐島エイダという個の再生実験によって一応の成功を見せている。そして誤魔化すのは自分の全技能の中ではこれが一番得意といってもいい。どちらかというところ、魂の呼び出しとかそれに耐えうる相性の良い肉体の創造とかの方が困難なのだが、幸いそれをどうにかできる人もときゆうせいしゆ材が揃っている。

「ここまで話して何ですが、結局あなたはどの立場に立って戦いますか？ 今ならマッチポンプで何でもできますよ。俺のお薦めは千年後に丸投げです」

何しろ準備が足りない。中途半端にカードがあるのが問題だ。消耗戦に突入するだけのプランがあるわけでもなく、玉砕前提の一発勝負をするのは難しい。俺が善人かどうかは別の話だが、異邦人の当麻大河という個人を犠牲にするよりは広く浅く負担すべきだと思う。結論からいうと自分の世界は自分で守ってやれということだ。

「滅びるなら華麗に滅びればいいのに」

「気持ちわかるが自重しろ白鳥」

俺は識つてはいるが有効利用する方法に関しては、クリス先輩こと白鳥女史の方が信頼できる。これに関してはもう適材適所としか言いようがない。そう、例えば彼女が割とネジが飛んだ人物であっても。

「錬金術師はこつちで準備します。あなたは死霊術師ロベリアを説得してください」

「私は酷い男です。妹を殺してまで生き残り、そして世界に復讐しようとして、それでもなお妹に執着する」

復讐やら悔恨という要素は、前世である佐藤弘光にも、またジルベール・ジルベルトの生の中にも無い。あつたとしてもゲーム崩してなかったなとか、早く続編書いてください〇〇先生くらいしかない。ハンターはいや止そう。白鳥女史でも無理だったのだ。

「ヒトとはそういう生き物なんですよ。それこそ俺は気まぐれであな

たに手を差し伸べましたが、サクツと殺した方が後腐れ無いと思っ
ていますし」

素晴らしい志を持つ人間が本懐を遂げるのも、心半ばで倒れるのは
美談であるが、実がなければ意味が無い。悪人が気まぐれで救った子
の子孫が多大な貢献をしたなら現実に評価される訳ではないが、少な
くとも俺はその悪人を評価する。

俺もノイ先生も、基本的に博愛とは無縁な利己主義の塊なのだ。そ
れでも俺はあの世界では人類の活動圏の拡張に貢献しているし、ノイ
先生も動機はともかく、結果的に毒物すらも食べられるようにしたナ
ノマシンを開発している。

初志貫徹できる聖人などいたらそれこそ物語の登場人物だろうと、
ジルベール・ジルベルトの外の人である俺は苦笑した。

side ミュリエル

男の救世主の登場以来、予定が狂いまくったが、ここに至り私は何
もかも投げ出したくなった。

「今回の破滅は茶番でどうにかして千年後に丸投げするように段取り
が付きました」

口に付けた紅茶を嘔き出さなかったことに自画自賛しても良いだ
ろう。

「アイスバーグ女史、改めて要望しますが、ルビナスを復活させてくだ
さい」

この男やっぱり私の正体を知ってる。ルビナスのことまで

「彼女に何をさせたいのかしら」

「神すらも欺く壮大な欺瞞のお手伝いですかね。多分説明したら割と
いい感じにやってくれると思いますけど」

短いやり取りの中でわかったことだが、彼は当麻大河のように大言
壮語を吐くタイプではない。

「例えば救世主候補を全員石にしてどうにかするという手も考えられ
ますが多分無理でしょう。結局はオルタラとイムニティが助けてし
まう。加えて一見法則性が無いように見えて、実は統御されている破

滅のコントロールが不可能になるということは、数で不利な人間側にとって絶望的。唯一救いがあるとすればガルガンチュアが使われないくらいですが」

手持ちのカードを全て見透かされている上での交渉というのは精神衛生上よろしくないのだが、黒の要塞のことまで知っているとそろそろ白旗を揚げたくなるが、私も元救世主候補としての意地がある。

「断ると言ったら？」

「あんまりやりたくはないですけど、墓まで行って記憶媒体掘り出してきて、総当たりですかね。一週間くらい掛かりそうなのと一応筋通しておかないとまずいと思ったからここに在るわけですが、効率を無視すればできますよ」

「私が妨害する可能性を考えなかったのですか？」

「しても良いですけど、政治的に意志統一されていない学園で動かせる手駒なんてないでしょう？ 既にご存じかもしれませんが、限定的に魔法は防げますし、死なない程度にどうにかするには慣れてますから」

魔法と経験に裏打ちされた戦術があれば未だに殻の付いた救世主候補に劣るとは思っていないが、前提が崩されると弱い。この世界の戦士程筋肉が付いているとは思えないが、かなりバランス良く引き締まった体躯。対して自分の肉体的なピークは既に過ぎているし、そもそも彼の獲物は銃だ。魔法を唱えるよりも早く動ける。

「二つ聞きたいのですが、あなたはこの問題を根本的に解決する手段に心当たりがあるのかしら」

「無いこともないですが、それが長期的に見て良いのかどうか。トラブルの結果巻き込まれた俺達はもちろん、当麻兄妹を含めて少女たちも結局は来訪者であって、アヴァターの未来はそこで暮らす人たちに委ねられるべきだと思っんですよ。個人レベルだと良いと判断してなりふり構わずやるでも良いんですけど、全宇宙の命運をバクチに委ねるよりは対処療法を積み重ねて未来に紡ぐやり方の方が最弱たる人間らしい在り方でしょう？」

前提として紡ぎ出される答えが本当に正しいかを理論的に検証する為には、同程度の知識を持つ他者が必要になる。彼は彼の提案を感情ではなく理性として良しとした。

「良いでしょう、それで改めて伺いたいのですが私の親友を蘇らせてあなたは何をしたいのかしら」

「それについては後のお楽しみということ」

私は今のやり取りを、彼らが立ち去った後に、義娘に話した私は、かつての自分の経験を踏まえて次のように忠告した。

「ジルベール・ジルベルトという人は何も無ければ、ごくごく普通のトラブルメーカーなのよ。ただ、何かを成そうとした瞬間に利益と損益を計算して割とみんなが妥協できそうな答えをはじき出してしまふ。みんなが何となく最終的には得をするかなという感情を抱くのよ」

「私にはそのどこが問題なのかわかりませんが？」

「例えばですけど、私の目の前にあるカップが割れたとしましょう。それが百年後に与える影響を答えなさいと質問したとき答えられる？」

その時の私が飲んでいたカップはスマイレの絵付けがされた王都の職人の手によるもので、それなりに価値のあるものの、王室御用達のものには遠く及ばない。

「そんなの無理よ！ じゃなくて無理です」

「だけど彼は何となく答えを出すのよ。『パラメーターをぶっ込んで、それなりに繰り返せば妥当な答えは出るんじゃないですか？』ってね。あれはもう異能のレベル。だからリリイああいうタイプの人は下手に取り込もうと考えちゃダメよ。あなたは何となくダメな男に弱い気がするから」

「わ、私は大河のことなんか」

「あら？ 私は大河君の事なんて言つて無いわよ」

「破滅の影響が消えてお義母様、ちよっと性格が良くなったんじゃないですか？」

「年頃の女の子が気になる男の行動に一喜一憂しているのが健全なのよ。私が望んだ世界はそういうものなの」

例え未来に不安があるとしても、少しずつ頑張ればいつか実を結ぶこと的重要性を伝え続けるために私はこの地に舞い戻ったのだから。

side クレシーダ

「ジルベール殿、私はどういう理由でこの集まりに参加させられているのか理解できないのだが」

「反乱勢力との和解交渉に政府側の代表呼ばないとか無いでしょう。まあ承認だけしてもらえれば反乱勢力を鎮撫して破滅から世界を救った名君とか尾鱗が尽きまくって後世に残りますよ」

彼は当麻と同じく地球人なのだが、思考が統治側かと思えば、賢人機関に所属する研究者のような物言いをするし、話し方は場合によっては道化のようだ。というか、この集まりは。

「クレシーダさんも知っているかもしれませんが、千年前の救世主達であるミュリエル・アイスバーグさんに、ルビナス・フロリアスさん、ロベリア・リードさん。で彼が学園の教師と破滅の首領を兼任するダウニー・リード氏。あと人体分野にそれなりに詳しい「彼女の」……今は彼女とかいいでしょ。ノイ先生と、この悪巧みの脚本を書いた諸悪の根源であるクリス先輩です」

伝説の魔法使いミュリエル・アイスバーグが来訪した時は敢えて考えないようにしていたが、1000年前の人物が何で三人も存在しているのだろうか。

「そういうことができない人間は救世主候補には相応しくないといいことですよ。俺でも条件が揃えば1000年単位で自己保存できま

すし」

「電子体幽霊で1000年も生きたら自我融合してしまうからダメではないか」

「都合の良いときに起きれば良いだけです。ほら数億年前の虫が水与えたら生命活動再開したようなもんでしょ」

「人間はそこまでシンプルじゃないのだが……まあいいか。クレシーダ・バーンフリートに問おう。私たちの間では既に妥協が成立する所まで詰めているが、一つだけ君の了承が必要だ。とある貴族の一族を

奴隷に落とした上、モンスターの中に放置したい」

その貴族の一族がこの中の誰に関わりがあるのか。消去方で言えば破滅の首領を名乗るダウニー・リード。

「彼らは善良なのか、悪辣なのか」

「今は亡き先の領主は家族にとつては良き父であった。ただ領民に取ってはあまり良い領主でなかった。そして彼自身は罰せられることなく召された。私たちの論理で言えば親の罪を子が継がなければならぬのはナンセンスであるが、彼は領主の地位を持ってしてそれを行っていた。ならばその罪は領主としての地位を受け継ぐべきではないのか」

「私からしてみれば、あなたのご先祖様の戦後処理が失敗だったと思うのよ。虐殺かさつきと同化政策に踏み切るか、異世界に追放すれば良かったのに」

クリスと呼ばれた女の意見は正しい。ただ人間は神ではない、私ももちろん、我が先祖も、その戦友たちも、あるいは破滅に協力したかつての民達すらその時の状況に応じて行動したに過ぎない。そして私の決定も正しいかどうかわからない。それでも時という名の水は流れ続ける。

「その者達を連れてくるが良い。既に証拠は拳がつている以上決定は覆られぬだろうが、人の問題は人が裁かねばならぬ。望む望まぬとして私は統治者だが、絶対的な君主ではないのでな」

初代が英雄であっても1000年も経過すれば権力も弱まる。永遠なんてあるはずがない。

「俺の予想通りこのお嬢さんは人間らしい選択をした。名君の最低条件は、曲げる事ができて法を曲げないことだと俺は思う。じゃあ答えが出たし俺の案で最終調整をしましょうか」

「ジルベルト殿の案とは？」

「最前線で戦ってもらいましょう。運良く生き残れば良しということ。ああ、別にそこを集中的に狙うなんてつまらないことはしませんよ。正々堂々とはいきませんが、それくらい酌量の余地があってもいいでしょう？」

さて、どこまで累を及ぼさせるか思案のしどころのようだ。しかし、死ねば罪はそこで償われるが、生き残れば今回の破滅の引き金を引いた者として社会的に死ぬだろう。ああ、いつそのことこうしろと命令して欲しいが、それは彼の性格からしてない。だが、私とて抗弁はしたい、女王ではなく、一人の人間として。

「確か私はお茶会の招待を受けてここに来たはずだが、なぜそれが世界の命運を決める話に飛躍したのか教えて欲しいのだが」

「部外者が提案する世界をローリスク、ローリターンで次世代に丸投げする話、『オペレーション岡目八目』なんて茶とケーキでもない息詰まりますからね。時間があれば手作りの点心とかも用意して飲茶でも良かったんですが」

ただ一つだけわかったことがある。この男にとってしてみれば、世界を救う手間は、料理の準備をする手間と同レベルであり、それは当事者でないからこそできる余裕なのだ。

すまん、まだ見ぬ我が子孫よ。私は今の民と世界の命運を担うのだ。なるべき手助けするつもりだが、後は任せた。そのような捨て鉢な考えが脳裏に浮かび、ふと、偉大なる英傑女王もこんな感じで子孫に丸投げしたのかと思い、腑に落ちる気分だった。

えせ救世主物語5. 5 本来の主人公「いや、あれを同じ地球人と言っているのかわからないんだが」

異世界召喚生活8日目

世の中には、ハーレム適性を持つ男がいる。コミュニケーション能力の高さに加え、複数の女性を惹き付けるプラスアルファを持っているタイプだ。何でこんなことを考えているかという点、ホムンクルス作成までは基本暇なので、フローリアス学園の一角で喫茶店の真似事をしていくことに起因する。

「ジルベルトさんは、誰が本命なんですか」

オーブン3日目だが、割と常連になりつつあるセルシウス君からこんな質問が投げかけられた。

「本命というか、付き合っているのはノイ先生なんだけど」

目線で女性と何か楽しそうに話している示す。彼も彼女を上から下まで視姦後に、俺を見た。

「他の、そのレインさんとかには心惹かれなかったんですか」

「彼女とは高校……まあ学園のようなものだな、そこで同級生だったわけだが、自分の思考速度が似てない相手とのコミュニケーションは疲れるだろ」

敢えてコミュ障とは言わなかった。いや最近は自分の意思をしっかり伝えることができる、出来る女ムーブなので、普通にモテますよ。ただ、成長を見守ってしまった兄の気分であり、これ恋愛というか家族愛だよなと思っている。精神年齢的には叔父と姪くらいの距離感だけ。

「真ちゃんは、元々対象外ですよね」

「んー、いや彼女はうちらの中で一番考え方がしっかりしている、家族思いのいい子だよ。ただこればかりはタイミング次第のところがあつてさ」

うちの連れ、数年前まで彼女と見た目どっこいどっこいだったんで

すとは言えない。何故なら俺はバランス派だから。

「……大人の余裕を感じる。これがモテる男。どうしたら俺にも彼女ができるのか」

「いや、ここはクリス先輩にも話を振る流れでは」

「クリスさんは、何とか高嶺過ぎて凄いとしか言いようがないと
いいですか」

ガワはいいし、所作がきれいなクリス先輩は、優美にも悪辣にも振舞える、れっきとしたお嬢様である。あとここが重要だが普通に強い。残念なことに中身は白鳥なだけ。

余談だが昨日は執事の服を着て俺様系執事キャラで接客して、その気のある女性を虜にしていた。なお彼女は物理的には異性愛者である。

「アドバイスではないけど、君は顔は悪くない。稼ぐ力もある。後は需用と供給のマッチングだが。一つだけアドバイスをすると常に同じ対応としてはダメかな。AさんにはAさんの好み、BさんはBさんの好みがある。普段はがさつだけど、私のこと考えてくれてるんだにキユンとする子もいれば、普段は真面目だけど、私の前だけでは弱みを見せてくれるにキユンとする子もいる。女性だって男性目線では一見清楚だけど、やべー奴は世の中にたくさんいる。モテない理由の自己分析は大切だ。例えば当麻兄妹の妹の方、兄貴に恋人ができるまではいい友達でいた方がいいタイプ。初恋が叶わないと自覚するまで絶対に無理。兄離れしろとかいう相手に対して一見苦笑してごまかすけど、絶対敵認定するから」

すまん、世界の平和というか、俺が無事に帰るために余計な波風を立てたくないのだ。

「そうですか……やっぱり見込みがないかあ」

共依存に入り込むというのは中々難しいからね、仕方がないね。

「大河はどうしてモテるのだろうか」

ハーレムルート持ちの主人公だからとはさすがに言えないが、ちよつと分析してみよう。

「相手の視線に立って行動できるコミュ力お化けだからかなあ。一見

がさつに見えるけど、二人きりの時は相手を立てるわけよ。良いか悪いかは別として」

妹を守るために、味方にできる人物かどうかを常に観察する。そして必要に応じて暴力の行使も否定しない。一見がさつというか大らかだけど、あいつどれくらい皮被っているのか。果たして当麻兄妹を元の世界に戻すことが幸せにつながるのか俺にはわからない。

「なんの話してんだ」

救世主クラスをゾロゾロと引き連れた当麻大河しゅじんこうが俺たちに声を掛ける。

「いや、君が何故モテるのかってという下世話な話をだね」

「……それ本人の前で言うか？」

「誉めてるんだよ。英雄色を好む。まめな男は好かれる。それでご注文は」

「焼きナノカレーで、でこの料理名のナノって何なんだ」

「人体に影響はないし、きちんとカレーとしての必要条件を満たしている。お通じにも良い」

ナノマシンが自壊する過程で、腸内の老廃物を一緒に持っていくというか。むしろ女性的にはそっちが本命らしい。野郎にはわからないが。

「白玉汁粉はまだあるでござるか」

「ありますよ、ただ今日はこしあんですけど大丈夫です？」

開店1日目は粒あんで作っていたのだが、食欲魔人リコリスが食べきってしまったのだ。で昨日は仕込んで、今日再び出したのである。

「どっちも大丈夫でござるよ」

粒あん派とこしあん派の闘争の歴史は深いのだ。

「しかし、外国人が和食も作れるって近未来ってそんな世界なのか？」
「親がそっちなだけで、生まれも育ちも極東州だから。レインだって、父親はE式だけど、お母さんは北米州だし。まあ君たちの世界の未来が俺たちの世界の未来かなんてわからないし」

「そうなんですか？」

「嫌な話だけど、君たちが負けて破滅が全次元を蹂躪すると、地球も壊

滅的な被害が出るでしょ。俺たちの歴史にそういった記録はないし、違う時間軸の人たちが同時並行的に存在すると考えた方が妥当さ」

「リレイさん、どうしたんですか」

「真ちゃんから焼き菓子と紅茶を渡されたリレイ・シアフィールドは何か考え込んでいるようだ。」

「いえ、何でもないわ。これは真が作ったのかしら」

「そうです。まだ師匠の足元にも及びませんが」

「ラ・ヴィータのマスターは本当に何でも作るからな。噂によれば、以前は高級ホテルの厨房を任せられていたという話も聞くが。」

「やっぱり、女の子って料理が上手い方がいいのかしら」

「これはまた難しい質問である。成績優秀で、一見品行方正に見えるリレイ・シアフィールド嬢にこれ以上のプラス特性を与えてよいものなのか。」

「余所行きの料理は必要ないよ。男は結局家庭の味に回帰するから。君は基本的なことはやろうと思えばできる子だから、レシピ通りにきちんと作ることができる。後は誰と一緒に食べたいかを意識して作ればそれでいいんじゃないかな。ただ故郷の味というか家族との思い出というのは残しておくに越したことはないさ」

「佐藤家のみそ汁と卵焼きももう俺しか再現できないからな。まあ本来の歴史では姉ちゃんが受け継いで改良してつなげていると思うけど。」

「あんた、最初は嫌な奴だと思ったけど、いい男ね」

「君たちより長く生きてるからね。君たちほど衝撃的ではなくてもそれなりに場数は踏んでいるさ」

「良いことを言ったつもりでふと視線が感じたのでそちらを見るとセルシウス君と当麻大河が呆れ、ノイ先生が面白半分で俺を指さす。「いいかね、あの男は自分だけは理解者だよという感じで、男も女も口説くのだ。セルビウム君はあの男を真似しても失敗するから気を付けるのだよ」

「全く、理解者殿は手厳しい。」

えせ救世主物語6 ミュリエル「思い通りになったよ
うな気はしますが、どうも腑に落ちません」

異世界召喚生活17日目

side 六条クリス

私こと白鳥由梨は、どこにでもいそうな健全なオタクである。適度に男女の恋愛を愛し、適度に男同士の友情を慈しみ、適度に女同士のキマシタワーを祝福する。そしてオタクの嗜みとして、ifとか大好きである。正確にはだったであるが。美人薄命なんてことは言わないが前世の最期は運が悪かったとしかいいようがない。

さて、ひよんなことからあるエロゲーの世界に生まれ落ちたわけだが、自分の立場の生存確率がすこぶる悪い場合、どうすればいいのだろうか。自分でいうのもなんであるが、本質的に行動の人ではない。どちらかといえば、出来事の経過と結果に対してニマニマしたいタイプの人間だ。私達の仲間内ではノイ先生が近いだろう。レインはちよつと違って少しずつ自分の領域を増やしていくことに満足するタイプだ。変な男に引つかからない限り、公私共に充実する未来が望める。問題は変な男に引つかかっているとかなのだが。真は：まあ何というかアクティブな小娘だ。脳症の軛から解放されたおそらくこの世界軸で一番強くなる可能性を秘めている少女。門倉甲？ あの幾人かの乙女の涙を地面に吸わせたりア充は、夫婦揃って警察に入るのかもしれない。とまあ色々面倒な私達だが一つだけ共通点がある。かつて諦観していたのだ。未来に光が見えないという点では私達はよく似ていて、同じ存在によって救われた。

「神様は信じないけど、奇跡は存在する。奇跡を起こすのがダメ人間でもこの際構わない。可能性が0じゃないなら運命を引き寄せる、私達が知る佐藤君はそんな存在」

恋人には向かないと思っっているのだが、世の中には物好きが割と居るのだ。幸いなことに養父は彼と仲良くしてさえくれればいいと

言ってくれているというか、養父の方が彼と仲がいい。まあレインの父親にも同じことが言えるが、精神年齢が割と近いからだろう。加えるなら肉体的にはともかく精神的には私もあつちに近い。

「猫被らずに好き勝手やれるという意味では魅力的なんだけど、そこまでする熱がねえ」

2年近くありのままの自分をさらし続けた結果、白鳥わたしと佐藤かれは恋愛感情抜きの友人という位置で落ち着いた。養父に実子いるから結婚しなくてもいい。いや容姿は良いからモテるのだが、如何せん、感覚が付いていけないというか。一応お嬢様だから貞操は固くないと困るという問題もある。

「私はそんなことを考える余裕もなかった。生きていくのが精一杯で、運が悪く死んだと思つたら、運命の悪戯か私はここにいます」

シスル・リード。もしダウニー・リードが主人公の物語なら、オーピングか回想シーンで物語に深みをもたらすため散つた悲劇の少女扱いされるだろうか。もつともDUEL SAVIORの主人公は当麻大河であるのでそんなことは敵対者に対する悪意の緩和にしかならないし、今が現実ならば悲喜交々は常なので意味が無い。但し、アウトローというか悪党気味の私や佐藤君からしてみれば、「別に救われてもいいんじゃないの？ 現在進行形で死んだ人は運が悪かつたということだ」という興が乗つたから助ける的な理論で現在に至るわけである。

「私達の来訪は完全なイレギュラー、デウス・エクス・マキナじゃないけど、トランプの中にドロウ4が入るみたいなものだよ。故に私達は、物事の本筋に直接的な介入をする力が弱い反面、絡み手では強い。倒す力は無いけど、倒す理由を消滅させる力は強い。あなたを蘇らせてダウニー・リードの行いに介入するというのは数万の命と比べれば安い。これは同情じゃなくて立派なビジネスよ。多分私達は結末を見ないで自分達の世界へ帰るわ」

これだけ双方に恩を売った以上は帰らせてもらいたい。これは個人的な見解だが記憶処理は事前にお願ひしているとはいえ、肉体は体の動かし方を覚えている。全世界のアマチュアシミュレーション

ザーの為にも実戦を積んで更に強力になった水無月真ver. 救世主もどきをこれ以上強くしてはならない(戒め)。尤も、私も専門家ではないので詳しくないが、ブラックボックスである脳内チップは、精神とは別の部分で記録しているのでどこまでが有効なのか些か疑問である。もつともジルベール・ジルベルトの力ならそんなものは容易なのかもしれないが。

「死ぬなら、自分の行為の愚かさによって死にたい。だけど私達の死に場所は縁も所縁もないここではない。後は勝手にやって欲しいというのが本音なのよ。というかここまでお膳立てしてあげたんだから後は何とかなるでしょう?」

政治のせの字も知らないような村娘に何を言うのかと自分でも思うのだが、それでも彼女は知らなければならぬ。ここに至るまでにどれだけの血が流れたのか。そして生贄となる彼らも知るだろう。領主の悪行の因果は世襲である以上、その血で贖われなければならぬということ。

side ミュリエル

「おー豪快に頭からボリボリと。やっぱり栄養行き渡っている貴族の方が美味しいんですかね」

彼は残虐な性質ではない。二重人格で無いのはノイさんから聞き取り済みだし、死ぬならさっさと死ねと言い放つ性格だそう。

「まあ、それでも理由も無く犬同士を争わせるように人間同士で殺し合いをさせた畜生よりはマシでしょうけど」

しかし、技術として人を恫喝できる才能を持っているのが恐ろしい。向こうには『目には目を、歯には歯をという』という諺があるそう。

「この戦いに生き残れば恩赦されるのに運が悪い」

ジルベール・ジルベルトは、敵前逃亡をすれば人質に残った家族の尊厳は保障できないと捕らえられた貴族の男子達に親切そうな笑顔で告げた。世の中には死んだ方がマシな状態というのが多々ある。

姓奴隷に落とされるくらいならいい。精神系の魔術や技術を使えば精神的陵辱をくり返して生きた屍にすることだってできる。

「将来の義理の父がそういうことに詳しくてですね。1日しか記憶が持たない状態にする技術や、精神を退行させる技術とか、まあ肉体の解剖とかも戸籍があるだけでも結構、自分で造ったのはどれだけなのか把握仕切れてないんで」

私も理論を聞いてしまえば可能だと思うし、隣のマッド気味の錬金術師に聞けば、「その手があったか」と納得している。彼女も精神を操作する系統は強くないが知識としては知っている。魔法と科学の違いはあれど、人間の構造そのものは基本的に同じということだろう。

例え話だが、もし彼が破滅の将として来ていたら救世主達がどれだけ強くても負ける。どれだけ才能を秘めていようが、どれだけ召喚器が強力であつても、召喚されるのは多感な年頃の少女達だ。アルストロメリアのように生まれが王族で、政治ができる人間、最低でも戦争が基本的にアルストロメリアが全て請け負ってくれて、私とルビナスは何も考えずに敵を倒せばいいと考えてた当時の私は、おそらく歴代の救世主達の中でもかなりマシだったのだ。だから生き残っている。その貯えが残っているからこそ子ども達を切り捨てるかどうかの選択肢を使うだけの余裕があつた。

ダウン先生、いやダウン・リードが人間の負の部分を書いてくるとしても、おそらく限界がある。嫌な話だが、人間はいくらでも学べると言っても基礎段階での遅れは致命的なのだ。というよりああいう生まれの状況から、結果的に救世主クラスの担任を任せられるだけの努力をしたのが奇跡と評していい。それでもせいぜい絶妙なタイミングで裏切るのが彼の限界だろう

「アイスバーグ女史。我々は建前であつても民主主義の世界で暮らして居ます。無論、権力を握れる人間なんて10人中9人は決まっていますが、一つだけ救われる面があります。個人的な恨みはともかく、制度的に被害者の恨みは加害者の家族へ向けられないのです。それでも悲劇は起こりますが、納得させるだけの教育があるというのは強

みです。この戦いが終わったらそういうこともしなければなりませんね学園長」

クリスさんもそうだが、彼は社会システムを分析して効率良くパワーをリソースできる。特別な教育をされたのかと聞けばそうではないらしい。

「私の場合は一応出がお嬢様だからそれなりに仕込まれたけど、ジルベルト君は本人の性質かしら。多分何やらしても一流にはなると思うけど、超一流にはなれない。むしろその引き出しの多さとそれを使う発想こそが彼の才能なのよ。縁の下の力持ちではないけど、アドバイザーに抱えとくと何かと役に立つタイプね」

もし彼が破滅側に与したらどのような手段を取るかクリスさんに尋ねた時の返答は我々を啞然とさせた。

「私も同じ手段を取ると思うけど、こっちの兵力が大きいのであれば包囲しつつ兵糧攻めで人間は生かしておく、まあ理想は傷病させて放置だけど、負担が大きくなるから。次は情報操作で不信を煽る。意図的に食糧を独占して他領に高い金で売っているというデマを流す。その時点で指導者層と民衆の結束はなくなるから。以降は各個撃破かなあ。モンスター相手にそんな緻密なことできるかって？ 神経流れているならできるわよ。神経流れていないのは魔法生物だから召喚者ないし創造者がコントロールできるだろうし。私はできないけど佐藤君、いやジルベルト君ならお手の物よ」

この話を聞いたとき、私は神には感謝しないが、運命には感謝した。おそらく大抵の救世主は天災に対しての対処が主だったろう。モンスターなんてものはコントロールできれば戦争だが、コントロールできなければ災害の一種だと割り切れる。そもそもアヴァターが千年紀に入る時、文明は成熟していて戦争に特化した人物が登場しているか未知数だ。ジルベル・ジルベルトは人間対天災を人間対人間に落とし込む。今回はたまたま、気が向いたからその逆をやり、人間対天災にしたに過ぎない。

「今回はイレギュラーな出来事が起きて割とキレキレだけど、普段は身内に手を出さない限りは安全よ。何だかんだ言って親身になって

くれるし」

喫茶店で親しげに語る彼と、全てを見透かしたようにスケジュールを語る彼のどちらが本質なのか。願わくは前者であってほしい。

千年後はそれをおこなうシステムも考えなければと思った矢先、映像から最後の一人が死んだことを告げる断末魔が響いた。

「残った家族は記憶の改竄をして適当な世界に送り込みましょう。陥れるのは仕方無いとはいえ、約束は守らなければなりません。ダウニー卿もそれでよろしいでしょうか？」

予定されたスケジュールを履行するように口にするが、そこに苦悶も歓喜もない。彼にしてみればどうでもいいことなのだ。

「あなたには貸しがある。それを踏まえた上でこれ以上を望むのは酷でしょう。地獄があるのなら私も墜ちるに決まっています。これが終わった後、死んでも構わない。それだけのことをしてきたのですから」

「遅かれ早かれ訪れる破滅の原因を個人に帰するというのは、無理だと思っただけです。もうどうにでもなれと思われる事は多々あるし。ぶっちゃけ運が悪かったで納得しましょう」

運の善し悪しに神が携わっているのか私にはわからない。正義かどうかも疑わしい。それでもやらなければならないことはある。そう約束は守らなければならない。

「大勢は決した以上、俺の要求は受け入れてもらえますよね？」

「アーグの地下にある転移装置の使用は許可しよう。しかし、私個人としては君にもう少し居て欲しいというのは我が儘なのだろうか」

この政治的決着の立役者であり、立場的に中立、ひいき目に見ても若干ダウニー寄りの彼の存在は大きい。クレシーダ殿下の考えはもつともな話だが、基本的に彼を含めた異邦人達は、自分達の問題は自分で解決しろというスタンスであり、私としても至極もつともである。何より世界の命運はともかく、国家の運営は彼女が自分の責任で行わなければならない。アヴァター王家の血を鍵として稼働する古代文明の機械が多すぎるためアヴァターの統治システムは最終的に王が責任を持つ。彼女も努力しているのだが、それを伝えきれずに前

王が崩御してしまったのは、運が悪かっただろう。

「そういうのは正義感の強い善人が損得勘定で動ける実務家に頼んでください。俺は自分とその周辺を守るだけで精一杯なんです」

正直に言えば彼は劇薬か特効薬のどちらかにしかなれない。そして一度使うと常習性が出てくるという意味では本当に危険である。何というか楽なのだ。そしてそれが無くなった時に酷く狼狽するのが目に見えている。予定は狂うものだが、前提が狂うのとは意味が違う。多分だが、あの時、私が自分の世界に戻らなければ千年後の今は変わっていただろう。アルストロメリアは国政を担うのが役割で、学園の管理まではできなかったはずだ。今は私が居る、今度こそ私が居る。根本的な解決にはならないかもしれないが、この場を凌ぎさえすれば考える時間は千年もある。

「三度目はないと信じたいな」

ドクターノイの発言にジルベルト君とクリスさんが同意するように苦笑する。苦笑する程度で済まされるぐらいのタフさがある人間は救世主候補の資質に合わない。そういうことなのだろう。そして私達は千年掛けてそういう人材が育つ環境を創り出さなければならぬのだ。

「時間はオルタラとイムニティに調整させてあの本を拾った時点にしてください。システムのな方はこつちで弄りますので、アイスバーグ女史には真ちゃんとレインの記憶処理をお願いします。後、当麻兄妹にはこちらに残るのか、帰るのかを確認した上で十分な保障をしてくださればなんちゃって同郷としては満足です。神については対策の一つとしてこれ預けておきます。千年後辺りに使ってください。クリス先輩が言うには数千年単位で使えるはずとのことなので」

渡された小瓶の中に入った液体の中身についてたずねるとちよつとした毒だという。

「アセンブラというナノマシンです。ちよつと改良して神様の力に反応して侵食するようになっていきますので、一般人には支障がありませんし、神なら再生するので永劫の時の中を無為に過ごすと思えますが、召喚器を持っている救世主候補やら書の精霊やらが触れると容赦

なく分解されますので扱いには気を付けてください。いや本当に大丈夫ですよ。コマンダーが用途を書き換えない限りそれ以外何もできませんから。いやほら、学園長だって一昨日食べたじゃないですか」

この子何を言ってるの。アセンブラ、ナノマシン、ナノカレー……ナノ？

「ジルベルト君……まさか」

「いやアレは、スパイスを再現するのと熟成に使っただけで、昨日の朝には悪玉菌を破壊して出ているはずですよ」

クレシーダ陛下を見ると、少し死んだ目で私を見て頷く。ああやっぱり彼女も食べたのか。確かにおいしかったし、言うように朝の通じも良かったが。

何はともあれ、歴代の王族並びに学園長が抱え込まなければならぬ秘密がまた増えた。その思いは彼女も同じだろう。出身も育ち方も年代すらも離れている私達だが共通の認識を持った仲間であることを実感する。やっぱり彼は魔王やら災厄と呼ばれる類なのだ。

えせ救世主物語 end 「君が望む日々」

「平凡な人生こそ真の人生だ。実際、虚飾や実際、特異から遠く離れたところのみ真実があるからだ」フエーデラー

暇人の憂鬱

佐藤：異世界なう

御大将：君が21世紀のカルチャーに強いのは分かるが、流石に異世界はないだろう。勇者として召喚されたとしてもいうのかい？

佐藤：正確にはかなり離れた星系だと思えますけどね

19：御大将、佐藤の言うことは残念ながら正しい。彼の脳内チップから発せられる信号はテラから約1000万光年離れている。私としては太陽系しかカバーしていないネットワークにどのような干渉しているかに興味があるのだが

佐藤：根源世界にルールなんてあつてないようなものですよ。それより19、悪いんですけど俺が今居る場所を基準として地球に戻るための座標設定してもらえます？

19：さすがの私でも3日ほど掛かるが、時間設定はどうすればいいのだ。時間情報と位置情報は連動しなければ意味がないぞ

佐藤：●月▲日で。いや助かった。知識としては知っていても理論的にどうなるのかよく分からないので、こういう時に19が居るとしても便利

御大将：19をアゴで使う存在……お偉方が見たら卒倒するだろうね

佐藤：いやだなあ、このチャットは唯才是挙ですよ。使えるものは親でも使わないと。本来ならば俺と皆さんは1000万光年程度離れているのかもしれませんが原理が分からないというのはなんちやって理系としても困るところです

19：私がデザイナーズ・チャイルドを造ったときに魂についても研究をしたが、電子体を造り出し、人間にフィードバックするという実験は終ぞ成功しなかった。仮想空間はどんなことでも実現可能だ

としてもリアルから零れたものだということが良く理解した。だが、この広い宇宙には私の常識など遙かに超越したものがあられるらしい。まあ気長にそちらに向かうのも一興か

佐藤：その辺は虚空の旅人たるあなたの自由ですよ19。地球に住まう人類が外宇宙に出た時、せいぜい当時の政府に文句を言うような面白おかしい状況になっていけばいいなと思っていますよ。

side 六条クリス

「何か化け物相手に大冒険をした気がしたのですが気のせいでしょうか」

「真さんですか、実は私も結構頑張っていた記憶が。ただ、その夢では3週間くらい経っているはずですが、今日は皆さんで出かけた日の翌日ですからやっぱり夢なんだと思います。ログを参照してもそういった記録がありませんし」

「夢なら夢で構わないのですが、どうもそれ以降調子が良いんですね。ネット上もそうなんですけど、リアルの肉体が最適化されたというか」

でも胸は大きくならないのよね、と色々と残念な思考を私は放棄する。今回の事件で改めてジルベル・ジルベルトを敵に回すのはやばいと再確認したわけだが、あのトリックスターのやはり発想は常人じゃ無い。逃げるための最終手段としてアヴァターにいる私達を電子体と「仮定」してログアウトするなんて荒技を考えていたと聞いたときには目から鱗だった。無意識に最適解を選び出すという特性の究極が自分の望みを実現する『スーパージルベルトワールド』。当然それは神の所行であり彼はそれを限定された空間でしか行使できない。

だが、何でもできる世界に呼び出されたのならば条件が変わってくる。なんでもできる陸奥圓明流に対して枠を広げるのは自殺行為みたいなので、交渉できる分ノインツェーンよりやばいのだが、彼の真価が分かるのは多分私ぐらいなものだろう。願わくは彼の人生にこれ以上の波乱が起きないで欲しいと切に祈る。解決はすると思う

んだけど、その後の影響を考えると恐ろしい。今回だって真のスペックがもう色々とやばくて、そろそろノインツェーンとやれるんじゃないかと思っっている。

「クリスさんはどうですか」

「うーん、特にそんな夢を見た気はしないかな。セカンド特有の情報干渉でも起きたんじゃない」

夢でなくて現実だから嘘は言っていない。

「そうなのでしょうか。また私はジルベルトさんが何かしたのではと疑っているのですが」

正確には巻き込まれた状況を佐藤君が思いっきりかき回して安全を確保したというのが正しいが、昔は箱入りお嬢だった癖にだんだん鋭くなってくるな。あれか、未来の分岐が変わってもできる女はできるのかと感心する次第である。

「彼が面白い人格の持ち主であることは否定しないけど、別にあなたたちを欺いて悦に浸るタイプではない……と信じたい。ごめん、自分で擁護しようと思っっていてあれだけど、悪ノリしたら……ま、まあその夢についてはジルベルト君は多分関係無いわよ」

後々、アークの方舟計画の代わりに行われる救世主候補になって世界を救うVRMMORPG「DUEL SAVIOR Online」を監修する羽目になることをこの時の私は予想していなかった。（企画発案はジルベール・ジルベルト、技術協力19という豪華スタッフ）

side 門倉甲

「そういやさ、渚千夏はいつ門倉になるの?」

男二人、大学から歩いて5分の位置にあるそば屋でメのそば湯を飲んでいたら、目の前の男が突然予想もしない言葉を紡ぎ危うくそば湯を嘔き出しそうになった。

「いやいや、ちょっと待ってくれ。何を突然そんな話になったんだよ」「もう付き合いはじめて3年ぐらい経つだろ。何とかそろそろ

初々しさがなくて詰まらないとは言わないが、別に在学中に結婚しても良いんじゃないかなと思つてさ」

「あのなあ、そりやお前みたいに単独で生活の基盤ができている男なら明日でも結婚できるだろうが、所詮一学生だからな。今更親父にその辺を頼むと有無を言わずフェンリル入りだろうし」

「仕事なら色々斡旋できるぞ。荒事から頭脳労働、人体実験まで何でも御座れだし」

そりや、こいつがただのデザイナーナーズチャイルドじゃなくて、下したら聖良おばさんより重要だと親父からは聞かされていたが、何としか天才つてやっぱリスケールが違うんだな。亜季ねえが言うには、あいつが一見平穩に見えるのは政財界と軍関係が協力して余計な手出しをしないようにしているからだそうだ。

「今更聞くのも何だが、あの中で渚千夏を選んだ理由って何なんだ。ほら、あの幼馴染みの子とかもいただろ？俺の好みは別として西野亜季も美人だったし」

お前の周りも美人が揃っているじゃないかというツツコミを心の中でしつつ俺はなぜ千夏が好きなのかを考えると、自然とその言葉が浮かんだ。

「お前もそうだけど、天才つてのは歩みの遅い人間と歩くためにはこつちが頑張るか、向こうが遅らせるかのどつちかしかない。千夏となら同じ速さで進んでいけるかなと思つたのが理由かな」

彼女の家族を見て、こんな家族を自分達も築けたらなと思う。

「何というか遠い世界に来たものだ」

「何だそれ」

「いや、うちの一個上の六条クリス先輩が知る何かとの違いだよ。想像もしなかった未来を歩んでみたらささやかな幸せが残ったみたい。まあ最早お前には関係ない話だ。恥ずかしい話を聞いた代わりにここの料金は持つてやろう」

そうしてジルベルトは伝票を持つて去っていく。残された俺はというと、今更ながら自分の発言に顔が紅潮し天を仰ぐ。そして心を落ち着かせて外に出ると千夏が立っていた。

「あの、その甲」

彼女の狼狽振りに、先ほどの会話が筒抜けだったことを悟る。気まぐずになった俺は、目線をあわさず彼女の手を取り大学への道を進む。「将来の設計についてはゆっくりと考えればいい。俺たちはちよつとネットに対する能力が高い平凡な人間なんだからさ」

世の中の一握りの天才が時代を切り拓き、エリートが土台を築き上げた上で、大衆がそれを享受する。ジルベル・ジルベルトは、自分はそのなりのスペックがある凡人と言っているが、普通であることを道楽と勘違いしているような感じがする。変な例えだが、お嬢様がお忍びで話題のカフェに行くような感じだ。彼自身は平凡を望んでいられるかもしれないが、周りから聞く限りそれは無理な願いだろう。面倒だ、面倒だといいつつもあの男は自分の時間を持ちながらそれを邁進する。

『人類への貢献度だけを考えるのであれば、20世紀以降最大の人物でしょうね。政治家になれば、軍部と財界の支持を得て40代でトップに立てると思うわ。私としては友人には普通にグダグダと生きてもらいたいけど、残念ながら時代は彼を放置する余裕が無いのよ』
だからこそ俺は、俺たちは彼に多少の感謝とわずかな恩着せがましい態度に辟易しながら歩んでいこう。

side out

「そういえば言い忘れていたのだが」

他愛も無い会話をしながら街中を歩いていると、ふと赤ん坊を連れてた母親に目を止めたノイ先生が衝撃的な発言をした。

「月のものが来ない。計算するとあの世界から帰る前の日辺りにやったのが原因のような気がするのだが」

「え？ ちよつと、待ってください。時間を、そう3分ほど時間を」
そりゃ男女の仲だからやることはやっていたが、いや転移して周期が狂ったのか。

「普段は飄々としている君でも父親になるということは前後不覚に陥るようだな。実に気分がいい」

「随分軽く言いますね、まあ責任は取りますよ。秘密を抱えて生活しないとなるとノイ先生か、クリス先輩しか選択肢が無いですし」

「愛人は許可してもいいのだが、まあ家ではいい父親でいてくれ。残念なことには君も私も親という一面ではあまり恵まれていないのでな」
「面倒だし浮気しませんよ」

「愛情と性欲は別物だからな。まあ面倒な世間とのしがらみの話をするなら、私と君の生み出す利益は気まぐれと我が儘で左右されることはあっても特定の分野に集中しないので概ね受け入れられるだろう」

ノインツエーンの管財人である俺の方もそうなのだが、ノイ先生のナノ関連、正確に言えばどんな料理音痴でも何とかなるノイ印の万能調理ナノマークⅣの特許による財産が偉い膨らんできて、そろそろ顧問弁護士やらを付けとかないとまづいレベルになっている。そもそも俺もノイ先生もせいぜい旅行に行ったり、旨いものを食べたいな、あるいは興味本位でアブノーマルな商品の購入程度の消費しかなく、投資に関しても、そもそも俺が技術提供している分野にしているからマッチポンプ的な意味合いに陥ってきたので金の使い道に関してはどうしたものやらと頭を抱えるわけだ。個人的に真ちゃんやんが軍人ではなくプロの競技者になるならスポンサーやってもいいなと思っっている位だろう。

「後の問題は後で考えるところとして取りあえず、お腹が目立つ前に式挙げましょう。せっかくの晴れ姿は残しておかないと」

AIの存在で信仰が問いただされるとしても結婚は基本的に宗教施設で行われるし、それを祝う習慣は消えなかった。ネットで挙げるなんてのもあるが、基本的に需要そのものは無くなっていないので会場は抑えておかないとならない。

「こういうのは惚れた弱みだが君が居てくれて本当に良かった」

「あの日、あなたが俺を見つけてくれて本当に良かった」

歪な二人の物語は誰が望んだのか分からないが、四捨五入してしまえば「幸せに暮らしましたとき」に集約される。もちろんこれからも色々と問題は起こるのだがそれは未来の話である。

スーパー・ジルベルトワールド 人物解説集

主要人物

●ジルベール・ジルベルト（佐藤弘光）

ネット小説でよくありがちなテンプレ的な死亡で第二の生を受けた主人公。前世は普通の会社員で、狭く濃い友人関係を構築。重度とまでは言わないがゲーマーで、面白ければ何でもやるといったタイプ。

大学時代から一人暮らしかつ、食堂でのバイト経験から料理は得意というか当時付き合っていた彼女が嫉妬するレベル。自分は努力すれば彼女ができる事は理解しているが面倒な性格なので維持するのが難しいということも理解している。

ジルベール・ジルベルトとして生を受けた後は、浦島太郎もビックリな世界に戸惑いを覚え、選ばれし者とか自認するような集団の中に放り込まれて人生が嫌になるが、変人もといちんちくりんな自称医者に会うことで、人間であることに変化はないと安堵して家を出て生活をはじめめる。以降は本編にて。

金がね、使いたくても使えないですよねこの人。結局食事関係以外は投資するんですけど、その投資先が自分が関わる事業関連なのでさらに金が集まるんですよ。使う暇がないの。

作者評：バタフライ効果だけを期待したキャラ。というかジルベルトって普通にファッション整えて普通にすれば普通にモテるんじゃないかと思つた訳ですが、好評な結果ダラダラと続き、他の作品にリソースが振れなくなってとても困った。早く区切れないかなとは思いつつ、やろうと思えばできちゃう遣い勝手の良さが。作品名の元ネタは国際的にネームバリューのあるあの作品のタイトルから。原作知識があるようにみえて実際は全然知らなかったらごく普通に自由に振り回すだろうという設定で動かししました。チートキャラだけとチート（ネット関係に於いて無意識に乱数を調整する。可能性がひとかけらでもあればたぐり寄せる能力）であることを理解したのは最終局面に入ってから、かつ結局対話で済ませる辺りが彼らしいというか

何というか。当時一発で考えていたから転生トラックを作者がやったらこうなった的な話をやりたかっただけだと思う。まじめに死因を考えるなら冬に氷で滑って打ち所が悪くて死亡か。

●ノイ

本編のメインヒロイン。生い立ちは原作ゲームを参照のこと。快樂主義者だが、それは生まれ、成長し、子を成して、育て、老い、死んでいくという生き物としてごくごく普通の生き方ができないことへの反動。エロいが男性経験はごくごくによだと思う。

彼女はジルベルトを救い、また彼女もジルベルトといることで代わり映えの無い灰色の日々が色づいたというだけの話。結局どちらか片方では飛べない鳥がたまたま出会い、一緒に飛んでみたら空を飛べただけのこと。

作者評：実を言うとな原作的にはキャラ的にはおいしいなと思うものの、攻略したいかといえば……なキャラでした。まあ原作でアレな絡みはあるのですが、どうしても精神年齢が大人な佐藤さんというキャラに対して世の中を穿った見方ができるキャラが必要だったから登場した。レインの成長を（駄目な方向で）促したりしますが、結果として踏んだ人生の場数で勝ち取った形に。成長が抑制されていたかもしれないが、成長した彼女はすごい。余談ですが、今世紀のナノ分野の三大発明の一つ（ふと二つはアセンブラと、ナノマシンチャイルド）にノイ印の調理用ナノがあり、結構な富豪レベルです。まあそれでも旦那の方が金持ちですけど。もつとも二人とも必要以上の金は宇宙開発への投資だったりに回しています。

●桐島レイン

本編のヒロイン。世界が変わっても同級生に絡まれるかわいそうな子。

朱に交われば赤くなるという言葉べきか、濃い面々に影響を受けて自身を肯定し、父親のことも認められるようになった。

結局卒業時にはデザイナーナースチャイルドの巣窟である鳳翔の主席

になるのだから感心なもの。最近の悩みは自分より若い実母の存在と、年が離れすぎている双子の弟と妹に母親と間違われること。

作者評：原作で一番人気ですが、作者的には3番目。素材的な優秀すぎて話を作りづらく、案の定ENDを迎えられず。というか桐島勲との接点であることの方が重要になった結果、頑張るけど空回りとははいかないものの上手くないかな。料理は壊滅的というのは原作の設定通りですが、お菓子は人並みというのは本作のこじつけ。料理も真という師匠のおかげで普通より上のレベルに。具体的には嫁さんの料理を楽しみに旦那が早く帰りたいなと思うレベル。というかレインは尽くすというかお世話できる人に依存したいタイプだからジルベルトより生活能力低そうな甲の方がいいよねと思う。そこ、ダメンズ好きなできる女とか言わない。

●水無月真

本編のヒロイン。多分一番作り込まれた人。

ジルベルトの作った文字チャットの常連「sin」で毒舌キャラ。姉のことを面白おかしく語るが本人ばれた際に、どうかばらさないでと行脚したのはいい黒歴史。

料理は本編を通じて一番上で、最終的にはそっち方面に向かう。ジルベルトに対しては頼りになる兄という認識で好きではあり、告白されれば吝かではないと考えているが、自分から告白したいかというところでもない。

電腦症から解放された後は被ってた猫もさよならして同級生から「誰これ？」と言われる始末。

ENDを迎えない場合は、おいしくご飯を食べてくれる人と付き合いをみたいな感じに。

ジルベルトとノインツエーンというバグを除けば、一番強いというかネットに対する親和制が高い電腦症の方がすばやく動けるはずなのに完治してからのの方が強い。具体的には大学時代に団体部門3連覇（1年目はクリス、レイン。2・3年目はジルベルト・レイン、4年目は同レベルの人がいないので不参加）個人部門で四連覇とかし

ちやうくくらい。まあ本人曰くシユミクラムは趣味なので軍とかには興味がないとのこと。

作者評：作者が一番好きだからこそバランスに苦慮したキャラ。まあ要素的には「貧乳」「妹キャラ」「電脳症」「料理上手」「黒い」などという要素を絡めつつ、上手く暴走できればなという役どころに。お兄ちゃんと一緒に料理、まこちゃん無双、ヒロインの座から遠ざけられる姉に対するモノローグ役、本編後ではいい狂言回しと個人的には八面六臂の活躍してくれたと思います。レインは完璧過ぎて対応に困る。まこちゃんは好きすぎて対応に困る。あと彼女のMP（むねポイント）の成長率が1%（本編後のノイは120%）なのは仕様です。なので、セーブ&リロードをして乱数調整してあげて下さい。

ヒロインルート鋭意制作中 朝霧アサギが主人公のゲームよりは早く出ます

●六条クリス

遅れてやってきた女。

原作知識持ちの憑依者。鳳翔学園生徒会長、成績優秀、スポーツ万能、お嬢様と三点揃った鳳翔の姫。……というのは表向きの話で、性格的には面倒で、佐藤曰く、姉に似ているということで苦手意識を持っている。

前世の名前は白鳥友梨。制作会社のイラストレーターでBL好きでいわゆる腐女子。鳳翔を卒業した後は星修系の大学に進学し、後から入学したジルベルトを同じ研究室に引き込む。基本的に策士だが予定外のこと起きると混乱を来すタイプ（もつとも復活も早い）。根源世界のとある学園の美術科で、救世主扱いされている。

なお、本人は純然たる異性愛者であり、それはそれ、これはこれでいけるタイプ。

実質的にジルベルトの秘書的ポジションで婚期が多少遅れる予定。なおその時水無月の姉はまだ独身だった。

作者評：初登場時は名前とビジュアル、鳳翔学園の生徒会長というデータしかなかったので、もうオリキャラ扱いでいいやと「お嬢様」、

「成績優秀」、「だけど性格は悪い」などのある種テンプレを抽出してどちらかというところ（無意識に）弄ることが多いジルベルトを弄るキャラとして登場して貰いました。まあ蓋を開けてみればアフターで大してキャラを弄らずに済んだのは幸いです。彼女は原作知識があつて自分の身がやばいことも理解しているけど、密かに主要キャラを観察してみるとどうも流れが違う。かといって自分が無理矢理修正して破綻したら目も当てられない。彼女の視点で本作語らせると混乱の連続でアフターで爆発したという感じです。なお彼女ENDは想定してません。

サブキャラクター（原作登場組）

●橘聖良

ジルベルトの作った文字チャットの常連「妹魂しすこん」でシスコンキャラ。たまたま彷徨っていたら変なサイトを見つけて解読しようとしても何故かできない。そうして居座っていると意外と居心地が良かった。

水無月姉妹の後見役で、ノイとはノインツエーン関係で知り合い。姉は勘でやっちゃう人で、彼女は検証を積み重ねて行動する人。ジルベルトに佐藤の匂いを見つけて紆余曲折を経て巻き込む。

本編終了後は彼をアーク社に引き込みたいと思うが、軍の横やりが入り、妥協点として学園都市に作った研究所の出資者の一人という形に落ち着く

作者評：技術的な話とかは基本的に彼女一人いればいいという使い勝手の良さ。橘って聞くとどうしても前作の悪人を思い出すところだけどもあいいや。

●桐島勲

統合軍の高級将校。というか年頃の娘と上手く接することができないかわいそうな中年。娘を変えるきっかけとなったジルベルトに興味を持ち、異なる視点で物事を考える能力を高く評価して、あわよ

くば娘と結婚させて軍に入れようと画策しているが、多方面からの横やりが入って（以下略）。結果として宇宙開発計画参事という肩書きが増えた。

作者評：レインとの和解、宇宙開発計画の責任者（少将）、妻の復活とどう考えても本作で一番得をした人です。まあ娘とほぼ同じくらいの肉体を持つ若い妻から夜な夜な……MOGGERO。責任感のある大人というのは貴重ですよ？

●久利原直樹

ジルベルトの作った文字チャットの常連「御大将」で学者バカ。

基本的には原作と変化は無いが、悩みとか色々チャットで吐いていた。手段と目的が入れかわってしまい、ジルベルトに論破されて落ち込む。

シユミクラムの腕は凄腕と言っても差し支え無いが、自分の領域で強制解除されるという超展開によって敗北。

社会的にはアセンブラを成功に導いた功績により宇宙開発計画環境構造部門の総責任者になるが実質は隔離であり、流刑扱い。端正な容姿（&CV子●）で角が取れた為競争率は高い。

作者評：ジルベルトが覚えた違和感と作者が覚えた違和感だから、原作やり直してもそこに言及ないし……。結果として善人が善意をもつてなりふり構わず善を行った結果救うべき物事死ぬ羽目になっただけの話。彼とジルベルトのどっちかを主人公にしようかと悩んだが、愛すべきバカが主人公になった。ちなみに彼が主人公の場合、メイン人格（善意）、神父（悪意）、憑依主人公（暇つぶし）という三人の話になる。

●モホーク

ジルベルトの作った文字チャットの常連「火打ち石」で不思議系な人。

基本的に原作ともつとも差異が無かった人。とにかく勘が良く、本当に精霊とか何かで把握しているというか超能力者のな何か働い

ているしか思えない。最終的に和解するもかなりいい一撃を食らわせた。

作者評：ある意味モブというか、数あわせの側面は否定できないけど、ネットの相手が見える近未来に文字チャットだけでかつての同志が和気あいあいと話す雰囲気って滑稽でありながら面白いよねという感じの為登場しました。arcadiaで掲載していた当時、火打ち石氏が誰なのかと当時は良く言われましたが、北アメリカの先住民であるモホーク族の別名「カニエンケハカ」が「火打ち石の人々」を意味し、だからモホーク＝火打ち石という言葉遊びです。

●ノインツエーン

諸悪の根源……と単純に言えればいいのだけど、彼は好きなように研究をしただけである。というより彼を理解できずに人間扱いした当時の上層部の問題のツケを後の世代が恩恵と共に払う羽目となり、とある異邦者の提案に同意することで解決した。

彼女が作った実験体の唯一の生き残りがノイであり、ジルベルトにとっては義理の父という扱いと言ってもいい。

翻訳MODをあててしてしまえば非常に話しやすく、かつての弟子も、久利原先生もあれはこういうことだったのかと目から鱗の状態。

人と異なるクオリアの持ち主は先に虚空の果てに飛び去った。さて百年先の人類は彼を友として扱うことができるのか、敵として対立するのかは未知数である。

作者評：ノイ先生ルートにおけるラスボス。未知との遭遇で、自分を理解してくれる相手が来たぞと、対話して解決することは設定していました。他人の電子体と融合できる特性は多分あるだろうから、神父戦の最中に制御権を奪った設定。

ちなみに真ルートなら、ネージュ・エールと真・グリモアによるラストバトルが発生するのだが、それ描く意味あるのかなとは個人的に疑っている。いや真ちゃん強くなるのは、その後なんですわ。

スーパージルベルトワールド0 ただのジルベルトの物語

夕方から夜に変わる境目の繁華街。

その雑踏の主役は買い物をする母親や学生から仕事帰りの社会人へとシフトしていく。

学生服に身を包みながら特に目的もなくただ歩いていた。

生まれた時から自分は異物だと思っていた。

知識としては適応してはいるが、精神構造が適応するのはとても難しい。

良い意味でも悪い意味でも子どもは環境の影響を受ける。

世界にどれだけ前世の記憶を持っている人物がいるかは分からないが、価値観に染まらないというのはさぞ不幸なことだろう。

「だからと言っていい大人が若者に突っかかるのもな」

そう、とても偉そうな少年に絡まれて、大人げない対応をしてしまった。

確か名前はケンタツキー君だったろうか。

彼のことを思い出すと、ケン●ツキーフライドチキンのフライドチキンが食べたくなる。

残念ながらこの世界にはケンタツキーが存在していなかった。

ちなみにマク●ナルドは存在する。

というよりあそこの企業のウィルスは、ポテトとかハンバーガーをモチーフにしているとてもシニールだ。

若いだけあってエネルギー消費の激しい我が身の欲望に應えるべく、ファーストフード店に向かおうとしたところ、何故か彼女が目に入ってしまった。

年の頃はミドルティーンくらいだろうか。

どちらかと言うと顔は整っていると思うが、まだあどけなさが抜けしていないと思う。

「お嬢さん、こんな時間に一人歩きするのは感心しないな。よろしけ

れば自宅まで送っていくよ」

別に気にする必要は無かったのだがつい気になってしまい声を掛けてしまった。

「それは私をいかがわしい場所に連れて行く意思表示なのかね。後、こう見えても私は立派な大人だボーヤ」

そして返ってきた返事はそのあどけない容姿とは裏腹に、初初しさよりどこか擦れている返事に、15年という人生の中で久しぶりに呆気にとられたのは後から考えればいい思い出だ。

鳳翔に入って早々その空気に馴染むのを放棄した俺と、年齢不詳、自称大人の彼女が出会ったのはそんな5月のある夜だった。

「まあ、俺が世間一般でボーヤと呼ばれる年齢なのは認めますけど、その身なりで大人は無いですよ」

佐藤弘光から通算して30年以上生きていると認識してもこの身は、長身なのを除けば未だ15歳。だが、目の前の少女はどう考えても13、4ぐらい、頑張っても俺と同じ年くらいだ。

「君はまだ学生だろう。私は君が新入生なら6歳は年上のはずだ」

彼女は身分証明書を提示する。

Neu（ノイ）という名前と生年月日を確認すると信じられない事だが、確かに俺より6つ年上だった。

「人工智能友愛協会……ああ、これは偽造のしようがないからなあ」

人工智能友愛協会といえば先端企業のお偉いさんとか天才科学者だとかが参加するAI派の超エリート集団の事だ。

確か最年少の学会員は13歳と認められたとか言っていたのが3、4年前なのをニュースで見たことがある。

そのこの会員証は技術のムダ使いと呼ばれていて偽造はほぼ不可能。偽造に成功したら会員になれると噂にあるが、目の前の人物が身分証明の為にそれを偽造するメリットはおそらくない。

「世間的にはエリート集団かもしれないが、実質は変人の集まりだよ」と親しくなってからノイ先生は答えたものだが、当時の自分は目の前の人物もまた天才かと嘆息した。

考えてみればバチエラだって天才少女だけど成長しなかったからなあと無意識に納得しようとしていたのだが。

「確かに年齢を間違えたのは謝りますけど、それでも治安が良いとはいえ、あなたのような身なりの方が一人でいるのはどうかと思いますよ」

「君も変わっているなあ。まあいい、そういうなら食事に付き合いたまえ。少年、名は？」

「ジルベール・ジルベルトです。しかし、俺おごる金ありませんよ」

「見た目こそ少女だが、きちんと定職には就いている。いやいかがわし……いかがわしいこともたまにあるが、アダルトな仕事ではないからな。いいから、素直にお姉さんにおごられたまえ少年」

背伸びをして指で額を小突く姿は却って子どもっぽかったのだが、人それぞれだと思い俺は了解することにした。

「ではご相伴に預かりましょうレディ」

まさか、ドラマか物語の中でしか言わないセリフを言うとは思わなかったのだが、ラテン系の人間が発していると思えばそれほど違和感もない。

「まあ、誘ったのは私だし好きなものを頼んで良いとは言ったが、何故ハンバーガーとフライドチキンなのだろうか」

「いえ、この間絡んで来た名前がケンタッキーという名前です、思い出したらとてもフライドチキンが食べたくなっただけです」

ここはファーストフードより少しレベルが上の手作りハンバーガーの店で、目の前には具材たっぷりのハンバーガーに揚げたてのフライドチキンとポテトというとてもアメリカ的なメニューがならんでいた。

ちなみにUSAという国は既に無いが北米は現在でも国際政治の中心部である。中国というか極東側は例の事件―リヴァイアサン問題―でトップがかなり飛ばされたおかげで主導権を握れなかったようだ。

まあ、体制が崩壊しようが中華料理が健在ならば俺的には問題が無

かったりする。

「しかし、君もその若きで人生に疲れているような顔をしているが、鳳翔に入ったが学業について行けなかったとか？」

「別にそう言うわけではありませんよ。ただ、一応親のルールに沿って歩いていたつもりですが、この生き方でいいのかなって思うことがあります。思春期にかかる麻疹みたいなものです。ほら、俺みたいな凡人は環境に恵まれただけで自慢できる同輩をどう扱っていいやら分からない訳でして」

「デザイナーズチャイルドの基本思考は自分の好ましい生き物を作るという発想そのものだからな。そんなことできるのは基本的に金持ちということだ」

「つまりエリート主義の延長なんですよ。凡人の自分としては大して努力しなくてもできるというのは精神衛生上良くないといえますか」

何せ前世はしがないごくごく普通の会社員だ。気がついたら文明がとんでもなく発展していたなんて浦島太郎もこんな気分だったのだろうか。

「ふむ、私は心の病は専門家ではないが、デザイナーズチャイルドの先輩から一つアドバイスをしよう。生まれは選べないし、育つ環境も選べないが、生き方は自分次第だ。君ほど客観的に物事を判断できるならどこでも働いて生きていける」

それは何度も使い古された言葉であるが、却って理解しやすかった。

「極論から言えば真に自由に生きたいなら自然を相手に生きることしかできないが、既に未開の土地なんて地上にはないから少なからず社会と関わり合いが必要になる。だが、人間至る所に青山ありだ。君が家族や学校と相性が悪いなら出ていけばいい。君ほどの能力があれば働きながら学校に通えるだろう。だから……って何拍手しているのかね」

俺は知らず知らずうちに彼女の演説に拍手をしていた。

「いえ、シルベール・シルベルトとして15年生きてきました、蒙が

ひらけました」

そう、どんな世界で生まれようとも結局人は死んでしまう。

ならば好き勝手に生きていくのも悪くない。

「まあ、ここで会ったのも何かの縁だ。私の連絡先を覚えておくので、何か困ったことがあったら訪ねたまえ。世界の裏側から肉体的快樂まである程度相談に乗ろう」

ニヤリとした表情はどう考えても見た目とは違う何かだ。いやあなた、アダルトなことはしないと云いませんでしたか。

だから俺は、『年上らしく』忠告をしたのだ。

「先生も若い内からおばさんっぽい話題ばかりしていると老けますよ」

うん、人間はどこまでいっても人間なのだから、それ相応に頑張ればいいのだ。

とりあえず、夏までに資金を調達して家を出よう。

その前に区切りも良いことだしあいさつをしておこう。

よろしくジルベール・ジルベルトと彼をとりまくSF世界。

企業戦士ジルベルト

無事に鳳翔学園を卒業した俺は、兼ねてよりの希望である、洒落た喫茶店のマスターになるという夢のために進学し現在経営を学んでいる……と言えれば非常に良かったのだが、現実是非情である。

「先輩が所属するゼミに入るのは全然かまいません。来年には正式に所属したいと思いますが、何ですかこれは」

「……謎の天才科学者サトーと知己のある君と親交を得たいと考えている経済関係者からの招待状態ね」

謎の科学者サトーとは緘口令を敷かれた人型翻訳ソフト、ジルベル・ジルベルトの仮の名である。サトーは極東州というか日本ではよくある苗字であり、コードネームとして使いやすいという意味でそうなった。

サトーは、アセンブラの第一人者である久利原直樹との共同研究者であり、脳症の対策でも昨年画期的な論文を提出した。一説にはノインツエーンの後継者として目される人物であるが、その正体は謎であり、幾人かが彼のエージェントとして知られている。

ジルベル・ジルベルトは極東におけるサトーの代理人の1人であり、メツセンジャーの役割を担っている。

このようなカバーストーリーがあるわけだが、それ俺を介在する必要があったのかを、悪だくみをした連中に問うたところ。

「サトーというと、アジア人を想像するが、君のガワは欧州系だからな。だから都合が良いのだ。後2、3人サトーの代理人を掲げているが、彼らは君より年上なので、敵対勢力が狙うとしても彼らだ。まさか君が本人とは考えにくいだろう」

『そうね、佐藤さんの本質を知っているのはあそこの住人くらい。仮にあなたを拉致するとしても、物理接触によるマインドハックが可能だからまあ死ぬことはないでしょう』

いやいや橘社長、できないことはないですが、それ法に触れませんか。

「残念ながら、君の優先度というか希少性は極東州では片手の指で数

えるレベルなのだ。事前に申請しておけば大抵の悪事は調整の上で許容されるレベルと考えたまえ」

大学に入る前に人生の諸先輩（ノインツェーン関係者）から心温まるメッセージを頂いた俺は、4年間のモラトリアムを無事に獲得することができたはずなのだが、速攻でクリス先輩に呼び出されて、来年のゼミ希望届の署名を求められたのである。

「残念ながらあなたに選択の余地は多少ありますが、雑音をなるべくシャットアウトするためには私のゼミに入った方が安全です」

「先輩のゼミですか。先輩が所属するゼミではなく」

「顧問の篠塚教授だけど、論文指導とかは勿論してくれるけど、彼女の本業は政府のエージェントなのよ。あなたの身の安全という意味では保証されているんだけど、特定の分野に肩入れされると色々困るので、事前に私に白羽の矢が立ってあなたの箱を用意しておいたわけ。西野亜希と一緒にしておいた方がいいという意見もあって、去年の秋ごろまではそのつもりだったんだけど、私は現実分野へのフィードバック的な研究を進めたいのに対して、亜希はネット世界の拡充の研究を進めたいという感じで、仮に私達と一緒にになると、外部との折衝が全部私に降りかかってくるので意味がないという結論に達したのが年を跨いだあたりね」

ちなみに人工知能友愛会のメンバーは自分のゼミを持てるらしいので、西野亜希が所属するのは西野ゼミなのである。そもそも西野女史レベルになると、大学生活は本当の意味でモラトリアムでしかないのである。

「話を戻すけど、今回の件に当たって、私の養父には、関係者の同意を得てあなたの正体を伝えてあります。まあ直接的な利益に直結する立場ではないというのもあるのだけど、一度顔を合わせたいという感じね」

つまり、軍を代表するのがレインの親父さん、研究側を代表するのが妹魂さんこと橘社長、商売分野を代表するのがクリス先輩の義父ということになるわけだ。それは良いのだが、一点疑問があった。

「そんな重要なこと、何で当事者が聞いていないのですか」

「いい、ジルベルト君。君は大抵のことは、自力で切り抜けられるわ。本気であなたと総力戦をするのであれば、水坂憐リウアイアサンでもないが無理なのよ。スペック的には」

「いやいや、俺多分バチエラにも勝てませんよ」

「ハッキング技術に関しては神かがついていたとしても、一気にハッキングを成功されない限り、遡って無効化するのよあなた。詳しく説明すると面倒なんだけど、分割保存ができるっぽいのよね。で無意識に最適解を呼び寄せる。でそれに対抗するには、高情報量で負荷かけてそれをできなくするって話。だから少なくともネットに接続できる状態というか、相手が脳内チップを持っているなら物理接触でも、イザナミループ……その頃には佐藤君もう現世にいなかったわね。とにかく、エラー起こして色々と残念なことになるので気を付けてね。だから特殊な生産工程を経ている人間以外は、まあそういうことね」
今明かされるスーパージルベルト（仮称）の脅威ごつごつのメカニズムしゆぎ。

「つまり、俺ってノインツエーンを説得するまでにかなり試行回数繰り返したということですか」

「そう考えるのが妥当ね。もつとも、揺らぎに関しては私も専門外だから、詳しくはエージェントにでも聞けばよいのだけど、この世界エージェントが多分干渉できないので意味はないのよ。まあその件は、私とドクターノイト、ノイ経由のノインツエーンしか知らないから置いておくとして、アークは企業だけど、根が技術屋さんなので、政財界に顔を聞く養父が選ばれたわけ」

「そのクリス先輩の養父さんってあれですよ、卒業式の時に一度お会いした、ロマンスグレーの美丈夫」

「六条裕斗、六条家の総帥ポジ。ちなみに物心着いた時には亡くなっていたけど、私の母方の親戚ね。性格はそれ程癖がないわ。門倉のお父さんとか、レインのお父さんみたいに家族関係で問題ないし、実子が祐希義兄さんと、月菜ルナ義姉さん。二人とももう結婚していて、甥っ子から先日クリスおばさんと言われたから。一緒にお風呂入って遊んであげたわ。……大丈夫よ。児童虐待で捕まるなんてことはないから」

本当に大丈夫なのか……俺は本当にクリス先輩しらとを信じていいのか。
「大丈夫、ちよつと強気な男の子を聞ではメス逝きさせたい程度で、私
性癖的には普通に同年代の異性好きだから」

安心要素なんてねえよ！ いや大丈夫だ。俺は別に強気系男子で
はない。この女の射程圏外のはずだ。

「ごめん、話逸れたわ。この話はヤメヤメ。とにかくサトーの窓口の
君の窓口を養父がやるので、事前打ち合わせと、ちよつと相談に乗っ
て欲しいみたいなの」

「まあ、俺が対応できるレベルであるのであれば」

この時、俺は下手に安請け合いたしたことを後悔した。いや正確には
俺の趣味に合っていたから、苦労ばかりではないが、お偉いさんから
のちよつとした相談は、その後トングデモ展開になり得ることを忘れて
いたのだ。

企業戦士ジルベルト 愛戦士

金持ちの家というのは一見質素なのである。成金は飾られる調度品に目につくが、代々受け継がれた家というのは高い技術で作られた調度品すら埋没してしまう。

そう一番輝くのは人、家を運営する人とそれに付き従う人なのである。

「やっぱり成金とは重みが違う」

「そうね、代々勤めを果たす家人とか、封建社会にしか存在しないとかつての私は思っていたわけけど、意外と現代にも存在しているのよね」

レインの家も金持ちだがそんな人はいない。橘の本家はともかく、アークの橘社長の実家はまあ最低限の管理スタッフにより運営されている。その内AI搭載の機械に置き換えられそうだけだな。うちの実家は……まあ普通の成金未満だったので言うこともなし。

とにかく、六条家は格別ということだ。

「六条裕斗だ。今日は席を設けてくれてありがとうドクターサトー、いやジルベルト君でいいのかな」

「ジルベルトで結構ですよ。サトーの評価が加速度的に肥大化されて、誰だよお前みたいな展開に最近なっていますので」

いやマジ、ゴシップ記事で、『関係者に聞いた謎の天才科学者サトーの実体とは!?!』とかあるわけですよ。

ちなみにこの世界を救うために地上に降り立ったオーバーロードである説を唱えている●ーが一番真実に近いのが笑える。いや渴いた笑いなのだが。

「評価というのはとても恐ろしいものでね。雪玉の雪のようで一度作って転がすと周囲を巻き込んで巨大化するんだ。ドクターサトーの場合は、まだ色がついていないから方針次第で何とでもなるのだが、君はどこまで話を聞いているんだい」

「俺の政財界の窓口をしてもらおう代わりに、六条さんの相談を聞くというところまでは」

俺の発言を聞き、クリス先輩を見てため息をつく。

「クリス、情報公開の取捨選択は任せると言ったが、肝心な話をしていないじゃないか」

「以前にもお話ししましたが、そういう子なんです」

何か残念な子扱いされてませんか俺。

「趣旨的には全く間違っていないのだが、そこに至る経緯が違うというか。ではそこから話そう。ここでは敢えてサトーとするが、サトーは脳症に関する研究を発表してすでに効果を出している」

「そうですね、橘社長経由でそんな話は聞いています」

提案の方向性は間違っていないかったようで、最初の被験者の真ちゃんは元気だし、その研究を元に公開されたパッチを当てることで多くの脳症患者が、ある日突然壊れるという破局を回避するに至っている。

「ここで重要なのはパッチを当てることで治療が成功するというところで、研究特許に関する報酬が発生するね」

「あの特許って政府とかアークが保持しているのでは」

何せ出所がノインツエーンである。俺的には閲覧した資料から使えそうなのを見つけ、それを基に人体実験をした結果、成功したという類である。現実的な調整はアークの人間がやっていたのだから俺に特許と言われても困るわけだ。

「もちろん政府やアークにも権利があるが、それでも一番多く受け取るべきは君なのだよ。アセンブラだって、久利原博士がメインらしいが、君にも権利がある。現段階でそれだ。君が抱えている本棚はこれからも多くの技術を解き放つであろうが、その度に権利関係の調整を行うというのは大変になるので、今後見据えてどうするかを予め考えておきたいというのが本来の目的だ」

「その技術を解き放たないという選択肢は」

白鳥氏の目が、以前カフェとかやりたいんですよねといった時の大人の目と酷似している。

「君の他にノインツエーンの言語体系を完全に理解できる狂人が登場したらお役御免になる可能性もあるが、義娘から君は特別でも特注で

もなく、ただの特殊事例だと聞いているので残念ながらもね。だから我々としても君が面倒だとは思っていても、できるだけ早く働いてくれる環境構築を目指さなければならぬわけだ」

俺はただ、自分の周りが少しだけ幸せになるお手伝いをしたかっただけなのに。そういうのは正義の味方に投げてくれよ。

「結論から言うと起業したまえ」

「起業となると会社ですか」

「そうだね、君の知的財産を管理する機能と、興味がある研究に投資する機能を持つ会社だ。最初は財団化することも考えたのだが、発足当初の目的からズレ始めると色々面倒なので、現状は法人として機能するようにした方がいいだろう。株式公開する必要はないが、出資比率だが、君の持ち株が41%、ドクターノイが10%、うちが5%、アークが5%。残りの39%は政府関係だ。うちとアークは、場合によって立場が変わるから、君とドクターノイで必ず51%を確保しておきなさい」

「株式公開とかはしなくて大丈夫なんですよね」

「資金は正直言って必要ない。錬金術ではないが、高確率で成功する事業に投資する。ある種のマッチポンプだよ。結局のところ、これから作る会社は君の周りの安全を確保するための囷な訳だ。事前にクリスや橘社長から話を聞いて、今日改めて君と話したが、君はある程度の責任は持つがそれは義理から生じるもので、経営者には向いていない。橘社長と似たタイプだ。彼女は基本好きなことしかしたくないのだが、社員の生活があるのも知っているから、経営陣を雇って経営している。君もどうせ興味あるところからしか始めないのだから、資金運用とかは専門家にぶん投げてしまって、適宜監査すればいいのさ。何、君をぐまかせる人間何ぞネットワーク社会にはほほいないのだから」

「わかりました、その辺はお任せします」

ここで仕事に関する打合せは終わったとばかりに、六条氏は上着を脱ぐ。

「でここからが私の相談なのだが、ジルベルト君は宇宙開発に前向き

と聞いていたのだが」

「まあ、ネット技術の拡充も重要ですけど、突如地球に隕石が落ちてきたとかとなると、どうしようもできないでしょう。火星にアセンブラ送り込んで人間が暮らしやすい環境とか作ってリスク分散した方がいいと個人的には思います」

「君の言うとおりだが、その取っ掛かりがなかったわけなのだよ。だが、アセンブラ研究の発展により流れが多少変わった。宇宙開発のために資源を地球から運ぶのでは意味がない。もちろん最初期はそうなるだろうが、資源惑星から引っ張ってくるのが前提になる。単刀直入に言おう、ジルベルト君、ロボットを作らないかい」

「ロボットという人型ですか」

「そうだね、マニピレーターを搭載した作業用ロボットだ。シユミクラムを動かすように脳内チップと連動するロボット開発。以前から軍も研究していたのだが、ネットなら人が脳死するだけだが、リアルだと維持費の問題もあるからあまり積極的ではなかったのだよ。だが自己修復もしてくれる総ナノマシンの機械なら前提条件が変わってくる」

あらゆる環境に応じて進化して、増殖して、修復もしてくれる。それなんてアルティメット。いや発想としてはありと言えはありだし、どうせ外宇宙に放り込むもとい旅立つ予定のノインツェーンが手を付けそうな分野だし悪くはない。

「前向きに検討したいと思いますが、ちょっと身内で相談がしたいので」

でもこれ思いつきり軍部マター案件だから、一応レインの親父さんにも話は聞いておきたい。

「もちろんだとも。まあ私もそろそろ息子に事業を譲るに当たって一度ぐらいは好きな仕事をしてみたいものさ」

あつこの人、良い意味で悪い大人だと思った俺はある程度実りある話合いができたと六条家を後にしたのだが……。

「クリス先輩、その義理のお兄さんの子どもは男の子と伺いましたが、あちらにいるのは義理のお姉さんのお子さんでしょうか」

「月菜義姉さんの子どもはこの間生まれたばかりだから、あれは義兄さんの子どもよ」

「何でスカート穿いて、潤んだ目で先輩を見ているんですか？」

「いい、いい子にしていたらご褒美をあげると教えたからかしら」

児童虐待の疑惑は捨てきれないが、この先輩ギリギリのラインで無実勝ち取りそうだから意味ないんだろうな……。

頑張ってくれ甥っ子くんちゃん。早くノーマルに目覚めるのだ。

君は容姿が端麗なので君だけではなく同級生の同性にも悪影響を及ぼすぞ。

六条家から出た後、ノイ先生の病院に言って、精神安定を凶った俺は間違っていない。

企業戦士ジルベルト めぐり逢いSモデル

日曜とは家族や恋人と過ごしながら、明日から始める仕事とか学業に備えて体を休めるべきだと、転生前は社会人だった俺は思っているのだが、何故かいい年したおっさんとロボットアニメを視聴している。というか、これ先週から同じ流れである。

名目は「宇宙の船外活動を行うロボット研究会（仮称）」の活動の一環であるのであり、主催はサトーこと俺と六条氏（父）。機体運用のオプザーバーとしての門倉氏と仮に部隊運用となった場合のオプザーバーとして桐島氏。平均年齢がかなり高いというか。

「あのー桐島さん。誘っておいてなんですけど、休日をこういうのに費やしているのですか。ほら赤ん坊の世話とか」

「残念ながら不器用な男がいても役に立たないとエイダから言われていてな」

居場所のない男の逃避先ではないんですけど……、と思いつつ。本題に入る。

「人間が乗らないなら前提なら人型に拘る必要はありませんね」

「そうだね、人型だと作業的に良い面はあるが、体高が高いとその分デブリ被害などのリスクが高い。人型を意識しないということは、コックピットも不要になるのだからコストも当然下がる」

「いやちよつと待って欲しい。人型は人型で需要があるというか、人が動かすことは考慮した方がいい」

「軍とノウハウの共有はしますが、このプランは基本資源衛星からの資源採取が主体になると思います。だから人型を開発したければ軍が主体になっていただければ」

商売人の白鳥氏と軍人の桐島氏の意見というか、見据えた先が異なるのは当然なのだが……。

「ジルベルトの坊主ちよつといいか」

「はい、なんでしようか」

これまで沈黙を保っていた門倉氏から声が上る。

「将来的な運用の話はこの際置いておくし、人型がいいか、その辺をオミットしてより機能的にするかという意見も無視するとしてよ。機体を動かすのにどれくらい処理能力が必要なんだ。遠隔操作ということとは距離のラグが発生するわけだが、ネット上から接続するか、リアルで専用端末からログインするのか。そもそも軍部がそれをしなかったのはコスト以前にそれなりの理由があるんじゃないのか」「あつ」

とりあえず現代技術でロボット作ろうみたいなノリで始めて小型ロボットで思い通りに動かしてみたまでは良かったのだが、根本的なことを忘れてた。

「その、ジルベルト君できるのか」

「遠隔操作ですよ。すみません、ちよつと時間をください……一応できますね。身近な例で例えると西野亜希3人分を使うだけのメリットがあるかですけど」

ちなみに西野亜希3人分というのは、橘聖良0.7人分くらいである。

「ようやく八重のクローン云々から解放されたと思ったら今度は聖良さんのクローンが必要になるとか、壮大な畏じゃねえか」

余談だが、門倉氏の奥さんである門倉八重さんは、凄腕だが純粋な処理能力でいうと橘社長の方が上だという。何だこの姉妹。

「ちなみに君がやるとしたらどうするんだ」

「1人でできますけど、ちよつと方式が違い過ぎて体系化できないですわね」

「ちなみに体系というかどうか」

「アセンブラのコマンダーを用いてナノマシン群を直接コントロール下に置いて動かす。いわば今宇宙ステーションで実験しているやつが発展型なのですが」

正確に言うと、ノインツェーン式といってもいいのだが、ここで言及する必要はないだろう。加えて言うのであれば、企業側や軍が求めているのは既存の技術の発展系であり、検証段階の技術でどうにかするというのは予算が降りにくい。

「正確にはもうちよつと非人道的な手段での解決法もあるのですが、俺ができる口にして、正式にOK出されるとこつちも困るといっか」

俺が口ごもるのを見て、門倉氏は何かを感じ取ったようだ。

「もう一回ノインツエーンを作るってことか」

「脳の並列処理的なのは必要なくて、単独の脳と特化したチップを介してみたいなイメージですね。自分で口にしといてあれですが、生体CPUって効率がいいんですよ。貧困地域で素材入手して、加工して、宇宙に出荷。もちろんパーツの方が先にイカレルと思いますけど、宇宙空間の専用ベースで交換すればいいし」

「私は聞かなかったことにする。家業の側面もあるが、これでも人を守るために軍人を志望したのでね」

「私も孫を持つ身だ。企業家として搾取する側面はあつても守るべき矜持というものがある」

ここでとりあえずこの話は終わり、次回への課題となったのだ。

余談だが、この問題の解決は、結局俺が大学卒業するぐらいまでの課題かと考えられてきたが、大学とある人物から意外な解決策を提示されたことで加速的に進むこととなる。

「アセンブラで脳のパーツを作つてそこに特製チップを付けて、コマンドーというかオペレーターが指示出せばいいんじゃないの」

ああ居たわ。原作知識持ちチートが身近に。

「可能なんですか？」

「原作の水無月空が全身ナノマシンで甲と一緒に地上に降り立っていたから多分いけると思う。というかその辺は専門家に任せるけど、処理装置としてならそこまで問題がないんじゃないの」

「全部ナノマシンなんですか未来では」

「冷静に考えなさい。現状脳以外は義体の人だつていますよ。脳だって、自己判定のチェックサムの問題さえ解決できればいけるのよ。今回は判定チェック必要ないのだからより簡単よ」

「クリス先輩、天才だったんですね」

「どちらかという使えるものはうまく使うだけという貧乏性なのよ

ね」

黄昏る彼女を後目に、解決策さえ出れば実現に向けてアイデアが出てくるわけだ。

「ストップ！ その辺は関係各位にやらせなさい。アイデアだけ提示して分散しないとまたあなたの元に大量の金が入ってきて扱いに困るでしょ。そもそも金の使い道のための起業なのに、金増やしてどうするのよ」

「おっしやる通りです」

よしこれから、こういう問題のさじ加減はクリス先輩に任せよう。こうして、プロジェクト・スカイは始まったわけである。何故スカイなのかというと。

「疑似脳のモデルをいくつか用意したのだけど、一番相性が良かったのが水無月空なのよね。カタログスペックだけ見ると真ちゃんの方がはるかに優秀なんだけど、ヒロイン補正が高いのか、こういう技術群との相性が高いのか」

まあ最終的にはもう少し調整するらしいが、それは置いておこう。

「とにかく、マテリアル系と精密機械系の企業がこの研究を基に宇宙空間向けのマニピュレーター開発とか色々やるはずだから、とりあえず今年は乗り切ったわ」

「今年はって来年もあるんですか？」

「多分来年あたりは橘聖良から何か要望が出ると思うわ。彼女も一応企業人だから」

「達成しやすい課題だとうれしいですね」

もつともことネットに関して彼女にできないのは例外的な何かか、時間を掛ければできるけど面倒な類だろうが。

「それが嫌なら、技術は持つてるけど金がない企業や個人を支援する側に周るしかないわね。幸い義父は篤志家の側面もあるから義父に扱えない変人を斡旋して貰えば何とか」

フラグかな。いやフラグだろうな。

斯くして、変人のソサエティである正式名称S & S 開発機構、通称ロボット愛好会が発足される運びとなる第一歩だったのだが、逃がさ

ん……お前だけのは精神で総務取締として面倒ごとを押し付けられる白鳥が一人居たそう。